

文学部論集

第 103 号

論文

呉氏蔵新出董黯石床Bについて	黒田彰	1
玉鬘と光源氏	上野辰義	15
現代語版『小説神髓』（八）	坂井健	31
『人相小鑑大全』（上）巻一～巻二	浜田泰彦 河戸愛実	39

論文

狂人の誕生 ——明治期の「狂人」言説と魯迅の「狂人日記」——	李冬木	1
医薬品における文語表現 レアリアによる中国語教育の一環として(1)	石崎博志	27
帰還兵士の苦難 ——ヘミングウェイの「兵士の家」を読む——	野間正二	41
田漢の歴史話劇における材源と創作に関する考察： 『春帆楼上の対話』と『朝鮮風雲』を中心に	楊韜	53
古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について ——コノハナノサクヤヒメを中心に——	黄當時	65
The Progression of Intercultural Communication in the Writings of the Early Modern Jesuits: Alessandro Valignano and His Rendering of the Japanese Social Custom of Gift-Giving	AISHWARYA Sugandhi	85

研究ノート

古代日本語における異文化の要素 ——南島神話と日本神話の固有名詞にみられる後置修飾表現——	黄當時 沖村由香	97
--	-------------	----

2019年3月
佛教大学文学部
京都

文学部論集

第一〇三号

二〇一九年三月

佛教大学文学部

Vol. CIII

March 2019

JOURNAL OF THE FACULTY OF LETTERS

CONTENTS

Articles

On a Newly Discovered Object Named “Dong An Stone Bed B,” Belonging to Mr.Wu	KURODA Akira	1
Tamakazura and Hikaru-Genji	UENO Tatsuyoshi	15
Translation into Modern Japanese of <i>Shōsetsu Sinzu ī</i> (8)	SAKAI Takeshi	31
Reprinting and Introduction: “Ninsokokagamitaizen” (Part1)	HAMADA Yasuhiro KAWATO Manami	39

Articles

Discoure of Madman in Meiji Japan and Luxun’s Diary of a Madman	Li Dong mu	1
On Modern Written Chinese in the Dispensatories	ISHIZAKI Hiroshi	27
The Sufferings of a Returned Soldier:A Reading of Hemingway’s “Soldier’s Home”	NOMA Shoji	41
A Study of TLAN-han’s Historical Spoken Dramas: Focusing on Material Sources and Creation	YANG Tao	53
Foreign Vocabulary Elements in Ancient Japanese Vessel Names: Focusing on Konohananosakuyahime	HUANG Dangshi	65
The Progression of Intercultural Communication in the Writings of the Early Modern Jesuits: Alessandro Valignano and His Rendering of the Japanese Social Custom of Gift-Giving	AISHWARYA Sugandhi	85

Research Notes

Ethnic Vocabulary Elements in Ancient Japanese	HUANG Dangshi OKIMURA Yuka	97
--	-------------------------------	----

Published by
THE FACULTY OF LETTERS
BUKKYO UNIVERSITY
Kyoto, Japan

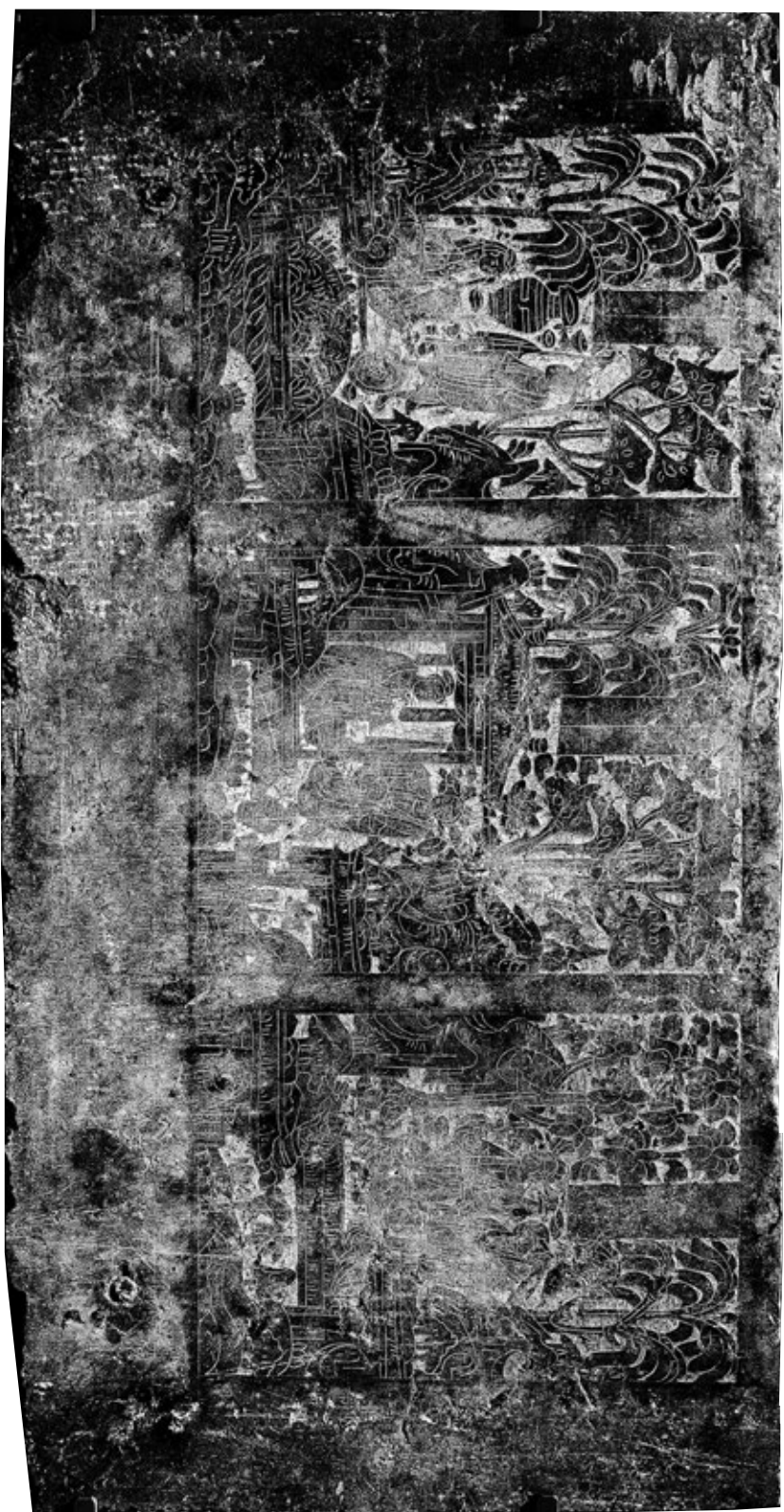
文学部論集

第 103 号

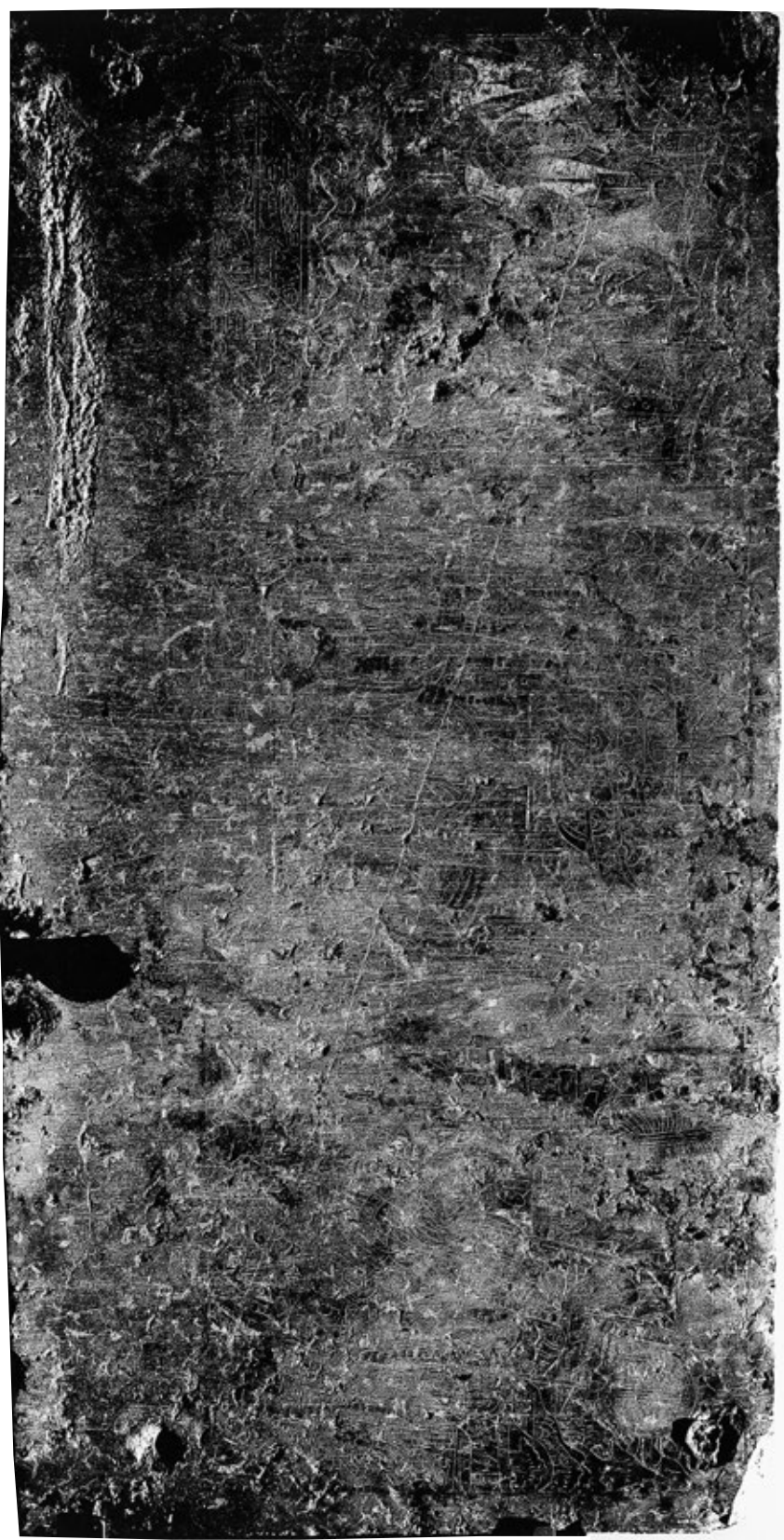
2019年3月

佛教大学文学部

京 都



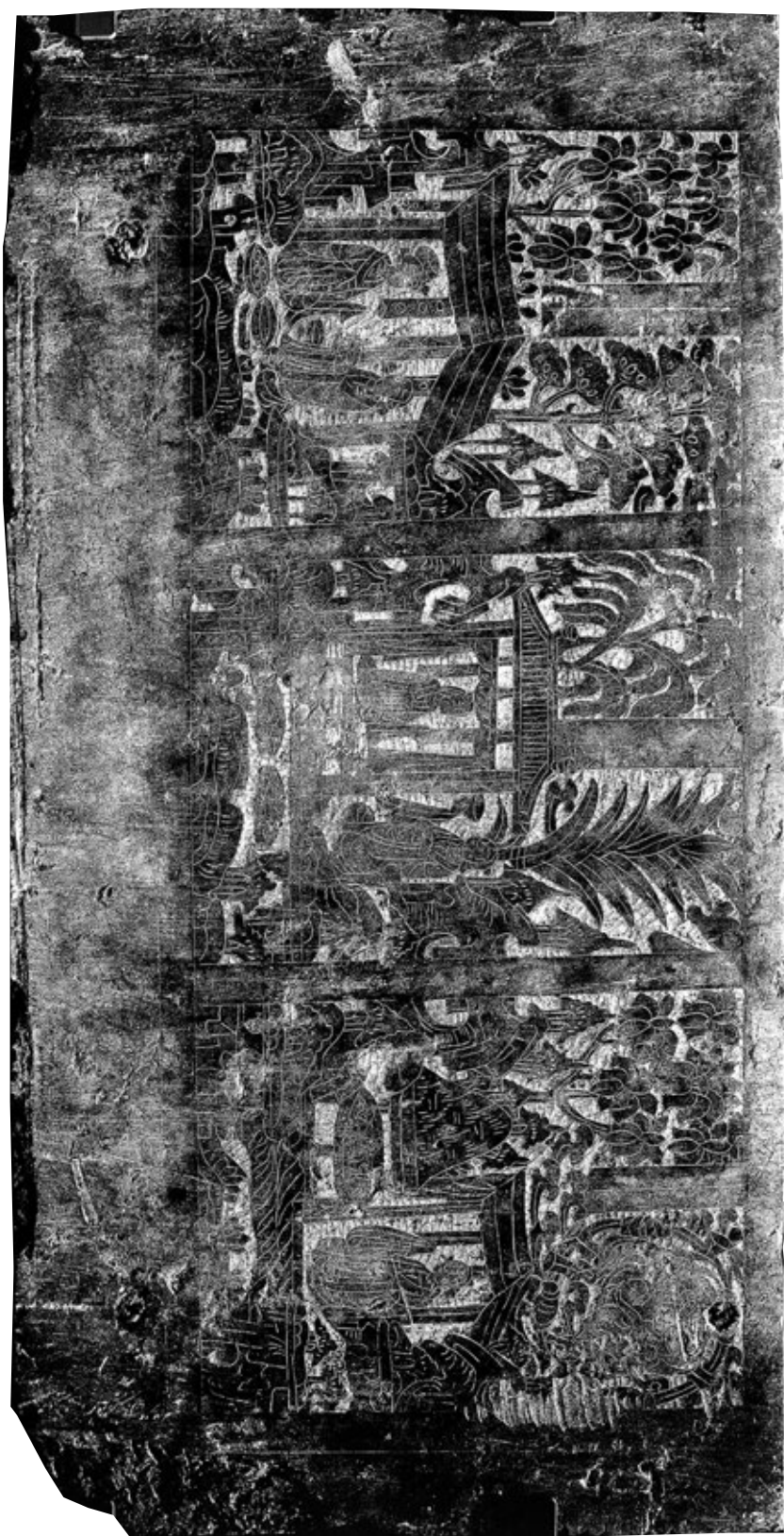
图版一 吳氏藏董黯石床B 右側板



图版二 吳氏藏董黯石床B 正面石板



图版三 吴氏藏董黯石床B 正面左板



图版四 吴氏藏董黯石床B 左侧板

呉氏蔵新出董黯石床Bについて

黒田 彰

〔抄録〕

小稿は、今般新たに出現した、深圳市金石芸術博物館蔵北魏石床を紹介しようとするものである。本石床は、同理事長呉強華氏による苦心の蒐集に掛る、石棺床囲屏四枚と脚部（前脚、後脚）から成るもので、左右の側板二枚に三図ずつ、計六図の孝子伝図が描かれる、貴重な遺品である。その左側板三図が全て、陽明本孝子伝37董黯条に基づく、董黯の図像によって占められている所から、本石床を、董黯石床Bと仮称する。Bは、もう一点の呉氏蔵董黯石床（『佛教大学文学部論集』102に紹介した）に対してい

る。小稿は、その囲屏の全貌を、世界に先駆け紹介しようとするもので、その写真の提供など、呉氏の好意に負う。本遺品の右側板には、郭巨、丁蘭、董永の三図が描かれている。小稿においては、左側板の董黯図に加え、それら三図の孝子伝図について、その図像的な特色を報告する。

キーワード 孝子伝（図）、深圳市金石芸術博物館蔵董黯石床

B、郭巨図、丁蘭図、董永図

一

平成二十九（二〇一七）年九月末、深圳市金石芸術博物館を訪れ、新出の北魏時代の孝子伝図石床二点を目撃した。呉強華理事長の好意によるもので、その二点の内、董黯石床と名付ける一点（囲屏四枚に

前脚、後脚を伴う）については、拙稿「董黯図攷（二）——呉氏蔵董黯石床の出現——」（『佛教大学文学部論集』102）において、孝子伝図（董黯図）を中心とする囲屏の全画像を既に紹介、報告した。^①小稿は、その折の二点の内、残る一点を紹介しようとするものである。

もう一点の石床遺品は、囲屏四枚に石闕（左右2）、前脚を具える、

北魏時代末期のものと思しい優品で（図一）、左右の側板が後述、孝子伝図で占められる、貴重な学術資料であることは、言を俟たない。巻頭図版一—図版四は、図一の囲屏部分四枚に描かれた図像を示したもののだが、その内容を概念図として示せば、図二のようになるであろう。囲屏四枚の法量を示せば、次の通りである。

右側板——縦五七糎、横一一二・一糎、厚七・八糎

正面右板——五七・三、一一四・四、八・二

正面左板——五八、七五・三、八・八

左側板——五六・二、一一〇・八、七・八

右の法量の幅（横）を見ると、両側板及び、正面右板の三枚が一〇糎余であるのに対し（図版一、図版二、図版四）、正面左板のみは、七五・三糎と、著しく狭いことが見て取れる（図版三）。それは、正面左板が一画面少ないためである。即ち、本石床の囲屏一枚は、三画面ずつに劃される筈の所、正面右板だけ、二画面（牛と女性墓主）にしか劃されていない（図二）。従って、正面から見た本石床の両端は、馬と牛となり、さらにその内側に男性墓主と女性墓主像が来て、中央は庖厨図が占めることになる（図二）。そのため、本石床は、正面右板の幅が長く、左板が短いという、聊か変則的な形状を有しているが、同様の例は、シカゴ美術館蔵北魏石床に見ることが出来る（呉強華氏教示）。

さて、本石床の両側板、各三画面には、全て孝子伝図が描かれている。六画面全ての孝子伝図、画面中央上部には、二行分の榜が配されているが、文字を読み取ることが出来ない。まず右側板には右から5



図一 呉氏蔵董黯石床B

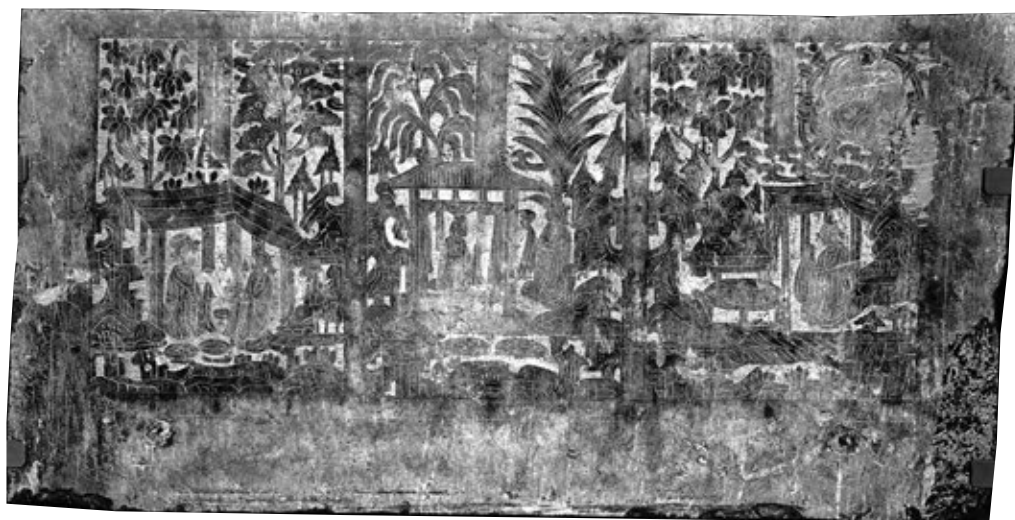
牛		庖厨	男性墓主	馬
37董黯③	女性墓主			2 董永
37董黯②				9 丁蘭
37董黯①				5 郭巨

図二 董黯石床Bの内容

郭巨、9 丁蘭、2 董永図が描かれる（数字は、陽明本孝子伝の目録番号）。また、左側板に見えるのは、37 董黯図(A)(B)(C)の三図に外ならない。図三は、本石床の左側に描かれた董黯図(A)(B)(C)を示したものである。^③図三の董黯図(A)(B)(C)は、先に紹介した呉氏蔵董黯石床に描かれる董黯図(A)(B)(C)と全く同じ場面を表わしたものと考えられる。特に図三の(C)は、董黯石床(C)と非常に深い関係を有している。図四は、董黯石床の董黯図(C)を掲げたものである。図四は、⑤黯の墓参（大団円）を描いたもので、図三(C)、ネルソン・アトキンス美術館蔵北斉石床のそれと共に目下、三図しか伝存の確認出来ない、極めて珍しい図像となっている。取り分け図四は、

董黯^(黯)将^(奇)王寄頭^(奇)祭^(奇)母報酬^(奇)未時

という題記が、北魏期における黯の墓参（大団円）場面の存在を確認する、大変重要な資料である点、先に論じた如くであり、加えて、図三(C)は、図四と全く同じ構図を有する上、11 蔡順図に由来すると考えられる、雷神の図（図四左上、図三(C)右上）までもが共有される点、本石床の董黯図は、董黯石床のそれとの非常に深い関連が顕著であるとしなければならない。^④そこで、本石床の董黯図と董黯石床との密接な関係に鑑み、本石床を、呉氏蔵董黯石床Bと仮称することにしたのである。ともあれ、本石床の董黯図（図三）と呉氏蔵董黯石床のそれとの関連に関しては、上記拙稿において述べたので、そちらに譲り、ここでは、本石床の図像を紹介するに留めたい。図五は、本石床左側板の董黯図(A)(B)を示したものである。まず両図には、董黯の家(A)、王奇の家が描かれている。これは、例えば陽明本孝子伝37 董黯条の冒



(A)

(B)

(C)

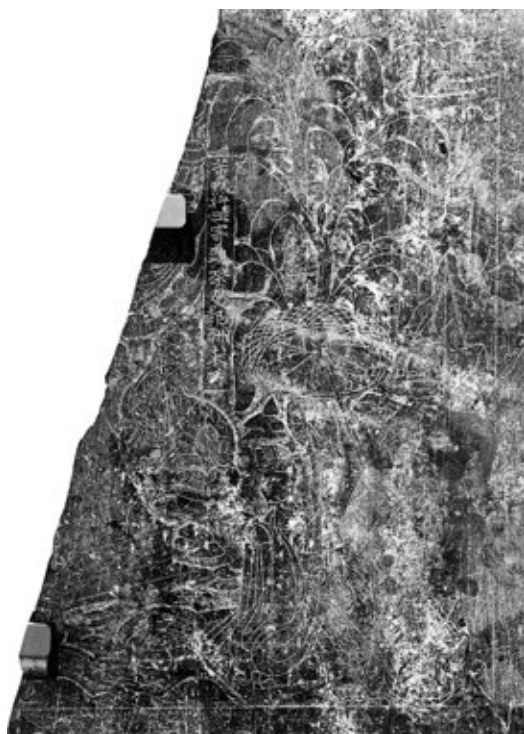
図三 董黯石床B左側板（董黯）

頭に、

董黯^(董)家貧至孝。雖与王奇^(董)並居……

と記される叙述を忠実に場面化したもので、図五が言わば董黯図の構図設定における定型であることは、それがボストン美術館蔵北魏石室ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床などの董黯図にも見られることから、証明されよう。(A)の屋内に坐するのは、董黯の母、(B)の屋内に坐するのは、王奇の母である（共に右向き）。黯母が若々しく和やかに、対する奇母が年老いて険しい表情に描かれているのは、陽明本に、

〔黯母〕年過七十、家又貧。顔色怡悦……〔奇母〕家雖富食^レ魚又嗜^レ饌……枯悴



図四 呉氏蔵董黯石床（董黯図C）



図五 董黯図 (A) (B)

等とある記述を反映したものである。(A)の黯母の右に跪き、両手で食器等を捧げるのは、董黯、(B)の屋外に跪き、右手で食器等を捧げるのは、王奇である(共に左向き)。瘦身の董黯に対し(A)、(B)の王奇が肥身に描かれるのは(腹も出ている)、王奇の横柄な人格を表わしている。両画面下の盆器に盛られた食物を見ても、(A)が少量で小さく(盆器も小振りで、右のそれは空である)、(B)が大量で大きいのは(盆も大振り)、やはり黯家が貧しく、奇家の富んでいることを表わし、黯家が仮屋風で、奇家がきちんとした家屋に描き分けられていることなども同様と考えられる。図五の(A)(B)が董黯図の研究史上、重要なのは、(B)の王奇の家に三牲が描き加えられていない点である(三牲は、後掲図六の(C)の墓前に見える)。このことは、図五(A)(B)が前引陽明本孝子伝冒頭の叙述に基づく、貧しい董黯の家と金持の王奇の家とが並び建っていたという、

① 黯の家、奇の家(プロローグ)

を内容とする、董黯図における冒頭場面の原初形態を留める図像に外ならないことを示している。すると、図五(A)(B)と全く同様の構図を有しながら、王奇の家に三牲を添えるボストン美術館蔵北魏石室やネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床などのそれは(但し、前者のそれは、三牲ではない可能性がある)、本来は①の場面である筈の奇の家に、三牲を描き加えることにより、①の奇の家の場面に、

④ 三牲強要

を重ね合わせ、④の場面をも兼ねさせていることが判明するのである。このことは、場面の数が厳しく制約される、北魏時代の孝子伝図にお

ける、描画上の工夫として、十分にあり得ることである。すると、例えば董黯図中の三牲に着目するならば、④三牲強要の場面として独立に描かれる図像（4）呉氏蔵北魏石床、（5）呉氏蔵翟門生石床、（6）ヴァージニア美術館蔵北魏石床）の他、④の三牲は、本石床の（C）の如く、⑤黯の墓参（大円団）の場面（後掲図六参照）や、ボストン美術館蔵北魏石床、ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床、呉氏蔵董黯石床の如く、①奇の家（プロログ）の場面へと、自在に移動を繰り返していることが確認されるのである。この点は、董黯図研究史における本石床の画期的な学術価値を示すものとして、今後注目すべきであろう。図六は、本石床の董黯図（C）を掲げたものである。図六は、⑤黯の墓参（大円団）の場面を描く。図六の右には、まず図五（A）と同じ仮屋



図六 董黯図（C）

風の建物描かれるが、董黯の喪屋であろう。建物の中に跪くのが董黯で（左向き）、董黯が右手の袖を上げるのは、母が亡くなったことへの嘆きを表わしている。画面左に描かれるのは、黯母の塚であり、墓前に供え物の置かれること、画面右上に雷神の描き加えられることは、図四呉氏蔵董黯石床（董黯図（C））と全く同じである（図四には、一匹の虎も見える）。その雷神（虎）が11蔡順図に由来しようことは、先に触れた如くであるが、問題は、図六における墓前の供え物が三牲となっていることである。この三牲こそは、図六が11蔡順図ではなく、董黯図であることを示す明徴として、極めて重要なものであると同時に、墓前の供え物は、図四に見る如く本来、王奇の首でなければならないことに、注意しなければならない。換言すれば、⑤黯の墓参（大円団）の場面としての図六に、④三牲強要の三牲を描くことは、間違いと言うべきであり、即ち、図六の誤りとすべきなのだが、それが必ずしも誤りとのみ断じ切れないのは前述、董黯図における三牲というもの、元来の④三牲強要の場面の他の諸場面間を、移動させられ得るものだからである。このような点などを含め、本石床の董黯図（図三）が、呉氏蔵董黯石床のそれと共に、今後の董黯図研究にとって看過し得ない、重要な研究史的位置を占めようことは、言を俟つまい。

二

董黯石床Bの左側板には、董黯図（A）（B）（C）が描かれているのに対し（図五、図六）、右側板の方には、右から5郭巨、9丁蘭、2董永と

いう三図の孝子伝図が描かれる。図七は、本石床右側板右の5郭巨図を示したものである。本図の基となった、陽明本孝子伝5郭巨の本文を示せば、次の通りである。

郭巨者、^{家貧養母}河内人也。時年荒。夫妻昼夜勸作、以供養母。其婦忽然生一男子。便共議言、今養此兒、則廢母供事。仍掘^(堀)地理之。忽得金一釜。々々上題云、黄金一釜、天賜郭巨。於是遂致富貴、転孝蒸々。賛曰、孝子郭巨、純孝至真。夫妻同心、殺子養親。天賜黄金、遂感明神。善哉孝子、富貴榮身

郭巨の物語は北魏時代、大変人気があり、残された郭巨図の数も多い。目下、管見に入った郭巨図としては、以下の遺品十九点を上げることが出来る。



図七 郭巨図

- (1) 江蘇徐州仏山画像石墓
 - (2) 寧夏固原北魏墓漆棺画
 - (3) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺
 - (4) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床
 - (5) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
 - (6) C.T.100 旧蔵北魏石床
 - (7) 洛陽古代芸術館蔵北魏石床
 - (8) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北青石床
 - (9) 鄧県彩色画像甁
 - (10) 襄陽賈家冲画像甁
 - (11) 陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶
 - (12) 呉氏蔵北魏石床
 - (13) 呉氏蔵北魏石床脚部
 - (14) 呉氏蔵翟門生石床
 - (15) ヴァージニア美術館蔵北魏石床
 - (16) 安陽固岸東魏石床
 - (17) 襄陽清水溝M1南朝墓画像甁
 - (18) 襄陽柿庄M15南朝墓画像甁
 - (19) 呉氏蔵北魏崑崙石床
- 上記十九点の郭巨図の内、近時における郭巨図の研究の急速な進展を齎したのは、(12)以下の呉氏蔵遺品を中心とする、八点の図像である。特に(12)呉氏蔵北魏石床こそは、平成二十四（二〇一二）年三月に、私
が呉氏と出会うきっかけとなった、思い出深いもので、(12)はまた、北

魏期の孝子伝図における、陽明本孝子伝本文の直接的引用というものを、始めて確認し得る、学術的価値に富んだ遺品である（拙稿「呉強華氏蔵新出北魏石床について―陽明本孝子伝の引用―」へ『京都語文』24所収）参照）。さらに貴重なのが、(13)呉氏蔵北魏石床脚部で、石床脚部に孝子伝図の見出された、始めての例であることに加え、その孝子伝図は、全てが郭巨の図像で占められ、場面の総数は、何と六場面にも及んでいた。(13)はまた、三角形の山型の区切りなど、四（三）場面を有する、(2)寧夏固原北魏墓漆棺画のそれとも、深い関連を有するが（(4)和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床のそれも三連図）、その六つの場面とは、左のようなものである（拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」へ『佛教大学文学部論集』98所収）参照）。

①供養（プロローグ）

②道行

③穴掘り、黄金

④運搬

⑤供養（大団円1）

⑥官の黄金返還（大団円2）

上記(1)―(19)の郭巨図遺品は、その①―⑥のいずれかの場面を有することになるが、本石床の郭巨図図七は、③穴掘り、黄金の場面を描いたものである。図七左下に、合掌して胡坐するのは、郭巨の子供である（右向き）。その右に立つのが郭巨及び、妻である（共に左向き）。郭巨は、両手に甬すきを握り（右手の袖を捲まきり上げる）、右足を甬に掛けて

いる。甬の右下には、黄金の釜が見える。郭巨の妻が右手に団扇を持つて、それを顔の左へ掲げるのは、子供の生き埋めを見まいとする仕草であろうか。或いは、黄金の釜が出現したことで、隠した顔を披いた所かもしれない。図七に描かれた、③穴掘り、黄金の場面は、郭巨図の代表とすべきもので、殆どの遺品に含まれる画像だが、図七同様、③穴掘り、黄金のみを郭巨図の画像とするものに、(1)、(7)、(8)、(9)、(15)、(17)、(18)などがある。上記十九例の郭巨図遺品の内、(12)呉氏蔵北魏石床以下の八例の図像が、比較的近時に出現を見た郭巨図である。中で、(12)また、(13)呉氏蔵北魏石床脚部のそれは、既述の二拙稿に紹介した外、(14)以下の諸図については、拙稿「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」三、四章において、

(14) 呉氏蔵翟門生石床——図九

(15) ヴァージニア美術館蔵北魏石床——図十

(16) 安陽固岸東魏石床——図十四

(17) 襄陽清水溝M1南朝墓画像——図十一2

(18) 襄陽柿庄M15南朝墓画像——図十一3

(19) 呉氏蔵北魏崑崙石床——図十八

等として掲出しておいたので、それらの参照を乞いたい。

図八は、本石床右側板の中央に描かれた、9丁蘭図を示したものである。本図の基となった陽明本孝子伝9丁蘭条の本文を示せば、次の通りである。

河内人丁蘭者至孝也。幼失母、年至三十五、思慕不已。乃剋木為母、而供養之。如事生母不異。蘭婦不孝、以火燒木母



図八 丁蘭図

面。蘭即夜夢語_二木母_一。言、汝婦燒_二吾面_一。蘭乃答_二治其婦_一、然後遣_レ之。有_二隣人借_レ斧_一。蘭即啓_二木母_一。々々顔色不_レ悅。便不_レ借_レ之。隣人瞋恨而去。伺_二蘭不在_一、以_レ刀斫_二木母一臂_一。流血滿_レ地。蘭還見_レ之、悲号叫_レ慟、即往斬_二隣人頭_一以祭_レ母。官不_レ問_レ罪、加_二祿位其身_一。賛曰、丁蘭至孝、少喪_二亡親_一。追慕无_レ及、立_二木母人_一朝夕供養、過_二於事_一親_{（生親）}。身没名在、万世惟真

丁蘭図も漢代以来、非常に人気であった孝子伝図の一つで、本図（図八）を除き、これまで管見に入った丁蘭図としては、以下の十九図が上げられる。

- (1) 後漢武氏祠画像石（武梁祠）
- (2) 同（前石室13石）

(3) 同（左右室8石）

(4) 和林格爾後漢壁畫墓

(5) 孝堂山下後漢小石室画像石

(6) 開封白沙鎮出土後漢画像石

(7) 後漢樂浪彩簏

(8) 泰安大汶口後漢画像石

(9) 寧夏固原北魏墓漆棺画

(10) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺

(11) 和泉市久保惣記念美術館蔵北魏石床

(12) ボストン美術館蔵北魏石室

(13) C.T.100 旧蔵北魏石床

(14) 洛陽古代芸術館蔵北魏石床

(15) 襄陽賈家冲南朝画像甁

(16) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床

(17) 吳氏蔵北魏石床（三面）

(18) 安陽固岸東魏石床

(19) ヴァージニア美術館蔵北魏石床

上記十九例の内、1—8が漢代の遺品となっており、9以下、本図を含む十二図が六朝時代の遺品に該当している。本図は、上掲陽明本孝子伝本文におけるa、

〔丁蘭〕幼失_レ母、年至_二十五_一、思慕不_レ已。乃剋_レ木為_レ母、而供_二養之_一如_二事_一生母_{（不也異）}

と記される部分を、図像化したものである。図八は、画面左に、一軒

の家屋が描かれ、その屋内に、一人の女性が坐している（右向き）。

それが丁蘭の作った木母である。母の右の屋外に跪く一人の男性が丁蘭である（左向き）。丁蘭は、右手の袖を上げるのに対し、母は、両袖を上げており、両者は、恰も何かを話し合っている風情である。上掲の十九例の郭巨図の内、比較的近時に知られるに至ったのは、(17)、(18)、(19)の三図であるが、(17)を紹介した拙稿「蔡順、丁蘭、韓伯瑜図攷——呉氏蔵北魏石床（二面）の連れの出現——」（関西大学『国文学』101所収）三章において、(17)を含め、

(17) 呉氏蔵北魏石床（三面）——図十二

(18) 安陽固岸東魏石床——図十五、十六（題記）

(19) ヴァージニア美術館蔵北魏石床——図十七

として掲出しておいたので、それらの参照を乞いたい。特に(18)安陽固岸東魏石床のそれは、

孝子丁蘭

隣人往礼

と記す二行の題記を有し、当図像は、上引陽明本孝子伝⁹丁蘭条本文における、b以下の隣人の件を描いたもので、(1)後漢武氏祠画像石（武梁祠）の題記に、

隣人仮_レ物、報乃借与

とも見える場面に該当するが、北魏時代の丁蘭図中に絶えてその例を見ない、珍しい図像であることに、注意する必要がある。⁹⁾

三

図九は、本石床右側板左の董永図を掲げたものである。本図の基ついた陽明本孝子伝²董永の本文を示せば、次の通りである。

楚人董永^意至孝也。少失_レ母、独与_レ父居。貧窮困苦、傭賃供_レ養其父。常以_レ鹿車_二載_一父、自随_二着_一陰涼樹下。一鋤一廻、顧_二望_一父顏色。供養_二蒸_一々、夙夜不_レ懈。父後寿終、无_レ錢不_二葬_一送。乃詣_二主人_一、自_レ売_二為_一奴、取_二錢_一十千。葬送礼已畢。還_二売_一主家、道逢_二一_一女人。求_レ為_二永妻_一。永問_レ之曰、何所_二能_一為。女答曰、吾一日能織_二絹_一十疋。於是、共到_二売_一主家。十日便得_二織_一絹百疋。用_レ之自贖。々畢、共辞_二主人_一去。女出門語_レ永曰、吾是天神之女。感_二子_一至孝、助_レ



図九 董永図

還^ニ壳身^一。不^レ得^ニ久^一為^ニ君妻^一也。便穩不^レ見。故孝經曰、孝悌之志、通^ニ於神明^一。此之謂也。賛曰、董永至孝、売^レ身葬^レ父。事畢无^レ錢、天神妻^レ女。織^レ絹還^レ壳、不^レ得^ニ久^一処。至孝通^レ靈、信哉斯語也。董永図も漢代に引き続き、人氣を博した孝子伝図の一つであつて目下、管見に入つた董永図は、以下の二十一図に及ぶ。

- (1) 後漢武氏祠画像石（武梁祠）
- (2) 和林格爾後漢壁画墓
- (3) 泰安大汶口後漢画像石墓
- (4) 中岳漢三闕啓母西闕
- (5) 渠県蒲家湾無名闕
- (6) 樂山柿子湾Ⅰ区1号墓
- (7) 渠県蒲家湾無名闕
- (8) 江蘇徐州仏山画像石墓
- (9) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺
- (10) ボストン美術館蔵北魏石室
- (11) CT100 旧蔵北魏石床
- (12) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北齊石床
- (13) 陝西歴史博物館蔵三彩四孝塔式缶
- (14) 樂山麻浩Ⅰ区1号墓
- (15) 樂山麻浩Ⅱ区40号墓
- (16) 樂山柿子湾Ⅱ区22号墓
- (17) 濟南長清大街1号墓
- (18) 臨沂呉白荘画像石

(19) 呉氏蔵翟門生石床

(20) ヴァージニア美術館蔵北魏石床

(21) 華厦石刻博物館蔵北魏石床（二面）

上記(1)―(21)の内、(1)―(8)、(14)―(18)が後漢、(9)―(12)と(19)(20)(21)が北魏、(13)が唐のものとなっている^⑩。本図は、陽明本孝子伝本文の、

常以^ニ鹿車^一載^レ父、自隨^ニ着陰涼樹下^一。一鋤一廻、顧^ニ望父顔色^一。供養蒸々、夙夜不^レ懈

とある場面を描く。画面左の木の下に、三輪車に坐すのが、父である（右向き）。父は、左手で杖を突く。その右に立つのが、董永である（左向き）。董永が右手に鋤を握り、両脛を露わとするのは、彼が農業中であることを示している。父と董永との間に、大きな壺が見えるのは、父の糧食を入れたものだろう（20 ヴァージニア美術館蔵北魏石床の董永図にも壺が見えている）。

最後に近時、管見に入つた上記、(14)、(15)、(18)、(21)の董永図四図を紹介しておく。図十は、四川樂山麻浩Ⅰ区1号墓、図十一は、樂山柿子湾Ⅱ区40号墓の董黯図を示したものである^⑪。図十一は、画面の左に、左端の樹の下で鹿車（独輪車）に乗る父（右向き）、画面の右に、耕作する董永を描く（左向き）。樹の枝には糧食の容器が掛かり、父は、杖、董永は、左手に鋤を握っている。図十も、傷んではいるが、樹、鹿車、父の形が残り、図十一と同じ構図のものだろう。図十二は、臨沂市博物館蔵臨沂呉白荘後漢画像石墓、前室東過梁西面右の董永図を掲げたものである^⑫。画面右の大樹の下に（枝に糧食の容器が掛かる）、鹿車に乗る父（左向き）、画面左に、耕作する董永を描く（左向き）。



図十 楽山麻浩 I 区 1 号墓（董永）



図十一 楽山柿子湾 II 区 40 号墓（董永）

父は、鳩杖を両手に持つて左の肩に掛け、董永は、両手で鋤を握つて父の方を振り返っているが、この動作こそ陽明本に、「一鋤一廻、顧望父顔色」（船橋本「一鋤一顧、見父顔色」と記される部分を、表現したものに外ならない。図十二において特徴的なのは、冠を被った董永の両袖や父の両袖などが宙に翻ることで、同じような描写が、沂南北寨後漢墓中室の列土図に見える。図十三は、陝西省宝鸡市の華厦石刻博物館蔵北魏石床（二面）、左側板左に描かれた董永図を示したものである。画面の上方やや右寄りに、

董永看父助時

という題記が記される（助は、鋤の宛字）。この題記も、先に触れた陽明本の本文に基づくものである。画面左、大きな銀杏の樹の下で、



図十二 臨沂吳白荘後漢画像石墓（董永）



図十三 華厦石刻博物館蔵北魏石床（二面。董永）

独座に坐るのが、父である（右向き）。董永図に特有の車は、見当たらない。画面右、左手に握った鋤を立て、父の方を顧るのが、董永である（右向き）。二人の間には、例の壺等が描かれている。

漢代から六朝期に掛けての董永の物語をめぐるのは、種々の議論がある。それは、孝子伝本文研究の立場から見れば、例えば前掲の陽明本孝子伝2董永条とはまた、別の董永物語を仮定することである。そして、その一つのきっかけとなっているのが、漢代以降の孝子伝図資料に散見する、董永とその父以外の登場——女性とか子供とか——であることに着目したい。今般紹介した四つの董永図には、それらの人物が一切、登場していない（20も同じ）。このことは、陽明本孝子伝2董永条が、六朝期の物語の形を示すものであり、さらにそれが漢代へも溯る、証左であるように思われる。陽明本より古い、孝子伝等の文献資料は、管見に入らないからである。肖貴田氏が始めて報告された、⁽¹⁷⁾濟南長清大街1号墓の董永図などの実地調査を通じ、その問題はまた、機会を改めて考えてみたい。

〔注〕

- （1）拙稿「董黯図攷（二）——吳氏蔵董黯石床の出現——」（『佛教大学文学部論集』102、平成30年3月）
- （2）図一は、吳氏提供の写真に拠る。
- （3）図三は、吳氏提供の写真（図版一——図版四と共に黎明舎主、立松洋行氏撮影）に拠る。以下も同じ。
- （4）注（1）前掲拙稿参照。
- （5）⁽¹²⁾吳氏蔵北魏石床の郭巨図については、拙稿「吳強華氏蔵新出北魏石床について——陽明本孝子伝の引用——」（『京都語文』24、平成28年11月）

なお趙超、呉強華氏『永遠的北朝 深圳博物館北朝石刻芸術展』〈文物出版社、二〇一六年〉に、拙稿の黄盼盼氏による中国語訳が収められる（を参照されたい）。

(6) 拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」

（『佛教大学文学部論集』98、平成26年3月）

(7) 拙稿「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29年3月）。なおその後、

(20) 北朝芸術博物館蔵北魏石床脚部

に描かれた郭巨図（四図）が出現し、小稿等における①―⑥の場面認定を改めた。詳しくは拙稿「北朝芸術博物館蔵の郭巨董黯石脚―呉氏蔵郭巨石脚との関連―」（『京都語文』26、平成30年11月）を参照されたい。また、(19)の墓主、翟門生がソグド人であることは、拙稿「翟門生覚書―呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―」（『京都語文』25、平成29年11月）において論じた（その二章後半及び、三章の中国語版が、『翟門生粟特人身份考―以薩甫為中心』として、中国社会科学院文学研究所『多維視野下的中日文学研究』〈社会科学出版社、二〇一八年〉117―127頁に収載、公刊された）。

(8) 拙稿「蔡順、丁蘭、韓伯瑜図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の連れの一面の出現―」（関西大学『国文学』101、平成29年3月）

(9) 注(8)前掲拙稿及び、その注(28)参照。

(10) (14)―(16)は、唐長寿氏「楽山崖墓画像中の孝子図釈」（『長江文明』5、二〇一〇年6月）による。(17)、(18)は肖貴田氏「漢至南北朝董永故事及其図像的嬗変」（『東方考古』7、二〇一二年12月）による。なお(19)と(20)については、注(7)前掲拙稿図版七また、図二十四と図二十五を参照されたい。

(11) 図十は、二〇一六年八月に私の撮影した写真、図十一は、唐長寿氏注(10)前掲論文図一に拠る。

(12) 図十二は、二〇一五年八月、私が撮影した写真に拠る（立松洋行氏が見易くしてくれた）。なお肖貴田氏注(10)前掲論文及び、その図八参照。

(13) 図十三は、華厦石刻博物館提供の写真に拠る。

(14) このことについては、注(7)前掲拙稿五を参照されたい。

〔付記〕

小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環であり、呉強華理事長の御高配に心から御礼申し上げたい。

くろだ あきら 日本文学科

二〇一八年十月十日受理

玉鬘と光源氏

上野 辰義

〔抄録〕

光源氏にとって、玉鬘巻から真木柱巻までのいわゆる玉鬘十帖において展開する玉鬘との物語とは、なにであったのか。六条院における太政大臣としての光源氏の権勢・みやびの視点、竹取物語取りの視点、第二部若菜巻以降の物語の先蹤としての視点、等々、既に多くの考察がなされているが、本稿では、従来さほど

留意されていないいくつかの点に注意しながら、光源氏の人生の一齣という位置づけに配慮しつつ、このことを考えていく手掛かりを得ていきたい。

キーワード 源氏物語、光源氏、玉鬘、すき、夕顔

一 玉鬘巻頭と末摘花巻頭

玉鬘巻は、夕顔喪失から十八年を経てもいまだ変わることのない、光源氏の夕顔への変わらぬ思いから語られ始める。

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れ給はず、心々なる人のありさまどもを、見給ひかさぬるにつけても、あらましかば、とあはれに口惜しくのみおぼし出づ。右近は……。かの西の京にとまりし若君をだに、ゆくへも知らず、
(玉鬘七一九)¹

夕顔喪失以後、十八年経過しても夕顔を微塵も忘れることなく、個々の性格の異なる女性たちとかかわりを重ねる中で、一段と夕顔が健在であったのならと、残念にばかり思い出すという。その理由は、この玉鬘巻頭とよく似た語りで始まる末摘花巻頭に明らかである。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれしこちを、年月経れどおぼし忘れず、ここもかしこもうちとけぬ限りの、けしきばみ心深きかたの御いどましさに、けぢかくうちとけたりし、あはれに似るものなう、恋しくおもほえ給。
(末摘花二〇二)

前年八月十六日に喪つて以後、五、六箇月ほど経つて年を越えても忘れることなく、上の品を軸とした、情交に緊張を強いられる他の妻や恋人たちと違って、夕顔は馴染みやすく、心を開いて打ち解けることのできる存在だったからである。最愛の紫上を得てもその事情は変わらない。紫上は「少しわづらはしき氣そひて、かどかどしさのすみ給へる」（朝顔）女性で嫉妬を隠さなかったが、夕顔は「世の人に似ずものづつみをし給ひて、人にも思ふけしきを見えむを恥づかしきものにし給ひて、つれなくのみもてなして御覽ぜられたてまつり給ふ」ようにふるまう女性で、「女はただやはらかに、とりはづして人にあざむかれぬべきが、さすがにものづつみし、見む人の心には従はむなむあはれに」（夕顔）思われた女性だったからである。

こうして玉鬘巻頭と末摘花巻頭は、他の女性たちと代替不能な特質をもつ夕顔を、喪失後多くの時間が経過しても忘れられず、恋い慕っているという光源氏の心情が語られている点で共通しているが、相違点もある。

末摘花巻では、こうした心理から、光源氏はそうした夕顔の欠損を埋めるべく、常陸宮娘末摘花の状態に疑念を引きずりながらも期待を先行させて接近し、失敗に至っていた。それに対し、玉鬘巻では、夕顔の形見と見なされて光源氏の須磨退居以来紫上付きの侍女となっている右近に言及し、六条院移徙時の右近の感慨により、話題が夕顔を經てその遺児玉鬘の、母夕顔の失踪・頓死時に遡つて以降の動向に転じていく。それにより、玉鬘は光源氏の養女（対世間的には実子）として六条院入りしてくるのだが、すると玉鬘巻頭には、両親（光源

氏・夕顔）の紹介を経て主人公（玉鬘）が登場してくるという、長編的構想の物語の始発の形式が、一編全体の冒頭ではないが認められることになる。光源氏が養父であるという点も、竹取物語の翁とかぐや姫との関係に対応する。玉鬘は既に帚木巻・夕顔巻でその存在が言及されており、夕顔頓死後光源氏は、「人にさとは知らせで、我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に」（夕顔）と、玉鬘を引き取る意向を右近に示していたから、玉鬘巻頭時に初出ではないが、形式的には長編的構想の物語の冒頭形式なのである。この巻頭により、以後玉鬘が玉鬘十帖の求婚譚のヒロインとなり、光源氏の以後の主人公性が相対化していくことが予示されていることになる。^②そして、末摘花巻頭で語られていた夕顔への思いが末摘花に向かつていったように、玉鬘巻頭で示されていた夕顔の喪失をいまだ「あはれに口惜しくのみおぼし出」でていた光源氏の思いは、夕顔の「御形見」である玉鬘に向けられていくことになる。とりあえず、玉鬘は光源氏の養女、外向きには実娘として、六条院に迎え入れた。

倉田実氏は、行幸巻での玉鬘の裳着によって光源氏との養子縁組が正式になされたのであり、玉鬘は光源氏の実子を偽装されて六条院入りしたのであって、「養女として六条院入りした」のではない、といわれる。^③確かにそのとおりなのだが、光源氏や紫上、右近、玉鬘とその従者たちなど、事情を知っている者においてはやはり養女扱いされて六条院入りしたわけで、裳着までの間はそうした二重性をもっているのである。

光源氏と十四歳差の玉鬘が二十一歳で、光源氏の妻・愛人としてで

なく、養女として六条院入りにしたのは、いくつか事情がある。まず夕顔巻での夕顔頼死後から光源氏がその意向を示していた。頼死事件後の大病から回復して、右近から夕顔の素性を聞いた際に、雨夜の品定時に頭中将の語っていた幼児の存在を確認して、「いづこにぞ。人にさとは知らせで、我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に」、「そのあらむ乳母などにも、ことざまに言ひなして、ものせよかし」(夕顔一三九)、と。だが、前掲の玉鬘巻頭部に引き続いて、「(右近は)ひとへにものを思ひつつみ、また、(光源氏が)いまさらにかひなきことに寄りて、わが名漏らすな、と口がためたまひしをはばかりきこえて、尋ねても訪れきこえざりしほどに」とあるように、夕顔頼死の事実とその責任相手が光源氏であることを隠したまま、三歳の玉鬘を右近が連れ出すことは実質不可能で、相互に情報が見えなかったまま十八年が過ぎた。その間も、玉鬘巻で玉鬘一行と邂逅した右近が一行に語ったところによると、右近が光源氏に、機あるごとに夕顔の遺児玉鬘の話題を取り上げると、「聞こしめしおきて、われいかで尋ねきこえむと思ふを、聞きいでたてまつりたらば」(玉鬘七三九)知らせよ、「かの御代はりに見たてまつらむ、子も少なきがさうざうしきに、わが子を尋ねいでたると人には知らせて、とそのかみよりのたまふなり」と言つて、引き取り・実子偽装の意思を当時から(夕顔頼死直後だろう)継続して示していたのであった。であるから、玉鬘巻で右近が実際に玉鬘を見つけ出し、光源氏にそれを報告するまで、玉鬘自身は二十一歳になっていたながら、玉鬘と光源氏の関係は、光源氏の意識の中では夕顔巻当時のまま、玉鬘を迎えて養女として養育する、

という認識がまずは持続していたのである。

つぎに、右近が、「須磨の御うつろひのほどに、対の上の御かたに、みな人々聞こえわたし給ひしほどより、そなたにさぶらふ」と、光源氏の須磨退居時以来、紫上付きの侍女になっていたことの影響がある。玉鬘巻で光源氏に玉鬘発見の報告をすべく長谷から帰京し、六条院に参上した時にも、翌日「とりわきて右近を召しいづれば、面だたしくおぼゆ。大臣も御覧じて、『などか、里居は久しくしつるぞ。』」(玉鬘七四一)と、右近を召し出した主人が紫上であり、大臣光源氏はそこに陪席していたのだとわかる。光源氏は紫上と常に一緒にいたから、右近は主人である紫上に、かつての主人であり光源氏の情事の相手であった夕顔の遺児の話聞かせにくく、光源氏も右近の主人である紫上への手前、かつての情事の相手である夕顔の遺児を二十一歳になつてゐるからといつて愛人として六条院に迎えるとは言えなかった。玉鬘発見の報告を紫上の前で右近から聞いた光源氏は、「われに似たらばしも、うしろやすしかし、と、親めきての給」ほかなかつたのである。玉鬘はこうしてまず養女として迎えられしかなかった。

玉鬘巻頭に見られる長編的構想の物語の冒頭形式のとおりである。そして、夕顔追慕の念で同様に語られ始めていた末摘花巻頭との対比で言えば、末摘花巻における末摘花体験の失敗により、「かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや」と容貌を気にし、「かの末摘花の言ふかひなかりしをおぼしいづれば、さやうに沈みて生ひいでたらむ人のありさま、うしろめたくて、まづ文のけしきゆかしくおぼさるるなりけり」(玉鬘七四五)と、筆跡・和歌・教養のさまが気になり、結

果はともに及第であつたばかりか、母夕顔と比べても、長谷寺で觀察した右近の目にも、玉鬘は、「母君は、たないと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎ給へりし、これはけだかく、もてなしなど恥づかしげに、よしめき給へり」（玉鬘七四〇）と、貴族めいた品格を有していた。玉鬘は、筑紫に下向する四歳時、また十歳ばかりの時にも、その美しさ、気高さが語られていたが、その後も、「この君ねびととのひ給ままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものし給」と、母夕顔以上に、容貌心ばせなどが申し分なく貴族的であることが語られ、「二十ばかりになり給ままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし」と、結婚可能の望ましい理想的女性となつたのである。そのころ筑紫で「ものおほし知るままに、世をいと憂きものにおほして、年三（ねさう―尾州家河内本・陽明本など、「ねんさう」―池田本・麦生本・阿里莫本、「ねむさう」―肖柏本・穂久邇文庫本）などし給」とあるのも、周囲の推奨もあつただろうが、藤袴巻末に「女の御心ばへは、この君をなむもとにすべき、と大臣たち定めきこえ給ひけりとや」と評されることに繋がる玉鬘の処世意識の高さを示すものである。

二 「年三」と「ねさう」

玉鬘が、「ものおほし知るままに、世をいと憂きものにおほして」修したという「年三」¹⁾は、その所依の經典により多少目指すところの

趣を異にする。『拾芥抄』（『尊經閣善本影印集成』17）によれば、正月・五月・九月の上十五日に持戒齋行道などし、また五味を断ち持戒精進し、佛菩薩名を称して、「一切罪業消滅、災難無起、命終之後往生十方淨土云々」と、現世を安穩に過ごして、後世の往生十方淨土を願うものだが、『提謂波利經』では、五戒を保つことを基本に、六斎日・八王日とともに、年三長齋を修して、「生天」・「増寿益算」・「定福祿」と、より世俗的な功德になつている。『仏說年三長齋殊勝福田功德經』では、「忽脫諸難。必獲殊勝福利」と、それは一段と現世的に傾く。中国の民衆宗教の色合いが濃い。「よをいとうきものにおほして年三などし給」のなら、後世の往生十方淨土に目を向けた『拾芥抄』の場合が最も自然と思うが、より現世的であつてもおかしくはない。

「ねさう・ねんさう（年星）」等は、大島本「年三」部分の傍書に「當年星」、「源氏和秘抄」（続群書類従一八下）に、「ねさう ねんさうといひて。年に三たびせうじをする也。又當年しやうをまつることをいふといへり。」ともあるように、これ以後の注に、「ねんさうなとし給 … 又年星とて其年の星を祭る事也…」（『尋流抄』井爪康之編）、「ねさう 年星也 又年三…」（『内閣文庫本細流抄』源氏物語古注集成七）、「ねさう … 一説年星歟云々当年の星の事也」（『休閒抄』源氏物語古注集成二二）、「ねんさうなとし給 … 又云毎年星をまつることをいふともいへり…」（『万水一露』源氏物語古注集成二五。この「毎年星」には誤りがあるか）と、見られるようになるものである。源氏物語以外では、『後撰和歌集』に、

年星をこなふとて女檀越のもとよりすゝをかりて侍ければくはへてつかはしける

ゆいせい法師 惟濟

もゝとせにやそとせそへていのりくる玉のしるしを君見さらめや
（『後撰和歌集』巻二十慶賀 天福二年本、『冷泉家時雨亭叢書』）
とみえ、詞書「年星」の部分、非定家本では、堀河本を除いて「年三」、定家本では、初期の中院本を除いて、天福二年本を含め「年星」とある。また、『帥大納言集』（内題、経信卿家集。書陵部蔵）に、

あこかひめきみの、ねさうしゝはしめられしに、あふきにかきつけられし

あさゆふにあふきてをかむかひありて そらなるほしもあはれとはみよ

とある「ねさう」も「年星」と考えられる。（異本の『大納言経信集』書陵部蔵には、「ねさう」の部分が「年三」とある。）

この「年星」は、『織田佛教大辞典』「ネンシヤウ（年星）」の項に、「古語にねんさうと讀む、人人其の年の當り星なり、若し其の星他に侵さることあらば其の人災害を蒙ると云う、密教に之を禳ふ法あり、俗に之を星祭と云ふ。」「ホシマツリ（星祭）」の項に、「宿曜經に人人の當年星本命星の侵さるるを以て其人に災ありと説く。然るに如来の大悲陀羅尼を説て之を消除す。」とあり、また、『密教大辞典増訂版』「ゾクシヨウク（屬星供）」に、「當年所屬星供の義にて當年星供ともいひ、又は單に星供と稱す、星供には本命星供と屬星供とあれども、現時は多く屬星供を行ふ。當年星に供養して轉禍成福を祈る法な

り」とあるものと考えられる。當年星は、『掌中歷』（続群書類従三二上）・『二中歷』（『新訂増補史籍集覽』・『拾芥抄』下の各「屬星歷」に同様に見えるもので、五曜と日月、羅睺星、計都の九星を、羅睺星、土曜、水曜、金曜、日曜、火曜、計都、月曜、木曜の次第で、一歳から順に、そして一巡すれば再び羅睺星を十歳から循環的に年齢によって配属していくものである。そして、この當年星は、「その年、その年齢の運命が所属する星で、一年間に限った屬星だから、一般に年星と呼ぶ」（速水侑氏『呪術宗教の世界』）と言われるもので、速水氏も言及されるように、「當年星」は當年屬星ト云ヘシ（『澤鈔』大正新修大藏經）、「當年所屬曜」・「當年行年所屬神」（『小野六帖』大正新修大藏經）などと称される。前掲の、『織田佛教大辞典』に、「若し其の星他に侵さることあらば」というのは、天徳元（九五七）年に日延が請来した『新修符天曆經并立成』等によつて従来に比較して格段に正確な天体の運行を計算することができるようになり、そうした曆算によつて生まれた年月日時刻による九曜の位置などに基つき一生の運命を占う「生年勘文」、ある特定の年の個人の運命をその年の九曜の位置により占う「行年勘文」、日食・月食による影響を占う「日食勘文」、「月食勘文」などの「宿曜勘文」が作られるようになったことと関係する。當年星に変異等があれば（なくても必要に応じ）、「星祭」⁵「當年星供」を行うのである。しかも、『新修符天曆經并立成』等を請来して宿曜道の成立をもたらした日延は、後、遁世隱居し、老親とともに、大宰府近郊（「近時府家之鎮山」）に下向し、康保年中（九六四〜九六八）、九条師輔の菩提を弔う為に大浦寺を建て（『平安遺文』

四六二三「太宰府政所牒案」太宰府神社文書、この大浦寺は平安中期には代々座主を置いて、室町期に至っている（『福岡県の地名』日本歴史地名大系41「大浦寺」の項）ように、北九州との関係も深い。星祭・當年星供の目的は、「災難消除」「轉禍成福」である。

玉鬘が、「年三」「年星」いずれを修したのか、諸状況から断定は下しにくい。結婚適齢期の女性の開運を求めている状況の意志、十世紀後半からの宿曜道の広まり、日延と北九州との関係の深さからすると、「年星」の方がふさわしく思われる。玉鬘は処世意識・意欲の強い女性だったのである。

三 六条院丑寅の町の西の対

その玉鬘は、六条院の丑寅の町、西の対に、既に置かれていた文殿を他に移して、入った。南の町は人多く余裕がなく、西の町は秋好中宮の侍女待遇に見なされるのを恐れての処置だったが、これについては、村井利彦氏の発言が注意される。氏は、母夕顔が亡くなった「西の対」のある某院が、(1)源融の六条河原院を意識して書かれている以上、六条にあり光源氏が自由勝手にしてよい施設で、未摘花巻に「かの、ものに襲はれしをりおぼしいでられて、荒れたるさまは劣らざるを、ほどのせばう、人げの少しあるなどに慰めたれど」とあるところから、常陸宮邸より広大で、「六条院造営に際しては、六条にあった某院も六条御息所邸のごとく取り込み利用したと考えられる。」（八七頁）(2)少女巻に「もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しか

へて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御かたがたの御願ひの心ばへを造らせ給へり」とあることが、六条御息所邸のみならず、「六条院の規模に相当する『池山』を有する古い施設」「某院」の再活用を示している。(3)「昔光源氏と夕顔が愛の逃避行をした」某院が、光源氏との愛に田子のようにもがいていた六条御息所邸の東隣北隣とは考えにくいから東北に位置するだろう。その結果六条院丑寅の町の西の対に入った「玉鬘は、夕顔の死んだ位置にいて、夕顔の命を源氏物語に繋いでいる。」（八八頁）と言われる。だとしても、某院が一町規模であったかどうか（河原院は『二中歴』に「六条北京極東」、即京外鴨河原域、町数不明、『拾芥抄』に「六条坊門南万里少（ママ）路東八丁云々…本四丁京極西」とある。）、一町としても六条院造営に際し、丑寅の町には馬場や馬場の大殿が設けられ、その西の対に某院の西の対の位置が継続されたか否か、問題はあがあるが、イメージ想起の地平においては十分あり得る推論だろう。

光源氏が、玉鬘を夏の町の西の対に住まわせ、「われはかうさうさうしきに、おぼえぬ所より尋ねいだしたると言はむかし。好き者どもの心尽くさするくさはひにて、いといったうもてなさむ」（玉鬘七四四）などと語ったのに対し、右近は、「いたづらに過ぎものし給ひしかはりには、ともかくもひき助けさせ給はむことこそは、罪軽ませ給はめ」と言っていたように、玉鬘を「好き者どもの心尽くさするくさはひ」として、「いといったうもてな」すことが、光源氏の滅罪、夕顔供養であり、日向一雅氏の言われるように、「夕顔鎮魂のための何よりの術法」であった。冷泉帝後宮には、既に内大臣娘の弘徽殿女御、

光源氏養女の秋好中宮が存在し、当時九歳の東宮には、七歳の明石姫が将来の妃として控えていた。明石姫は后となることが予言されていたし、光源氏・右近の意識では、藤壺宮と紫上ともども美人の極点であった。玉鬘が仮に内大臣方の娘として入内しても、東宮の十二歳上、美女度でも明石姫にわずかにしる及ばない。であるならば、太政大臣の娘として貴族社会の注目を浴び、華やかな求婚競技のヒロインとして幸せな結婚をさせてあげることが、母夕顔と娘玉鬘の為に最も望ましいことであつた。ちなみに、このことは、光源氏が前斎宮秋好を養女に迎えて、冷泉帝後宮に入内させ、中宮に即けて、それが母六条御息所の慰霊、光源氏の滅罪行為と意識されたことと類比的である。

玉鬘が、母夕顔の頓死した某院西の対を想起させる、六条院丑寅の町の西の対に入つたことは、夕顔玉鬘母娘の連続性・一体性を意識させ、玉鬘を夏の町の西の対に、文殿を移動させてまで据えた光源氏の内面までも窺わせるものである。

四 母夕顔と娘玉鬘

だが、光源氏は、この求婚競技の企画者・指南役でありながら、玉鬘に恋心を抱くようになる。

前もって言うっておけば、光源氏が玉鬘を養女でなく、自分の妻の一人、あるいは愛人とすることが、世間的にも可能であつたことは、以下に言及する、いくつかの記述から確認できる。胡蝶巻では、美しく気が利いて、親しみやすい性格の玉鬘を、光源氏が「わが御心にも、

すくよかに親がりはつまじき御心やそふらむ、父大臣にも知らせやしてまし、などおぼしよるをりをりもあ」(七八七) ったし、玉鬘を六条院に引き入れた右近が、光源氏を玉鬘の「親と聞こえむには、似けなう若くおはしますめり、さし並び給へらむはしも、あはひめでたしかし、と思」(胡蝶 っていた。また蜚巻では、玉鬘も光源氏の懸想を「親などに知られたてまつり、世の人めきたるさまにて、かやうなる御心ばへならましければ、などかはいと似げなくもあらまし」(八一〇) と思ひ、藤袴巻では、光源氏から玉鬘の存在を告げられた実父の内大臣が、「尋ね得給へらむはじめを思ふに、定めて心きよう見放ち給はじ、∴、それを疵とすべきことかは、ことさらにも、かの御あたりに触ればはせむに、などかおぼえの劣らむ」(九〇一) と思つていた。さらに真木柱巻では、夫となつた髭黒が玉鬘の処女であつたことを「かの疑ひおきてみな人のおしはかりしことさへ、心きよくて過ぐいたまひけるなどを、ありがたうあはれと思ひまじきこえ給」(真木柱九四〇) いもしていた。

であるのに、二人の間に性的交渉の不成立に終わつたことの原因を、藤井貞和氏は、光源氏と六条御息所の遺児秋好中宮との場合も含めて、近親婚のタブーのためとして説明されている。確かにこの二つのケースは、「六月(十二月) 晦大祓」「国津罪」の一つ「母與子犯罪」(「まづある女と通じ、後にその女の子と通ずる罪」日本古典文学大系頭注)に当るもので、歴史的には、『とはずがたり』の後深草院と二条娘・母の例、逆の「子與母犯罪」としては、平城天皇と藤原薬子母・娘、などの例が指摘できるが、六条御息所が光源氏に前斎宮を「おも

ほし人めかさむ」ことをあえて拒んだことも含めて、源氏物語では、「母與子犯罪」が意識されていないように見える。この現象は物語の表層と深層の問題なのかもしれないが、「表層」において、さらに考えるべきであろう。⁹

光源氏が玉鬘に恋心を抱くようになる経緯には母夕顔への思いが重なる。秋山虔氏がいわれるように、「あの夕顔への惑溺が、そのままむすめに転移する好き心があつた」¹⁰のである。光源氏は、右近との前掲の「好き者どもの心尽くさするくさはひ」「罪軽ませ給はめ」会話の後、次のように言う。

あはれに、はかなかりける契りとなむ、年ごろ思ひわたる。かくてつどへる方々のなかに、かのをりの心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを、命長くて、わが心長さをも見はべるたぐひ多かめるなかに、言ふかひなくて、右近ばかりを形見に見るは、口惜しくなむ。思ひ忘るる時なきに、さてものしたまはば、いとこそ本意かなふこちすべけれ。
(玉鬘七四四)

夕顔への愛情執着緊張度の極点は、（藤壺宮はさておき）紫上の場合も及ばぬもので、夕顔を忘れるときなく、あつけない宿縁と思いつている、形見である玉鬘を迎え入れるのは、その補償となる、と。この発言に右近への顧慮はそれほど働いていないだろう。そして、玉鬘の歌と書の出来を見て六条院入りに問題なしと確認し、紫上にもかかわらずの恋人夕顔の存在を打ち明けて、次のように言う。

人の上にてあまた見しに、いと思はぬ仲も、女と言ふものの心深きをあまた見聞きしかば、さらにすぎずきしき心はつかはじ、

となむ思ひしを、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに、あはれとひたぶるにらうたきかたは、またたぐひなく思ひいでらる。世にあらましかば、北の町にもする人のなみには、なか見ざらまし。人のありさま、とりどりになむありける。かどかどしう、をかしき筋などはおくれたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな。
(玉鬘七四七)

夕顔は、品よく、誰よりも心を揺さぶられるほどひたすらに可憐であった、と。教養があり、機転を働かす点は、眼前の紫上の方が優れているが、また、花散里に玉鬘の養母を依頼する際には、

かの親なりし人は、心なむ、有り難きまでよかりし。御心も後安く思ひ聞ゆれば。
(玉鬘七四八)

光源氏がここで言う「心」のよさとは、例えば前掲末摘花巻頭にみえる、他の女性達の「けしきばみ心深きかたの御いどましきに」対して、夕顔の「けぢかくうちとけたりし、あはれ」をいうのであろう。

このように、右近・紫上・花散里、三者三様に焦点を変えて夕顔への思いを表白していた光源氏は、六条院入りした玉鬘に初めて対面して、こう言った。

「年ごろ御行くへを知らで、心にかけぬひまなく嘆きはべるを、かうて見たてまつるにつけても、夢のこちして、過ぎにしかたのこともとりそへ、忍びがたきに、えなむ聞こえられざりける」とて、御目おし拭ひたまふ。まことに悲しうおぼしいでらる。
(玉鬘七五〇)

長年行方を尋ねていた玉鬘に会えて、母夕顔との事が思い出されて堪

えがたい思いた、と。そして、返事をする玉鬘の「ほのかに聞こえ給声」が「昔人にいとよく覚えて、若びたりける」のを、光源氏は確認した。聞き覚えのある夕顔の声は十九歳時のもの、いま玉鬘は二十一歳、声で夕顔が若く甦ったのである。これについての光源氏の感慨は特に示されていないが、玉鬘が容貌も教養も、末摘花とは異なり貴族女性として及第であつたのを喜び、紫上の許へ帰った後、思いを述べた手習に、夕顔の遺児玉鬘が光源氏の許へ寄り付くことになった縁を思量し、

恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなる筋をたづね来つらむ
(玉鬘七五一)

と書いて、「あはれ、と、やがてひとりごち」た時、光源氏の心には、玉鬘に夕顔がかさなっていたはずだ。感に浸っている光源氏の姿を見て、紫上も、「げに深くおぼしける人のなごりなめり、と見」て、光源氏にとって夕顔が特別の女であつたことを理解した。

ところで、この時紫上に、先に右近にも言っていた、玉鬘を好き者の心尽くさせる「くさはひ」としてもてなすことを再び述べ、六条院に来ては「いとうるはしだちてのみ」いる好き者どもの「心乱り」て「なほううちあはぬ人の気色見集めむ」と言つたのは、光源氏本人は参加できない、玉鬘争奪競争のへの代償行為とも理解できる。それゆえ、それを聞いた紫上は、「あやしの人の親や。先づ人の心はげまさむ事を先におぼすよ。けしからず」と、玉鬘を女として見ている光源氏に気づいた。光源氏は即座に反応して、「まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ」と言い返した光源

氏の「今の心」には、男の情念が燦っていたのである。玉鬘と光源氏の親子関係は既に不安定な状態にある。

そして、玉鬘巻末で新年用に、「くもりなく赤きに、山吹の花の細長」を玉鬘によそえた時、紫上が、見ぬように見て合点し、「内の大 臣の、はなやかに、あなきよげとは見えながら、なまめかしう見えたるかたのまじらぬに、似たるなめり、と」推量したように、母夕顔を越える玉鬘の器量は父親由来のものが勝っていたようだ。かつ、そう推量した紫上の様子は、「色には出し給はねど、殿見やり給へるに、たゞならず」と語られ、紫上が、明石御方ともども玉鬘に並々ならぬ注意を向けていたことが知られる。光源氏と血の繋がっていないことを知っている紫上は、玉鬘を警戒していたのである。光源氏は紫上との関係からも、玉鬘に軽率な行動は取り得ない。

年越えて初音巻、正月、山吹の細長にもてはやされて、はなやかに明る玉鬘が、物思いに沈んで、髪が少しほつそりとさわやいでいるのを見て、このような玉鬘を六条院に迎え入れることがなかったのならばとおもうにつけても、「えしも見過ぐし給まじくや」と、光源氏の玉鬘への思いは、語り手に予想されるようになるが、この玉鬘には父親譲りの容貌、そして実父に会いたいという思いは知られるが、母夕顔の存在は直接にはうかがえない。

それから二か月余り後の三月末、胡蝶巻では、「けしきいと労あり、なつかしき心ばへと見えて」と、玉鬘に初めて「なつかし」という語が使われる。夕顔巻の「なつかし」「なつかしげなり」五例のうち三例は夕顔に関して用いられ、二例は光源氏に関して用いられる。夕顔

に係わりの深いことばなのである。この「なつかしき心ばへ」により、六条院の他の女君たちと良好な関係を築いている玉鬘が語られ、求婚者も増える中で、光源氏も、「わが御心にも、すくよかに親がり果つまじき御心や添ふらむ、父大臣にも知らせやしてまし、など、思し寄る折々もあり」と、玉鬘への思いが膨らみ、実父を偽装し続けることに自信が持てなくなってくる。実父に存在を知られたいと内心では思いつながら、それを口にはせず、一途に光源氏を信頼し打ち解けてくる玉鬘の可憐で若々しい様子は、「似るとはなけれど、なほ母君のけはひに、いとよくおぼえて、これはかどめいたところぞ添ひたる」と語られ、今までの声のみならず、「けはひ」も母夕顔を彷彿させるようになる。光源氏にうちとけてくる「なつかしき心ばへ」が効いているのである。

光源氏の玉鬘への思いが明確に示されるのは、四月に入って、玉鬘への多くなってくる求婚者たちの懸想文に対する対応を指南をしつつ、都慣れして垢ぬけて来た玉鬘を、「こと人と見なさむは、いと口惜しかばう思さる」と語られるところだ。右近も目の前の二人を見て、「親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり、さし並び給へらむはしも、あはひめでたしかし、と思」っていた。

この場面で注意されることは、光源氏が、主要な求婚者である兵部卿宮と髭黒大将の注意点を語った後、玉鬘に相談相手として、「まろを、昔ざまにならずらへて、母君と思ひない給へ。御心に飽かざらむことは心苦しく」と、語ったことだろう。光源氏は、十八歳時北山で幼い紫上を見出し、祖母尼に養育を申し出た時にも、

あはれにうけたまはる御ありさまを、かの過ぎ給ひにけむ御代はりにおぼしないてむや。言ふかひなきほどの齡にて、むつまじかるべき人にもたちおくれはべりにければ、あやしう浮きたるやうにて、年月をこそかさねはべれ。同じさまにものし給ふなるを、たぐひになさせ給へ、といと聞こえまほしきを、かかるをりはべりがたくてなむ、

（若紫）

と、幼くして母を亡くした共通点を梃子に、自分を母代わりに見なして預けてほしいと申し出ていた。この言葉には真情もこめられていたであろう。実際に、祖母尼の死後、紫上を二条院に迎え入れ、母のごとくに育て上げたことは、須磨に退居した光源氏からの文を読んで紫上が光源氏を深く恋い慕ったときに、紫上が光源氏に、「馴れむつびきこえ、父母にもなりて生ほしたてならはしたまへれば、恋しう思ひきこえたまへる、ことわりなり」（須磨）と語られていることから知られる。同様の言葉は、母六条御息所を亡くした前斎宮にも見舞いの折に述べていた。

かたじけなくとも、昔の御なごりにおぼしなずらへて、けどほからずもてなさせ給はばなむ、本意なるこちすべき。

（濡標五〇九）

この二人、紫上は、二条院迎え入れ当初は内々の養女扱いであるし、前斎宮も養女となった。尤も、前斎宮の養母には紫上がなったが、母を亡くした女性に、「けどほからずもてなさせ」て、男が近づくには、亡き母代わりのポジションを使うのが効果的だったのであろう。母と娘は繋がりが深いのが普通だからである。男子だが、父親から疎遠に

されているとこぼした夕霧に、祖母大宮も、「母にもおくるる人は、
ほどほどにつけて、さのみこそあはれなれど」(少女七〇二)と言っ
ている。光源氏は、玉鬘にも三度、男ながら母代わりと言つて、親
しく近づこうとしたのである。実際、蜚蜚で兵部卿宮の来訪時に玉鬘
に蜚蜚を放つたりして、周到な世話をした光源氏を、侍女たちは、「よ
べいと女親だちて、つくろひたまひし御けはひを、うちうち知らで、
あはれにかたじけなしとみな言」(蜚蜚八一〇) つていた。だが、この
時点で玉鬘には既に養母として花散里が存在していたから、光源氏は
文字どおり、「まろを、昔さまになすらへて、母君と思ひない給へ」
と、自分を玉鬘の記憶にも残っていない、母夕顔と思うように求めた
のである。そのうえで、玉鬘への思いはまだ口に出来ぬが、「けしき
あることは時々まぜ給」う挙に出たのである。

ところが、それに気づかぬふうで、実父の内大臣に会いたい思いを
光源氏の前では否定する玉鬘を、光源氏は、ますますかわいいと思い、
紫上に母夕顔と比較しつつ、こう言った。

あやしうなつかしき人のありさまもあるかな。かのいにしへの
は、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、もののありさ
まも見知りぬべく、けちかき心ざまそひて、うしろめたからずこ
そ見ゆれ
(胡蝶七九四)

声と「けはひ」が似ていると言われていた母と娘の性格の違いが口
をついた。かつて「はかなびたるこそは、らうたけれ」(夕顔)と述
べられていた夕顔の魅力が、ここでは「あまりはるけどころなくぞあ
りし」と、否定的に評価され、玉鬘の明るく親しみやすい聡明さが称

揚されている。昔の母より今の娘に、光源氏の心の動いていることが
知られる。それを察した紫上に、

「ものの心得つくべくはものし給ふめるを、うらなくしもうちとけ
頼みきこえ給ふらむこそ心苦しけれ」…、「いでや。われにても、
また忍びがたう、もの思はしきをりをりありし御心さまの、思ひ
いでらるるふしぶしなくやは」
(胡蝶七九四)

と、紫上自身の、二条院に引き取られて以来の体験に重ねられた皮肉
を言われた光源氏は、

心のうちに、人のかうおしはかり給ふにも、いかかはあべからむ、
とおぼし乱れ、かつはひがひがしうけしからぬわが心のほども、
思ひ知られ給うけり。
(胡蝶七九五)

と、玉鬘の扱いを思索し、物語の記述としては、養女に思いを抱く自
分の料簡を初めて否定的に自覚する。その起点がこのように、紫上の
玉鬘と重ねられ類比的な自己の体験による皮肉であつたことが注意さ
れる。玉鬘は、紫上・秋好中宮と養女的な立場において共通性を持ち
ながら、六条院入りに際し、愛人としてではなく、養女として扱われ
ることになった時以来、光源氏の玉鬘の処遇に関する判断を通して、
紫上の影響を受け続けているのである。

だが、そうした自身の玉鬘に対する料簡の不埒さを自覚しながら、
光源氏は玉鬘への思いを抑えられず、言動に出すに至る。四月、雨後
の新緑の清澄さに玉鬘を想起して訪れる。

手習ひなどして、うちとけ給へりけるを、起きあがり給ひて、恥
ぢらひ給へる顔の色あひいとをかし。なごやかなるけはひの、ふ

と昔おぼしいでらるるにも、忍びがたくて、「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえ給はずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりこそあれ。あはれなるわざなりけり。…」とて、涙ぐみ給へり。…。箱の蓋なる御くだものなかに、橘のあるをまさぐりて、

「橘のかをりし袖によそふれば変はれる身ともおもほえぬかな世ともの心にかけて忘れがたきに、慰むことなくて過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。おぼしうとむなよ」とて、御手をとらへ給へれば、女かやうにもならひ給はざりつるを、いとうたておぼゆれど、おぼどかなるさまにてもなし給ふ。

袖の香をよそふるからに橘のみさへはなくなりもこそすれむつかしと思ひてうつぶし給へるさま、いみじうなつかしう、手つきのつぶつと肥え給へる、身なり肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひそふこちし給て、今日は少し思ふこと聞こえ知らせ給ひける。（胡蝶七九五）

ここで、光源氏が玉鬘に夕顔を想起したのも、やはり「なごやかなるけはひ」によつてであつた。当初はそれほど似ていないと思つたのは、おそらく容貌であり、「あやしう、ただそれかと思ひまがへらるるをりこそあれ」というのは、やはり見慣れてきた結果の「けはひ」であろう。「おぼどかなるさま」「いみじうなつかしう」も、夕顔に繋がる「けはひ」であつて、それらが、目の前の玉鬘の容貌・肉体と不可避に一体化しているのである。この「けはひ」によつて、玉鬘

は夕顔と一体化し、「世ともの心にかけて忘れがたきに…」の傍線部のごとく、光源氏にとっては夕顔そのものとなり、光源氏による肉体的な接触を発生させる。これが、光源氏のたくらみだとしても、口実の成り立ちとしては、こうなのである。

この後、さらに光源氏は、玉鬘に添ひ寝し、「これよりあながちなる心は、よも見せたてまつらじ。おぼろけに忍ぶるにあまる程を、なぐさむるぞや」と言い、「まして、かやうなるけはひは、ただ昔のこちして、いみじうあはれ」に思い、「ただ昔恋しき慰めに、はかなきことを聞こえむ。同じ心にいらへなどし給へ」と、言い置いて帰つていった（胡蝶七九八）。夕顔への忘れられぬ思いは玉鬘で慰められ、玉鬘への思いは夕顔を口実にして募っていくのである。だとすれば、光源氏の思いは、次第により玉鬘にかたむいていくのであろうか。以後、光源氏による夕顔への言及は、常夏巻、玉鬘に対する和琴の論と演奏から内大臣に話が及び、雨夜の品定時に内大臣によつて夕顔母子の物語が披露されたことを告げて、玉鬘を引き取っていることを内大臣に知らせたら、亡き母夕顔との事も知られてしまうだろうと、二人で唱和する個所と、藤袴巻での大宮に対する玉鬘引き受けの理由づけに出てくるのみである。ちなみに、玉鬘にとつての母夕顔は、これ以前、「まろを、昔さまになずらへて、母君と思ひない給へ」と言つていた養父光源氏が、玉鬘に母を見て、明確に男として現れた後、自身の置かれた苦境の中で、「母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとりかへしをしく悲しくおぼゆ」（螢八〇五）と思つたのが個別での最後の言及である。

光源氏と玉鬘の物語において、夕顔はこうして一通りの役割を終えた。光源氏の夕顔への思いは生身の玉鬘の中に生き続けていくのである。

五 光源氏の「すき」

ここに至った、玉鬘に対する光源氏の恋心は、どのような質なのか、玉鬘に自分の思いを打ち明けて添い寝までしたのち、兵部卿宮来訪時に螢を放つなど過剰な演出をする光源氏の言動に思い悩む玉鬘に関して、次のように語られていた。

さるは、まことにゆかしげなきさまにはもてなしはてじ、と大臣はおぼしけり。なほさる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくや思ひきこえ給へる、ことにふれつつ、ただならず聞こえ動かしなどし給へど、やむごとなきかたのおよびなくわづらはしさに、おりたちあらはし聞こえ寄り給はぬを、この君は、人の御さまも、けちかくいまめきたるに、おのづから思ひ忍びがたきに、をりをり人見たてまつりつけば、疑ひ負ひぬべき御もてなしなどはうちまじるわざなれど、ありがたくおぼしかへしつつ、さすがなる御仲なりけり。

(螢八一〇)

光源氏は、玉鬘に思いを打ち明けて以後、却って思いが募り、苦しいものの、玉鬘とは養父と養女の関係から、男女の仲にはなるまいと思ひ、一方、昔からの心癖で、秋好中宮にも乱れた言動を繰り返しているが、中宮という身分の重々しさにあえての接近はしないでいるのに

対して、玉鬘は、近づきやすくなかなので思いを抑えがたく、疑わしい行動もしてかしやすいのだが、珍しいほどに反省して、微妙な関係になっていた、という。同じ養女として、秋好中宮と相対なのである。

また、常夏巻、玉鬘と和琴論から内大臣・夕顔に及ぶ話を交した後、「ただこの御ことのみ、明け暮れ御心にはかか」る状態になるが、心のままにふるまったとしても世間のそしりを受けて、自分とはかく、玉鬘が気の毒だ、「限りなき心ざしと言ふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじくおぼし知れたり」。どんなに思い詰めていても紫上への思いには敵わないと自覚する。ならわき目もふらず玉鬘を愛する男と結婚させるがまし、兵部卿宮か髭黒と結婚させれば、あきらめもつくだろうか、とも思うが、玉鬘に琴を教えるのを口実に一層近づくと、玉鬘も光源氏を信じて打ち解けてくるので、このままでいられなくなり、六条院で婿を迎えて、合間に情を通じようかと、思いついたりして、厄介な状態に至る。その究極の計画が、玉鬘の尚侍としての入内であったが、息子夕霧に内大臣の推測として、光源氏のその意図が見抜かれ、光源氏は逆に、内大臣に「いかでかく心清き様を、知らせたてまつらむ」と思う。こうした光源氏の考えは、結局玉鬘の入内直前、髭黒による玉鬘略奪により頓挫し、玉鬘本人も参内後、髭黒邸に退出させられて、六条院を出ていくことになる。

光源氏の玉鬘に対する恋はこれで終わらざるをえなかったのだが、この恋が光源氏にとって何であつたのかは、真木柱巻における光源氏

の次の思いに明らかである。

殿も、いとほしう人々も思ひ疑ひける筋を、心きよくあらはしたまひて、わが心ながら、うちつけにねぢけたることは好まざかしと昔よりのこともおぼしいでて、紫の上にも、「おぼし疑ひたりしよ」など聞こえたまふ。いまさらに人の心癖もこそとおぼしながら、ものの苦しうおぼされし時、さてもや、とおぼしよりたまひしことなれば、なほおぼしも絶えず。
（真木柱九三七）

玉鬘とは男女の關係に陥らず、当座の曲がつたことは昔から好まない、紫上にも疑いを晴らせた、踏みとどまりはしたが、光源氏のあやにくな女癖で危険な状況にも至ったので、いまだ玉鬘を思い続けている、等々で、これらは、帚木巻頭の光源氏の本性記述と呼応しつつ、光源氏の玉鬘への思いに対する影響を当初から及ぼしていた紫上のこの恋における位置を再確認している。

ただ、光源氏の恋全体における、玉鬘への恋が持つ意味、占める位置については、さらに考察が必要であろう。そして、その手掛かりとなるのは、この恋に関する光源氏の反省の言である。¹¹ 参内後、二月、髭黒邸に引き取られた玉鬘を偲んで、

宿世など言ふもの愚かならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかし、と起き臥し面影にぞ見え給ふ。
（真木柱九六三）

と、自分の度を越した思いが原因だという、自己責任感。同じく二月、玉鬘の光源氏を偲ぶ返書を得て、涙がこぼれるにつけても、養父養女の關係により、通常の男女の仲でなく「世づかず」もあり、

好いたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今はなににつけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわび給ひて、
（真木柱九六五）

と、「すき」の反省。そして三月、六条院の山吹の花に玉鬘を偲んで、
「思はずに井手のなか道隔つとも言はでぞ恋ふる山吹の花顔に見えつつ（忘れなれなくに）」などの給ふも、聞く人なし。かくさすがにでも離れたることは、このたびぞおぼしける。げにあやしき御心のすさびなりや。
（真木柱九六六）

と、女との距離と認識し、この恋が戯れ心、と評されていることである。

四十歳になつて、玉鬘と入れ替わりに女三宮を六条院に迎え入れる光源氏の「すき」の状態がこれからうかがえ、晩年にとどまらぬ光源氏の抱え込む問題が、彼の全人生的、人間的視野で見通されてくるであろう。

[注]

- (1) 源氏物語の引用は、『源氏物語大成』校異篇により、適宜、表記を改めた。漢数字は頁数。
- (2) 拙稿「『そのころ』で書き起こされる源氏物語の巻頭について」『国語国文』、一九八五年一月、参照。
- (3) 倉田実氏『王朝撰関期の養女たち』四六三頁
- (4) 以下、「年三」と「ね（ん）さう（年星）」については、拙稿「『年三』と『ねさう』の問題―玉葛論のために」『源氏物語の展望』九、二〇一年四月に詳説した。
- (5) 桃裕行氏『宿曜道と宿曜勘文』『立正史学』三九、一九七五年三月

- (6) 村井利彦氏『源氏物語逍遙』、二〇一四年十二月
- (7) 日向一雅氏『源氏物語の準拠と話型』三二七頁
- (8) 藤井貞和氏『タブーと結婚』など。
- (9) 別稿を用意したい。
- (10) 秋山虔氏『源氏物語』
- (11) 斎藤暁子氏「玉鬘の結婚をめぐる」『源氏物語の探究』八、一九八三年六月、に、これらの個所に関する氏のその段階における考察がある。

(うえの たつよし 日本文学科)

二〇一八年十一月十五日受理

現代語版『小説神髓』（八）

はじめに

『小説神髓』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強するべきだというのは、なるほどそのとおりだとは思うけれども、実際に、『小説神髓』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでもごく少ないし、とくに、この本を読んでもほしいと思う、大学二、三年生ではほとんどいないといってもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髓』の現代語訳をすることにした。訳にまちがいや不適切な表現があるかにはない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遙選集』（中村完注釈、角川書店、昭和四九年一〇月）、岩波文庫『小説神髓』（宗像和重解説、二〇一〇年六月）に詳細な注があるので、ここでは最小限にとどめた。また、柳田泉『小説神髓』研究』（春秋社、昭和四一年）に詳しい解

説がある。これらの先行研究にはさまざまに教えられるところがあったので、記して、感謝の意を表したい。柳田氏の著作には、本文の解釈に相当する部分があるが、本稿では、なるべく直訳を心がけた。

日本近代文学大系は、『逍遙選集』別冊第三を底本とし、初版本（松月堂、明治一八〇一年）を参照したとある。なお、柳田泉氏による岩波文庫本に初出と『逍遙選集』の異同についての注記があるほか、宗像和重氏の解説本は、『逍遙選集』を底本として、初出との対照表を付している。

本稿では、若き日の逍遙の口吻を髣髴とさせたいと思い、初出本に拠った。本稿は、『小説神髓』を原文のままに理解したくても、できずにもどかしがっている初学者を念頭において訳したものである。

（第二） 俗文体

俗文体は通俗的な文によって、そのまま文章を作ったものである。

坂井 健

だから、文字の意味は平易で、ただ理解しやすい長所があるばかりでなく、それ以外に、生き生きとした力があるので、いわゆる文芸作品に必要な、簡易で品格や明晰な品格はもちろん、才知がすぐれ、勇ましい勢いがあり、昔を懐かしく思い起こす心持を引き起こすことのできる品格もある。それだけではなく、心の底からの感情を表し出して、優れていることもある。こういうわけで西洋の諸国は、もちろん、中国のようなどころも、小説には、地の文以外には、なるべく通俗的な言葉を用いて、事物のありさまを写すことである。俗文体の有利な点は、すでにこのようであるが、ただ、どうにもわが国では、言文一致になっていないので、文章上で用いる言葉と、普段の会話に用いる言葉とは、まるで氷と炭のように違っている。であるから、俗語のままに文章を書くときは、あるいは音調が野蠻になり、あるいは、その氣韻が野暮つたくなって、とてもみやびな趣向でさえ、そのために田舎びたものとなって、いやしくみだらであるとの非難を受けることが多いのである。しかも、西洋とは事情が違って、言語の移り変わりが激しいばかりか、わずか数百里以内であつても、その方言が異なることは、あのイギリスとフランスの国語がお互いに異なっているのと同じようなものもある。だから、時代ものの小説には、この文体を用いることはきわめて不適切のかぎりであつて、かつ、不都合であることといふべきである。ただ、あの現代の物語（世話物語）^①をこの文体によつて書いたならば、感情も文章も両方ともお互いに合致して、非常に詳しく優れたものになるだろうが、それでさえいくら苦心を加えて、折衷しなければうまくいかない。あの為永派の作者であつても、やや

厳格な部分にいたると、ときおりは演劇の台詞めいた言葉をいくらか借りて使つて、俗語では言うことのできない不都合な部分を補つていたのは、読者も知っていることだろう。曲亭馬琴はかつて言つた。^③

「中国で俗語によつて綴つた文章に正式の文章があり、方言がある。そうでなければ役に立たない。また、儒教の書物、医師の書物、仏教の書物は、正式な文章であるべきものであるが、その中に俗語があるのは『二程全書』^④、『朱子語類』^⑤である。俗語によつて書いたのは、『奇功新事』^⑥、『傷寒條弁』^⑦、『虛堂錄』^⑧、『光明藏』^⑨の類の他、まだあるだろう。先輩がすでにこのように使っている。こういうわけだから、その文学というものも、言霊の助けを借りなければ、思うように文を作ることができない。まして皇国の文章は、和漢雅俗古今のちがひがある。それを今、文学世界で働くものが、どうしてよくすべてに精通することができようか。まったく難しいことではないか。思うに、昔の草紙、物語、『竹取物語』、『宇津保物語』、『源氏物語』なども、作者はできるかぎりその言葉を研究し、選んで書いたものではないだろう。きつと、これはその頃の貴族たちの日常語や方言さえも、そのままに載せたものだろうが、古語はそれ自体卑俗なものではないし、しかも、宮女の言葉には雅俗そのままに任せたものもあるが、才子、才女はその性質も違つていて、かつ文章に優れているので、後の和文の手本ともなっている。こういうわけだから、昔の草子、物語は、ここでも俗語によつて書かれたことを思うべきである。和文、漢文は、その文章はちがつているが、人間のありさまをうまく描写

することができて、その趣を描きつくすることができるのは、俗語でなければすることができない。このことは中国も日本も同じである。だからといって、現在、この間の俚言、俗語の変化や聞きとれない言葉をそのまま文章にしてはいけない。私の文章に整っていないく入り混じっていて文章があるのは、この分かりにくい言葉、卑俗な言葉にならないようにしてである。」云々

俗語に不都合なところが多いことは馬琴翁の言うとおりである。私も、この議論に賛成しないわけにはいかないが、しかし、いくらはこの議論と意見の違うところも無いわけではないので、いささか持論を論述して、さらに俗文を論じ、明らかにしたい。

そもそも小説は、人々の生活のありさまを写すことをもって、その本質とするものである。だから下流の生活のありさまを写し出そうとするときには、その人物の言葉などに、田舎びていやしい言葉があるのは、もとより逃れがたいことであるよ。その様子さえ写し出したなら、かりにその言葉は田舎びていても、これはかえって下流社会の本当の姿にはかならないので、このことによつて俗語を我が国の小説に使つてはいけない言葉であるということはできない。ディッケンズ翁①の小説、および、フィールディング翁②の歴史小説などには、ずいぶんはなはだしい俗語などをいくらかともなく使っているが、だからといってディッケンズをそしって、批評したものもないし、また、フィールディング翁を罵るものもない。フィールディング翁の著作は田舎びてみだらだといって排斥するものは多いけれど、それは趣向が田舎びてみだらだということから出たことであつて、文章の上のことでは

ない。こういうわけだから、なまった方言であつても、聞き取りにくい俗語であつても、その場合、場合に應じて用いると、けつしていけないということではなく、かえつて、趣が深いだろう。とはいへ、わが国の俗語、日常語は、とかく冗長な欠点がある。さらに、語法に決まつたりズムがなく、かつ、音調が美しくないもので、叙文（事物のいわれを序する文章をいう。）、ならびに、紀文（事物のありさま、性質などを記述するもの。）には、使つても面白くないところが多い。思うに、それが冗長になつてしまう原因は、わが国本来のやさしくやわらかなやまと言葉に由来するのであらうし、その用語法に決まつたりズムがなく、かつその音調が美しくないのは、日本と中国の言語、なまつた方言がお互いに混ざつたことに基づくのだろう。そのうえ、俗語には三種類の区別があつて、上流の人に対する言葉と、同等の人に対する言葉と、下流の人に対する言葉と、それぞれ著しいちがいがあつて、あの西洋の言語とは異なつてゐる。そして、同等以下の人に対する言葉のようなものは、まったく過去と現在と未来との区別のないものがある。たとえば、「少しも行方が分からなかつたので」という叙事体の文を書くときにも、「少しも、行方が分からないので」ともいうことができるし、「とんと行方が知れなかつたものだから」ともいうことができるし、「少しも行方が分からなんものだから」ともいうことができるだろう。そして、第二と第三とは、俗語中の俗語であつて、もつともいやしい言葉なので、まず、第一の言葉をとつて叙述するのがまちがいない。ところが、第一の言葉のようなものは、いわゆる現在の言語であるから、すでに過ぎ去つた来歴などを叙述するには最も

適しているとは言えない。イギリスの文法にも、歴史的現在といわれている一種の用語法があるけれども、時たま使うものであつて、いつも使うものではない。とても長々しい来歴を、日本の冗長な言語によつて過去、現在の区別をしないで、くどくど述べていくならば、ついには、前後が混乱し、ものごとの順序が分からなくなつてしまうこともあるだろう。これでは、第一に、読者に飽きる気分を起こさせてしまう。だから、私は、断じて言う。俗語によつて物語の言葉（物語に現れた人物の言葉）を写すのは差支えがない。ただし、地の文にいたつては、（我が国の俗語に一大改良がおこなわれない間は）俗語によつて写してはいけない。思うに、このために物語の進歩を妨げるのではないかと恐れるからである。

左に為永派の人情本の跋文¹²を挙げる。一読して、その長所と短所を窺うことができる。

○孝道無二の丈夫であるのに、なまじ人情に引かされて、そのまま長者のもとに戻り、義理ある父と注太夫にせめて一筆書き残そうと、硯を引き寄せ摺り流す墨も涙ににじみがち。事情を知らないで娘のお梅は、唐紙を開けて、手をついて、梅「こんにちは、お寺参りからどちらへいらつしました。」源「おふくろの仏壇から久しぶりで方々へ歩いて来ました。（中略）源「おお、でかした、でかした。それでこそ武士の妻。卑怯未練の源太左衛門何ほどのことがあるう。本望を遂げるのは、またたくまだ。必ず吉左右まつていろ。」といつて、雨戸を細めに開け、外を眺めて、源「思ひのほかにも夜も更けた様子。今から出かけるから、父上と

忠太夫にこの書置き差し上げておくれ。梅「それではもうお出かけになるのですか。ずいぶんお体を大切に。源「お前も体に気を付けて」とすこし声を低くして。源「おまきさんが下さるものをつかりと食べないように。その他おまきさんからおとっさんにあげる物には気を付けて。身体を大事に時間を待ちな。」梅「ハイ」と答えて取り出だす。刀で切るのではないが、ひよつとしたらこのまま二人の縁は切れてしまうのではないか、刀に巻く柄糸の「つか」ではいいが、つかのまも忘れずことができず、刀のさやの割筭が分かれているのではないが、二人は別れても、刀の鞘を結ぶ下緒のように結ばれる時がある、と両目に浮かぶ涙を見せまいとして云々

（松亭金水）

右に載せたものはいわゆる俗文体の文章であるが、地の文には雅語を混せて使つて、俗語八分の文章としてゐる。思うに、先ほど述べた多くの不都合があるためである。地の文章と言葉の文章とがこのような氷と炭のような違いがあるのは、また致し方のないことであるが、同じ言葉の文句の中で、まるで時代が違つてるように、その性質が異なつてゐるのは、実に面白くないことではないか。たとえば、前の文章中の「おお、でかした、云々」の語は、いわゆる芝居の台詞であつて、今の世の人の言語ではない。前後の言葉と比べてみたなら、不都合の欠点がないとはいふことができない。これが我が国の通常の言葉の不便さから生じたことであつて、作者を非難するかぎりではないが、これらは俗文の真髓である活き活きとした面白さを損なうことがある。もとより望ましいことではない。これはしかしながら、文章の

性質がその物語の性質にふさわしくなくて、言い表すべき情緒も言いつくすことができないことによることである。だから、前段に言ったように、時代ものを書くときには、俗文体を用いることは、きわめて不都合が多いだろうから、雅俗の言葉を折衷した別の文体を用いて、その趣を現すべきである。

現代ものを書くときにも、地の文は、しかたなく雅文をいくらか取り混ぜて、叙事をする便宜に使うことができることは、すでに前にも言ったとおりである。とはいえ、雅俗折衷の地の文と、まったく俗語によつて書いた言葉との折衷する加減は、実に簡単ではない技術なので、この文体を使う人たちは、充分気を付けなければ、うまくいくことは極めて難しいことだろう。たとえば、馬琴得意の文体で地の文を書いた続きに、為永得意のペランメイ、オヨシナサイナなどのような言葉を書きだしたなら、地の文と台詞とがまったく撞着する勢いがある。口調も自然と穏やかではないだろう。だからといって、この撞着をなくするために地の文をあまりに俗文体にかたよらせたならば、あの意気盛んな様子を写し出すのに不都合であろう。これが第一の問題であることだ。だから、俗文体を使おうとするならば、一種類の文体とするのがよい。けつして馬琴の文と春水の文とを合わせて、地の文と台詞を記そうと企ててはならない。そのようなことをするならば、以前のとおりに人情本の文章を書くのにも劣つて拙劣である。俗語などは、卑しいもののようなだが、決してそうではない。作者であろうとするものは、よくよくこのあたりを考えなければならぬ。以前に俗語は、意味の分からぬ言葉が多く、なまった言葉、田舎の言葉が多い

と言つたので、読者は私がきつと俗語を内々貶めたと思つただろうが、それは、また、はなはだしい誤りである。言葉は魂である。文は形である。俗語には、七情¹³すべてが化粧をほどきしないで現れるが、文章には、七情も、みな紅、おしろいをほどこして現れ、幾分かは実を失うところがある。俗語のままに言葉を写すと、差し向かいで談話するような興味がある。雅俗折衷の文章で台詞を綴ると、手紙を読む思いがする。その面白みが薄いことは言うまでもないことである。俗文の利益はすでにこのようである。ただ、残念なことに、世の中にその不都合を除く方法がない。ああ、私の仲間の才子よ、誰がこの方法を表し出すだろうか。

私は今から首を長くして新しい俗文体が世に出る日を待つものである。

〔注〕

- (1) 現代を舞台とする小説のこと。
- (2) 為永派・染崎延房(二世為永春水) および、その弟子たちを指す。
- (3) 曲亭馬琴はかつて言つた・以下は、『南総里見八犬伝』第九輯下帙中巻第十九の「簡端贅言」の後半部分からの引用。
- (4) 『二程全書』・北宋の程顥、程頤兄弟の文章を集めたもの。宋学の先駆となった。
- (5) 『朱子語類』・南宋の思想家朱熹の語録。門人が集めたもの。
- (6) 『奇功新事』・未詳。
- (7) 『傷寒條弁』・『傷寒論』は、後漢の張機によるとされる古医書。漢方医の聖典。
- (8) 『虚堂録』・南宋の禅僧虚智愚の語録。
- (9) 『光明藏』・南宋橘洲少曇編の禅宗史。
- (10) ディッケンズ翁・Charles Dickens (一八一二〜七〇) イギリスの小説

家。代表作に『二都物語』、『クリスマス・カロール』など。

(11) フィールド・ヒュー・ヘンリー・フィッディング (一七〇七～五四) イギリスの小説家。代表作に『トム・ジョーンズ』がある。

(12) 為永派の人情本の跋文・本文に松亭金水とあり、『鶯塚千代廼初声』の一節と岩波文庫の注（宗像和重氏による。）にもあるが、実際には、山々亭有人による続編、三巻の上の一節である。

(13) 七情・七つの感情。喜、怒、哀、楽、哀、悪、欲。

（第三） 雅俗折衷文体

雅俗折衷の文体は、一つでは足りない。さらに大別して二種とする。一つを読み本体と称し、一つを草子体と称する。

（甲） 読み本体は、地の文章を綴るには雅語七、八分の雅俗折衷の文体を用い、台詞を綴るのには、雅言五、六分の雅俗折衷の文体を用いる。したがって、地の文と台詞の文とがお互いに喰いちがうような心配もなく、みやびな様子を述べるのには、雅語を用いて述べ、粗野な趣を述べるには俗語を使って述べ、臨機応変に貴賤雅俗を写し分けるのに便利である。かつ、中国の言葉をさえ、その折々に交えて使つて、国語の不足を補うことなので、美しくたおやかな場面になると和文のみやびやかなものを使ってこれを彩り、いきおいの激しい模様を述べるときには、漢語の雄健なものを用いて、その足りないところを補い、俗語を六、七分交えて使つては、はるかに離れた田舎の様子をはつきりと写し出し、雅語を八、九分用いては、雲上人の遠い昔の言葉もその文面に表すことができる。時代物語を綴ろうとするなら、こ

れと比べることのできる良い文体が他にあるとも思わないのである。現代ものの小説のようなものも、あるいは、この文体でつづることができないわけではないが、他の俗文体、草双紙体などに比べると、一歩譲るところがあるだろうか。思うに、その台詞が一種の特質をもっていて、今の言葉に比べると大いに異なるところがあるからである。だから、現代ものの小説には、この文体を用いないことは、かえって当然と思われるのだ。

雅俗折衷の加減さえ、うまくいったならば、時代物語に適する文章は、実にこの文の他にはないだろう。とはいっても、雅俗折衷の加減、塩梅は、とても簡単なことではないので、なお幼稚なエッセイ作家は、これを使おうと企てながら、まったく読むに煩わしい、卑しい、俗な文章を作ることがある。試みに、一つ二つその難点を挙げていうなら、まず、第一にみやびな調子に偏りやすいことである。初心の作者が綴った読み本体の文を見ると、だいたいみやびな調子に傾いて（作者がもし古典に詳しい者であれば）、文法にばかり心を配って、貴賤の言葉に区別なく、言葉と言葉が切れ切れになって、読むのに美しくない文を作るか、そうでなければ、音調ばかりにのみ心を用いて、長歌のような、今様歌^①のような文章を書いて、事物の活動の勢いを失うものが多い。かりそめにも雅語を用いるからには、文法を守ることが、もちろん、当然のことだけでも、そうかといってあまりに文法ばかりにまったく心を奪われて、小説、稗史の本分である人の心や世のありさまを写すことができないなら、まことに利益の少ないことというべきである。

第二には、俗文体に偏ることがこれである。和文を深く心得ていない連中が、なまじつかに多く俗語を交えて使おうと試みるときには、だいたいの浄瑠璃本、または、端唄⁽²⁾めいた文体に流れやすく、音調が滑らかなところもあるけれど、その声はいやしくて少しも読むに耐えないものがある。瀬川如幸⁽³⁾が著した『鼎臣録』⁽⁴⁾のようなものは、ややこのそしりを免れることができないだろう。

〔注〕

(1) 今様歌(いまようた) 平安中期に起った新様式の歌謡であるが、ここでは七五調の仏教歌謡の和讃などを指す。

(2) 端唄(はうた)・江戸時代後期に流行した俗曲。三味線で伴奏し、歌詞が短い。

(3) 瀬川如臈(せがわ・じょこう・一八〇六―一八八二) 歌舞伎作者。「東山桜莊子」、「与話情浮名横櫛」など。

(4) 鼎臣録(ていしんろく)・『木曾義仲鼎臣録』。木曾義仲にしたがう忠臣と巴御前を描いた読本。

(以下次号)

〔付記〕

本稿は、江蘇省社会科学基金「坪内逍遙文論中的中国文化要素研究」(蘇州大学、研究代表者 潘文東、二〇一六―二〇一九年)による成果の一部である。

(さかい たけし 日本文学科)

二〇一八年十一月十四日受理

『人相小鑑大全』（上） 卷一〜卷二

浜田泰彦・河戸愛実

〔抄録〕

貞享元（一六八四）年八月に刊行された喜多村江南軒『人相小鑑大全』は、中国由来の和刻本を除けば、我が国史上初の漢字仮名交りの整版本観相書である。

日本の観相学史上重要な書物であり、さらには近世文芸にも少なからず影響を与えたにもかかわらず、本書はこれまで翻刻がそ

なわっていない。そこで本稿では、『人相小鑑大全』全四巻の内巻一〜二を翻刻・紹介する。

キーワード 観相書、ほくろ、版本

はじめに

江戸時代の版本は、儒学・仏教・神道等の学問諸領域のみならず、文学の諸ジャンルに至るまで、有用・無用を問わず多彩で広範な領域をカバーしていた。夢占・易占・手相書・観相書等占術に関連する書物もまた江戸時代を通して大量に刊行されていた。今日では、占術の言説は、科学的根拠を持たず、学問領域の対象外と見なされるのが一般的になっている。一方で、江戸時代では占術もまた学問の一領域を

占めるものと認識されていた。

たとえば、石門心学者の鎌田一窓（虚白齋）が著した心学書談義本『売卜先生糠俵』（安永六（一七七七）年五月刊）では、筮竹を手にした売卜先生が、悩みや疑問を抱えて次々とやって来る老若男女を「其次は誰じゃ」の一声で迎えつつ、矢継ぎ早に解決していく。ただし、売卜先生はいたずらに筮竹に運命を委ねる易者ではない。最初に先生のものを訪れた女性が、器量は良いが生計を立てるに難のある男か器量に難があるが質素儉約を守る男のいずれに嫁ぐか占って欲しい

と相談すると、先生は親の考えを糺す。

「はい親達は、質素な方を望まれど、私が顔を見て、縁の道ばかりは、押付けられぬ。其方の心次第と有る故に、私も心も迷ひ、占に任する気。」

翁目に角立て曰、

「トは以て疑を決す。疑はざるに何ぞトせん。同じ路二筋有つて、問ふ人も無く、知らざるときは、トうて天に任す。一筋道にトは入らぬ。此縁組に畳算も入る物歟。縁の道ばかりは押付けられぬなど、は、親達も親達、育が悪い。《後略》⁽¹⁾」

売卜先生は、「トウ」までもなく、親の指示通りに質素儉約を旨とする男の方と縁組を結び、親孝行せよと、この後告げる。このように、江戸時代における易者は、非科学的な扱いを受けたところか庶民に敬慕される知識人であった。

近世の文芸作品中においても占術は重要な位置を占めており、近年では再検討の対象ともなっている。一例を挙げれば、上田秋成『雨月物語』(安永五・一七七六年刊)巻之三「吉備津の釜」は、正太郎と磯良の婚姻が吉備津神社の釜占いと陰陽師の占いとが的中して破綻する章段であるが、近衛典子氏により、中西敬房『夢卜輯要指南』(宝暦四・一七五四年序)中の「屋宅諸怪占」の記事が、磯良が正太郎を襲撃する場面で発せられる不思議な光に関与していることが明らかにされている。⁽²⁾後述するが、これまであまり顧みられなかった占術書が文学作品を解釈が明らかになる源泉となる可能性はこの一例にとどまらないだろう。

このような問題意識から、近世の観相書にも注目が集まりはじめている。「観相」とは、「人の身体・容貌・声・気色を観察して、その性質・禍福を見通すこと」⁽³⁾を指す。古くは中国の春秋時代に遡及される人相見に関連する書物は江戸時代の初期より刊行されていたが、その刊行の実態が青山英正氏の研究により明らかにされている。⁽⁴⁾

二、『人相小鑑大全』の概要と文学作品への影響

青山氏稿「近世日本観相書版本目録」⁽⁵⁾によると、陳希夷伝・袁柳莊訂『神相全編』の和刻本が慶安四(一六五二)年九月に刊行をみたのが、観相書版本の端緒である。浅井了意『安倍晴明物語』(寛文二(一六六二)年正月刊)「人相卷上・下」(巻六・七)の人相見の記事の大半は『神相全編』に拠っていることは既に指摘がそなわる。⁽⁶⁾ただし、「人相卷」は本書の「おまけ」⁽⁷⁾に過ぎず、作品全体は観相書を内容としていない。したがって、寛永頃(一六二四―四五年)に古活字版で刊行された『人相経』を除けば、本稿で紹介する貞享元(一六八四)年八月に刊行された『人相小鑑大全』は、史上初の整版本観相書である。

その多くを『神相全編』に拠っている『安倍晴明物語』「人相卷」に対し、『人相小鑑大全』は別系統の本文に拠っているようである。たとえば、前者が「人面十相」として「大貴人・富祐・弥寿・貧賤・夭殤・暴悪・孤独・薄俗・盜賊・婦人」の十相を掲げるのに対し、後者は「人相八相之圖論」として「厚相・威相・清相・古相・孤相・

薄相・悪相・俗相」の八相が掲げられる。頭部に関する記載も共通点は見いだせるものの、相違点も多い。

●『安倍晴明物語』巻下「一 頭部」

頭は、一身の尊にして、百骸の長たり。諸陽のあつまるところ《割書略》五行の宗まるところ《割書略》一身のうへには、高きところありて、天の徳をかたとれり。此故に骨ゆたかに立て、中高にみゆるをもつて、頭のよき形と名づく。頭の皮厚きは、衣食ともしからず。皮うすきは貧窮なり。頭に肉角あるは、大富貴の相なり《割書略》耳の後に骨あるを、寿骨と名づく、此骨たかく立たるは命ながく、陥たるは命みじかし。

●『人相小鑑大全』巻二「頭論 并 髮鬢の相論」

頭は一身の尊。百骸の長五行の宗たり。高に居して。まとかに天の徳を。つかさどるといへり。かるがゆへにそのほね。ゆたかにして。明なるは命ながし。中ゆたかに。皮あつく。中たかきは。富貴なり。頂の中だかに。ひかりあるは。貴人なり。落入て皮うすきは。貧賤にして短命なり。額の中に肉。こぶのごとくにあるは。大貴人。出家なれば。天下の能僧たり。當時百丈禪師の法子。黄檗禪師は身の長七尺ありて。額に角ごとくに。肉出たり。是圓珠といふて。貴相なり。いただき右の方へ落入たるは。母をそんず。左のかたへ。おち入たるは。父をそんず。耳のうしろにほねあり。名て。寿骨といふ。そのほねたかく成たるは。命ながし。落入たるは。命みじかし。

両作品ともに論旨は似通うが、『安倍晴明物語』の方が簡潔である。

とはいえ、『人相小鑑大全』が『安倍晴明物語』の本文を参照にしたとは到底考えられない。

『人相小鑑大全』の著者「喜多村氏江南軒」及び序者「難波散人」

については、詳細不明。貞享元（一六八四）年八月刊。初版は大坂敦賀屋九兵衛単独版であったが、後印本では江戸山崎金兵衛との相版となった。本稿で紹介するのは後者である。刊記に修訂は加わったが、版木は変わっていない。というのも、本書の影印を紹介した『江戸庶民文庫』7所収小泉吉永氏所蔵本は敦賀屋単独版だが、本稿で翻刻紹介する相版の本文版面とカスレや匡郭の欠け目まで一致するからである。

観相書の記述の文学作品への波及あるいは反映については、青山氏の論考に京伝の黄表紙作品のパロディに至るまで例示されている。

『人相小鑑大全』に絞れば、その刊行時は井原西鶴が浮世草子作品を相次いで発表した時期に該当する。たとえば、『武家義理物語』（貞享五・一六八八年二月刊）「黒子は昔の面影」（巻一ノ二）において、明智十兵衛（後の光秀）が十一歳の時に婚約した近江国沢山の某氏の姉娘が不幸にも痘瘡を患い容貌が醜くなったために、妹娘が代わりに嫁入りするが、それを見破ったのは十兵衛が幼い頃に見た黒子の記憶であった。「咎むる程にはあらぬ黒子一つ」が「耳のほとり」にあつたのを覚えていたのである。十兵衛の視線を感じた妹は身代わりを告白し、十兵衛は約束通り姉を迎える。その姉は「武道の油断をさせ」ない賢女で、十兵衛の出世を助けたと結ばれる章段であるが、何故十兵衛が「耳のほとり」の黒子を気に留めていたのかといえ、『人相小

鑑大全』によると、その位置の黒子が「男女ともに。両の耳にあるは聡明にして知恵ふかし」と「聡明」や「知恵」に関わるからだだったかもしれない。さらに同書「女人面痣之圖」(巻二・十七ウ)の向かって右側の耳の近くのホクロには「敬夫」とあり、あるいは姉が十兵衛に軍略上の忠言を加えて甲斐甲斐しく仕えた姿に通じるかもしれない。もつとも、西鶴が『人相小鑑大全』を実際に読んだか否かは証明ができないゆえ、憶測にとどまるほかないが、観相書での認識が広く普及していた一例ともなりうるのではなからうか。時代はやや下って、江島其磧『世間娘氣質』(享保二・一七二七年八月刊)「男を尻に敷金の威光娘」(巻一ノ二)では、「見る物魂をうしな」うほどの器量よしであつた室町の呉服屋の娘が新町の酒屋に嫁ぐのだが、乳離れをしておらず破談になるストーリーである。その彼女は「三十二相打そろふたる美人微塵疵気のなひ様子」で、先の十兵衛の妻と対照的に、ホクロ一つない完全な美形がかえって災いしたとの認識が持たれていたとも解しうる。

浮世草子作品における人相の描写は勿論、右の例にとどまらない。先述したように、影印紹介はなされていたものの本書は未だ翻刻がない。本誌のみならず広くwebで公開することで、文学研究との相乗効果を期待するものである。

〔注〕

- (1) 引用は、芳賀登監修『日本道德教育叢書』第3巻(二〇〇一年・日本図書センター)に拠る。

- (2) 近衛典子「『雨月物語』の当代性―夢占と鎮宅護符―」(『上田秋成新考―せ者の文学』二〇一六年・ペリかん社)。
(3) 相田満「観相をめぐる言説」(『アジア遊学』第118号 二〇〇九年一月)。

- (4) 青山英正「古典知としての近世観相学―この不思議なる身体の解釈学」(『アジア遊学』第155号 二〇一二年七月)、同氏「近世日本観相書版本目録」(『明星大学研究紀要 人文学部・日本文学科』第二十一号 二〇一三年三月)。

- (5) (4) 同稿。

- (6) 和田恭幸「『安倍晴明物語』の世界」(『国文学解釈と鑑賞』第67巻6号 二〇〇二年六月)。

- (7) (6) 同稿。

- (8) 引用は、『仮名草子集成』第一巻(一九八〇年・東京堂出版)に拠る。

- (9) 『江戸庶民文庫』7(二〇一二年・大空社)。

- (10) (4) 同稿。

- (11) 引用は、広嶋進校注・訳『新編日本古典文学全集』69(二〇〇〇年・小学館)に拠る。

- (12) 引用は、長谷川強校注『新日本古典文学大系』78(一九八九年・岩波書店)に拠る。

三、『人相小鑑大全』翻刻

翻刻底本とした浜田架蔵本の書誌事項を以下に掲げる。

【書誌】

表紙・書型 藍色無地。二二・六×一六・一糎(替表紙)。半紙本三巻合一冊。

題簽 後補題簽無粹「人相小鏡大全 完」(墨書)。一七・九×三・

三編。

版心 「序 一」、「人相小鑑目錄上 二」、「人相小鑑卷一（〜九、十ノ十五、十六〜十九）」、「人相小鑑卷二（〜十九）」、「人相小鑑目錄中 一」、「人相小鑑卷三 二（〜二十）」、「人相小鑑目錄下 一」、「人相小鑑卷四 二（〜十五）」。

紙数 全六八丁（遊紙〇）。

行数 序文半丁十行、本文半丁十二行。

刊記 （巻四・十五ウに）「貞享元甲子歲仲秋上旬／書林／江戸山崎金兵衛／大坂敦賀屋九兵衛」。

【翻刻凡例】

一、浜田架藏本を底本とした。

一、漢字の旧字・異体字・俗字は、原則として、底本の字体に従った。

一、清濁・振仮名は底本に従った。句点は底本に従ったが、読みやす

さの便を図って適宜補った箇所がある。左訓は該当する箇所に続

けて（一）に示した。

一、底本の丁移りは「『（二オ）』」のように示した。

一、「江戸庶民文庫」7所収本により、校合を行った箇所がある。

【翻刻】

人相小鑑大全序

それ人のそがふを見るに。先ほねすぢの肥瘦五行三停之長短の計。面部の盈虧を察し眉目の清秀。神氣の榮枯を看手足の厚薄を取。鬚髮の疎濁身材之長短を量。五官のなす事有を考へ。五岳之歸朝と倉庫の豊満陰陽の盛衰を見。又威と儀之有無を計。形容之敦厚辨じ。氣

色之喜滯をかんがへ。體と膚之細膩。頭之方員。頂之平場。骨之貴賤。骨肉之せいりう氣の短促声の『（一オ）響心田之好夕。ならひに部位流年によつて。骨格形局をして。断り時に随て趨奉し家に傳にかくる事あるべからず。只星宿富貴貧賤壽夭窮通榮枯得失流年の体咎におみて備に皆週蜜なれば。人を相する所萬に一失なし。学者又よろしく。詳にして。真妙を推しもとむべき者也。時而天和四甲子孟春

日難波散人書（一ウ）

人相小鑑大全目錄卷上

▲十二宮五官圖論之事

▲五嶽圖論之事

▲四学堂圖論之事

▲八学堂圖論之事

▲六府三才三停之事

▲人面總論并三相所主之事

卷之二目錄

▲人面六曜五星之事（二オ）

▲頭之相論之事并吉凶之圖

▲髮之論之事并善惡見様

▲頸之相論并吉凶之事

▲八相之論并富貴貧賤之事

▲同八相之圖之事

▲額之論并善惡見様之事

▲面紋善惡論之事

▲枕骨善惡論之事

▲痣之善惡論同圖相論之事(二ウ)

(三オ)

人相小鑑卷之一并二一生善惡見様之事

喜多村氏江南軒述

十二官之論

▲第一命宮。兩の眉の間なり。光明ありてかゞみを見るごとくなるは。がくもんありて。智恵ふかし。又たいらか成は。ふくとくありて。命なかし。兩方の目すゞをはりたるごとくに。ふんみやう成るは。かしこくして。心たんきなり。額のひらきたるは。心やさしく富貴にして。よろずによし。額中ひきゝは。さだまりて。貧寒なりとしるべし。又ひたいに川といふ。文字あるは。親かうくの人なるべし。▲第二財帛とは鼻をいふ。くらい財星なりといへり。鼻ひきゝ處をろんず。しかればはなのあいだ。目と見合て相應せざるは貧賤にして思

ひ事あり。よく相應して。(三ウ) ゆたかなるは。ふうきなり。鼻のあいだ。ひろきは。さきに仕合よく。後にまづしきなり。さるのはなのごとくなるは。ひんにして。思事たへず。色あかきも。心ちいさくおもふ事かなはず。はなのかく成るは。住所さだまらず。色のくろきは。おやの跡しきをとらず。たとへばすこしありても。うしなふなり。つゝしみてよし。

▲第三兄弟とは。兩のまゆをろんず。眉ながくして。目をすぐるは。きやうだい三人あれども。不縁なり。其身の仕合は。よく思ふ事も。かなふ。兄ならば弟をあはれむべし。まゆ三ヶ月のごとくなるは。心ゆたかにして。学者となる。此人は出家のゑんありて。かいぎやうをたもつ。眉のかしらあがりたるは。心をふどうにして。口舌をこのむ。(四オ) まゆのいろあかきは。ちゝはゝにも。はやくはなれ。子にも。ゑんうすし。但女ならば。男にゑんなし。まゆ毛うすきは。他國の商又は奉公を。のぞみて吉。又まゆの短のびざるは。命みぢかし。長ゆたかなるは。富貴にて長命なり。まゆほそきは。心けんどんなり。つねに觀音の信すべし。

▲第四田宅とは。位兩のまなこをいへり。目の内あかくして。あざやかなるは。親のゆづりの財宝を。中年にうしない。おいて苦勞すべし。眼うるしをぬりたるごとくなる人は仕合もよく。思ふ事かなひて。心のまゝ成べし。めとまゆのあいだのあきたる人は。貴して義ありて。知行を取高名すべし。眼のまはりあかき人は。病たへず。目の内くろくあざやかなるは。心すなをにして。なさけふかし。さりながら(四ウ) 住所さだまらず。眼きよく。分明なる人は学文ありて。忠信

あり。出家武家はいよくよし。眼出たる人は。父母のゆづりの金銀うしなふて孝行になし。武家なれば。けんくわなどをして。死すべし。女は産の道にきづかいあり。出家はくるしからず。つねによく。佛を念じ神をまつるべし。

▲第五男女とは。両方のまなこの下をいふ。是を涙堂共いふ。平にうるはしき人は。福德ありて子孫繁昌すべし。目のふちあつきは。姪欲ふかし。よく慎てよし。るいだうひきゝ人は。貧賤なり。又るいだうにほくろあるは。年おいて。くろふあり。男女共に。観音不動を信ずべし。又たいらかなるは。仕合よく思ふ事かなふ。眼の下に。臥といふ文字のあるは貴子をもつ。則出家になして。よし。天下に一人(五才)の知識となる。又在家にても。みんよくをつゝしめば。智恵ふかく仕合よし。又へらにてそひだごとくなるは。親に不孝なり。是も兄弟にゑんなし。

▲第六奴僕とは。類の両脇をいふ。まるくふくやかなるは。仕合よし。さりながら。能口をたゝく人なり。男女共に。口ゆへそんしつあり。年よりては。いよくよし。口四の字のごとく成は。富貴にして。学文あり。つゐに位にのぼるべし。類。とがりたるは。貧賤にして。心に徳あり。色黄なるは。下人牛馬に。ゑんなし。白くろき人は。あひきやうありて。ふくとくあり。類ゆたか成は。命ながし。

▲第七妻妾とは。眼のすこし脇。たゝかほの上をいふ。是を奸門ともいふ。ひかりありてうるはしきは富貴にして。命(五ウ)ながし。なんによともに。夫妻にゑんふかく。福德あるべし。古人云。おとなれば。妻をとりて。金銀財帛家に盈。おんななればくらひなくして

も。四徳ある男にそふべし。奸門ふかくおち入たるは。男女共に。夫婦のゑんさいく。かわるべし。目のわき大きなるは。かならず。年よりて悪死す。女なれば産の道にて。命あやうし。かんもんあかく黄成は。知恵ふかし。さりながら姪欲ふかくして。あしゝ。奸門分明にうるはしきは。男はよき女をもち。女もよき男にそふ。惣じて。男女ともに。面満月のごとく成は。子に大名か又は天下に名ある出家を持。おもてあかきは。男女ともに。口舌あり。黒白(くろくしろき)なるは。愁おほし。うすぐれなひのごとく。すこし黄なるは。なんによともに。ふうきにて命ながし。(六才)

▲第八疾厄とは。両のまゆの。あひだの下のひきゝ所をいふ。是をなづけて。命宮といふ。ゆたかにして満たるは。福德有て。知恵さいかく也。貴人ならば学文ありて能書なり。明に光あるは。命ながく。五福ともにそなはりてよし。されども中年より前に病あり。心するどなれば。命おわるまで。苦勞たへず。氣だてそうくしくて。さだまらざる也。平に光あるは。災なく。福德もあり。但親に早はなれ兄弟には縁有。

▲第九遷移とは。まゆの角也。なづけて天倉といふ。明に光ありて。うすかうばい色なるは。うれいなく。福德あり。又たいらかなるは。年よりて。親類の跡しきを取落入たるは。年老て思ふ事かなはず。まゆとひとつに成たるは。主人貴人の。氣にいらす。女は男にゑんなし。天倉に角(六ウ)あるは命短。明にうるはしきは。他國あきなひしてよし。古郷は。相應せず。天倉ひきゝはたびへ出て。馬船の上を慎べし。色青きは。ぬす人におふて。財宝をうしなふ。つねに心に

氣づかひたへず。色うすぐれなひのごとくにて。ゆたかなるは。福德ありて。喜事おほし。此段は口傳あり。次の巻の眉の部を見合知るべし。

▲第十官禄とは。上額をいふ。此所たかくして。角いたゞきたるごとく成は。貧賤なり。又落入たるごとく見るは。心にとくありて。口舌たへず。思ふ事おほし。平にして。たとへばかなにてけづりたるごときは。男女共にきうせんにかゝりて死す。よくくつゝしみて。信心のおこしてよし。心入れによりて。難をのがるべし。圓して。玉を見るごとくにて。ひだりへ『(七オ)』よりて。ちいさき痣あるは。富貴にて命ながし。色青きは。うれひあり。あかきは。口舌たへず。うすあかく。ゆたかにひかりあるは。富貴にして。親に孝行なり。

▲第十一福德とは。両の眼の上。わきのかたをいふ。たひらかにして。まゆのはへかりたるは。富貴なり。きわめて。くぼきは。貧賤なり。まゆよりたかく。角のごとくにみゆるは。心短して。ぬすみの心あり。福人ならば。うそをつき。下人にゑんなし。子に悪人ありとするべし。眼のきは。うつくしきは。心ざしふかく。出家をうやまひ。信心の人なり。眼のうへより。まゆの中まで。青すぢ有は。愚にして。一生やまひたへず。色あかきは。つねに酒宴ゆふきやうをこのむ。うすぐれなひのごとくしかも赤なきはこのの外よし。

▲第十二相貌とは。五嶽といふて。面に五つ。大事の相あり。『(七ウ)』五つとも具足したるを。貴相といふ。此人は福德圓滿にして。そうめいなり。三停といふて。三つの相あり。三停の事は次に見へたり。○五嶽とは。一つに東嶽左の。ほさきの事。二つに西嶽は右のほさ

き。三つに南嶽とは額。四つに中嶽は両方のまなこの間。はなのうへひきゝ所。五つに北嶽とはおとがひ。是五つの大事也。相を見るに。まつ五嶽を見。次に二停を見る。ほねあらは成は。よろしからず。五嶽三停の色。うすかふばいのごとく成は。富貴にして。親に孝行なり。五嶽三停相應したるは。父母命ながし。其身も知恵ふかく。しやはせよし。色黒白(くろくしろし)にして。相應せざるは。父母の命みぢかく。其身もやまひおほく。愚痴なり。十二宮。五官。五嶽。三停のかたち。なき人は。悪人にして。天下の法をやぶり。親に。ふかう『(八オ)』にて。あしき名をとり。身をほろぼすなり。

▲貴賤見様の事

それ人の貴賤は。頭(かしら)と眼と二つを持て。たひすうとして見る。まつ。かしろのまろきと。角なるとを見。次にまなこの黒白を見るべし。さてかしろのまろきは貴なり。目分明(あきらか)なるは。慈悲ふかく。仕合もよし。眼の玉いでゝ人を見るににらむごときは。あく心ありて。人をねたむ。中年すぎて。仕合あしく。惣じてまなこの色青きは。口舌ありて。やまひたへず。目のまはり。うすぐれなひのごときはよし。黒きは。おろかにして。命みちかし。眼の下に。肉なく落入たるは。大きにわろし。身こゑて。額ちいさく。眼ほそきは。病たへず。口舌おほし。次の巻(まき) 眼の部に審なり。』(八ウ)

(九オ)

▲四学堂論

▲第一学堂とは。眼の事なり。ながくして。清すゞやかなるは。富貴にして。くらひたかし。町人は愛敬ありて仕合よし。

▲第二禄学堂は。額の事なり。ひろくながきは。ふうきにして。命ながし。せばく。みぢかきは。貧賤なり。

▲第三内学堂とは。上下の齒をいふ。かたく大ひにして。よく。そろひたるはよし。武家は。忠信あり。出入ありてむかふば。外へそりたるは。下賤の相なり。齒の色黄なるは能いつわりをいふ。人なるべし。

▲第四外学堂とは耳より壺寸まへをいふ。ゆたかにして光明あるは。富貴にして。知恵ふかし。又くぼくなりて。色青黒なるは。貧寒にして。愚痴なり。たかきはたんき。』(九ウ)にて。ゐんよくふかし。つゝしむべし。

▲八学堂論

▲第一高明部学堂とは。額の事なり。まろくして平なるはよし。ある

ひは。異相のあるは。一げいあるなり。

▲第二高廣部学堂とは。高明の下也。あきらかに見ゆるは。心きよく。富貴なり。出家武家は。いよくよし。

▲第三光大部学堂とは。高廣部の下也。平にして。明成はよし。

▲第四明秀部学堂とは。眼の下なり。黒きは病おほし。口舌あり。上のふちあつきは。姪欲ふかし。豊成は。富貴なり。

▲第五聰明部学堂とは。両の耳なり。あつく大きなるはよし。うすくちひさく黒きは。皆貧賤の相なり。次の巻耳の部に。くわしく見たり。』(十ノ十五オ)

▲第六忠信部学堂とは。鼻の上下口ひるをいふ。うすきは男女共に言多し。あつくそりたるは下賤にて貧寒□。鼻と口と両の間。ひろく脇へ開たるは。富貴にして。知恵あり。

▲第七廣徳部学堂とは。口びるの下おとかひの。すこしうえなり。是まで舌とぎきたるは。富貴にして。智多有。短はわろし。

▲第八班笋部学堂とは。両の眉の上也。まへの兄弟の部に。審にべんずるなり。よく見合しるべし。

右四学堂八学堂は。是皆人面の名なり。一々是に合たるはよし。此相を具足せざる者は下賤也。鼻の上あかきは苦勞たへず。此内の相皆尖たるは悪し。上高明より。下廣徳部に至るまで。相應したるを。富貴の相とす。是には口傳あり。よく次の下の巻と見合て相すべし。』(十ノ十五丁ウ)

(十六オ)

▲六府三才三停之圖論

六府とは。先^{まづ}両^{りやう}のほふぼね也。是^{これ}を顙^{くわん}骨^{こつ}といふ。兩^{りやう}方^{ほう}のおとがいは顙^{くわん}骨^{こつ}といふ。兩^{りやう}の眉^{まゆ}の上^{うへ}是^{これ}を天^{てん}倉^{そう}といふ。此^こ六^{ろく}とこころなり。古人^{こじん}云上^{うへ}の二^ふ府^ふは兩^{りやう}の天^{てん}倉^{そう}をいふ。中^{なか}の二^ふ府^ふは兩^{りやう}の顙^{くわん}骨^{こつ}をいふ。下^{した}二^ふ府^ふは兩^{りやう}の顙^{くわん}骨^{こつ}をいふ。六^{ろく}府^ふは此^こ六^{ろく}つをいふなり。秘^ひ訣^{けつ}にいわく。天^{てん}倉^{そう}のゆたかなるは。富^{ふう}貴^きにして。親^{おや}に孝^{かう}行^{かう}にて。兄^{きやう}弟^{だい}に縁^{えん}あり。せばく短^{みぢ}は下^げ賤^{せん}の相^{さう}なり。天^{てん}倉^{そう}と耳^{みみ}とのあいだ。遠^{とほ}はよし。ちかきは貧^{ひん}賤^{せん}なり。又^{また}ほうぼねのたかきは下^げ賤^{せん}なり。とがりたるは心^{こころ}じやけんとしるべし。分^{ぶん}明^{めい}にゆたかなるは福^{ふく}徳^{とく}ありて知^ち恵^ゑふかし。いこつ。くほく成^{なり}て。みぢかきはおもふ事^{こと}かなはず苦^く勞^{ろう}おほし。ながくゆたかに面^{おもて}の色^{いろ}うすかふばいのごとく成^{なり}は福^{ふく}徳^{とく}圓^{えん}満^{まん}にて命^{いのち}ながく思^{おも}事^{こと}なく心^{こころ}豊^{ゆたか}也^{なり}。』(十六ウ)

▲三才三停論

三才^{さい}とは。一^{ひと}に額^{かみ}を天^{てん}といふ。二^{ふた}に鼻^{はな}を人^{ひと}といふ。頰^{おこ}を地^ちといふ。

是^{これ}てんじんちの三才^{さい}なり。額^{かみ}ひろくして。圓^{まる}はよし。鼻^{はな}のあいだ。すこしなかきは寿^{じゆ}命^{めい}ながし。頰^{おこ}の間^{あいだ}せばきはよし。尖^{とがり}たるは惡^{あく}相^{さう}。よく上下^{うへした}相應^{さうおう}したるはよし。

三停^{さい}とは。一^{ひと}に額^{かみ}を上^{じやう}停^{てい}といふ。二^{ふた}に鼻^{はな}を中^{ちゆう}停^{てい}といふ。三^{さん}に頰^{おこ}を下^げ停^{てい}といふ。是三^{これ}ていなり。じやうていながきは。聰^{そう}明^{めい}にて福^{ふく}徳^{とく}あり。ちうていながきは。貴^き人^{にん}にて思^{おも}ひ事^{こと}なし。下^{した}停^{てい}ながきは。一^{ひと}生^{しやう}半^{はん}吉^{きち}なり。右^{みぎ}三^{さん}停^{てい}同^{どう}からぬは。貧^{ひん}賤^{せん}也^{なり}。じやうてい高^{たか}きは。学^{がく}文^{ぶん}するによし。中^{ちゆう}停^{てい}みぢかきは。中^{ねん}年^{ねん}に病^{やまい}ありて命^{いのち}あやうし。下^{した}停^{てい}ゆたかにひかりあるは。しんるいと中^{なか}よく。田^{でん}地^ちをもちて仕^し合^あよし。さりながら。子^こ。』(十七オ)にゑんうすし。狼^{やう}子^しすべし。

三 相 所 主

身^みに三^{さん}相^{さう}あり。頰^{おこ}をもつて。しめす心を付^つて。見^みるべし。

頰 云

額^{かみ}尖^{とがり}初^{はつ}主^{しゆ}レ災^{さい} 鼻^{はな}歪^{かまがへ} 中^{ちゆう}主^{しゆ}レ逆^{ぎやく} 欲^{ほつ}知^せレ晚^{ばん}景^{けい}事^じ 地^ち閣^{かく} 喜^{よろこ}二 方^{まさ} 高^{たか}一

三 柱 頰

頭^{かしら}為^{なり}二 壽^{じゆう}柱^{ちゆう}一 鼻^{はな}為^{なり}二 梁^{りやう}柱^{ちゆう}一 足^{あし}為^{なり}二 棟^{とう}柱^{ちゆう}一

身 三 停 論 相

身^みの三^{さん}停^{てい}を。分^わに。まづ頭^{かしら}を上^{てい}停^{てい}とす。身^みこへて。せいひき、人^{ひと}の頭^{かしら}大きく長^{なが}きは少^{せう}年^{ねん}の内^{うち}。福^{ふく}徳^{とく}あり。中^{ちゆう}年^{ねん}すぎてより。貧^{ひん}苦^くあり。身^みのながく大^{おほ}きにして頭^{かしら}の短^{みぢ}小^{せう}』(十七ウ)なる者^{もの}は。一^{ひと}生^{しやう}貧^{ひん}賤^{せん}なり。肩^{かた}より腰^{こし}を中^{ちゆう}停^{てい}とす。間^{あいだ}ながきは。福^{ふく}徳^{とく}ありて。命^{いのち}ながし。腰^{こし}ふとくして。座^ざするとき身^みも腰^{こし}もうごくは貧^{ひん}賤^{せん}にして。みぢかし。腰^{こし}より足^{あし}

を下停といふ。上停と中停と同じからずして。ながきは病ありて。口舌たへず。上中下の三停。長大短小ひとしからずは。短命の人なり。一身の三停皆相應したるは。男女共に形うつくしく。福德あり。古人云此段の相するに上停長はよし。下停ながふして。身のうすきは。貧賤なり。他國のすまひ。船の上の商をのぞみてよし。身みぢかく。脚ながきは。一生流浪す。上長下短はよし。上短下長きは下賤なり。惣じて身乾かれたるは。貧にして。命みぢく身躰さいくかわるべし。上中ながく(十八才)下短は富貴にてよし。

人面之總論

人の相はまづ面部を本とす。面すなをにして。ゆたかなるはよし。一身のとくしつを面にあらはすなり。かるがゆゑに。五嶽三停もみな人面の好相なり。おもて色うすぐれなひのごとくにて分明成を富貴の相とす。面なのめならず。傾側。缺陷たる四相は貧賤の二相なり。かるがゆゑに。面の色白してにがり。油のごとく。又うるしの色のごとくひかりあるは。富貴なり。おもての色赤にわかに火のごとく成は命短としする相なり。面色かれ寒氣ならざるにさむく。見ゆるは。貧下相也。面の色あをくあひのごとく見ゆるは。心に毒ありて人をそこなふべし。面に三拳(十八ウ)とて。角たつて。かゞみたるごとく。見ゆるは。男は妻子を害す。女は男をさまたぐる。男女共によくつゝしみて大信心のおこし。一代のまもり本尊をたつとみて吉。面満月のごとく。きよくゆたかなるを。名付て朝霞面といふ。男ならば。公家武家か。町人ならば。庄屋年寄か。なににても。物のかしらと成相。女は美人にて。公家大人につかへて。貴人の妻と成。前

生に三宝を供養し。人に善根なしたる因縁ゆへ。此世にも。なをく信心ふかく。心すなをなり。おもて。皮あつくうるをひあるは富貴なり。かわうすくかわきたるは。貧なり。身こへておもての瘦たるは。命ながく。生れ性しづかにして。物にさわかず。ゆふくたり。身やせて。おもてこへたる人(十九ウ)は。命みぢかし。おもての色白身黒きは。下賤なり。おもてくろく身白は。貴人の相にて仕合よく病もなし。おもてうりぎねなりしたるは。富貴にて。ゑひぐわの相なり。おもて。少あおく瓜のさねのときは。かしこき相。おもて。ながふしてしかくに。上下とがりて。棗の実のときは。貧賤なり。ほふぼねに。寿といふ。文字ありて。耳に入たるは。富貴にして命ながし。鬚たかくせばきは。孤となりて。苦勞あり。おとがひ開たるは。福德ありて。人にうやまはるゝ。上下あぎとのほね大きくひらきて。耳のうしろに見ゆるは。心に惡毒ありて。人を害す。(十九ウ)

人相小鑑卷之二

人面六曜五星に當事

六曜五星に。あたるとは。頭は火星。鼻は土星。左のまゆは羅睺。右のまゆは。計都。口は水星。左の眼は。太陽。右眼。は。大陰。左の耳は。金星。右の耳は。木星。まゆの中を紫炁。山根を月宇(ほし)。これを六曜五星といふ。○鼻ばしら。たかき人は。富貴にして。位あり。面すくやかに見ゆるは。中年に心に思事あり。おとがひ。まろくゆたか成は。田宅おほく持。額ひろくたひらか成は。子孫繁昌なり。又云面あらく身ほそきは。福人なり。面ほそく身あらきは。一生貧髪げに。油けなくこわきは。一生義なく慈悲なし。能慎てよし。

頭論 并 髮鬢の相論 (一オ)

頭は一身の尊。百骸の長五行の宗たり。高に居して。まとかに天の徳を。つかさどるといへり。かるがゆへにそのほね。ゆたかにして。明なるは命ながし。中ゆたかに。皮あつく。中たかきは。富貴なり。頂の中だかに。ひかりあるは。貴人なり。落入て皮うすきは。貧賤にして短命なり。額の中に肉。こぶのごとくにあるは。大貴人。出家なれば。天下の能僧たり。當時百丈禪師の法子。黃檗禪師は身の長七尺ありて。額に角ごとくに。肉出たり。是圓珠といふて。貴相なり。いただき右の方へ落入たるは。母をそんず。左のかたへ。おち入たるは。父をそんず。耳のうしろに。ほねあり。名て。寿骨といふ。そのほねたかく成たるは。命ながし。落入たるは。命みぢかし。太陽の穴とて。左の眼の事なり。此太陽二骨あるを。名て扶桑骨といふ。耳のうへ(二ウ)にあるを名て玉樓骨といふ。二つならびてあるは。大富貴の相なり。又坐する時。頭うしろへ。あをのきて。居するは貧賤の相。髪をあいだたるゝは愚にして。命みぢかし。髪をあいだ高は。心やわらかにして。命ながし。髪黒して。みぢかく。うるおひあるはよし。かしら。ちいさく髪ながきは。他國に。住所する也。髪黄にて。こがるゝごとく成は貧て。命みぢかし。髪みちかくしてこわく針のごとく成は。性つようして。じやけんなり。又あかくみぢかきは。たん命。かしら。ちいさく。くびながく。髪耳まではへかゝるは。みな貧賤の相にて。老うへにおよび死すべし。髪若年の内より。白なるは。悪。又おゐて二度黒なるは。命ながく仕合よし。額たいらか成は。かならず。富貴なり。かしらの内に角ごとくにあるは。心たけ

くし(二オ)て。仕合よし。うへ尖。したながききは。貧賤の相なり。ひたい。下へたれて。ゆたかなるは。賢人なり。女ならば。賢女にて。びじんなり。髪に油氣なく。ちゞみまきあがりたるは。男女ともに。人を妨ぐる相なり。つゞしみてよし。かしらのうちに旋ありて額にたれ。頂にありて。つじ多きは男女共に。みんよくふかし。つゞしみてよし。○人げんの髪を山岳の草木に。かたどるに。其草木さかんなる時は。蔽明ならず。うつして。清からず。かるかゆへに。毛髪は蜜にして。ほそくみぢかくして。うるをはん事を。ねがふ。黒して色ひかり。やはらかにして。にほひよきは。みな富貴の相。髪の色黄にしてちゞみたるは。一切の事に。さまたげをなす。その身も一生苦勞たへず。悪髪なり。髪あかき人も。わざわひ。(二ウ)たへず。髪あらくこわきは。性つよふして。慈悲心なし。むすぶふれて。あしき香のあるは。貧賤の相なり。鬢のなき人も。毒心あり思事もたへず。髪ひたいにはへかゝり。たるは男女ともに。母をさまたげ妻子を害す。かみひげばらゝとして。うるおひなき人は一しやう食物にとほしきなり。ひげかみに。あぶらをつけても。水を付てもはやくかわくは苦勞たへず。かみにうるおひありて。ほそきは男女ともにくらひあり。又黒やはらに糸のこたく成も仕合よし。四十よりうちに髪しろく成るは。血おとろふといふ。此人は命みぢかし。毛髮諸人の目に。すぐく見て。蝟の毛のごとく成は。子となりても。親にふかふ。臣下となりても。ふちうなり。是あく髪なり。(三オ)

頸の相論

頭は一心の体上を棟といひ。下を梁といふひかり有て。ゆたかなるを。

富貴とす。肥たる人。うなじ短は。大きによし。瘦たる人の項長はよし。あるひはなはだ。ながくして。つるのごとく。あるひは又みぢかくして。いのしゝのくびのごとく。あるひは大きにして。まる木のごとく。あるひは小して。中ふとく。うへしたほそきは。みなこれ不合の相といふて。あしゝ。くびのまわりに。こぶのごとくあるは。肥たる人はわざわひあり。やせたる人はくるしからず。いたゞきにすぎありて。ほそきは命ながし。短して。まへにさがりたるは。ふくとくあり。ほそくして。ながきはきはめて。ひんせんなり。まがりたるもひんくおほし。じねんに『(三ウ)まへに。かたむきたるはよし。うしろへ。のりたるは性弱(よはし)にしてあしゝ。頸立たゞしく。すなをなるは。性たゞしうして。さひわひあり。薄側馬のごとく成くびのものは。人にさまたげをなす。むまれなり。圓疊(まろくたゝみ)にして。ころもの袖のごとくなるは。富貴にして。命ながしくびまがりて。へびのごとくなるは。心に毒あくありて。しかもまづしきなり。まとかにながく。つるのくびのごとくなるは。心きよくして一生ひんなり。されども。つねの貧にはあらず。ころろざしを。きよくまもりて。世をへつらはず。もうこしの。伯夷叔齊のたぐひなり。まろくこへて。つばめのごとくなる。くびのものは貴人なり。項かしらより。ほそきものは。まずしふして。たんめひなり。うなじたつ『(四オ)て。おもてにそうおふしたる人は。命なく。清貴(きよくたつとみ)にして。賢人のごとくなり。こへたる人うなじ短。やせたる人のながきは。年をへてより。その名。よもにきこへてよし。此人かならず。こきやうをさりて。われと出世して他國に。住居する

なり。』(四ウ)

一云厚相

そのかたち。つよくして。福德あり。此人は心あつく。よく大氣にして。貴人高人とまじわりても。心少もおくせず。たとへは山のごとく。大船のごとし。引ども来ず。うごかせども。動ぜず。老年にしてなをくよし。』(五オ・上)

二云威相

此相いせひありて。一生人にしたがわずして。物のかしらと成べし。人にうやまれ。おそろゝなり。人よりあなどらるゝ事なくして。慈悲ふかく。下々をあれみすへはんじやうにてゑひ花なり。』

(五ウ・上)

三云清相

清とは。心きよく。たましひ。たかくひいでゝ。ちりにまじわりてもそまらず。たとへば。玉のごとく。蓮(はちす)のごとし。泥中(どろのなか)より出て。泥にそます。事にのぞんで過不及ならず。泥にそます。是聖賢の相とも。いふ

(六オ・下)

(五ウ・下)

(五オ・下)

べし。』(六オ・上)

四三云古相

古とは。いやしからずして。心しはく愚痴にて。一切に。きずかひたへず。物事に分別して。しかも。よきふんべつもなく。人より。うとまるゝ相なり。よくくつゝしみて。心得べし。』(六ウ・上)

五云孤相

孤といふは。仕合。よからず。妻子なく。一生苦労ありて。思事たゑず。たとへば。雨の中の鷺。ともをたづねて。立てるがごとし。されども出家しては。みし。大信心のおこし。観音不動を。念ずべし。』(七オ・上)

六云薄相

薄とはかたち。よはく氣よはく。心うすく。一生あやうき事おほし。たとへば大海のうへに。一葉(は)をうかべたるがごとし。よくつゝしみ。信心すべし。舩の上を心得べし。口舌たゑず。まづしき

なり。』(七ウ・上)

七云悪相

悪とは。親に不孝にて。つねに殺生を好人を害す。一生心にあくじをたくみ。人をなやます。さるによりて。わが身も皮をやぶり。骨をくだき。一身あやうし。よくつゝしむべし。是あく相也。』(ハオ・上)

八云俗相

俗とは。下賤の事也。心にこりて清からず。いやしき。いとなみをする相なり。たとひ衣食ありても。用る事ならず。されども心はりちぎ成べし。

右是八相なり。男女ともに此通に見分に違あるべからず。よくく考べし。』

(ハウ・上)

富相

富相とは。かたち。あつく。神やすく。氣きよく。音声わうしきにて。項大に。ひたいたかく。眼あきらかに。まゆひろ

(六ウ・下)

(七オ・下)

(七ウ・下)

(ハオ・下)

(ハウ・下)

(九オ・下)

く。耳あつく。唇くれなひに。鼻すぢとふり。面しかくに。背あつく。
腰たゞしふして。皮うるほひ。腹だれ。齒なみよく。色白して。万
事豊成は財宝おほし。』(九オ・上)

(九ウ)

はらのごとく。下かるく。むな
しふして。上おもく。むねにほ
ねあらはれ。おもてなつめのさ
ねのごとく。上下とがり。口火
を吹やうにて。齒あらはれ。ま
ゆみじかく。乳ちいさく。万
長短にてそろわぬは。貧賤の
相なり。』(十ウ・上)

(十ウ・下)

貴相とは。十二宮五官。四学堂。八学堂。六府三才三停。一切相を。
具足して。心きよく。形ゆたかに。声しづかにて。慈悲ふかく。心す
なをに。身おのづから香。上停長。下停みぢかく。まゆのあいだ廣。
まなこ分明にくろく。はなすぢ。すなおにして口四の字のごとく。
舌ながく。齒をふきくして。しろく。額とがらず。耳大きにして。あ
つく。おもての色。うすぐれなひのごとくにて。形よくなもあいたる。
是を貴人とも聖人ともいふなり。

貧賤の相

貧賤の相とは。頭は。ちいさく。額すほり。耳うすく。口ちいさくし
て。肉ゆるく。かたちいやしく。氣もにぎり声のひゞき。われたる鐘
のねのごとく。まゆのあひ。せばく』(十オ)腰おれて。せなかうす
く。脚ながく。かたせまり。物くひねずみのくろふごとく。すゞめの

孤苦の相とは。一生みなしごと成て。くろうたへず。詩にいわく。人
孤獨なる事は。何によるに。顴骨たかく。氣しつ。せまりて。和せ
ずへんくつにして。おもての色こがれ眉すこしにて。まなこに。くろ
き所すくなく。いろあかく。鼻のなり。ひらたふして。あな。おふき
く。角ありて。口せばく。物くろう事。いのしゝのごとく。耳ちいさ
くして。うすく。くびうへした。すほり。中ふとく。肩せばく。身の
すぢあらはれ。物事心にかゝり。思事たへず。みなこれ。孤どくの相

(十一オ)

なり。これには。口傳あり。よくく。見合て。相すべし。』(十一ウ)

寿相

寿相とは。命ながきをいふ。詩にいわく。富貴の相は見やすく。世に見がたきは寿相なり。先ひたひ。ゆたかにして両の眉ながく。ほふぼねのにく多。耳の中に毛はへ眼の内すく。四十過て。眉の毛しらがまじりに。鼻のなり正。頰豊に。齒の色白。耳大きに三停能なれあひたるは。是寿相也。』(十二オ・上)

(十二オ・下)

夭相

夭相とは。命みぢかきをいふ。すこし。肥て氣みぢかく。ひたいとがり。眉のあいだせはくして。耳うすく。鼻おぼへずたれ。鼻の中より毛はへ出て。齒くろく。うはば出て。口びるそり。おとがいみぢかく。つねにかほに。うれひありて。酒にゑひたるごとく。形にかけなく身のにく厚皮薄。のんどの下の骨上りたる。是短命也。』(十二ウ・上)

(十二ウ・下)

額部の相

人の貴賤富貧。命の長短を。わくるにももて額にあらわれずといふ事なし。かるがゆへに。上て論ず。玉柱の頂に入たるは。たつとき事。天子のくらしいなり。ひたひゆたかにして。平なるは。命ながし。おもて。ちいさく。さるの面のこときは。貧して。命みぢかし。ひたいくぼく。落入たるは。あし。髪下へはへかりたるは。愚にして。貧賤なり。かしら。ちいさき者。老して孤苦なり。額おふきにして。面ゆたかなるは。年おひてよし。』(十三オ)

(十三ウ)

痕紋の圖論

額の紋に。貴賤の二相あり。額ひろくして。好紋あるは。富貴なり。額とがり。缺くぼみたるは。悪紋にて。いよく。貧賤なり。〔一〕偃月の紋といふてくらのほる紋なり。〔二〕是懸犀の紋といふて。武臣の紋なり。〔三〕王字の紋は。神主などにしてよし。〔四〕天桂紋といふて代官などに。なるなり。〔五〕鶴足紋といふて。一國よりいげ

郷里のぬしとなるなり。三横の紋といふて。親に。はやく。はなるなり。一蛇行紋といふて旅へいでゝ死するなり。井井字の紋といふてじゆりやうをして吉なり。川字の紋といふ。物おもひ。うれひ事。たへず。あるひは。刑にあふなり。十字の紋といふて富貴にして繁昌なり。田田字紋(十四才)といふて富貴にして。命ながし。山山字の紋といふて。武家はよし。町人は半吉なり。乙乙字の紋といふて。みやこに居て。禁中の。御用を聞て。仕合よし。女女字紋といふて。何事にても。其名あらはれ。一げいに達する也。右のもんみな。ひたいにあらわるゝなり。心を付て。見るべし。女人に三横のもんあるは。夫に早はなれ。子をさまたぐる紋なり。耳に三紋あるは。聡明にて。知恵あり。眉の上に。紋あるは悪し。目の下に。なみだの。なぐるゝごとく。紋有は。慈悲ふかし。目下に横紋あるは。貧賤なり。又は子に。えんうすし。額に大字の紋あるは。親かうこうにて武家は忠臣なり。ひたいに。一字の紋あるは。商人はよし。あわれむ心あり。額に毛のはゆるは。男女ともに。さまた(十四ウ)たけの心ありて。親に不孝なり。額の左に。日といふもん。右に月といふもん。此両紋あるは。貴相なり。出家は。天下の大和尚と成る。俗は天子の御前ちかく出仕する人なり。額に一筋ふときすじあるは。心勇にして。百萬の軍兵の大將と成る。額に紋ありて。眉の中へ入。わけ見へずして。紋あるは。貧苦あり。口のはたにもんありて口の中へ入たるは。男女ともに。うへて死すへし。額に川といふもんあるは。富貴にして。命ながし。顴骨(ほうぼね)に小といふもんあるは。水難にあふて。あやうし。もろこしに。鐘繇といふも

のあり。いとけなきとき。祖父(ぢい)と同道して洛陽に行に。道に人相を見る人ありて。鐘繇童子を見ていわく。此童子は。聡明にして。よき(十五才)相あり。さりながら。水にあふて。わざわひあり。つゝしむべしといふ。それより行事いまだ。三十丁にもたらずして。橋をわたる時馬おどろいて。落馬し。水におぼれて。すでに死すべかりけるを。すくいあげ。たすかりたり。それより。いよく此童子をあはれみ。人相の正き事を。信じて。童子に学文させ。つゝに官位にのほり。世に名をあらはしける。鐘繇が顴骨に小といふ紋あり。(十五ウ)

(十六才)

枕骨の圖論
枕骨とは。頭のうしろ。髪(かみ)のゆひめより下。枕の。あたるを。枕骨といふ。しかれば人の貴賤は。枕骨にあり。枕骨ゆたか成は。富貴なり。落入たるは。貧賤なり。古人いわく。枕骨の善悪しらんとおもわば。

枕骨の脳下にあるを富貴とし。脳上にあるを。貧賤とす。故に紋論す。○三才紋といふて。貴なり。五岳の枕といふて。位あり。◎車軸枕といふて。合よし。假月枕といふて。貴人なり。相背枕といふて。文武二道に達す。垂針枕といふて。長

(十七オ)

(十七ウ)

命也。酒樽枕といふて。仕合吉。上上字枕といふて。男女共に富貴にして。長命也。◎妻子に縁あり。鶏子枕といふて。貧賤也。右の紋能相して。善悪を考知べし。』(十六ウ)

男女痣の圖論并善惡

漢の高祖は。股に七十二のほくろありて。帝王の位にのぼる。凡ほくろの生ずる所に。善あくの差別ありて。吉凶をさだむ。しかれば色の黒はうるしのこく赤きは朱のこくなるはよし。うすあをくうす白きはあしきほくろなり。額のうへにほくろ七つあるは貴人也。鼻のあなのうへにあるは。父母をさまたげ不孝なり。男女ともに。両の耳にあるは聰明にして知恵ふかし。学文して。いよくよし。耳の中にあるは命ながし。右の耳の下にあるはおやに孝行なり。耳の中のたまにあるは福德あり。眼脰にあるは盜賊の心あり。此ほくろをほりて。血を取綿につゝみ針をさし。観音の名号七へんと。』(十八オ) 鼻。川にすつべし。つゝみに盜賊の心やむべし。両のまゆの中にあるは。富貴にして吉。さりながら男女ともにたんにて兄弟にゑんうすし。鼻のあなのたにあるは。病たへず口舌あり。つねに薬師如来を信ずべし。目のふちのうへにあるは。仕合よし。鼻ばしらにあるは。きみちかくして。自害などする心あり。つゝしみて吉。人中といふて。鼻のあなにあるは。夫妻にゑんあり。口びるにあるは。貧賤なり。口中の上のあぎと。下のあぎとにあるは。一代食物多し。舌の上にあるは。一生いつわり。きよごん多し。人をたぶらかす。高廣堂にあるは。親に不孝なり。ほふぼねの一寸下にあるは。牛馬。あるひはたかき所より落て。わざわひあり。又のんどの下にあるは。男はつま。』(十八

ウ)を。がいし。女は男をなやます。むねの下。みそ落にあるは。よく物をおほべて吉。乳より壺寸わきにあるは。思事たへず。苦勞あり。わきばらに赤ほくろあるは。仕合よし。背十一のほねの脇。壺寸目にあるは。命みぢかし。くびすぢのうしろにあるは。たんきにて。苦勞あり。へその壺寸わきにあるは。夫妻にゑんあり。子に貴人あるべし。股のつけきは。四寸うへにあるは。富貴なり。同もゝの付きは。七寸下。内股にまろく赤●是ほど成。ほくろあるは。親に大孝行の人にて。天下に名をあぐへし。是を聖人とも賢人ともいふべし。唐漢の高祖。御子漢の文帝は。いとけなき時御名恒と申侍り。御母。薄太后に。孝行也。よろづの食物をまいらせらるゝ時は。先みづから。きこし』(十九才)めし心み給へり。御兄弟あたましくけれども。このみかど程。仁義をおこなひ。孝行なるは。なかりける。此ゆへに。上一人より。下萬民に至るまで。忝思ひ。四百余劬の。天子にかやうの帝。よもあらじと。かんるいきもにめいしけるが。かくのここのほくろあり。ことぐくは。面の圖に見へたり。よくく考べし。惡ほくろをほりて。血を取。綿につゝみ針をさし。川にすつべし。つるに惡事やみて善事と成るべし。

人相小鑑卷之二終』(十九ウ)

〔追記〕

『人相小鑑大全』には、人権上の観点から適當ではない表現が含まれているが、原作を尊重し、手を加えずに掲載した。なお、本稿は二〇一七年度秋学期に河戸愛実氏が提出した卒業論文「脇顔の痣 付『人相小鑑大全』翻刻―浮世草子から見る観相学―」に依拠している。

(この稿、続く)

(はまだ やすひこ 日本文学科)、

(かわと まなみ 日本文学科二〇一七年度卒業生)

二〇一八年十一月十五日受理

論文

狂人の誕生

——明治期の「狂人」言説と魯迅の「狂人日記」——

李 冬 木

〔抄 録〕

これまでの「狂人学史」においては、「狂人」言説自体を作品の人物精神史の背景として検討する研究が欠如していた。本論は「狂人」の用法、社会のメディア状況、「ニーチェ」、「無政府主義」、文学創作及び時代精神の特性など複眼的視点から、「狂人日記」誕生の以前に「狂人」の言説史が存在したことを確認し、この状況を前提として「狂人」誕生の足跡を考察した。また周樹人は「狂人」の雛形を携えて日本から帰国したが、この「狂人」は彼自身を形成した過程でできあがったもので、いわば彼の記憶にある「真の人間」と血を分けた兄弟であったと考える。「狂人」の誕生は、「真の人間」の誕生の必然性を宣告したもので、「狂人日記」は本質的に「人」の誕生を宣言した作品であったと結論づけた。

キーワード 狂人言説、狂人日記、魯迅、ニーチェ、真の人間

一．緒言 「狂人」誕生の足跡を探し求めて

今を隔てること100年前の1918年、雑誌『新青年』4巻5号において「魯迅」と署名された短編小説「狂人日記」が発表され、中国現代文学に初めて象徴的人物、つまり「狂人」を擁する作品が世に送り出された。これにより魯迅と呼ばれる作家が誕生した。こうした解説は文学史においては常套的なものとなっている。

では、「狂人日記」は「今日」に対してどのような意義があるのか。これは百年の「狂人学史」が一貫して探求してきた問題であり、今後も引き続き探求し続けられるテーマであろう。本論は「狂人日記」誕生百年という節目において、「今日」的観点から「狂人」を考察した結果を提示し、各方面に教えを乞うものである。

本論が提起する問題の所在は、「狂人日記」の「狂人」は如何に誕生したか、ということにある。換言すれば、この「狂人」には果たして「前世」があったのかという問いになる。これ

は具体的には「狂人」はどこから来たのかという問題である。歴史家の言うところの、「狂人」というこの奇特で怪奇な文学形象が誕生し、中国の精神界全体を震撼させ、五四文化革命の初めての春雷となった⁽¹⁾であろう。また、「狂人」誕生以来の「現世」は、読書史であると同時に、震撼史であり、中国精神界に巨大な波紋をもたらし、今に至るも少しも弱まっていないと言えるであろう。本論はこうした問題意識のもと、上述の問題を提起するものである。

作品の構成から言えば、「狂人日記」には二つの核心的要素がある。一つは「喫人」のイメージであり、もう一つは「狂人」のイメージである。そして「狂人」が「喫人」を告発するのである。この「喫人」というテーマが形成される前には、長い「食人」の言説史があり、それが道筋となっている以上⁽²⁾、これと同様に「狂人」の誕生にも「狂人」に関する言説の背景が果たして存在するのかという問いを設定するのが自然であろう。先行の研究者による研究には、つとに周樹人の留学時代と「狂人日記」の内的な関連に着目し、考察したものがある。例えば伊藤虎丸（1927-2003）、北岡正子（1936-）、中島長文（1938-）、劉柏青（1924-2016）等の学者の行った創造的な貢献は、「周樹人」がどのようにして「魯迅」に到ったのかという問題の架け橋を提示しただけでなく、国境を越え、更に広範囲の近代思想の文化的背景を現出させた。本論ではこうした優れた基礎の上に、「狂人」に対する言説の整理し、そこから更に一歩踏み込んで周樹人周辺の「狂人」現象と本人及びその作品の関連を考察する。そして「狂人」のイメージが形成されるメカニズムを探り、研究の空白部分を補填しつつ、「狂人」自体を作品人物の精神史の一つの背景としていきたい。

本論では「狂人」の用法、社会のメディア状況、「ニーチェ」と「無政府主義」などの言葉とその受容、文学創作及び時代精神の特徴など複数の視点からこの背景の存在を明らかにし、「狂人」誕生までの足跡をたどっていきたい。

二. 「狂」の用法と「狂人」言説

まずひとつの前提として、「狂人」言説は果たして存在するのかという問いを立てたい。答えはもちろん「存在する」である。

筆者は周樹人及びその周辺の関連する明治の文献を調査した時、しばしば「狂」の字を目にすることがあった。例えば、「狂」、「狂気」、「狂人」、「狂者」、「発狂」、「狂奔」のたぐいであり、当初は注意を払わなかったが、その後、これらの語句の用法には特定の範囲と文脈があり、特定の人物、事件、物事、思想、及び文学創作に関係しており、さらに特定の言語空間の言説を構成していることに気づいた。つまり「狂人」言説は、客観的には存在していたにもかかわらず、これまで発見、整理されていない状態であったのである。

言葉の点から見ると、「狂」は中国のかなり古い文献にも用例が見いだせる。甲骨文字にもつとに「狂」字（甲六一五）があり、許慎『説文解字』にも「狂は狢犬なり」と説解されてい

る。それは狂った犬のことで、のちに人にも転用されるようになり、「精神に異常を来した、狂った、ぼんやりする」などの意味から、ひいては「傲慢、軽率、放蕩、放埒、荒々しさ、性急さ」などという意味に敷衍していった⁽³⁾。『康熙字典』⁽⁴⁾や『辞源』⁽⁵⁾などにも『詩経』、『楚辞』、『尚書』、『左伝』、『論語』などの用例が列挙されており、これらは必ずしも最も早いものではないが、これらから古くから用例があったことがうかがえよう。たとえば李白の有名な詩句「我は本、楚の狂人、鳳歌して孔丘を笑う」⁽⁶⁾から数えても、今より1250年余り隔たっている。「狂」字は、語幹として強力な造語能力を有しており、大量の「狂」に関連する字句を産出している。例えば、諸橋轍次の『大漢和辞典』には、「狂」を語頭とする字句だけでも160語が収められており⁽⁷⁾、『漢語大詞典』では240語が収録されている⁽⁸⁾。これは中国語ではさらに大量の「狂」を含む語彙が存在していることを意味しており、日中間で「狂」の字句を共有している例を見出すことも容易である。つまり「狂人」言説はこれらの言葉の上に構成されているのである。

明治期までで言えば、日本語の「狂」を含む語彙は、基本的には中国からもたらされたものである。例えば、「狂人」、「狂士」、「狂者」、「狂子」、「狂生」、「狂父」などの言葉は「和製漢語」⁽⁹⁾と見なされていない。しかし、このことが空前の規模で造語が作られていた明治期に「狂」字が全く無関係であったということの意味するものではない。例えば瘋癲病院 [フウンテンビョウイン]、偏執狂 [ヘンシュウキョウ]⁽¹⁰⁾などはこの類の言葉である。井上哲次郎 (1855-1944) などが編纂した『哲学字彙』は日本近代史上で初めての哲学辞典であり、明治期に三度版を重ねており、明治の思想文化を考察するうえで重要な文献である。その1881年の初版には、「狂」の含まれる言葉が5語しか収録されていない⁽¹¹⁾、1911年の第三版では、「狂」の含まれる言葉は64語に増えておいる。[愛国狂]、[珍書狂]、[魔鬼狂]などがその例であり、例えば [妄想]、[誇大妄想]、[虚無思想]、[被害妄想]、[健忘] など更に関連する精神状態を表す言葉を加えると、新たに増えた言葉はおよそ100近く数えられる⁽¹²⁾。ちなみに新たに増えた漢字語彙はすべてが創作という訳ではなく、[疎暴、疎狂、鄙野、固陋、獷獐、魯莽、狷獷、麇鹿]⁽¹³⁾といった古語に典拠を求められるものもあり、これらは Rudeness という言葉の対訳として用いられた。

その他の近代の新語と同じように、「狂」に関する言葉も大幅に増え、これは明治の日本がヨーロッパ思想を吸収した速さと範囲の広さを表している。それと同時に、この「狂」という精神現象に対する認識が日々深化、専門化し、言葉の使用範囲も広範囲に広がっていた。明治30年代の終わりには、すでに日本語の系統で「狂」を一種の精神現象と見なし、加えて認識の形成と議論の基礎となる語彙となっていた。ここには少なくとも二つのレベルの意味合いがある。一つは大量の新語 (ただ「狂」の字を使用した言葉だけではない) の創造と広範囲の使用は、本文で検討する「狂人」言説を可能にしたということ。もう一つは「狂人」言説が以前とは異なった近代性を有していたことである。

しかし、さらにもう一つ指摘しておかなければならないのは、上述の『哲学字彙』の領域には「医学」が含まれていないということである。もし医学生が当然接触するであろう医学用語の「狂」に関係する言葉を考慮すると、一個人として、彼には「狂人」言説に介入するだけの素養と資格を有していたことを意味している。

魯迅が後に「狂人日記」を語った時に述べた「おおよそ、頼みの綱としたのは、以前に読んだ百余篇の外国作品とわずかな医学上の知識」⁽¹⁴⁾という文章の、「わずかな医学上の知識」とは、すなわち上述した語彙の範囲内で獲得したとみるべきで、当然それは当時の医学生が修めるドイツ語と日本語の対訳も含んでいた。これはその当時の藤野先生が改めた医学ノート⁽¹⁵⁾の中の言葉から、容易に推測される。これにより、「狂人」言説に関係する段階から言えば、周樹人は明治期の日本で使われていた語彙と同一の語彙を共有していたのである。

三. 社会生活レベルに見られる「狂人」言説

一般の社会生活のレベルから言えば、「狂人」に関する語彙と語句は、どのような状態であったのか。

上述したように、当時の日本には大量の「狂」と「癲」を含む漢語語彙は既に入っており、日本語に同化し、日本の各典籍や作品の中に使われていた。例えば「狂人走れば不狂人も走る」などは、当時はありふれた諺で、その意味は「気のふれた人が前を走ると、普通の人もそのあとに従う」となろう。これは、人はいつも他人に追随して、付和雷同しがちであることを喩えている。この諺はつとに文集『沙石集』(1283年)、謡曲『関寺小町』(1429年前後)や俳諧『毛吹草』(1638年)⁽¹⁶⁾に見られる。さらに江戸時代の国学者である本居宣長(1730-1801)は、「狂人」を冠した書物『鉗狂人』(1785年)⁽¹⁷⁾を著している。この書物は、藤貞幹の『衝口発』に対する反論の書であり、その後、日本国学史上の重要な文献となった。長い間、日本語が漢語の「狂」に関する語彙をどのように吸収したのか、遙か往事のことであることや、膨大な書籍があったことが原因で、確定することができなかった。しかし、明治十二年(1879)から明治四十年(1907)、明治政府が千巻以上に及ぶ百科全書『古事類苑』を編纂し、日本の歴史が積み重ねてきた様々な知識に対して全面的な統合と整理が行われた。例えば、この書物には「癲狂」の項目がある。

〔倭名類聚抄 三病〕

癲狂唐令云、癲狂酗酒、皆不得居侍衛之官、本朝令義解云、癲發時、臥地吐涎沫無所覺、狂或自欲走、或自高稱聖賢也⁽¹⁸⁾。

続けて「癲」の由来と「狂」字の解釈が、歴史的、文献学的考察がなされている。畢竟、この二つの字は単独で使用されようとも、熟語として使われようとも、「病気のことを言う」のである。また「癲狂」と「狂人は同じ」と特記してある⁽¹⁹⁾。同時に大量の症状の表現及び

『沙石集』、『源氏物語』など歴代の典籍と作品の狂人の事跡を集め、『癪病総論』⁽²⁰⁾を付け、まさに「狂」事大全ということができよう。つまり、この本を編纂した時期の日本語では、「狂」、「癪」、「癪」という漢字はすでに精神病を指すとみなされていた。つまり明治期の「狂人」言説には、こうした基礎知識に裏打ちされた前提があったのである。

近代のメディアの出現と発達とは、「狂人」言説を近代におけるテーマとして、最初に社会伝播のレベルで確立させた。当時の代表的新聞である『読売新聞』と『朝日新聞』の記事を例にとってみよう。1874年11月2日に創刊した『読売新聞』は、1919年の末までに限ると、100件⁽²¹⁾を超える「狂人」に関する報道をしている。1879年1月25日創刊の『朝日新聞』は1919年7月16日朝刊第五版の「狂人巢鴨医院から逃走」⁽²²⁾の報道までに限ると、「狂人」に関する報道は540件にも及ぶ。さらに報道数の増加の趨勢を見てみよう。『朝日新聞』の明治10年代と20年代(1879-1897)の18年間の報道数は140件⁽²³⁾であるが、明治30年代(1898-1907)は一気に208件⁽²⁴⁾にまで増えており、前の18年間の1.5倍になっており、明治40年代ではわずか4年半の報道数が144件⁽²⁵⁾にまでなっている。この後、1919年の年末の大正時代(1912-1925)の7年半には僅か48件の報道しかなかったこと考慮すると、一つの明確な結論が得られる。つまり「狂人」が新聞などのメディアを通して社会の表層の話題となったのは、明治30年から40年代の15年間に集中している(『読売新聞』も同じような状況である)のである。この調査の結論は、大衆の言葉の側面から筆者の先の一つの基本的な推測に証拠を提供している、即ち「狂人」は一種の言説として、おおよそ明治30年代前期には形成され、明治30年代後期ないしは明治40年代には広まっていた。これを中国の歴史的事件に照らすと、ちょうど戊戌の変法から辛亥革命の十数年にあたり、20世紀の最初の10年を含んでいる。周樹人が日本に留学した7年半(1902-1909)も、まさにこの時期に相当する。

ではメディア空間で出現した「狂人」とはどのような存在であったのか。報道の内容から分類すれば、以下のことに気づくであろう。それは絶対多数が狂人の行動、事件に関する報道であり、メディアの「狂人」は精神病患者であり、俗に言う「気がふれた人」となる。彼らは傷害、殺人、放火、窃盗、逃亡、横死やでたらめ、ひいては奇怪な行動の中心人物であり、同時に医学的治療の対象でもある。彼らの姿は精神病院、病院や監獄に現れるだけでなく、総理大臣官邸や貴族の邸宅、文部省などの役所や警察署などにも現れる。そして、重要な場所で大騒ぎをする中心人物であり、彼らの行動に伴って最も多く登場するのは警察である。警官は、往々にして手をこまねいており、酷い時は彼らから暴力を受けてしまう。つまり一般大衆の言説の「狂人」と『古事類苑』の「狂人」が担っているもの、例えば「幼者狂人放火」⁽²⁶⁾「瘋癲者犯罪」⁽²⁷⁾「狂人犯罪」⁽²⁸⁾「狂人愚昧者犯罪」⁽²⁹⁾の類の行動とは大きな違いはなく、どちらも「気がふれた人」という範疇に属している。これが以前と異なっている点は、「狂人」の存在が普遍化し、問題となり、一般社会が注目する対象となり始め、公共の言語空間に入った言説となったことである。

書物における「狂人」の出現は、新聞よりも一歩遅かったが、増加の趨勢は同じであった。それについて後述する為、ここではこれ以上触れない。つまり、1902年に来日した周樹人にとって、「狂人」は耳になじんだ日常の話題でなかったとしても、少なくとも全く知らない話題でもなかったはずである。「狂友」を収録した宮崎滔天（1871-1922）の名著『狂人譚』が、周樹人が横浜に上陸したその年に出版されていることがその一例である⁽³⁰⁾。

四. 「ニーチェ」と「狂人」言説

明治33年即ち1900年、ドイツの哲学者、文明批評家、詩人でもあるニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）が死去し、翌年の明治34年（1901）、日本で「ニーチェブーム」が巻き起こった。端的に言えば、この「ニーチェブーム」は「美的生活論争」から引き起こされた。1901年評論家の高山樗牛（1871-1902）は「文明批評家としての文学者」と「美的生活を論ず」⁽³¹⁾二編の文章を発表し、「文明批評」と「人間性が本来要求する」「美的生活」を追求することを展開、主張し、これにより論争が引き起こされた。高山樗牛は前の文章で「ニーチェ」の名前を挙げ（ただ名前挙げただけだが）、更に彼の援軍の登張竹風（1873-1955）が駆けつけ、「高山君の『美的生活論』は疑いもなくニーチェの説を根拠にしている」⁽³²⁾と宣言し、「ニーチェ」をこの論争に巻き込み、その中の焦点の一つとした。「ニーチェ」はあたかも巨大な渦のように、様々な問題を巻き込み、様々な言説やことばを攪拌させた。その中で、最も顕著なものは、「ニーチェ」の登場と相伴って出現した「狂人」の言説である。

「ニーチェ」は「気のふれた人間」として、日本の思想界に現れたと言ってよい。「発狂する」という言葉は、彼みずからが付けたレッテルである。「ニーチェ」が最も早く日本に伝わったルートの一つが、1894年に医学博士の入沢達吉（1865-1938）がドイツから持ち帰った哲学書であるとされる。同年、同じように医者で且つドイツに留学したことのある森鷗外（1862-1922）が彼からその書物を借りて読んだが、結局どのような著作だったのかは、はっきりしない。ただ森鷗外が友人に宛てた手紙の中に「ニーチェ」に関する僅か数語が残されており、それが「ニーチェ」が彼に残した最初の印象、「ニーチェは最もすでに発狂している」⁽³³⁾を現している。1899年1月に発表した吉田静致（1872-1945）の「ニーチェ氏の哲学（哲学史上第三期懷疑論）」と同年8月に発表した長谷川天溪（1876-1940）の「ニーチェの哲学」の二本の論文が最も早く「ニーチェ哲学」を公に紹介したものであるが、期せずして「ニーチェ哲学」と彼の「癲狂」或いは「心狂」が関連づけられて紹介された。前者の「ニーチェ」は「偉大な懷疑論者」だが、「聞く彼は當時癲狂症に罹り居ると」⁽³⁴⁾した。後者では「ニーチェ」に対し実に同情的であり、「彼を以て一狂者なりと見做」⁽³⁵⁾したくないが、「其激烈なる活動、狂奔せる思想の流は、遂に此人の精神組織に影響を及ぼし……其心狂うてエーナの瘋癲病院に幽閉されたり」⁽³⁶⁾としている。

ここで最も提起すべきは、桑木厳翼 (1874-1946) が1902年に出版した『ニーチェ氏倫理説一斑』⁽³⁷⁾である。この書は「超人」を「精神病院」と関連づけて紹介している。「自分で天才であるなどと自覚したら、この関心の多い人間でありながら、自分免許で天才や超人となつたなら、気の毒な事には彼は最早瘋狂院の一客とならねばならぬ。かような實際ない超人も一種の詩としては興味があるが、人生の理想としては、割合に価値のないものであると思ふ」と断じている⁽³⁸⁾。桑木厳翼は明治26年 (1893) 東京帝国大学文学部哲学科に入り、東大でニーチェを祖述したドイツ人教授のラファエル・フォン・ケーベル (Rapheal von Köber, 1848-1923) と東京帝国大学の主任哲学教授の井上哲治郎の高弟となり、本を出版したこの一年には既に東京帝国大学文学部の助教授に昇任していた。当時最も詳しくニーチェを語る資格を持った学者の一人であり⁽³⁹⁾、その言論の影響は言うまでもなかった。「ニーチェ」に関する著述におけるその描写は、婉曲的であったが、「学術的」であった。しかし「超人」を気のふれた人間と見なしていたに違いない。更には、直接ヨーロッパの「精神病学」の方面の最新研究成果を即座に導入し、それをもって「ニーチェ」を評価した。それが1903年4月12日に『読売新聞』に発表した「精神病学上よりニーチェを評す (ニーチェは発狂者なり)」⁽⁴⁰⁾である。『読売新聞』のこの文章は、「1902年、パウル・ユリウス・メービウス (筆者案ずるに、ドイツの精神科の医師、Paul Julius Möbius, 1853-1907) が『ニーチェにおける精神病理的なものについて』というセンセーショナルな病跡学研究を発表した。今日の医学水準からいってほとんど信憑性を失っているが、当初、影響力の甚大な一書であった」⁽⁴¹⁾と、この書物の内容に対する全般的な紹介をしている。

多くの口は金をも溶かすように、ニーチェは「気のふれた人間」になってしまった。僅か数年の間で、「ニーチェ」はこのように新聞、雑誌や著書を通じて紹介、評論され、社会的言語、思想学術、精神医学など各レベルで「狂人」を形作った。このことは生田長江 (1882-1936) に深い印象を残すことになった。彼は日本で最も早く『ツァラツストラはかく語りき』の翻訳に着手した人物であり、後の『ニーチェ全集』の日本語訳者であったが、この明治30年代の「ニーチェブーム」では、いわば「遅れてきた青年」⁽⁴²⁾であった。彼は明治36年 (1903) に東京帝国大学文学部哲学科に入り⁽⁴³⁾、桑木厳翼から遅れること十年を経た同門であり、彼がこの一年で見た情景は「ニーチェはまだ理解されておらず」、熱気は既に過ぎ去り、ただ「狂人」のレッテルを残すのみであった⁽⁴⁴⁾。これにより、ほとんど生田長江と同年齢で、ほとんど同時に東京で学問を求めている周樹人にとって、「ニーチェ」の第一印象は、先学達が指摘した「積極的人間」、「文明批評家」、「本能主義者」⁽⁴⁵⁾というよりはむしろ、「狂人」「ニーチェ」が近いものであったであろう。

前に紹介した一般社会における「狂人」言説を通じて、以下のことがわかる。「狂人」というレッテルが貼られたことは、ただ単に残酷な非難であったというだけでなく、社会に押しつけられ、瀬戸際に追われ、更に追い込まれていたことを意味している。これにより、ニーチェ

は「狂人」であるという理由で攻撃され、「狂人」はニーチェの価値を否定する者たちの強力な武器となった。

客年ニーチェの異説一たび論壇に現るゝや、軽佻浮薄なる文学は、其奇矯の辞激越の調を喜び、或は之を以て本能主義と同視し、或は之を以て自然主義と結合し、或は之を以て快楽主義と解釈し、甲難乙駁底止する処なかりき、

されど当時虚心冷頭なる、識者は、窃かに彼が詭弁弁説を忌み、是れ果して健全なる思想の産物なるか疑わざるを得ざりき、

果然ニーチェは医学上一狂者として知らるゝにいたれり⁽⁴⁶⁾

このような状況で、文壇の老將軍で著名な坪内逍遙 (1859-1935) は、匿名で「馬骨人言」の題名で、嘲笑するかのように、「ニーチェ」とそれに追隨する人間を攻撃した。彼は同表題の文章を一気に31の書き、『読売新聞』に24回⁽⁴⁷⁾連載した。そこで「ニーチェ」は明治の主流のイデオロギーの領域において、特に社会と世論の中において、すでに評判が悪く、たとえ人が彼を「天才」とであると弁護しようとも、それは「似面非天才」、「贗天才」、「疵天才」、「屑天才」、「汚天才」、「狂天才」、「病天才」、「偏天才」、「歪天才」、「畸天才」、「怪天才」(いっそのこと「変人」かも?) にすぎない。さあゝ、選取るつたゝとした⁽⁴⁸⁾。

では、「ニーチェ」に関する論争において、「狂人」を弁護する人間は現れなかったのであろうか。答えは、現れたのである。ただその勢力は弱く、「瘋狂」論に抵抗できなかった。「美的生活論争」を担った高山樗牛その人だけでなく、この論争の火種を「ニーチェ」に向けた登張竹風及び当時留学地のドイツから声援を送った姉崎嘲風 (1873-1949) も、彼らの論争そのものは思想界に巨大な衝撃をあたえたが、彼ら自身は少数者のほか、彼らが直接「狂人」のために弁解した言論も極めて少なく、ただ彼らの殿の齋藤信策 (1878-1909) が、1904年11月に発表した長文『天才と現代の文明』で「天才崇拜の意義を明かにす」⁽⁴⁹⁾が初めての真剣な回答であった。

つまり、「狂人」が一種の言説となり、「ニーチェ」の登場に伴って明治のエリート階層が思想問題を討論する言葉となり、それと同時に「ニーチェ」も独自で特徴的な表象となった。これにより、「狂人」をいかに理解、認識したかということが、とりもなおさず「ニーチェ」に対する理解と把握であるということまで及んだ。既にわかっている鲁迅の「ニーチェ」、「狂人」に対する総合的認識に基づけば、明らかに上述の「ニーチェ」と「狂人」のイメージには大きな齟齬がある。では彼はどのようにして世間と世論が作り出した認識と混乱を克服し、自分が把握し得たあの「ニーチェ」像に到ったのであろうか。

五. 「無政府主義」と「狂人」言説

明治30代の「無政府主義」という言葉も「ニーチェ」同様、「狂人」の言説をさらに強化し

た。

19世紀の80年代以後、ヨーロッパ各国、特にロシアでは「虚無党」や「無政府党」の動きが活発化し、しばしばヨーロッパとロシアで騒乱を引き起こし、これに関する明治期の言説も、ヨーロッパやロシアの状況に対して日本政府と社会が注意を促し、報道することと密接に関係していた。明治35（1902）までで統計をとると、1880年2月22日から1901年10月21日までの『読売新聞』誌上におけるヨーロッパとロシアの「虚無党」に関する報道は55件、「無政府党」に関する報道は29件、合計84件であった。ほぼ同期間の1880年2月29日から1902年7月29日までの『朝日新聞』の報道では、欧露の「虚無党」に関する報道は140件、「無政府党」に関する報道は16件、合わせて156件であった。つまり、20年余りにわたって二紙が報道した「虚無党」と「無政府党」の記事は、合計240件にものぼる。その内容は主として「虚無党」の人間と「無政府党」の人間の暗殺、爆破、暴動などテロ活動及び各国政府特に帝政ロシア政府の彼らに対する取り締まり、鎮圧、駆逐と処刑であり、これらの人に与える印象は前者は皇帝と政府を敵とする殺人、放火、悪の限りを尽くす犯罪集団であり、後顧を考えない命知らずの輩と精神錯乱分子であるというものであった。

「虚無主義」(Nihilism)と「無政府主義」(Anarchism)は本来、異なる意味をもつ概念であり、それらが日本で紹介された順序も異なっていた、前者はつとに1881年初版の『哲学字彙』に存在し、「虚無論」⁽⁵⁰⁾と訳され、1911年第三版にはさらに「虚無主義」乃至「虚無論者」(Nihilist)⁽⁵¹⁾の漢字が対訳されている。その一方で、「無政府主義」は『哲学字彙』第三版にも収録されていない。しかし明治2、30年代の言葉の具体的運用において、「虚無主義」と「無政府主義」、「虚無党」と「無政府党」は同義で、ほとんど互換が可能であった。1902年4月『近世無政府主義』⁽⁵²⁾という日本で初めての「無政府主義」に関する専門書が出版され、その作者の煙山専太郎(1877-1954)は『序言』で「無政府主義」と「虚無主義」の関係について以下のように説明した。

現時に於ける無政府主義と露国の虚無主義とは、その間の性質少々異なる者あり。然れども此二つの者は近時革命主義（余輩は敢えて之を社会主義とは云わず）の最も極端なる形式として発展し来たる者にして、或意味に於いては虚無主義を以て包括的な無政府主義の一特殊現象と見做すも敢えて不可なかるべきを信ずるが故に、此处には便宜上共に之を近世虚無主義なる題目の下に列したり。読者の之を諒せられんことを望む⁽⁵³⁾。

これは当時としては画期的な著作であり、「無政府主義」に対する恐怖と憎悪がもたらす偏見を解いた。「本編純粹乎たる歴史的研究により、此妄想者熱狂者が如何にして事実として現社会に発現し来りたるや。その淵源を明にせん」とし⁽⁵⁴⁾、それ故、後世の人間に「邦訳で出版された無政府主義の研究書としては唯一といってもよいまとまった労作であった」⁽⁵⁵⁾。そして「アナキズムの情報面では質量ともにはるかに優れたものであった」⁽⁵⁶⁾と評された。

この著作は同時代の日本の社会主義者の幸徳秋水(1871-1911)と無政府主義者の久津見蔵

村 (1860-1925) に影響を与えただけでなく、——この二人も同時に中国に影響を与えた——更に中国の清末民初の思想界に大きな影響を与えた。管見の範囲だけでも、同時期の中国言論界で、煙山専太郎の『近世無政府主義』を基にした文章と著作は18種以上に及ぶ⁽⁵⁷⁾。

煙山専太郎の多大な貢献には、とりわけ二つのことが顕著である。一つは「無政府主義」の二つのタイプの区分であり、もう一つは区分した中で「シュティルナー」と「ニーチェ」を突出させたことである。

まず、「無政府主義」は大きく「実行」と「理論」の二つに分けることができる。暴力を使用する手段は世間に恐怖をもたらし、広く関心を引き起こすということを主要なものとするのが前者の「実行」であり、それは「実行的無政府主義」である。しかし彼はイタリアの犯罪学者で精神病学者のチェザーレ・ロンブローゾ (Cesare Lombroso, 1835-1909) の有名な観点には同意せず、社会通念の観点、即ち「実行的無政府主義」者を病の原因を有する精神病患者と「狂者の一種」と見なした。だがこれが誤謬に陥れたと要因と考えられる⁽⁵⁸⁾。これにより、彼は自らの著書においてこの種の無政府主義者を、通常の「熱狂的」或いは「熱狂者」として描写し、これにより無政府主義者の身に生まれながらの「狂人」の汚名を効果的にすすぎ、彼らを「狂人」の列から選り分けることで「狂人」言説の主張を客観的に強化した。

またこれだけでなく、彼はさらに大幅な紙面を費やし、「理論的無政府主義」として「シュタイナー」と「ニーチェ」を詳しく紹介した。そして前者を「近世無政府主義の創始者」の一人と位置づけ、後者を「近世無政府主義」の代表とした。蚊学士「無政府主義を論ず」には、「スチルネルの言説は絶対的の個人主義なり」⁽⁵⁹⁾とある。また「之に反して我性は我々に向て叫で云ふ、汝自身に蘇れと。我性は生まれながらにして自由なる者なり。故に先天的に自由なる者にして自ら自由を追求し、妄想者、迷信者の間に伍して狂奔するは、正に己を忘る、者なり」⁽⁶⁰⁾とある。そして「スチルネルの奇矯なる此新説は恰も燦爛なる花火の一時に発」するとある⁽⁶¹⁾。また煙山専太郎は雑誌『日本人』で2ページに渡りシュタイナーを紹介し⁽⁶²⁾、さらに著書でも9ページの紙幅を使い⁽⁶³⁾、この文章は日本の同時期で最も詳細で完成され正確なシュタイナーの評論となった。一方、ニーチェに対する紹介は更に多く、雑誌『日本人』で何度も言及されたほか⁽⁶⁴⁾、『近世無政府主義』では14ページの紙幅が割かれた⁽⁶⁵⁾。そこでは「ニーチェの学説は純粋な哲理性の無政府論と見なすことが出来る」⁽⁶⁶⁾、また「晩近の思想界に於て一種特異の光彩を放ちつゝある者をニイチェの哲学とす。……ニイチェの学説は決してそれが社会改革の動機より出でたる者に非ずして純然たる理論上より立せられたる者なり。此点に於ては個人主義たるマクス・スチルネスと全く其立脚地を一に」し⁽⁶⁷⁾、吾人は之より少しく彼の主張に付て観察する所あらんとす⁽⁶⁸⁾。——ニーチェに関する紹介は、このような前置きから始まった。煙山専太郎は同時期に発生した「ニーチェブーム」の論争に参加しておらず、のちに出現した日本ニーチェ学史においても彼の名は見られない⁽⁶⁹⁾。しかし今日的な観点で見ると、「ニーチェ」が流行した当時であって、はっきりと支持ないし反対して旗幟鮮明にした

「ニーチェ」論と比べると、煙山専太郎の「ニーチェ」論だけが最も明晰にニーチェの思想上の位置とその価値を見出していたといえる。

夫れ一方の極端説に対して他の反対説出て、而して其兩者の相調和進行することによりて人文の発展するはこれ実に自然の経路なり。人世豈に夫れ絶対的の者あらんや。衝突し、調和し、駿々として苟くも止むとなし、其間に於て云うべからざる意味の存するあるなり。所謂実行的無政府主義者の求むる所は其理想を直に刻下に実現せんとするにあり。其順序を誤れる、豈に敢て知者を俟て後初めて知るべき所ならんや。然れども徒に彼等の主張を排斥し、狂者の空言を以て之を遇するはこれ又た不可なり。彼等の大呼唱達する所はたしかに其據る所の之あるを見ればなり。……個人主義より出でたるスチルネルや、ニエチエや、将たハーバードの無政府主義はこれ豈に極端なる自我中心説にして、引て意志の自由を推量し、我性の發揮、本能の自由を唱へ、遂には一切我以外の権力を否認せんとするに至りたる者に非ずや。……ニエチエの利己的哲学が一代の思想界を動かし、多数の学徒を世界至る所に有するに至りたるは其後者なるが為なり。夫れ進歩の動機は理想が人心を衝動するの故なり。理想の追求せらるべきなく、營々として現実世俗の物質に拘泥す、何へにか進歩の遂げらるべきあらむや。遠く慮り、深く謀り、現実の事物を修正改善して徐ろに己が胸中の理想国に近づかしめんとする、洵にこれ志ある者の窃に以て計画するべき所にあらずや⁽⁷⁰⁾。

魯迅の文章を熟知している人からすれば、上述の話から既視感を催すかもしれない。しかし「狂人」言説の問題の角度から見ると、煙山専太郎は實際上、「シュタイナー」と「ニーチェ」の解釈と通じて、「狂人」の価値を反転させる役割を果たした。「狂人」の言は、所謂「瘋言瘋語」で理解できるものではなく、「彼等の大呼唱達する所」は、「確かに根拠があっただけでなく、その「人心を衝動」した理想は人類の進歩の価値を押し上げた。もし誰かの気が狂ったのなら、それはまさに「シュタイナー」の言葉を借りれば、「先天的自由者は自分で自由を追い求め、妄想者と迷信者とで隊を成して狂奔し……、自己を忘却する」人となるのである。徹底した個人主義者からすれば、本当の発狂とは「自己を忘却して」耐えられない状況なのであろう。この種の価値の転換の認識と肯定の痕跡も、忠実に記録され、「令飛」すなわち当時の周樹人が1907年に書いた『文化偏至論』⁽⁷¹⁾には、いわゆる「外的原因」と「内的原因」という言葉として表現されている⁽⁷²⁾。

つまり、「ニーチェブーム」の「狂人」がマイナスのイメージで表に出てきたのとは異なり、「無政府主義」という言葉には、「狂人」は肯定的な「シュタイナー」と「ニーチェ」の意味を付与され、そして「狂人」は創造性を有する、独立した個人という一種の「おくり名」（「個人主義」を「利己主義」に分類したように）を冠して世に出てきたのである。これにより「狂人」は肯定的意義という新属性を有することとなった。

煙山専太郎が区別した「無政府主義」の二つの類型と「狂人」に対する肯定的価値は、後の

論者にも踏襲されていった。例えば久津見蔵村は4年後の1906年11月に出版した『無政府主義』において、章立ての区分だけでなく、叙述の方法と内容にも明らかに煙山をトレースしている。例えば「実行の無政府主義と理論的無政府主義」⁽⁷³⁾のといったたぐいの用法は言うに及ばず、ロンブローゾを批判し、「狂人」を擁護することも煙山に近づいている⁽⁷⁴⁾。彼は更に「ニーチェ」を擁護して以下のように言う。

或は彼れの性格が常人と異なり、奇矯の言行多く、遂に発狂して死せるの故を以て、彼れの論ずる所は狂者の言なり、採るに足らずと云うものあり。然れども天才と狂者とは相距る一步の差のみ。……彼れ好し狂者にても可なり。人を以て言を捨つ可らず。彼れの設ける所にして狂ならず愚ならず、真理を語るあらば之を採るに於て何ぞ遲疑を要せんや⁽⁷⁵⁾。さらにのちの大杉栄(1885-1923)『正気な狂人』(1914年5月)になると、この「狂人」はすでに「俯仰不屈、何事にも屈せず、「最高の山頂までもよじ登れる」⁽⁷⁶⁾ほどの明晰で健全な「狂人」に変化している。

生の最高潮に上りつめた瞬間のわれわれは価値の創造者である、一種の超人である。僕はこの超人の気持ちが味わいたいのだ。そしてみずからこの瞬間的超人を経験する度数の重なるにしたがって、一步一步、この種の超人となる資格が得たいのだ⁽⁷⁷⁾。

つまり大杉の見方は、「狂人」は理想的人格の体现であり、それによりこの「狂人」は明晰で、勇敢で、健全で、超越的な存在であった。衆知の通り、周氏兄弟は大杉栄の愛読者であった。

六. 文芸作品と評論における「狂人」

以上のように社会レベルと思想レベルで「狂人」を見てきたが、総体的に見ると、明治期に「狂人」言説を伝播拡散した最大にして有力なルートは文芸作品であった。「狂人」が文学作品と評論に頻繁に登場したのは、明治文学の顕著な現象であったと言える。わずか20世紀に入ったばかりの20年間に出版された「狂人」に関係する書物を例にとると、「文学分類」に属する図書は、1900年から1909年の37の図書、15種類があり、1910年から1919年では69の図書、42種類⁽⁷⁸⁾にも及んだ。

さらに遡ると、「狂人」が「文芸」という言葉の範囲においてその痕跡があることを発見できるであろう。ただ明治文学の「全集」や「大系」の類のものを紐解けば、そこに収録されている作品や評論に容易に「狂人」を見出すことができる。例えば文壇で名を轟かせた森鷗外の早期「ドイツ三部作」はドイツでの留学体験をもとにしているが、先の二部には「狂人」が登場している。『舞姫』(1890)の女性主人公・エリスが最後には不治の「狂人」となり、『うたかたの記』では1度に三人の「狂人」が描かれていて、後世の人間から見ると、名実ともに「三狂」の作品である⁽⁷⁹⁾。

もしも早期の作品と評論の「狂人」がさらに多くの「比喩性」があったなら、後になればなるほど、「狂人」もますます「リアリティ」を備え、「狂人」の実体のイメージが文芸において確立しえたであろう。「狂人」の塑像があるだけでなく⁽⁸⁰⁾、「狂人の家」⁽⁸¹⁾、「狂人の音楽」⁽⁸²⁾、「狂人の文学」⁽⁸³⁾などの表題も至る所に見ることができる。その中でも最も注目を引くものは、明治35年即ち1902年3月1日、つまり周樹人「一行三十四名」が「神戸丸に乗って」——「大貞丸」ではない⁽⁸⁴⁾——横浜に到着する一か月前、雑誌『文芸倶楽部』には「狂人日記」と題された小説が掲載されていたことである。しかしこれはよく知られた二葉亭四迷(1864-1909)が翻訳したゴーゴリの同名の小説ではなく、日本人の創作で、作者の署名は「松原二十三階堂」となっている。これは19ページにわたり雑誌の紙面⁽⁸⁵⁾を占めた、決して短いとは言えない小説であり、以下の前置きには、明治文学史上初めて日本人たる「狂人」の日記を披露している。

一日郊外散歩の折、原上樹蔭の下にて此の日記を得たり。表紙はクロス仕立てにして枚数百余頁を綴りたるものなり。文章不羈縦横にして逸気奔騰、慷慨淋漓の所業より常識家の筆にあらず、依て中間数章を抜萃して假りに狂人日記と名づく⁽⁸⁶⁾。

この展開の方法は自然に魯迅の「狂人日記」を連想させるものである。しかし両者の主人公の「狂人」のありようは異なっている。魯迅の主人公は「被害妄想狂」で、松原二十三階堂の主人公は「誇大妄想狂」で、名を「在原」と言った。小説は主人公の「在原」が3月3日から7月10日の間の10編の日記を「抜萃」した形で構成されている。巻頭には「予は今日決心せり、予は今日限り断然予が出勤する所ろの世界貿易会社を辞職せんと欲す！」この会社には「小人と俗物」で満ちており、彼の「天下を経綸するの大手腕と陰陽を奕理するの大技倆」を見出せず、ただ「計算簿記の雑務」をやって時間を過ごした。このように、主人公が抱く「絶対無比の天才」であるとの意識は彼の置かれている現実と鋭く対立した。彼は狭い部屋に身を置き、借金取りから身を避け、自分が大きな貿易で巨万の富、或いは田畑を得たと想像した。彼は官僚になり、「将来の総理大臣」になることを妄想した。小説はこのような自己が肥大化した「狂人」の眼を通して、明治30年代の豪華奢侈の社会の蔓延を表現した。

作者は「二十三階堂」と号し、本名は松原岩五郎(1866-1935)で、彼は明治期、最下層を注視する新聞記者であった。この「狂人日記」は社会問題小説に属するものであるが、「狂人」を主人公とし正式に登場させたことで、明治文学の幕を開いた。

5年後の1907年3月1日、雑誌『趣味』に次の「狂人日記」が現れ、しかも3期連載され、これが人々によく知られた「二葉亭主人」(即ち二葉亭四迷)が翻訳したロシアの作家ゴーゴリの同名の小説であった。しかし一つあまり知られていない事実がある。それは二葉亭が雑誌『趣味』で「狂人日記」を連載するのと同時に、同年3月『新小説』で、これとは異なる「狂人」を描いた「二狂人」⁽⁸⁷⁾と題する、ロシア語から翻訳した作品を発表した。「二狂人」は「狂人日記」と比べると、後世には殆ど顧みられず、重視もされておらず、岩波書店出版の『二葉

亭四迷全集』の「解説」でさえもこの作品の原作を誤って記されている。そして『昔気質の地主』の部分翻訳と指摘され⁽⁸⁸⁾、ゴーゴリの作品と誤解されたが、先達のご指摘により⁽⁸⁹⁾、はじめてこれは「錯誤」に関する錯誤であったことがわかった。すなわち「二狂人」の原作はゴーリキーの「錯誤」（ОШИБКА、1895年）であった。しかしこの問題に関しては、筆者は別稿でまた詳述する予定である。

二葉亭が当時に出した「狂人」に関する二つの翻訳は、明治期の「狂人」文学を新たな高まりへと昇華させた。そしてこれとほぼ同時期に、「無極」と署名した最初の「狂人」に関する文学評論——「狂人論」も雑誌『帝国文学』に正式に登場した。

頃者我文壇は二葉亭主人の靈妙なる訳筆によりて新たに露西亞種の三狂人を得た。ゴーリキーの「二狂人」及ゴーゴリの「狂人日記」の主人公である。「二狂人」は物凄い心理解剖で……⁽⁹⁰⁾

これらを比較すると、「狂人日記」は二狂人の様に物凄い、深刻の物ではない⁽⁹¹⁾。論者のこの読書体験は、この二つの作品が人に与える感覚と符号している。もしゴーゴリの作品に「涙を含んだ微笑」があれば⁽⁹²⁾、「二狂人」には「涙を含んだ微笑」があるだけでなく、「アンドレーフ式の暗鬱」も描かれていた⁽⁹³⁾。それ故、後者は当時のインパクトと影響力は前者をはるかに凌いでいる。——しかし後の影響力は正反対である。翌年1月1日、二葉亭の翻訳集⁽⁹⁴⁾には「二狂人」など四編しか収録されておらず、「狂人日記」が収録されていないことがその有力な証左であろう。つまり「狂人論」は二編の作品に対して内容と創造の手法から高い評価を与えられているだけでなく、それらを美学的高度にまで押し上げ、初めて「狂人美」⁽⁹⁵⁾の概念を提起した。『帝国文学』は強大な影響力を持った雑誌で、この呼びかけは「狂人」創作を更に自覚的なものへと変化させた。

四年後、内田魯庵（1868-1929）が「小説脚本を通じて観たる現代社会」という長文に着手した時に、彼は『太陽』の応募懸賞小説を調べた時に、以下のことに気づいた。つまり「狂人小説も比例が多過ぎる感があり、描写内容も「アンドレーフの『血笑記』よりもヨリ以上に戦争の惨禍を憶起させるのを戦慄した」⁽⁹⁶⁾とある。

では、何故「狂人」がそれほどまでに数多く描かれたのであろうか。

七．「狂人」を作り出す時代

文学作品での「狂人」は当時の社会の投影に過ぎなかった。これは「一日増しに狂人が殖えて行」き、「世界は尽く狂人になつて」、「癲狂院」も足りない時代と、内田魯庵は述べている⁽⁹⁷⁾。

その原因を追究すると、まず「日清（1894-1895）」と「日露（1904-1905）」の二つの戦争が「狂人」を生み出したことが挙げられる。特に後者は、日本、ロシアに関わらず大量の精神異常者を作り出した⁽⁹⁸⁾。内田の言葉で言えば、「国誉を輝かした戦争に由て教へられたる賜物で

ある⁽⁹⁹⁾」。もう一つの原因は、近代産業社会の発達をもたらした社会環境と精神的圧迫が作り出したものである。「機械の車輪の響が空気に充ち、石炭の煙が碧空を閉ざし、瓦斯や電気がチラクラするような世の中では人間は誰でもヒステリーになるのが当然で、此の社会一般のヒステリー傾向を世紀末と云い廃頽時代と呼ぶのであるから」⁽¹⁰⁰⁾とある。

以上の二点を除くと、特筆すべきは思想・精神に関わる「狂人」とその成り立ちである。明治憲法の公布(1889年2月11日)とその実施(1890年11月29日)及び『教育勅語』(1890年10月30日)の公布に伴って、日本は天皇を中心とする近代国家体制を正式に確立し、明治維新以来の文明開化は、殖産興業、富国強兵等の効果として表れ始めた。これは成長期の明治国家にあって、官民一体で強国となる夢を共有していた。そして直後の「日清戦争」は明治の国家体制の力が試されたと同時に、日本全体が自分自身の実力を自覚する契機となった。そして次の目標に狙いを定め、帝国主義の道のりで「臥薪嘗胆」の十年が始まったのである。八幡製鉄所や軍事工場の建造や、大規模な巨大戦艦が作れるようになったと同時に、民間製造業も発達し始めた。さらに日英同盟が締結され(1902年)、世界の一等国と肩を並べ、その結果、日露戦争にも勝利した。台湾を割譲した後、「満鉄」を設立し(1906年)、韓国を併合するのなど(1910年)、世界に向けた一連のアピールは、すなわち日露戦争前後の所謂「大日本帝国」の「膨張」であった。この国家の「膨張」はナショナリズムの奇形的発展を導き、国を挙げて「在原」式の「金儲け」の絵空事から国家主義の狂乱に陥れた。幸徳秋水は「世の所謂志士愛国者みな髪豎ち眦裂くるの時に於て」⁽¹⁰¹⁾、この時代に残した最大の献辞は「狂」の一字であった。彼は「我国民を膨張せしめよ、我版図を拡張せよ、大帝国を建設せよ、我国民を発揚せよ、我国旗をして光榮あらしめよ」⁽¹⁰²⁾という鼓吹を「国民の獸性を煽揚し」⁽¹⁰³⁾た「狂顛的な愛国主義」⁽¹⁰⁴⁾とし、これらの人々を「愛国狂」⁽¹⁰⁵⁾と称し、且つ「外国に対する愛国主義の最高潮は、内治に於ける罪惡の最高潮を意味する」⁽¹⁰⁶⁾と鋭く指摘した。これにより所謂「愛国心」が一種の強制的な奴隷道徳に変質した時、まさに内田魯庵が指摘したように、「恠ういう道徳は国民を墮落さするか或は狂人化するかの二つである」となった⁽¹⁰⁷⁾。

これはすでに一つの「世を挙つて国家主義帝国主義に狂奔」⁽¹⁰⁸⁾し、「獸性の愛国」⁽¹⁰⁹⁾を製造する狂った時代であり、一方で精神が極度に窒息した「閉塞」の時代でもあった。少数の醒めた鋭敏な人のみが「時代閉塞の現状」⁽¹¹⁰⁾を打破しようと試みた。彼らもかつて国家の熱狂的な同調者であり、衷心からの擁護者であり、彼らは国家の繁栄富強を謳歌し、「日本主義」⁽¹¹¹⁾を賛美し、文学での「国民の性情を表現する」⁽¹¹²⁾ことを主張し、「時代精神と大文学」⁽¹¹³⁾を叫んだ。それらは「国権」と「民権」が並行して衝突することがなく、個人の精神の発展が国家の上昇と同調したからであった。しかし、二度の戦争を経て、彼らの感じ方にも変化が生じた。つまり、この国家は自分が望んだ国家なのであろうか。自己に内包されている「人」はこの国家ではどのような位置にいるのであろうか。この国家には魂はあるのか、といった問いかけが生まれた。そこで、彼らは「人」即ち「精神と理想」の問題を、「国家」という物質的な実体

の前に据え置き、「個人」の存在価値を確立し、且つ「天才」、「詩人」、「精神」、「価値創造」等をこの「個人」の内側に充填した。そしてある日、彼らが「国家と詩人」に関する宣言を発表し、「人、詩人がいなければ、国家はなににもならない！」⁽¹¹⁴⁾と直接この狂った国家に大声で叫ぶことになった。ここで明らかなように、この過程において、「ニーチェ」は外部から導入され、「個人」を明らかにする啓示と導入の役割を果たしたに過ぎなかった。

かえって世の中の人々は、彼らは気のふれた人間が出鱈目を言い、これは上述した「ニーチェ」が「狂人」の扱いを受けたことが原因であるとした。興味深いのは、世の中が「狂人」に対して絶え間ない糾弾していたにもかかわらず、これらの「狂人」達はあっさりと「狂人」を自認していたことである。高山樗牛は迫害に遭った日本の日蓮宗始祖の日蓮上人に自らをなぞらえ、彼は僧侶の口を借りて「嗚呼我が蓮長（筆者案ずるに、日蓮のこと）遂に狂せり」⁽¹¹⁵⁾と言った。これと同様の意味において、国家主義に反対した著名なキリスト教徒の内村鑑三（1861-1930）は何度も自分が「狂人」であると宣言し⁽¹¹⁶⁾、彼は『教育勅語』に「拝礼」することを拒否した所謂「不敬事件」を社会に対して引き起こした。ここから、「狂」は時代の象徴の一種であり、「個人主義」者の精神的特質を表す一部分であったと言えるだろう。「彼は晩年に『此の生の憂苦を免るるの道にたゞ三つあり。永き恋か早き死か、然らざれば狂……彼は早き死と永き恋の外に更に狂を加えた。あゝ狂乎、予にも取りてはこの樗牛が詞に、云ひ知らぬ哀れさを覚ゆるものである』」⁽¹¹⁷⁾。これは高山樗牛の実弟の齋藤信策が彼の為に書いた追悼文である。確かに、それは二種類の「狂人」、つまり「庸衆」と「哲人」が生み出され、後者、つまり「哲人」が消滅した時代であった。或いは、周樹人が仙台の教室であの耳をつんざくような「万歳」の歓声を聞いた時、彼は「狂人」に対して既に明晰な識別力を有していたのかも知れない。

八. 周樹人の選択

遺漏が多いことは言うまでもないが、以上が「狂人」言説史の概略である。しかし明治の言語史、思想史、文学史乃至は世相と時代精神において、至る所に「狂人」の影が現れているのは、争うべくもない事実であると言えるだろう。周樹人の留学期間全般にわたって、「狂人」言説が精神的洗礼を経て、自我の確立過程における一つの有機的な部分をなしたことは明らかである。総体的に言えば、「ニーチェ」、「シュティルナー」を目印とした「個人主義」と文芸創作・評論が、「狂人」に接近、対面させた可能性が最も大きい。

周樹人はまず精神上の「明治のニーチェ」の論争に参与し、「偏見なしにこのことばの実質を考え」⁽¹¹⁸⁾、明確な価値選択をしたうえで、「ニーチェ」を彼の文章に取り込んだ。筆者が2012年秋に初めて『文化偏至論』を論じた時、「ドイツ人のニーチェ氏」を紹介した際に引用した『ツァラトゥストラはかく語りき』は、先学が指摘したように、周樹人本人がニーチェの

原書の一章を「優れた要約」をしたのではなく、前述の桑木厳翼の『ニーチェ氏論理説一斑』から写し取ってきたことを確認した⁽¹¹⁹⁾。前述のように、桑木厳翼はニーチェの価値を認めてはおらず、この本から「ニーチェ」を肯定する内容を選ぼうとするなら、桑木厳翼が「狂人」を口実に「ニーチェ」を否定していることを乗り越えなければならなかった。この選択は、「狂人」を排斥していた主流の議論を、周樹人が切り捨てたことを意味している。

次に、『文化偏至論』で「個人という言葉……」から「個人主義」を擁護したことを引き出した後、続いて書かれた「ドイツ人のシュティルナー……」以下長文260字（中国語）の段落は、完全に前出の煙山専太郎の『無政府主義を論ず』⁽¹²⁰⁾に基づいている。前述のように、同じ時期に煙山専太郎を訳した中文書は18種類にものぼっていたが、しかしその中からシュティルナーが正確な翻訳を通してその「個人主義」を明らかにした文脈を受け入れたのは周樹人だけであり、その着眼点は当時の中国革命党の人々とは完全に異なっていた。彼はそれらの所謂「実行的」主張を重視せず、「理論的」な力を重視した——この点は、彼が現実でとった行動と完全に一致する——つまり、彼は「無政府主義」の言葉から「シュティルナー」を分離し、精神革命に極めて重要な「極端な個人主義」を明らかにし、それと同時に「狂人」を正面から解釈する言葉を手に入れたのである。

第三の点は、周樹人と文学の世界における「狂人」の関係である。たとえ本論が及ぶ所に限っても、明らかに断言できる。つまり、この世界で、日本語訳のゴーゴリの「狂人日記」一篇だけでなく、「狂人」も九等の文官の「ポプリシチン」に止まらず、更に「在原」、「クラフツォフ」と「ヤロスラーフツェフ」⁽¹²¹⁾及び内田魯庵が見て「戦慄」させられたあれらの「狂人」がおり、更に文学評論が展開した「狂人美学論」がある。これらの周樹人を取り囲む「狂人」たちは、ゴーゴリを除くと、その他は周樹人と関係がないのであろうか。明らかに、どの行、どのページにでも、彼に「狂人」が審美対象の意義をなすことを教え、彼も真にその意義を把握している。

第四に、「狂人」が直接文章に入ったことは、周樹人が「狂人」の価値に対する最終判断を完成したことを意味している。彼は「ニーチェ」と「無政府主義」に対する包囲網や、殲滅の声の中で、「狂人」とはその実、「ニーチェ」と「シュティルナー」のような「個人主義の英傑」が圧迫を受けた化身であるとみなされ、英雄と凡庸の対峙において、「狂人」は終始「英雄」の側に身を置いていた。パイロンもそうであり、シュレーもそうである。その証拠に、『摩羅詩力説』第六章に「詩人の心には、早くも反抗の兆しが芽生え始めたのである」というシュレーのセリフを紹介している。その後、小説を書き、それで得た金で、8人の友人に馳走を振る舞い、「気違いシュレー」のあだ名を付けられてここを去ったと。北岡正子の検証に拠ると、この段落は浜田佳澄の『シュレー』（第二章）から取材している⁽¹²²⁾。彼が取り入れた理由は、これらの「狂人」の価値に対する共通認識のためである。これにより、「狂人」も「天才」、「詩人」、「精神世界の戦士」と同列になり、彼らの担い手となった。

その意義において、齋藤信策（野の人）を提起しなければならないであろう。彼は文章レベルにおいて最も実証的で、明治期で「個としての人間の確立を主張した言説のなかで最も魯迅の文章と親近性が観られる」⁽¹²³⁾者の一人であった。ここには更に「親近性」の証左を加えることを妨げない。即ち「狂者の教」である。「健全の文明は美しき名なりき。されどもこれが為に、活ける人は死すべきことゝなりぬ。これ誠に狂者の教により、新しき命を掬すべき時にあらずや。知らずや、狂者の文明とは、これ自らの立てる所を掘りて泉を求め、新しき理想によりて、自ら住むべき世界を造るの謂なるを」⁽¹²⁴⁾とある。これは『摩羅詩力説』の初めの部分で言及している「新しき泉は深淵より湧き出づらむ」⁽¹²⁵⁾及び文中で言及している「悪魔とは真理を語るもの」⁽¹²⁶⁾の意味合いと完全に一致している。彼らは「哲人」、「天才」、「新しき泉」を追求し、この道のりで「狂人」と「悪魔」に遭遇し、「教」或いは「真理」と名づけられた啓示を得たのである。

九. 狂人の誕生とその意義

以上の考察から、周樹人は日本で一つの「狂人」の雛形を持って帰国したと言えるであろう。これは自己を構築する過程での「生成物」ともいえるものであった。病理的知識、精神的内核及び芸術的対象を作り出し、表現する文学様式がすべて彼の内面に備わっていたなかで、被害妄想症に罹患した「いとこ」が彼の扉をたたき⁽¹²⁷⁾、中国的「担い手」^{キャリアー}を提供するのを待つだけであった。

形式上から見ると、魯迅の「狂人」は、外国思想と文芸を中国現代文学に移植し、それを本土化した結果である。しかし彼個人について言えば、内面化してしまった「真の人間」を、中国に持ち帰り、別の「時代閉塞」に遭わせた結果となった。「時代閉塞」が「狂人」を作り出したことは、前に既に見てきた。これは彼に置き換えると、彼はこれを「寂寞」と名付けた試練を受けた⁽¹²⁸⁾。現実的には、人が縊死したS会館で古い碑文を写し、精神上も「まもなく窒息してしまう」ほどの「鉄の部屋」⁽¹²⁹⁾に身を置くものの、意識がまたあるし、「精神の糸ですでに過ぎ去った寂寞の時をつなぎ」「忘れきれぬことが苦しい」⁽¹³⁰⁾、「この寂寞はさらに日一日と成長し、大きな毒蛇のように、私の魂にからみついた」⁽¹³¹⁾——これが彼の記憶の中の「真の人間」と現実の衝突が彼にもたらした苦痛の体験であった。これにより、「狂人」登場の声は、「真の人間」が声をあげる現実的形態であると解釈することができよう。筆者が思うに、これは「狂人」の誕生の内的なロジックである。この「狂人」は、時代の「狂人」に関する言説を凝集したものであり、作者がそれを内面化したのち、再び創造した産物である。それが魯迅の文学的精神の典型的な人物となったのは、必然であった。

作品の最後に、「ほんとうの人間の前に顔が出せたものか（原語、「難見真的人」）」⁽¹³²⁾の一句は、「狂人」が覚めた後「真の人間」の記憶に対する喚起であり、同時に作者の「完全に忘

れられないことが苦し」い記憶でもある。この言葉はこれまで「狂人日記」の解説のキーポイントであるが、しかしこの「真の人間」がどこから出たのかは探し出せない。今明らかにできるのも、やはり作者が当時熟読したことのある文章である。

ニーチェまた曰く、幸福なる生活は、到底不可能の事に属す、人間の到達し得べき最高の生活は英雄的生活なり。衆人の為に最大の苦痛と戦ふ所の生活なり。真の人間出でて、始めて吾人をして真の人間たらしむることを得べし。所謂真の人間とは、一躍直ちに大自然となるべき人なり。彼等は自己の事業に據つてよりも寧ろ自己の人物によりて、世に教ふる所の人なり。その思想家たると、芸術家たると、詩人たると固より問ふを須あざる所なり。

かゝる人間は則ち歴史の目的とする所なり⁽¹³³⁾ (傍点は原文のまま)。

ここから「狂人」と「真の人間」が実は血の繋がった実の兄弟であると証明することができる。「狂人」の誕生は、「狂者の教」が中国に現れたことを意味し、彼は「喫人」時代がまさに終わろうかとしていることを宣言するだけでなく、「真の人間」が必ず誕生することを宣言している。これにより、本質から言えば、「狂人日記」は「人」の誕生を宣言するものであった。

「狂人」の前に、魯迅その人以外に、中国には「人」に関する、「個人」に関する言説がほとんど存在しなかった⁽¹³⁴⁾。周樹人が「ニーチェ」を発見し、力を尽くして「個人」を擁護した時、彼の恩師の章太炎(1869-1936)が、彼と同調してある種の意義を見出していたが、「所謂我見たるものは、自信であり利己ではなく、特に厚自尊貴の風があった。ニーチェの所謂超人とは、これに近いものである」⁽¹³⁵⁾というような短い一文があるだけであった。梁啓超(1873-1929)は近代の「国民国家」理論に熱中したが、彼の「新民」には「個人」が含まれていない。彼がニーチェをとりあげて「自己本位説は、その言説の弊害がドイツのニーチェにより極まる」⁽¹³⁶⁾と攻撃したのは1919年の事で、「狂人」言説は言を俟たない。故・范伯群先生は「中国の文学史上、文学形象の「狂人史」を研究しなければならないことを」提唱したが、1917年以前の近代文学においてはただ陳景韓の『催醒術』一篇が見本となるだけであった⁽¹³⁷⁾。つまり中国の「狂人」言説史は魯迅の「狂人日記」の後から始まるのである。この点は以下の図が示す Google のデータからも裏付けられている。

Google における「狂人」と「吃人」

<https://books.google.com/ngrams>



現在までのところ、「狂人日記」を構成する二つの核心的要素、つまり「喫人」と「狂人」の双方のイメージは共に孤立した存在ではなく、作者が留学した時期の外国に関係する言説と「史」的属性が関連しており、われわれはこの作品に対して新たに詳細に観察し、評論する余地があらうと思われる。具体的には、「狂人日記」には中国文学の領域を広げ、狹隘で閉鎖された一国文学史観を打ち破るという意義を有している。中国文学にとっては、「狂人日記」の開拓性の意義と基本精神は「拿来主義」であり、結果から言えば、以下にみるように作者の初志と符合する。

明哲の士が、世界の大勢を洞察し、比較検討を加え、その扁頗を去って、その神髓を得、これを国内に実施したならば、必ずやぴったりと合って、間然することはないにちかない。外は世界の思潮に落伍しない上に、内は固有の血脈を失わないであろうし、今を取りて古に復し、別に新しい主義を起こして、人生の意義を深遠にしたなら、国民の自覚が生まれ、個性は発展して、砂の集まった国は、これにより、一転して人間の国になるであろう。人間の国が建設され、ここに始めて前古に比類なく雄大となり、屹然として独り天下に現れ、もはや浅薄凡庸な事物など、問題なく消えてなくなるだろう。(『墳・文化偏至論』⁽¹³⁸⁾)

「狂人日記」の開山の所以は、この「今を取りて古に復し、別に新しい主義を起てる」という真の自信があるからあらう。

そもそも国民の発展には、懷古ということは大きな役割を果たすのであるが、この懷古の懷は、理路整然と、鏡に照らして見るように、自分の考えをはっきりさせることである。絶えず前進すると共に、絶えず後ろを振り返って見ることである。絶えず光明に満ちた遠い前途に向かって進むと共に、絶えず燦然と光を放つ古い昔の物を思い返すことである。かくしてその新しさは、日に日に新しくなり、その古も生命を失わないのである。もしも、この道理を知らないで、みだりに自慢して、自己満足していると、無明の闇はこの瞬間から始まるであらう。(『墳・摩羅詩力説』⁽¹³⁹⁾)

「狂人日記」がこの百年の間も衰えを見せない所以は、この「理路整然と、鏡に照らして見る」文化的自覚があることによる。文化における自信と自覚は「狂人日記」が百年後の現在に与えた最大の啓示ではないであらうか。

〔注〕

- (1) 張夢陽『中国鲁迅学通史(下卷一)』、広東教育出版社、2005年、270頁。
- (2) この問題に関しては、拙文「明治時代「食人」言説と鲁迅の〈狂人日記〉」中国社会科学院文学研究所編『文学评论』2012年1期を参照。
- (3) 以上は漢語大字典編集委員会編纂『汉语大字典(第二版)』の「狂」字に関する解釈を参照。四川辞書出版社、2010年、第3巻1431-1432頁
- (4) 渡部温標注訂正『康熙字典』、東京：講談社、昭和五十二年復刻版、1605頁を参照。
- (5) 商務印書館編集部編『辞源(合訂本)』商務印書館、1988年、1080-1081頁を参照。

- (6) 李白『廬山謠寄盧侍御虛舟』。760年の作、『辞海』にもこの句が用例として収められている。
- (7) 統計使用版本、諸橋轍次著『大漢和辞典』修訂第二版、東京：大修館書店、平成三年、第七卷676-680頁。
- (8) 統計使用版本、大詞典編集委員会漢語大詞典編纂所編纂『漢語大詞典』、上海：漢語大詞典出版社、1990年、第5巻12-25頁。
- (9) 「和製漢語」は通常中国本土のものではなく、日本が作った漢字語彙を指す。佐藤武義編「和製漢語」(遠藤好英、加藤正信、佐藤武義、飛田良文、前田富祺、村上雅孝編『漢字百科大事典』、東京：明治書院、1996年)はこれらの語句を収めていない。
- (10) 『漢字百科大事典』983、984頁。
- (11) 統計版本、飛田良文編『哲学字彙訳語総索引』笠間索引叢刊72、有限會社笠間書院、昭和五十四年を使用。
- (12) 統計使用版本、井上哲次郎、元良勇次郎、中島力造共著『英獨佛和 哲学字彙』(*Dictionary of English, German, and French Philosophical Terms with Japanese Equivalents*)、東京：丸善株式會社、明治四十五年。
- (13) 前掲『英獨佛和 哲学字彙』、134頁参照。
- (14) 魯迅『南腔北調集・わたしはどのようにして小説を書きはじめたか』、『魯迅全集』第六巻、東京：学習研究社、昭和六十年、342頁。
- (15) この問題に関しては、以下の文献を参考、「魯迅解剖学ノート」、魯迅・東北大学留学百周年史編集委員会編、『魯迅と仙台』東北大学留学百周年、東北大学出版会、2004年、90-113頁。坂井建雄「明治後期の解剖学教育—魯迅と藤野先生の周辺」、日本解剖学会『解剖学雑誌』、82巻1号、2007年。阿部兼也「魯迅の解剖学ノートに対する藤野教授の添削について」、東洋大学中国学会編『白山中国学』12号、2006年3月。解沢春訳『魯迅と藤野先生』、北京：中国華僑出版社、2008年。
- (16) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第2版、東京：小学館、2000年12月-2002年12月、第4巻452頁。
- (17) 筆者が目睹したものは1819年版、日本国立国会図書館(<http://dl.ndl.go.jp/titleThumb/info、ndlj/pid/2541616>)
- (18) 「方技部十八」疾病四、『古事類苑』、洋巻第1巻1472頁。
- (19) 〔伊呂波字類抄 毛病瘡〕、『古事類苑』、洋巻第1巻、1473頁、1475頁。
- (20) 同上、1475頁。
- (21) 1919年12月19日朝刊第三版「独帝を精神障害者扱」参照、これは104番目の狂人に関する記事である。『読売新聞』データベース、ヨミダス歴史館。
- (22) 標題は「物騒なる狂人逃走 昨夜巢鴨病院より 非常の暴れ者市中の大警戒」『朝日新聞記事データベース、聞蔵II』。
- (23) 統計範囲、1879年3月6日から1897年12月31日、出所は同上。
- (24) 統計範囲、1898年1月26日から1907年12月22日、出所は同上。
- (25) 統計範囲、1908年1月23日から1912年6月5日、出所は同上。
- (26) 「法律部四十四」下編上 放火、『古事類苑』洋巻第2巻785頁。
- (27) 「法律部四十五」下編上 殺傷、『古事類苑』洋巻第1巻855頁。
- (28) 「法律部二十三」中編 殺傷、『古事類苑』洋巻第2巻885頁。
- (29) 「法律部三十一」下編上 法律總載、『古事類苑』洋巻、第2巻21頁。
- (30) 宮崎滔天(寅蔵)著『狂人譚』、東京：国光書房、明治三十五年。
- (31) 高山林次郎「文明批評家としての文学者(本邦文明の側面評)」、『太陽』、明治三十四年一月五日。樗牛生「美的生活を論ず」、『太陽』明治三十四年八月五日。本文参照『明治文學全集40』、筑摩書房、昭和四十五年。
- (32) 登張竹風「美的生活とニイチエ」、『帝國文学』明治三十四年九月一日、前掲『明治文學全集

40』、311頁。

- (33) 以上は入沢達吉と森鷗外に関することは、高松敏男著『ニーチェから日本近代文学へ』を参照、東京：幻想社、1981年、7頁
- (34) 吉田静致、「ニーチュエ氏の哲学（哲学史上第二期の懷疑論）」『哲学雑誌』明治三十二年第1期、ここでは以下から引用した。高松敏男・西尾幹二編『日本人のエーチェ研究譜・II資料文献篇』、『ニーチェ全集』（別巻）、東京：白水社、1982年、第307頁。
- (35) 長谷川天溪「ニーツエの哲学（承前）」、『早稲田學報』第33號、明治三十二年十一月、ここでは以下から引用した。前掲『日本人のエーチェ研究譜・II資料文献篇』、332頁。
- (36) 長谷川天溪「ニーツエの哲学」、『早稲田學報』第30號、明治三十二年八月、ここでは以下から引用した。前掲『日本人のエーチェ研究譜・II資料文献篇』、323頁。
- (37) 桑木厳翼『ニーチュエ氏倫理説一斑』、東京：育成會、明治35（1902）年、186頁。
- (38) 同上。
- (39) 峰島旭雄編「年譜・桑木厳翼」、『明治哲学思想集』、『明治文学全集80』、東京：筑摩書房、昭和四十九年、437頁。
- (40) 藪の子「精神病学上よりニーチェを評す（ニーチェは発狂者なり）」、『讀賣新聞』、明治三十六年四月十二日日曜附録。
- (41) 西尾幹二「この九十年の展開」、前出『日本人のエーチェ研究譜・II資料文献篇』、524頁。
- (42) 前出『ニーチェから日本近代文学へ』、13頁。
- (43) 伊福部隆彦編、「生田長江年譜」、『高山樗牛 島村抱月 片上伸 生田長江集』、『現代日本文学全集16』、422頁、東京：筑摩書房、昭和四十二年。
- (44) 生田星郊「輕佻の意義」『明星』卯歳第八號、明治三十六年八月、第68頁。
- (45) 伊藤虎丸『魯迅と日本人—アジアの近代と「個」の思想』、東京：朝日新聞社、1983年、49、54頁を参照。
- (46) 前掲「精神病学上よりニーチェを評す（ニーチェは発狂者なり）」。
- (47) 『馬骨人言』は明治三十四年十月十三日から明治三十四年十一月七日『讀賣新聞』に連載され、26日にも及ぶ。
- (48) 「馬骨人言・天才」、『讀賣新聞』、明治三十四年十一月六日第一版。
- (49) 齋藤信策「天才と現代の文明（天才崇拜の意義を明かにす）」、『帝國文學』第十卷第十一号、明治三十七年十一月十日、その後、『藝術と人生』（東京：昭文堂、明治四十年六月）に収録する際、「天才とは何ぞや」と改題。
- (50) 前掲『哲学字彙訳語総索引』、150頁。
- (51) 前掲『英獨佛和 哲学字彙』、103頁参照。
- (52) 煙山專太郎著、『近世無政府主義』、東京：博文館、明治三十五年四月廿八日発行。
- (53) 前掲『近世無政府主義』、2頁。
- (54) 前掲『近世無政府主義』、1～2頁。
- (55) 嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』、東京：研文出版、1994年11月、48頁。
- (56) 同上。
- (57) 煙山專太郎『近世無政府主義』と魯迅、近代中国の關係は、拙文「留学生周樹人「個人」語境中的「斯契納爾」—兼談「蚊学士」、煙山專太郎」、『東岳論叢』2015年第6期参照のこと。
- (58) 蚊学士「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾四号、明治三十五年一月一日、28頁。
- (59) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾七号、明治三十五年二月廿日、25頁。
- (60) 同上、24頁。
- (61) 前掲『近世無政府主義』、302頁。
- (62) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾七号、24-25頁。
- (63) 前掲『近世無政府主義』、294～302頁。
- (64) 『日本人』第百五拾七号、第百五拾九号連載「無政府主義を論ず」を参照。

- (65) 前掲『近世無政府主義』、369～383頁を参照。
- (66) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾七号、26頁。
- (67) 前掲『近世無政府主義』、369～370頁。
- (68) 同上、370頁。
- (69) ニーチェ研究の基本的文献である、高松敏男著『ニーチェから日本近代文学へ』と高松敏男・西尾幹二編『日本人のエーチェ研究譜』には、煙山専太郎のニーチェに対する紹介がない。
- (70) 前掲「無政府主義を論ず」、『日本人』第百五拾九号、25頁。
- (71) この文章の後に署名日時は1907年8月である。1908年6月に『河南』第5号で発表した時は、令飛と署名。
- (72) 魯迅『墳・文化偏至論』、前掲『魯迅全集』第1巻、81頁。
- (73) 久津見蔵村『無政府主義』、東京：平民書房、明治三十九年十一月、2、53、114頁を参照。
- (74) 同上、4～5頁を参照。
- (75) 久津見蔵村「文部省とニイチェニズム（明治四十五年五月稿）」、『久津見蔵村集』、東京：久津見蔵村集刊行會、大正十五年八月、591頁。
- (76) 大杉栄、「正気の狂人」、松田道雄編『アナーキズム』、現代日本思想大系 16、東京：筑摩書房、1963年10月、175頁
- (77) 同上、189頁。
- (78) 以上の統計は日本国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」から分類を行った。
- (79) 長谷川泉「森鷗外の人と文学」、『舞姫・山椒大夫他4編』、東京：旺文社、昭和四十七年、192頁。
- (80) 米原雲雪、雕塑「狂人」、『美術新報』、明治三十七年一月十二日、第五版、附照片。
- (81) 児玉花外、「狂人の家」、『太陽』、明治四十一年一月一日、95-96頁。
- (82) 北原白秋、「狂人の音楽」（1908）、『邪宗門』、『明治反自然派文学集（一）』、『明治文学全集 74』、筑摩書房、昭和四十一年十二月十日、23-25頁。
- (83) 「時報・狂人と文学」、『文藝俱樂部』、明治38（1908）年十二月一日、318頁。
- (84) 北岡正子「魯迅の弘文学院入学」、『魯迅』日本という異文化の中で——弘文学院入学から「退学」事件まで、関西大学出版部、平成十三年三月、35-43頁を参照。
- (85) 松原二十三階堂「狂人日記」、『文芸俱樂部』、129頁、明治三十五年三月一日、129-147頁。
- (86) 同上、129頁
- (87) ゴーリキイ原作、二葉亭主人訳「二狂人」、『新小説』明治四十年第三号。本論で使用した版本は以下の書籍に収められている。二葉亭主人『カルコ集』、東京：春陽堂刊、明治四十一年一月一日。
- (88) 「解説」、河野與一、中村光夫編集『二葉亭四迷全集』第4巻、岩波書店、昭和三十九年十二月、439頁。
- (89) この問題について南京師範大学汪介之教授のご指摘にここで心から感謝の意を表する。
- (90) 無極「狂人論」、『帝國文學』第十三卷第十七号、明治四十年七月十日、140頁。
- (91) 同上、142頁。
- (92) 魯迅『且介亭雜文二集・ほとんど何事も起こらなかった悲劇』、前掲『魯迅全集』第八巻、414頁。
- (93) 魯迅『且介亭雜文二集・『中国新文学大系』小説二集序』、同上、272頁。
- (94) 二葉亭主人『カルコ集』、東京：春陽堂刊、明治四十一年一月一日。
- (95) 前掲「狂人論」、145頁。
- (96) 内田魯庵「小説脚本を通じて観たる現代社会」、初刊『太陽』、明治四十四年二月十五日、以上は、稻垣達郎編『内田魯庵集』、東京：筑摩書房、昭和五十三年三月、257頁。
- (97) 同上。
日、以上は、稻垣達郎編『内田魯庵集』、東京：筑摩書房、昭和五十三年三月、257頁、257頁、

258頁から引用した。

- (98) 内田魯庵『樓上雜話』、前出『内田魯庵集』、295頁参照。
- (99) 前掲「小説脚本を通じて観たる現代社会」、257頁。
- (100) 内田魯庵、『気まぐれ日記』、前掲『内田魯庵集』、308頁。
- (101) 幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』、飛鳥井雅道編集『幸徳秋水集』、東京：筑摩書房、1975年11月、34頁。
- (102) 同上、36頁。
- (103) 同上、65頁。
- (104) 同上、46頁。
- (105) 同上、42頁。
- (106) 同上、42頁。
- (107) 前掲「小説脚本を通じて観たる現代社会」、258頁。
- (108) 登張竹風「フリイドリヒ、ニイチエを論ず」、『帝國文學』七卷、明治三十四年六月至八月、十一月號、前掲『明治文學全集40』、297頁。
- (109) 魯迅『集外集拾遺補編・「破惡声論」』、前掲『魯迅全集』第十卷、66頁。
- (110) 石川啄木「時代閉塞の現状」（1910年）一文、前出『明治文學全集52』参照。
- (111) 高山林次郎、「日本主義を賛す」、『太陽』第三卷第十三号、明治三十年六月二十日。
- (112) 高山林次郎、「非国民的小説をを難す」、『太陽』第四卷第七号、明治三十一年四月五日。
- (113) 高山林次郎、「時代の精神と大文学」、『太陽』第五卷第四号、明治三十二年二月二十日。
- (114) 野の人、「国家と詩人」、『帝國文學』第九卷六号、明治三十六年六月十日。
- (115) 高山樗牛、「日蓮上人とは如何なる人ぞ」、『太陽』第八卷第四号、明治三十五年四月、前掲『明治文學全集40』、88頁。
- (116) 内村鑑三、『基督信徒の慰』、『後世への最大遺物』、『現代日本文學大系2』、東京：筑摩書房、昭和四十七年七月参照。
- (117) 齋藤信策、「亡兄高山樗牛」、『中央公論』、明治四十年六月、姉崎正治、小山鼎浦編纂『哲人何処にありや』、東京：博文館、大正二年、437頁。
- (118) 魯迅『墳・「文化偏至論」』、前掲『魯迅全集』第1卷、75頁。
- (119) 拙文「留学生周樹人周辺の「尼采」及其周辺」、『東岳論叢』2014年第3期参照。
- (120) 前掲「留学生周樹人「個人」語境中的「斯契納爾」—兼談「蚊學士」、煙山專太郎」参照。
- (121) 両者とも『二狂人』の主人公。
- (122) 北岡正子、『魯迅文學の淵源を探る—「摩羅詩力説」材源考』、東京：汲古書院、2015年6月、111頁。
- (123) 中島長文、『ふくろうの声—魯迅の近代』、東京：平凡社、2001年、20頁。その他、本論文関係のある伊藤虎丸『魯迅与日本人』、李冬木訳、河北教育出版社、2000年、清水賢一郎「国家と詩人—魯迅と明治のイプセン」、東京大學東洋文化研究所編『東洋文化』74号、1994年3月。
- (124) 齋藤信策「狂者の教」、『帝國文學』第九卷第七号、明治三十六年七月十日、118頁。
- (125) 魯迅『墳・「摩羅詩力説」』、前掲『魯迅全集』第1卷、94頁。
- (126) 同上、122頁。
- (127) 周遐寿の文章を参照、『狂人は誰』、『魯迅小説里の人物』、北京：人民文学出版社、1957年。
- (128) 魯迅『呐喊・「呐喊」自序』、前掲『魯迅全集』第2卷、9頁。
- (129) 同上、13頁。
- (130) 同上、9頁。
- (131) 同上、12頁。
- (132) 魯迅『呐喊・「狂人日記」』、前掲『魯迅全集』第2卷、31頁。
- (133) 登張竹風「フリイドリヒ、ニイチエを論ず」、前掲『明治文學全集40』、300頁。
- (134) 董炳月がこの問題について検証を行った。『「同文」的現代轉換—日語借詞中的思想与文学』、

第三章「個人」与「個人主義」参照。北京：崑崙出版社、2012年。

(135) 湯志鈞編『章太炎年譜長編』卷三、光緒三十三年丁未、北京：中華書局、2013年、245頁。

(136) 梁啓超『欧游中之一般觀察及一般感想』、『飲冰室專集』第7冊、北京：中華書局、1989年、9頁。

(137) 范伯群「『催醒術』、1909年發表的「狂人日記」一兼談「名報人」陳景韓在早期啓蒙時段的文学成就」、『江蘇大學學報』(社会科学版)2014年第5期。

(138) 前掲『魯迅全集』第1卷、84頁。

(139) 前掲『魯迅全集』第1卷、97頁。

(り　とう　ほく　中国学科)

2018年11月15日受理

論文

医薬品における文語表現 レアリアによる中国語教育の一環として(1)

石 崎 博 志

〔抄 録〕

本稿は中国語の読解力向上と薬品の取り扱いを通じた異文化理解を目的とし、レアリア（実物教材）に使われる語彙・語法について考察したものである。基本資料としたレアリアは、中国で販売されている風邪薬や咳止め薬の能書（説明書）である。これらの資料から、薬品の説明書に用いられる典型的な禁止表現の特徴を論じ、中国語における文語表現と口語表現の差異について論じた。また語彙の特徴として、特に注意すべき薬品の摂取にかかる “禁用”、“慎用”、“忌用” といった表現の差異を論じ、その結果、説明書の書面語は規範を体現する市販の辞書のみでは読解は困難なことを論じた。また語法の特徴として、薬品の説明書には曖昧さを含む程度副詞、語気副詞、動態助詞、語気助詞が排除されていることを明らかにした。

キーワード 現代中国語、レアリア、薬品、書面語、禁止表現

はじめに

留学や駐在など日本語話者が中国に中長期の滞在をすることが日常的になるなか、渡航者のなかには環境の違いや疲労などから体調を崩す者もいる。その際、日本から持参した薬がない場合には、緊急避難的措置として中国の薬局で薬を求めることもあろう⁽¹⁾。また医療に従事していない善意の友人や知人から中国で販売されている薬をもらう状況も、その適否はおくとしても十分に想定される。医薬品は病気を治癒する一方で、副作用などにより健康に大きく影響することから、その説明書は情報の正確性と一種の権威的イメージが求められる。よって中国で販売される医薬品には文語や文語的表現（以下、「書面語」）が用いられる。中国語の書面語は、文言でも、口語でもない独立した体系をなし⁽²⁾、この“語体”の違いを前提とした語法研究が提唱されている⁽³⁾。

本稿は、中国の医薬品や健康食品の説明書から書面語を抽出し、医薬品の説明書に使われる

書面語と口語の差異を明らかにすることを目的とする。併せて医薬品や医療に関する基礎的事柄について、日中の法律や慣習の違いを中国語学習者に学ばせるための一助とすることを目指している。数あるレアリアのうち医薬品を選ぶ理由は、医薬品の説明書や健康食品の能書には典型的な書面語が反映するからであり、学習者自らが効能や副作用を把握する必要に迫られた時に対処することは、中国語を学ぶだけでなく中国で生活するうえで有益だと考えられるためである。

日本における中国語教育では初級段階での口語重視の姿勢が中級以上に及ぶことが多く、中級の教科書も口語体の文体を中心に編まれることが多い。一方、中西千香 (2018)⁽⁴⁾ほかレアリアで書面語の体系的な教育を目指すものが存在する。本稿はレアリアに関する先行研究の延長上に医薬品の説明書を位置づけたい。

次章ではまず分析対象とした基礎資料について説明する。実際に販売されている医薬品を例に、医薬品の典型的な記述スタイルについて解説する。そして本稿を日中間の制度や習慣の違いについて学生に教授するための基礎資料としたい。なお中国と台湾、香港、マカオはそれぞれ薬品に関する法律が異なるため、ここでは特に断りのない限り中国大陆への渡航を想定している。

1 基礎資料

中国で販売される食品や医薬品の管理・監督は、中国国務院直属の中華人民共和国国家食品薬品监督管理局 (State Food and Drug Administration, SFDA, “食药监局”)で行っている。ここでは広い意味で体内に摂取する物品全般を扱い、主に食品、特殊食品 (健康食品)、化粧品、医療機械などの品質管理、安全管理を行っている。そしてインターネット上に国内薬品と輸入薬品についてのデータベースを置き、情報を提供している⁽⁵⁾。また検索サイト“百度”においても、“国家中医药管理局中医药名词术语成果转化与规范推广项目”として、上記プラットフォームの情報を転載したうえで、第三者による書き込みをブロック (“锁定”) して情報管理を行っている。

ただ医薬品や健康食品といっても多様で、それらを網羅的に扱うことはできない。そこで本稿では、日本からの渡航者が中国で罹患しやすい疾患について説明した外務省の「世界の医療事情 中国 (北京)⁽⁶⁾」をもとに分析対象を絞り込む。ここで挙げられている病名あるいは症状は以下である。

- (1) 下痢症、(2) 大気汚染 (による咳・痰、のどの痛み)、(3) 肝炎、(4) 寄生虫、(5) マラリア、(6) デング熱、(7) HIV 感染・エイズ、性感染症、(8) 交通事故、(9) 結核、(10) 鳥インフルエンザ、(11) 狂犬病、(12) 水痘、(13) 手足口病、(14) SARS (重症急性呼吸器症候群)

上記のうち、対処療法が比較的有効なのは、(1)の軽い症状や、(2)に関するものである。具体的には、発熱、腹痛、頭痛、風邪などの症状、アレルギーによる蕁麻疹、眼の症状等であり、滞在が数ヶ月以上に及ぶ際には現地の薬を調達する必要もあると思われる。本稿では中国国内で比較的広く用いられている風邪の諸症状を緩和する薬、抗アレルギー薬、下痢の症状を抑える薬を主たる基礎資料として考察する⁽⁷⁾。そのうえで、中国において比較的広く用いられている医薬品や中国と日本の能書を対比する便宜から日中両国で販売されている銘柄を選ぶ。

なお上記(3)～(14)の疾患にかかった場合は、対処療法は有効ではなく、専門の医療機関で適切な治療を受ける必要がある。よってこれらの疾患に関する医薬品、および中国での処方薬は、本稿の考察対象から除外する。

2 説明書の構成

中国の薬品は《中华人民共和国药品管理法》および国務院役員監督管理部門の説明書に関する規定に合致するように作られている。市販薬品の説明書に書かれている内容は、概ね日中で共通しているが、レイアウト上の違いがある。日本で販売される薬の説明書では、注意事項や禁忌を冒頭近くに目立つよう明記しているが、中国の薬については下記の順序で列挙されている。なお、中国の説明書は、記述項目が日本語のそれに比べて細分化されているが、日本の薬品の説明書は、中国語では複数の項目にまたがって分けて説明している事柄を、「用法・用量に関する注意」「成分と作用」「保管および取り扱い上の注意」といったカテゴリーを設け、まとめて説明している。以下は中国の薬品説明における典型的な記述である。

表1 中国の薬品説明における記載項目

中国語	日本語訳	内 容
药品名称	薬品の名称	通用名、薬品名、英語名、ピンイン
成份	成分	成分と賦形剤（添加剤）
性状	形状	カプセル、粉、色など薬の外観、香、味
作用类别	効果のタイプ	病名、および処方薬/非処方薬の別
适应症	適応症	効果が期待できる症状
规格	規格	有効成分の量
用法用量	用法・用量	服用方法、年齢、服用量、服用間隔、服用上の注意
不良反应	薬害、副作用	有害反応。薬害反応。服用によって目的とは違った反応が出ることの総称。
禁忌	禁忌	服用を禁止される病気や対象
注意事项	注意事項	服用に関する詳細
药物相互作用	薬物の相互作用	他の薬品との併用による注意書き
药理作用	薬理作用	薬効のメカニズム、効果の持続時間の説明

貯蔵	保存方法	室温、冷暗所、冷所（冷蔵）など保管方法
包装	包装	包装方法、内容量
有効期	有効期間	有効期間、有効期間
执行标准		《中华人民共和国药典》における番号
批准文号	許可番号	国家薬品監督管理部門が発行した番号
说明书修订日期	説明書の改定日	説明書のバージョンを示す日付
生产企业	メーカー	メーカーの正式名称、住所

上記のうち、日本語と微妙な違いを示すのは“不良反应”という語である。中国語の“不良反应 (adversereaction⁽⁸⁾)”は、“副作用” (side effects, 狭義の「副作用」), “毒性反应” (toxic reaction, 毒性反応、中毒反応), “变态反应” (allergic reaction, アレルギー反応), “后遗效应” (aftereffect、後遺症), “继发效应” (secondary effect, 二次作用), “特异质反应” (idiosyncratic reaction 特異体質反応)、“三致” (“致癌” carcinogenesis 発がん、“致畸” teratogenesis 催奇性、“致突变” mutagenesis 突然変異誘発)などを包括する概念である。よって“副作用”は“不良反应”の下位分類の一つとなる。そのため中国の薬品の説明書にある“不良反应”は、服用直後のみならず、その後の長い期間に起こりうるかなり広い範囲を含み、日本語の「有害反応（薬害反応）」に相当する。

一方、日本語の広義の「副作用」も医薬品の使用により生じた有害な反応すべてを含むという意味で、おおむね中国語の“不良反应”に相当する。そして中国語の“副作用”は、日本語の「狭義の副作用」に相当し、医薬品が通常有するいくつかの薬理作用のうち、治療上求めている作用以外の作用を指す。鼻水を抑えるために使用した抗ヒスタミン剤が、ねむけを催すといった作用がこれに該当する。

3 文法的特徴

薬品の能書（説明書）には、薬剤がどの症状に、どう作用するかが記される。よってモノを主語にした「使役文」が使われる。ただここでは“叫”、“让”、“使”、“请”など使役マーカーを用いる使役構文はほとんど使われることはなく、他動詞使役を多用する点に特徴がある。例えば以下はその典型的な表現である。

【药理作用】本品为缓解感冒症状的复方制剂。其中盐酸伪麻黄碱为拟肾上腺素药，具有收缩上呼吸道毛细血管，消除鼻咽部粘膜充血，减轻鼻塞症状的作用；马来酸氯苯那敏为抗组胺药，能进一步减轻感冒引起的鼻塞、流涕、打喷嚏等症状。

【薬理作用】本品は風邪の症状を緩和する混合製剤である。そのうちブソドイフェリンは

アドレナリンの作用のある薬で、上呼吸道の毛細血管を収縮させ、鼻や喉の粘膜の充血を取り除き、鼻づまりの症状をやわらげる作用がある。またクロルフェニラミンマレイン酸塩は抗ヒスタミン薬で、風邪が引き起こす鼻づまり、鼻水、くしゃみなどの症状をさらに軽減させることができる。

上記にみられるように、これらの中国語を日本語に翻訳する際は、中国語の他動詞をあえて「せる」、「させる」といった日本語の使役の助動詞を使って表現する必要がある。あるいは和語では他動詞を使う。この点は中国語と日本語の使役文の共通性と差異を学習者に学ばせる素材となる。

また、説明書の文語には、当然ながら口語的要素は排除されているが、そのため特定の用法が出現しない⁽⁹⁾。例えば、名詞、動詞、形容詞などの重ね型など口語に観られる用法は使われない。また文書の性質上、“很、挺、非常、太、更、几乎、最、比较”といった曖昧さを含む程度副詞、“难道、偏偏、究竟、到底、却、倒、究竟、差点儿、果然、简直、索性、怪不得、其实、大概”といった語気副詞も使われることはない。また、“”、“了”、“过”、“来”などの動態助詞、“的”を除く“地”、“得”といった構造助詞、“的、吧、呢、啊、哪、啦、呀、哇、嘛、吗、呢”などの語気助詞も使われない。接続詞は、語やフレーズをつなげる“及”、“或”、文やフレーズをつなげる“如”、“即使”といった条件を表す接続詞が多用される。それ以外の“不过、因为、所以、接、一边、不但、只有、只要、或者、结果、无论”といった接続詞は使われない。

典型的な書面語において各品詞のなかのどのような表現が排除されているかはそれ自体興味深いが、学習者に品詞の多様な用法を学ばせるためには、医薬品の説明書は教材に向かない。

4 語彙の特徴

ここでは語彙面に着目し、服用や使用に関して特に注意すべき表現の違いについて説明する。そののち、説明書で常用される禁止・注意表現を列挙する。

4.1 “禁用”、“忌用”、“”、“不宜”の違い⁽¹⁰⁾

薬品の利用には“禁用”、“忌用”、“慎用”、“不宜”といった利用にあたっての注意を促す表現が使われている。医薬品は症状に効果がある一方で、副作用を伴うことがあり、服用者の年齢、体質、体調、服用量や服用間隔、他の薬物や食品との併用によって反応の程度は大きく異なる。よってこうした文言が使われているが、“禁用”、“忌用”、“慎用”といった表現における厳密な規程は管見の限りなく、国家食品药品监督管理局のサイトにおいて「如何看懂药品说明书之7 看到“慎用、忌用、禁用”干脆不用了对不对？」という一文を掲載し、説明してい

る。これは“内容来源：中国药学会”とされているが、中国药学会のサイトには該当する文章はない。しかし、ここで掲載されるサイトの性質上、この記述がもっとも公的な見解を反映するものとし、以下に注意の度合いが強いものから弱いものの順にその違いを説明する。

“禁用”是指禁止使用。某些病人如使用该药会发生严重的不良反应或中毒。如青光眼的病人应禁用阿托品；对青霉素过敏的病人就应禁用青霉素，否则将引起严重的过敏反应，甚至死亡。所以，凡属禁用的药品，绝不能抱侥幸心理贸然使用。

(禁用は、使用の禁止を指す。ある患者がかりにこの薬を使用した場合、深刻な有害反応が出たり、中毒になることがある。例えば緑内障の患者はアトロピンの使用は禁止しなくてはならない。またペニシリンに対してアレルギーがある患者はペニシリンの使用を禁止しなくてはならず、そうでなければ深刻なアレルギー反応を引き起こして、最悪の場合に死亡することもある。よってすべての使用禁止に属する薬品は、決して軽々しく使ってはならない。)

“忌用”是指不适宜使用或应避免使用该药。提醒某些患者，服用此类药物可能会出现明显的不良反应和不良后果。但有的忌用药品如病情急需，可在医生指导下选择药理作用类似，不良反应较小的药品代替，如果非使用该药不可，应联合使用其他对抗其副作用的药品，减少不良反应，尽量做到安全。在家庭用药时，凡遇到忌用药品最好不用。

(“忌用”は使用に適さないあるいは当該薬品の使用を避けねばならぬことを指す。ある種の患者がこのタイプの薬物を服用すれば明らかな有害作用と良くない結果が出るかも知れないことに注意を促す。しかしある“忌用”薬品はかりに緊急を要する病状では、医師の指導のもと薬理作用が類似しているものを選べば、有害反応が比較的小さい代替薬品となるかも知れず、かりに当該薬品を使用せざるをえないときは、その他のその副作用に対抗する薬品とあわせて使用することで、有害反応を減らし、なるべく安全になるようにしなければならない。家庭で薬を服用する場合は、総じて“忌用”薬品は使わないのがベストである。)

上記以外に“忌”を使った表現に“忌烟、酒及辛辣、生冷、油腻食物。”といったものがあるが、これらは厳密な意味での“忌用”とは異なる。また“治疗期间，宜节制房事。”といった婉曲表現を含んだ注意もある。

“慎用”是指该药可以谨慎使用，但必须密切观察病人用药情况，一旦出现不良反应立即停药。通常需要慎用的大多是指小儿、老人、孕妇以及心脏、肝脏、肾脏功能不好的患者。因为这些人体内药物代谢功能（包括解毒、排毒）较差，所以，机体对某些药物可能出现不

良反応，故不要轻易使用。但慎用并不等于不能使用，家庭遇到慎用药品时，应当咨询医生后使用为好。

（“慎用”は当該薬品を慎重に使用してもよいことを指すが、患者の使用状況をつぶさに観察し、いったん有害反応が出たならただちに服用をやめなければならない。通常、慎重に用いることが求められるのは、子供、老人、妊婦および心臓、肝臓、腎臓機能に問題がある患者である。これらの人々の体内の薬物代謝機能（有毒物質の中和や排出）が低下していることで、人体がこれらの薬物に対して有害反応が生じるかもしれない、よって軽々しく使ってはならない。しかし“慎用”は使用できないことと決して等価ではなく、家に“慎用”の薬品があれば、必ず医師に相談してから使用するのが良い。）

“慎用”に関連する表現には“慎服”（“高血圧、心臓病患者慎服”）がある。また“运动员慎用”という表記は、スポーツの競技大会におけるドーピング検査などで陽性反応が出る恐れがあることを示している。

またこの他にも“不宜～”といった表現がある。これは禁忌の度合いが“慎用”よりも弱い、他の薬品との混用などの注意が必要な時に書かれる。

不宜：指某些药有一定的毒副作用，单独使用或与其他药物配合时对患者产生不利于治疗的不良反应，不适合患者使用。如：氟喹诺酮类药氟哌酸、氧氟沙星等有报道可以引起未成年动物的软骨组织损害，导致软骨病变，因此这类药不适宜用于骨骼系统未发育完善的小儿，尤其是婴儿使用，必要时应在医师指导下严格剂量、短期使用。

（不宜は、ある種の薬品に一定の有毒な副作用があり、単独での使用や他の薬品との組み合わせによっては患者に治療に影響する有害反応が生じることがあり、病人の利用に合わないことを指す。例えば、ノルフロキサシンやオフロキサシンなどフルオロキノロン系薬物は未成年の軟骨組織に損害を与え、軟骨の病変を引き起こすことが報道されているため、これらの薬は骨格系統が未発達の小児、特に嬰兒の使用には適さず、必要な時に医師の指導のもと厳格に量をはかり、短期の使用をしなくてはならない。）

これらの表現はおおむね以下の日本語に対応する⁽¹¹⁾。

“禁用”＝「警告」「禁忌」

“忌用”＝日本語の該当なし

“慎用”＝「特定の背景を有する患者に関する注意（旧「原則禁忌」）」

日本語の説明書の場合、上記の注意事項は「してはいけないこと」、「相談すること」に二つに大別している。前者は、守らなければ現在の症状が悪化したり、副作用・事故が起こりやす

くなることとなっており、中国語の説明書における“禁用”と“忌用”に相当する。後者の「相談すること」は服用前に医師や薬剤師に相談すべきことや、副作用に関係する事柄で、中国語の“不宜”や“慎用”に相当する。

日本語と中国語では、小児区分が異なるため、中国語の説明書がどの年齢幅を想定した記述になっているのか確認する必要がある。日本語の「小児」と中国語の“小儿”が指す年齢幅は以下である。

【日本語の小児区分】

新生児：生後28日以内

乳児：生後1年未満

幼児：生後1～6年

学童：生後6～12年

【中国語の小児区分】

“新生儿期”：生後28日以内。

“婴儿期（乳儿期）”：生後1年未満。

“幼儿期”：満1歳から満3歳。

“学龄前期”：満3歳から6～7歳。

“学龄期”：6～7歳から、女12歳、男13歳まで

特に日本語の幼児期が1歳から6歳までであるのに対し、中国語の“幼儿期”が1歳から3歳までで、小学校に入る前の期間として“学龄前期”を設けている点が異なる。

そして“老人”がどの年齢層を指すかについても注意が必要である。WTO（世界保健機関）では、65歳以上を高齢者としているが、中国では60歳以上としている⁽¹²⁾。

4.2 その他の禁止・注意表現

前節の注意書き以外にも、禁止や注意の表現がある。以下にみるようにこうした表現も主に書面語が使われ、口語でよく使用される禁止表現“不要～”、“不用～”、“別～”、“不准～”、“不许～”、“～是不行的”は使われない。

表2 主な禁止・注意表現

禁止・注意表現	用 例
“不能～”	不能同时服用与本品成份相似的其他抗感冒药。
“勿～”	服用降压药者，请勿服用本品。
“禁止～”	本品性状发生改变时禁止使用。
“不得～”	服药期间不得驾驶机动车、船、从事高空作业。

“不宜与～并用”	激素不宜与维生素 A 并用。
“如～时请停止使用”	使用时如出现异常请停止使用。
“在～下使用”	老年人应在医师指导下使用。儿童必须在成人监护下使用。
“宜节制～”	治疗期间宜节制房事。
“避免～”	服药期间避免饮酒。
“可增加～的危险”	可增加肾毒性的危险。

5 書面語と口語の対照

ここでは、説明書で常用される書面語表現を抽出し、それらに対応する日本語と中国語の口語表現を列挙したい。書面語に対応する口語は、製薬会社が説明書とは別に自社のウェブサイトで薬品や効能について Q&A を用意していることもあり、その Q&A で用いられている表現を参考にした。そもそも文単位で考えれば、書面語と口語は単に一对一の対応ではなく、書面語の語を口語の語に入れ替えればそのまま口語になるわけではない。中国語の場合、ある書面語の語彙を口語に替えると、その語の語構成や文の“語体”自体が変わってしまい、それに伴って介詞や構文を変更しなければならないことも多い。以下の表はそうした可能性をとりあえず捨象している。なお「品詞」は書面語の品詞について説明しているが、“口干”（ドライマウス）など文法のうえで1単語として認められるものもあえて品詞に分解している。

表3 書面語と口語の対照

日本語	書面語	品 詞	口 語
医師／医者	医师	名	医生/大夫
薬剤師	药师	名	药剂师
患者／病人	患者	名	病人
小児／子供	小儿/儿童	名	孩子
治療期間	疗程	名	疗程
花粉症	枯草热 ⁽¹²⁾	名	花粉症
空腹	空腹	名	饿, 空肚子, 空腹
しっしん	皮疹	名	疙瘩
ドライマウス	口干	名/動	口渴
便秘	大便干燥	名/動	便秘
食欲不振	食欲缺乏	名/動	没有胃口
一日	一日	数+量	一天
問い合わせる	咨询	動	问, 打听
疲れる	困倦	動	累, 疲劳想睡觉
服用／のむ	服用	動	吃药

服用／のむ	使用	動	吃,用
併用する	并用	動	一起吃, 一起用
判断動詞	为	動	是
めまい	头晕	動	晕
のむ	饮 (酒)	動 (名)	喝 (酒)
運転する	驾驶 (机动车)	動 (名)	开 (車)
服用／のむ	用药	動/名	吃药
眠気を催す	嗜睡	動/名	困, 打瞌睡, 犯困
重症化	加剧	動/名	比以前严重,加深, 病重, 病危
診察を受ける	就诊	動/名	看病
発熱	发热	動/名	发烧
高热	出现高热	動/名	发高烧
かゆい	瘙痒	形	发痒, 痒
だるい	乏力	形	没劲儿
この (指示詞)	本 (品)	代	这个 (药品)
この (指示詞)	该 (药品)	代	这个 (药品)
ただちに	立即	副	马上/赶快
してはならない	不宜 ⁽¹³⁾	副/動	不应该
たとえば	如	接	如果
そのため	故	接	所以
するだろう	将 ⁽¹⁴⁾	助動	会
胃もたれ	上腹部不适		胃不舒服, 胃胀
はっきりしない	尚不明确		还不清楚

なお上述の文語表現のなかには、商务印書館の《現代汉语词典》第7版といった中国語の規範を体现する辞書に掲載されていない語も多い。例えば、“就诊”、“药师”、“口干”、“嗜睡”、“头晕”、“大便干燥”、などは日本で出版される日中辞典のみならず、中国の一般的辞書でも項目として採りあげられていない。よってこうした医薬品に関しては語彙規範の例外として取り扱われているものと思われる。

また、医学の専門的な辞書しか掲載されていない語彙もある。しかも、薬の薬効成分という肝心な部分がそれに当たる。例えば、対乙酰氨基酚 (Acetaminophen-アセトアミノフェン (パラセタモール)、氢溴酸右美沙芬 (Dextromethorphan、DXM,デキストロメトルファン)、盐酸伪麻黄碱 (pseudoephedrine, PSE,プソイドエフェドリン)、马来酸氯苯那敏 (Chlorpheniramine Maleate, クロルフェニラミンマレイン酸塩)、氯雷他定 (loratadine, ロラタジン)、可待因 (Codeine, コデイン) などは、中日の対訳資料がないケースがある。中国語の読解力が不足している服用者は、中国語を英語に置き換え、インターネットで検索をして薬効成

分を日本語で確認することが現実的な対処になると言えよう。

6 おわりに 薬品における日中の違い

本稿では中国で販売される薬品を中国語読解の素材として利用することを想定し、説明書に観られる書面語表現について分析した。薬品の説明書には典型的な書面語表現が観られ、文法的には曖昧さの残る程度副詞、語気副詞などの副詞の使用や口語的色彩が強い助詞の使用頻度は高くなかった。そして、語彙においては事実上、普通話の規範を提示する役割をもつ《現代汉语词典》(商务印書館)などには収録されない語彙や用法が多く用いられていることが分かった。それは医学の高度な専門用語に限らず、「診察を受ける」、「薬剤師」、「めまいがする」といった一般的な意味の単語も含まれる。

本稿では単語レベルで書面語と口語の対照を示したが、前述のように書面語語彙を口語語彙に置き換えれば、また口語語彙を書面語語彙に置き換えれば、そのまま口語文体、書面語文体ができあがる訳ではない。もし口語と書面語の語彙の入れ替えを行った場合、各種の構文や介詞、助詞の利用にどのように影響を及ぼすのかまで考察する必要がある。しかし、この点は今後の課題としたい。

医薬品のうち風邪などの初期症状に向けたものは、コンタック (GSK グラクソ・スミスクライン株式会社) やタイレノール (ジョンソン・エンド・ジョンソン)、白加黒 (バイエル製薬) など多くのグローバル企業から世界で発売されている。しかし薬品は同じ銘柄であっても、その販売国の法律で管理されており、内容量や成分の違いに伴い、薬効が異なるケースがある。よって同じ銘柄であっても、成分をよく見極めて服用する必要がある。また、日本で総合感冒薬として処方箋がなくても購入できるものでも、中国では身分証 (パスポートなど) の提示や購入数に制限が設けられることもある。例えばエフェドリン (“麻黄”) を含む薬品はそれに該当する。こうした日中間における法的な違いも広い意味での文化の違いであり、学習者においては医薬品を通して中国の習慣や文化を理解する機会が得られるものと思われる。

また日本の説明書は、禁忌に関して説明書の冒頭近くに「使用上の注意」として目立つように書かれているが、中国で販売される薬品は、必ずしもそうっていない。これも当然ながら後ろにあるから重要度が低いという訳ではないので、服用にあたってはしっかり読み通す必要がある。また、子供の手の届かないところに置くという注意書きも、日中では異なる欄に記述されていることがある。

また中国においてもネット上では個人の経験に基づく情報が寄せられているが、これらはあくまでも個人の感想であり、書き込みをした者が医療に従事する人とは限らない。当該薬品を製造している製薬会社のサイトには Q&A の形式でより口語に近い文体で情報が提供されているケースがあるので、より正確性が高い情報を見極める必要があろう。

〔注〕

- (1) 持参できる薬の種類や量についての正確な情報は、中国駐日大使館や在日中国総領事館に問い合わせる必要がある。そして、日本の処方薬の中国・台湾への持ち込みには、薬、処方箋、処方量、診断書等（英文）を税関に提示して持込みの可否を判断してもらう必要があり、そのなかで持ち込み量も制限を受けることもある。日中における薬品規制が異なることもあり、日本の市販薬でも中国への持ち込みができないケースがある。とりわけ向精神薬については注意が必要である。また中長期の滞在の場合には十分な量を確保できない可能性もあり、本稿はそうした場合を想定している。
- (2) 冯胜利 (2003) 参照。
- (3) 陶红印 (1999) 参照。
- (4) 中西千香 (2018) 参照。
- (5) 中国医药信息平台 <http://www.dayi.org.cn/> (2018/04/18アクセス)
- (6) 世界の医療事情 中国 (北京) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/medi/asia/beigin.html> (2018/04/18アクセス)
- (7) 総合感冒薬の新康泰克美扑伪麻片 (国药准字 H20013063 中美天津史克制药有限公司)、泰诺酚麻美敏片 (国药准字 H20010115 上海强生制药有限公司)、アレルギー薬の福萊西氯雷他定片 (国药准字 H20050009 河南九势制药股份有限公司)、开瑞坦氯雷他定片 (国药准字 H10970410 上海先灵葆雅制药有限公司)、息斯敏牌氯雷他定口腔崩解片 (国药准字 H20080190 陕西量子高科药业有限公司)、咳止め薬の蛇胆川贝液 (国药准字 Z44022397 广州白云山潘高寿药业股份有限公司)、复方磷酸可待因口服溶液 (国药准字 H20073689 上海长城药业有限公司)、サプリメントの同仁堂 五子衍宗丸 (国药准字 Z11020188)
- (8) 薬物との因果関係がはっきりしないものを含んだ、あらゆる好ましくない、意図しない徴候、症状、病気を有害事象 (adverse event) とよび、有害反応 (adverse reaction) は、因果関係があるものを指す。「日本薬学会 薬学用語解説「有害事象」の項」
- (9) 品詞別の口語的表現と文語的表現の違いは冯胜利 (2003) を参照。
- (10) また“禁用”、“慎用”といった分類は、医薬品のみならず、メディアでの禁止用語にも適用される。
- (11) 厚生労働省医薬・生活衛生局長「医療用医薬品の添付文書等の記載要領について」<http://www.pmda.go.jp/files/000218446.pdf> (2018年6月9日アクセス)
- (12) 中华人民共和国老年人权益保障法第二条：本法所称老年人是指60周岁以上的公民
- (13) 中国における花粉症のアレルゲンは、クヌギ、ニレ、カバ、モミジ、オリーブ、ヒマワリ、アオギリ、トウゴマ、ニレなどの花粉によるものが多く、スギはない。
- (14) 冯胜利 (2003) には、“観光游客不宜前往” に対し、“*観光游客宜前往”、“*観光游客不宜往” は非文になることを指摘している。
- (15) “将” には以下の用例がある。“对青霉素过敏的病人就应禁用青霉素，否则将引起严重的过敏反应，甚至死亡。”

〔参考文献〕

- 冯胜利 (2003). 《书面语语法及教学的相对独立性》. 《语言教学与研究》2003：2
- 陶红印 (1999). 《试论语体分类的语法学意义》. 《当代语言学》1999 (3)
- 中西千香 (2018) 『中国語教育のためのレアリア読本』2016-2018年度科学研究費補助金 基盤研究C「中国語教育におけるレアリア活用方法の構築」報告書
- 中華人民共和國衛生部藥典委員會《中華人民共和國藥典 2015年版》人民衛生出版社
- 厚生労働省医薬・生活衛生局長「医療用医薬品の添付文書等の記載要領について」<http://www.pmda.go.jp/files/000218446.pdf> (2018年6月9日アクセス)
- 公益社団法人日本薬学会「薬学用語解説」<http://www.pharm.or.jp/dictionary/wiki.cgi>

独立行政法人医薬品医療機器総合機構の「医療用医薬品情報検索 <http://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/>
第一三共株式会社 Medical Library <https://www.medicallibrary-dsc.info/index.php>

〔付記〕

本稿の執筆にあたり薬剤師の ST 氏より情報提供と助言を頂いた。ここに感謝申し上げる。
なお本稿における錯誤はすべて著者の責任に帰する。

(いしざき ひろし 中国学科)

2018年10月21日受理

論文

帰還兵士の苦難

——ヘミングウェイの「兵士の家」を読む——

野 間 正 二

〔抄 録〕

“Soldier’s Home” は、これまで日本では「兵士の故郷」と訳されてきた。良く考えられた和訳ではあるが、作家の意図をじゅうぶんに考慮した訳とはいえない。このタイトルには、英語の同音の Soldiers’ Home の意味も込められていると思われる。Soldiers’ Home は、全米各地に設立されていた、何らかの事情で戦線から故郷にちよくせつ帰れない兵士を収容する施設である。とすれば、タイトルの “Soldier’s Home” も、Soldiers’ Home の意味をも含む「兵士の家」とする方が適当だと考える。そのことの妥当性を証明するために、本論文は書かれている。主人公のクレブスは1919年に師団とともに米国に帰還している。だから1919年に帰郷したと誤解されがちだが、実は、1918年の休戦から「数年後」に故郷に帰っている。その数年間については何も書かれていない。そもそもヘミングウェイは「氷山の理論」を提唱した作家である。全てを語るわけがない。クレブスは、戦争で心が傷ついていて、おそらく Soldiers’ Home のような施設で「数年間」を治療のために過ごしていて、故郷に帰れるほどに回復したと考えたから帰郷したと解釈する。

キーワード 帰還兵士の苦難、兵士の家、戦争神経症、第一次世界大戦、兵士の帰郷

本文

ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の「兵士の家 (“Soldier’s Home”)」は1924年に書かれ、1925年6月の同時代作家のアンソロジーに、そしてその4カ月後に短編集『われらの時代に (*In Our Time*)』に収録された。この作品は、作者自身によって、1924年12月の段階ではあるが「これまで書いたなかで最高の短編」(SL 139) と見なされている。

I

おもに描かれているのは、オクラホマ州の田舎町の実家に約1カ月前に第一次世界大戦から帰還してきた元兵士クレブス（Harold Krebs）のある1日の生活。場面は、オクラホマの田舎町。時期については、クレブスが故郷へ帰還して「約一カ月後」（113）の「晩夏」（112）とのみ語られていて、年代については語られていない。しかし年代を推測する材料はある。たとえば「クレブスがオクラホマの故郷へ帰還するまでに、英雄たちの歓迎はすでに終わっていた」（111）と語られている。また、クレブスの故郷への帰還が、町民には「かなり滑稽」（111）に思えるほどに「遅すぎた」（111）し、「あの戦争が終わって数年後（years after the war was over）」（111）だったと書かれている。だから文字通りに解すれば、クレブスの帰郷は、休戦の1918年11月から数年後、つまり1920年以降の夏のことになる。

ところがこの「数年後」については、これを文字通りには受け入れない解釈が、私がたまたま目にしただけでも8つある。その全ては、クレブスが1919年夏に帰郷したとしている。その内の3つ（Roberts 516; Ullrich 364-65; Mellow 122）はそう判断した根拠を示していない。他の1つは作者のケアレスミスで「数カ月後」の誤りだとしている（Jones 17）。残りの4つは、事実は「数カ月後」なのだが、主観的な印象で「数年後」と語っているとしている（Boyd 52; Monteiro 51; Lamb 23; Trout 14）。

休戦から「数カ月後」か「数年後」かはテーマにかかわる問題なので検討しておく。その判断の根拠を示さずに「数カ月後」としているものについては、反論のしようがない。ケアレスミスだとする考えには、この短編のこの個所ではそんなことは「まずありえない」（Monteiro 50）と、私も考える。そこで、残りの4人の主観的な印象を表したものだという見解に反論しておく。

まず、同郷の元兵士たち「全員」（111）が、クレブスよりもずっと早くに帰郷しているからだ。クレブスが属していた第二師団は、1919年夏に米国に帰還している（111）。また、アメリカ外征軍のなかで最も重要な第一師団が米国に帰国してニューヨークとワシントンで約25000人の兵士が盛大な凱旋パレードをしたのが、1919年秋の9月10日と17日である（“September 10, 1919”）。そして徴募兵と志願兵との間に除隊の時期に違いはない（Trout 14）。とすれば、夏に帰郷しているクレブスは、故郷の元兵士「全員」よりも「かなり滑稽」に思えるほど「遅すぎた」のだから、1920年の夏以降に帰郷していなければならない。

次に、本文には「（クレブスは）第二師団が1919年夏にライン川から戻ったときに米国に戻ってきた」（111）と書かれているからだ。この「1919年夏」という表記は、現実の第二師団がニュージャージー州ホーボーケン（Hoboken）に帰還したのが1919年8月3日だった（Trout 14）から歴史的事実とも合致している。ここで注意すべきは、1919年夏に米国に帰ったとのみ書かれていて、故郷に帰ってきたとは書かれていない点だ。たしかに、ヨーロッパ戦線に派遣され

た兵士が米国に帰国すれば、間もなく除隊になることが通例である。しかし除隊になれば、すべての兵士が故郷に戻るわけではない。たとえばフィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) は、1919年2月にアラバマ州の基地で除隊になると、すぐにニューヨークに出てきて作家としての自活の道を探し、同年7月になるまでニューヨークに留まっていて故郷に帰っていない (Brucoli 96)。

以上の2点からだけでも、クレブスは休戦から数年後の夏に帰郷したと考えるのが妥当である。では、それはいつ頃だったのか。草稿では1920年となっていた (Smith 72) ようだが、私は1921年の夏だったと考える。なぜならクレブスの田舎町では、「ふしだらな娘たち」(112) ではない、多くのふつうの若い娘たちが、クレブスが入隊する以前には見かけなかった「髪をショートカットにしていた」(112) と語られているからだ。一方で、流行に敏感なフィッツジェラルドが短編「バーニス断髪す (“Bernice Bobs Her Hair”)」を発表したのがサタデーイブニングポスト (*Saturday Evening Post*) の1920年5月1日号だった (Fitzgerald 25) し、ニューヨークで一般の若い娘が髪をショートカットにするのが流行し始めていると、ニューヨークタイムズ (*NY Times*) が報道したのが1920年6月27日のことだったからだ。つまり、ニューヨークの流行がオクラホマの田舎にまで届くには時間ラグが必要だから、この物語の場面は早くても1921年の夏と考えるのだ。

主人公のクレブスは、実家に戻って「約一カ月」しか経っていない。だとすれば、属していた第二師団が1919年夏に米国に帰還したにもかかわらず、それから約2年間故郷に帰っていないことになる。これは常識的に言っても、異例なことだ。このことも、先の8人の研究者がクレブスの帰郷を1919年とした理由のひとつだろう。

II

過酷な戦場を経験した兵士が除隊になれば、ふつうなら、すぐに帰郷して心身を休めたいのが自然だろう。しかしクレブスは除隊後2年間も故郷に戻らなかった。それはなぜなのか。

クレブスの故郷の町の若者たちは全員が徴兵で入隊している (111)。だが、クレブスは1917年に大学から志願して入隊している (111)。しかもアメリカ外征軍のなかでもっとも死傷者率の高かった第二師団 (Trout 14) の海兵隊に入隊している。海兵隊は、アメリカの4軍のなかでもっとも勇猛だと知られている。さらにオクラホマ州で志願して海兵隊に入れたのは各郡 (county) でわずか「4人か5人」(Trout 18) で、オクラホマ出身の海兵隊員は「ごく希 (ultimate rarity)」(Trout 18) だった。クレブスは、愛国心が旺盛で勇猛果敢を自認している選ばれた新兵だったのだ。

しかし戦場では、クレブスは目覚ましい武勲をあげることはできなかったと思われる。なぜならクレブスは、休戦後でも「伍長 (corporal)」(111) だったからだ。海兵隊で伍長という

のは、下士官ではあるが、最下位の下士官で、三等軍曹（sergeant）よりも下の階級だ。大学を中退して志願すれば、入隊時にはたんなる「兵卒」ではなく下士官で任官した可能性が高い。ちなみにプリンストン大学を中退しているフィッツジェラルドは1917年11月に陸軍の少尉で任官していて、戦場には出ていないのに1918年4月には、伍長より9階級上の中尉に昇任している（Turnbull 89）。つまりクレブスは戦場に出ているのに階級が上がっていないのだ。

とすれば、コブラーも指摘している（Kobler 382）ように、退役時に伍長であるクレブスは戦場で目立った武勲をあげることはできなかったと考えられる。というよりむしろ、クレブスは下士官としてその任務をじゅうぶん果たせていなかったと思われる。そう考える根拠は一枚の写真にある。

クレブスは、ラインの河畔で仲間の伍長と、ドイツ人の売春婦と思われる「美しくない」（111）女性2人と4人で写真を撮っている。この写真は、メソジスト派の大学で同じ襟の服を着た学友たちと一緒に撮った写真（111）とは対照的に、「孤立と分離（isolation and separation）」（DeFalco 140）の雰囲気がただよっている。この孤立感のたどる写真に写っているクレブスは、仲間の伍長と2人とも揃って「軍服には大きすぎるように見えた（look too big for their uniforms）」（111）と、軍服が身に合っていないことが語られている。

この窮屈になった軍服については、クレブスの知的・性的な成長（Ruben 56, 64; Baerdemaeker 64）や「ある意味での成長」（Lamb 21）を表しているという解釈がある。しかし、いかなる仕事においても、制服が身に合っているというのは、その仕事において有能である証拠である。さらに、ヘミングウェイの別の短編「誰も知らない（“A Way You’ll Never Be”）」（1933年）では、「少しきつい（a little tight）」（CSS 312）軍服を着ている主人公の兵士は、戦闘によって生じた神経症に苦しんでいて、兵士として不適格であると語られている。きつい制服と兵士としての不適格とが対応している。だから写真に写っているクレブスからは、クレブスが軍人として有能ではなかったことが暗示されていると解釈できる。

もちろん入隊時には、身体に合った軍服が支給される。この年齢で身長が伸びることはない。だから2人は入隊してから太ったのだ。2人とも揃って窮屈に見えたという表現からは、クレブスの軍服が窮屈に見えたのは、クレブスに関してのみの偶然ではなく、2人とも太っていて、太っていたのは事実であったことを示唆している。孤立のなかで、類は友を呼んでいるのだ。

河田も言う（河田 23）ように、過酷な戦場で、兵士が太ることは通常考えられない。だから2人とも、前線から離れた後方で、太ったと推測できる。そして兵士が戦場から離れられるのは、心身が負傷したときだろう。ところが、クレブスは、身体的に負傷したとは語られていない。また、帰郷してからの様子からも、心に悩みを抱えているのは感じられるが、身体的な傷を負っているようには感じられない。そのうえ、もし万一身体が負傷していたら、名誉の負傷だから帰国してから2年後にひっそりと帰郷する必要はない。だから戦場で心を病んだと考えられる。そしてその心の傷の治療の過程で太ったのだ。この写真を撮ったときには、クレブ

スは戦争で神経がすでに傷ついていて、その影響が太った身体にでていたのだ。

クレブスが帰国後なぜ2年間も帰郷しなかったのかという疑問の答もここにある。クレブスも、自分が戦争による神経症を明らかにわずらっている姿を、故郷の人びとに知られなくなかったのだ。というのは、戦争神経症にかかる者は、当時、臆病者か意志薄弱者か社会生活不適応者か作病者と見なされがちだった (Herman 21) からだ。現在でも、2016年10月に、大統領候補だったトランプ (Donald Trump) は、「強い (strong)」兵士は、戦争や戦闘で PTSD に苦しむことはないと主張している (*NY Daily News*)。そんな世間の眼は、勇猛果敢を自認して出征した選ばれた兵士にとっては、耐えられないものだった。だから戦争神経症がある程度回復するまで⁽¹⁾、故郷に戻らなかったと考えるのだ。

故郷に戻らなかった2年間の内のいくらかは、可能性としては、医師の治療をうけていたり (O'Neill 656-72)、設立されていた戦争神経症治療のための専門病院で治療をうけていたり (*NY Times*, Aug. 21, 1921)、あるいは南北戦争以降各地にあった戦争で心身が傷ついた兵士を収容する「兵士の家 (Soldiers' Home)」と呼ばれていた施設 (Trout 6-7) に留まっていた可能性がある。いずれにせよ、空白の2年間の後、戦争神経症からかなり回復できたと信じたクレブスは故郷の実家に戻ってきたと考えるのだ。

なぜそう考えるかといえば、実家に戻っているクレブスが戦争神経症の症状と思われる症状を今も示しているからだ。戦争による神経症を考えるうえで、現在もっとも信頼できる基準は、米国精神医学会編「PTSDの診断基準」(American Psychiatric 218-20) だろう。その手引き書の PTSD 診断基準を参考にして、帰郷したクレブスを検討すると、少なくとも8つの点で診断基準の項目と一致している。それは、たとえば、1) 最悪の戦闘を5つも経験している、2) 最初は戦争の話をしようとしなかった、3) 戦時中に起こった全てのことにたいして嫌悪感をもっている、4) 社会の関係性のなかで生きることを拒否している、5) 遅くまで寝ている、6) 感情が制限されている、7) 未来を思い描けない、8) 怒りっぽくなっているを挙げることができる。

しかしたしかに、クレブスは戦争体験を誇りにして、戦争体験によって男性性を獲得して大人の男として成長した (DeFalco 144; Cohen 163; 板橋 84-85) という意見もある。しかしもし仮にクレブスが大人の男として成長したとするなら、帰還してからの故郷での先に指摘したふるまいは理解できないものになる。もちろんこれまでも、クレブスが戦争で精神的に傷ついていることを指摘した研究はある (Imamura 102-03; Hoffman 98; Ullrich 366; Sheridan Baker 27; Stewart 212; Eby 147-8)。しかしそれらの研究はそのことをじゅうぶんに検討・展開していない。

III

クレブスは除隊から2年後に実家に帰ってきて、「事態が再びだんだんと良くなってきている（things were getting good again）」（113）と、自分が回復途上にあると感じてはいるが、しかし先に例示したように、戦争神経症の症状を今も示している。クレブスが戦場で心に傷を受けたのは確かだ。

たとえば、戦場を経験した後でのクレブスの変化のなかで、クレブスが示す大きな変化は、クレブスが神を信じられなくなっていることにある。この「兵士の家」の本文の前には、「第7章」という章名の下にイタリック体で書かれた11行の小文（vignette）が置かれている。その小文では、第一次世界大戦のイタリア戦線での兵士の姿が描かれている。その兵士は、砲撃で命の危機に瀕したとき、もし生きながらえられれば神の教えを伝える人となるという交換条件まで出して、心底から神の加護を祈っている。このときの兵士は、人の願いを聞き入れてくれる神の存在を少なくとも信じようとしていたし、神が人知を超えた存在だということを信じていた。しかしその危機的な状況を経験し生きのびると、神との約束である交換条件を完璧に無視している。神の教えを人びとに伝えるどころか、売春宿に登楼して売春婦を買うという瀆^{とく}神^{しん}的な行動をしている。砲撃で命の危機に瀕する経験をしたことで、彼の内部に変化が起きたのだ。『日はまた昇る（*The Sun Also Rises*）』のジェイク（Jake Barnes）が戦争を体験してから「信仰心を抱くことができればよいのに（I only wished I felt religious）」（SR 103）と願っているように、信仰心を失ってしまったのだ。

兵士が戦場で信仰を失う過程をドラマティックに描いているこの小文が、短編「兵士の家」の前に置かれている。だから、メソジスト系の大学にあえて進学した信仰ぶかいクレブスが、信仰を失って故郷に戻ってきた状況を読者は間接的に理解できる。実際クレブスは、戦場では「いつでも吐き気がするほどひどく怖がっていた（had been badly, sickeningly frightened all the time）」（112）と、同郷の帰還兵に語っている⁽²⁾。クレブスも、小文のなかの兵士と同じように、戦闘ではひどい恐怖を感じていたのだ。だからクレブスも、今村も指摘している（Imamura 105）ように、戦場で命の危機に瀕するような状況をくぐり抜けて、生き残ったけれども、入隊前にもっていた信仰心を失ったのだらうと推測できる。

たとえばクレブスは、仲間の伍長と2人で、白昼堂々と売春婦2人と一緒に写真に収まっている。十戒のひとつの姦淫の罪を犯した証拠であるこの写真は、コブラーも指摘している（Kobler 380）が、クレブスの信仰ぶかい家族には見せられない類の写真だった。しかしクレブスは、そんな記念写真を撮ることに抵抗がなくなっていたのだ。これはクレブスが信仰ぶかい家族のもとで養っていたかつての信仰心を失っていたから可能だったと思われる。

IV

この作品のかかなりの部分で、クレプスの実家での居心地の悪さが、信仰ぶかい母親との関係を中心にして描かれている。それで、これまでの研究において、母と子との葛藤関係が注目されてきた。この作品は、息子の母親（家族）からの自立をテーマとしているという解釈（Lynn 259-60）すらある。そこまで極端でなくても、母親に反発していたヘミングウェイの自伝的な関心をも反映して、クレプスの母親にたいして厳しい見方のものが多い。たとえば、この母親は「母親として不適格」（Lamb 25）という意見や「自己中心的で残酷で […] ものすごく破壊的」（Griffin 81）とか「モンスター」（Lynn 260）とか「むさぼり食らう母」（DeFalco 143）というようなものまである。

しかし詳細に読んでみると、必ずしも彼女は息子にたいして異常なまでに厳しい身勝手な母親ではないことが分かる。除隊から2年後に初めて実家に戻ってきて1カ月にもなるのに、クレプスは遅くまで寝ていて、読書や玉突きやクラリネットの練習はするが、生産的なことは何もせず玄関のポーチの階段から通りを眺めて、日々を過ごしている。こんな息子の姿を身近に見ていたら、どんな母親でも、「何かすることを決めたの？」（115）とか「そのことをもうそろそろ考えたらどう？」（115）と問いかけられると思われる。しかしその当たり前の問に、クレプスは「そんなことは考えたことない」（115）と、すげなく全否定する。すると母親も、彼女の生活を律している神を持ちだしてきて「神様はどんな人にもやるべき仕事をお与えになっている。神の御国には怠け者はありえないの」（115）と、クレプスを真っ向から教え諭^{きと}そうとする。もし仮にクレプスが、「その内に…」などと、もっと曖昧に否定していたら、信仰ぶかい母親でもここまでまともに「神の御国」や「怠け者」の言葉はださなかったと思われる。母親のこの厳しく断定的な言葉は、相手のことを考えないクレプスのすげない全否定が導きだしたのだ。

そして、母に厳しく断定的な言葉で神を持ちだされて、クレプスも、「ぼくは神の御国にはいない」（115）と、あまりにも直^{ちよく}截^{せつ}に本心を言ってしまう。戻ってきた実家では、これまで通り、神という絶対的な存在のもとに日々の生活が今も営まれていた。正常な思いやりと神経があれば、そんな言葉を母親に言うべきではなかった。そんなことを言えば、母親が「わたしたちはみんな神の御国いるの」（115）と真っ向から反論するのは明らかだった。そして母親が感情的になるのも分かっていた。母親への配慮が足らなかったのだ。結果的にここで顕在化した親子の鋭い対立の責任の大半は、クレプスの配慮の無さにある。クレプスのこうした配慮に欠けた態度と、クレプスが神を信じられなくなったこととは表裏一体の関係にある。クレプスの母親にたいする配慮の欠如も戦争にゆく前には無かったと思われる。クレプスは戦争を経験して人柄が変わったのだ。

自分がまいた種から生まれた母親との鋭い対立に、クレプスまでも当惑し腹を立てている。しかし、さすがのクレプスにも、母親にさらに言い返すことが事態をさらに悪化させることが

分かっていた。彼は不機嫌に怒りのなかで沈黙をするより仕方がなかった。

クレプスのその怒りを秘めた沈黙を見とって、母親が「ハロルド、あなたのことをとても心配しているのよ。[...] あなたのために、これまでも神様に祈ってきたし、今も一日中祈っているのよ」（115）と言うのも、信仰ぶかい母親だから、それほど意外な反応ではない。どちらかと言えば、子を思う母の気持ちの必死さが伝わってくる。しかしこのとき、クレプスは黙って、冷えて固くなってゆくベーコンの脂肪を見ている（115）。この固まってゆく白い脂肪は、客観的相関物で、このときのクレプスのしらけた嫌な気分とかたくなに拒絶する気分とを暗示している。彼は母の言葉や母の愛をかたくなに拒絶している。

クレプスのその不機嫌な沈黙や不満げな視線を感じとって、母親が「そんな風に見つめないで。[...] わたしたちはあなたのことを愛していて、あなたのことを思って事情を話しているのは分ってるでしょう」（115）などと、クレプスのことをいかに愛し心配しているかを、くどくどとたたみ掛けてくるのも自然なことだ。

しかしその感情的な口説きに、クレプスは「それで全部？」（115）と応えている。あまりにも冷たい反応だ。感情の交流を拒否した態度だ。この冷たい反応に接して、母は茫然として、「そうよ。ねえ、あなたは母さんを愛してないの？」（116）と、すぎる思いで問いかける。すると「ああ（No）」（116）と最小限の言葉できっぱりと否定する。あまりにも配慮を欠いたふるまいだ。そっけなく「ああ（愛してない）」と息子に面とむかって言われて、冷静でいられる母親はこの世にはいない。母親が「声をあげて泣きはじめる」（116）のも当然だ。こういう愁嘆場しゅうたんばが生じるのは、クレプスに母親の気持ちそんたくを忖度する気持ちの余裕がないからだ。

ここまでのクレプスの一連のふるまいには、感情が制限されて円滑な人間関係が築けないという戦争神経症の影響がでていると考えられる。

母親が声をあげて泣くという事態に直面して、さすがのクレプスも母親を慰めようとする。あれほどぶっきらぼうな返事をしていたクレプスが、母親の肩に手を置いて「母さん、ほんとお願いだから、ぼくのことを信じて」（116）と言って、母親の髪の毛にキスまでする。すると、母親は「わたしはあなたの母さんよ。小さな赤ん坊だったときには、この胸に抱いていたのよ」（116）と、息子が自分と一心同体だった幸せな時代のことを話す。しかし過去をとり戻すことはできない。しかも母親との一心同体を望まれることは、成長した息子には嫌悪感が生じるものだ。だからクレプスが、この母のことばを聞いて、「気分が悪くなっ（た）」（116）のは仕方がないかもしれないが、「ちょっと吐き気がした」（116）のは少々過敏で過剰な反応だ。この過敏で過剰な生理的な反応も、戦場での経験を嘘や誇張をまじえて語ったときに「吐き気」（112）を感じたのと同じように、戦争神経症の影響と見なせるだろう。

吐き気を抑えながらもクレプスは「マミー、分かってるよ。母ちゃんのためによい子でいようと思う」（116）と、「マミー」という幼児語まで使って答えて、母に甘えてみせて、懸命に「よい子」であるための演技をしようとする。そして母親が食卓の側で、跪いて神に祈ること

を求めたときには、クレプスも母と一緒に跪き、母の祈りを母の隣で聞いている。その後、2人は立ちあがり、クレプスは母にキスをして外出する。

食堂での母親とクレプスとのこの「もっとも痛々しい」(Baerdemaeker 67) 場面は、一見すれば、母親の過干渉から生じたように見えるかもしれない。しかし実態は、息子クレプスの母親にたいする一連の配慮の無さや愛の無さがちよくせつの原因となって生じたものだ。そしてその配慮の無さや愛情の無さは、クレプスが過酷な戦争を体験することで、神が信じられなくなったことと「誰も愛せなくなった」(116) こととによって、つまり戦争で心が傷ついたことで生じたものだ。

クレプスは、戦争による神経症のために、神の御国に生きている情のふかい母との対立が決定的になったのだ。さらにこの対立は、戦争神経症によって円滑な対人関係を築く能力が脆弱^{ぜいじやく}になっていたので、より激しいものになった。だからこの場面に、従来のように、子と母との葛藤というヘミングウェイの自伝的な要素のみを読みとるだけでは、この作品の解釈としては不十分だ。戦争が帰還兵士にもたらした悲劇・苦難を読みとらねばならない。

戦場で心が傷つき信仰心をも失っていたクレプスは、除隊から約2年後に実家にやっと戻ってきた。しかし、神の御国を信じている母親を中心に動いている家族のなかでは居づらくなる。そこでとりあえず、就きたい仕事があるわけではないが、学生時代に知っていたカンサス(Kansas) 市に出てゆき、人間関係が希薄な都会のなかで生活しようとする。このときのクレプスは、ウルリッヒが言うように「(かつての) 開拓者が抱いていたような希望」(Ullrich 372) を抱いて、カンサス市に向かったわけではない。その辺りの事情は、『グレート・ギャツビー(The Great Gatsby)』(1925年) の語り手ニック(Nick) よりも(野間 124-26)、もっと漠然とした故郷からの脱出だった。

この短編は、おもに帰還兵士クレプスの実家(home) での一日の生活を描いている。だから、そのタイトルが「兵士の家("Soldier's Home")」であるのも納得がゆく。しかしほんらい愛とくつろぎを与える拠り所であるべき「家」が、この作品では、クレプスにストレスを与え、クレプスを「家」から追放している。結果的に、皮肉なタイトルとなっている。

また一方で、このタイトルは同じ発音の「兵士の家(Soldiers' Home)」をも想起させる。「兵士の家」は戦争で心身が傷ついた元兵士たちがその傷を癒すための施設だ。だから、戦場で受けた傷を実家で癒すことができないクレプスを描いているこの作品では、そのタイトルに作者の皮肉な視線を感じざるをえない。

こうしたことを考慮すれば、この作品のタイトル "Soldier's Home" は、これまで「兵士の故郷」と広く訳されてきたが、そのような漠然とした一般的な訳ではなく、作品内容をもっと適切かつ具体的にあらわす「兵士の家」の方が、タイトルとしてはふさわしいように思われる。

最後にまとめると次のようになる。クレプスは、愛国心あふれる勇猛果敢であることを自他とも認める兵士として海兵隊に勇躍志願して、ドイツ戦線に派遣された。ところが戦場で精神

的な傷を負った。その結果、他の同郷の若者たちは戦後すぐに帰郷したので英雄として大歓迎されたが、クレブスは終戦から数年後に、誰にも英雄として歓迎されることもなく、ひっそりと実家に戻ってきた。戦場から生きて故国に帰って来ても、クレブスは戦場で精神的に傷ついているから、また勇猛果敢な兵士として出征した手前、すぐには実家に帰れない状況が生まれていたのだ。さらに数年ぶりに実家に帰って来ても、精神的な傷はいまだに完全には治癒していないから、自分の未来を思い描けないだけでなく、他人を愛することもできず、家族を思いやる精神的余裕にも欠けていた。だから、やっとたどり着いた家族の元からも出てゆかねばならない。戦争で心が傷ついた兵士のこのような苦難を、短編「兵士の家」は、クレブスの実家での一日を描くことで、読者に語りかけている。

〔注〕

- (1) サリンジャー（J. D. Salinger）は戦争神経症の影響が見いだされる帰還兵士シーモア（Seymour）について、「陸軍がシーモアを病院から退院させたのは完璧な犯罪（perfect crime）だと医者が言っている」（*Nine* 6）と作中人物に語らせている。米軍は戦争神経症に苦しむ兵士をかなり早い段階で退院させていたのだ。シーモアは第二次世界大戦からの帰還兵士だが、事情は第一次世界大戦でも大差なかったと思われる。
- (2) この個所は、「（クレブスは）他の兵士たちの間では、ベテラン兵士のくつろいだポーズ」（112）をとっていたという部分に、コロンでつながれて続いている。だから、「ポーズ（ふり）」との関連を強調して、この部分は彼の嘘の証言（ポーズ）だとする解釈がある（McKenna 204-05; Cohen 162; Mellow 125; 板橋89）。しかしここでの「ポーズ」はベテラン兵士に掛かっていて、ベテラン兵士のような余裕ある態度を示していたことを指している。一方で、兵士が戦場で恐怖を感じるのは自然なことだが、兵士たちは故郷に凱旋したとき、「英雄」として「熱狂的に」迎えられた。だから故郷の人びとの前では、帰還兵士たちは、戦場で恐怖など感じなかった英雄としてふるまわなければならなかった。それを知っていたクレブスは、帰還兵士しか居ない場所では、世間から求められている「英雄のフリ」をする必要がないと考え、戦場を熟知しているベテラン兵士という態度（ポーズ）をとることで、戦場で恐怖を感じていたという事実を語ったと解するべきだ。さらに言えば、ヘミングウェイが戦争を描いているおもな短編は3つ（“In Another Country” “Now I Lay Me” “A Way You’ll Never Be”）あるが、その3編すべてのなかで兵士が戦場で直面する恐怖が語られている。だからクレブスも、この3人の兵士と同じように、また、この「兵士の家」の前に置かれた小文の主人公と同じように、戦闘ではひどい恐怖を感じていたと考えるのが妥当だろう。

Synopsis

Hemingway’s “Soldier’s Home” mainly describes one day in the life of Harold Krebs, who had come back to his home a month earlier in the summer “years after the war was over.” When he came back home, most of the young girls in his home town had their hair cut short. Hence, even though eight critics insist “years” in fact means “months,” Krebs probably came home in the summer of 1921 because *The NY Times* included an article “Vogue of Bobbed Hair” on June 27, 1920. And as he returned to the United States with the Second Division in the summer of 1919, he presumably did not come home for about two years even after returning to his native country.

There is no clear explanation for why he did not come home for about two years, but we can surmise that he was suffering from war neurosis during that time for the following four reasons. Firstly, symptoms of war neurosis appeared in his behavior at home, which is epitomized in his

losing his faith in God; secondly, he still remained a corporal when he was discharged from the Marines; thirdly, the picture taken on the Rhine showed that he and another corporal looked too big for their uniforms, which reveals that they grew fat in the course of medical care behind the front; and finally there is no mention of him being physically injured. At that time a soldier suffering from war neurosis was likely to be considered as an inferior human being or a malinger or a coward. Therefore, he, taking pride in leaving college to enlist in the valiant Marines, tried to avoid betraying noticeable symptoms of his war neurosis to the people of his town, and he waited for two more years until he had fairly recovered.

Although he recovered considerably from the neurosis, he still had neither his faith in God nor had any sense of a happy future, and he “[didn’t] love anybody.” The aftereffects drove him into troubles at home, because his family was dominated by the pious and affectionate mother who didn’t try to fathom her son’s anguish. She single-mindedly wished her son to settle down, and she could not tolerate her son who professed his impiety and his lack of affection for her. Inevitably this caused painful disputes between mother and son; hence some critics, taking account of Hemingway’s own troubles between him and his mother, believe that the story mainly relates the mother and son disputes. However, Krebs’ troubles originate in the aftereffects of his neurosis, which restricted his ability to love and made him lose his faith and his prospects for the future. Namely, the story narrates the sufferings of a returned soldier who did not come home for two years even after returning to his homeland and who did not behave properly at home and finally could do nothing but leave home.

〔引用文献〕

- American Psychiatric Association. *Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR*. 2000. American Psychiatric Association, 2004.
- Baker, Sheridan. *Ernest Hemingway: An Introduction and Interpretation*. Holt, 1967.
- Baerdemaeker, Ruben De. “Performative Patterns in Hemingway’s ‘Soldier’s Home’.” *The Hemingway Review*, vol.27, no.1, Fall 2007, pp. 55-73.
- Boyd, John D. “Hemingway’s Soldier’s Home.” *The Explicator*, vol.40, no.1, 1981, pp. 51-53.
- Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. 1981. U of South Carolina P, 2002.
- Cohen, Milton A. “Vagueness and Ambiguity in Hemingway’s ‘Soldier’s Home’: Two Puzzling Passages.” *The Hemingway Review*, vol.30, no.1, Fall 2010, pp. 158-64.
- DeFalco, Joseph. *The Hero in Hemingway’s Short Stories*. U of Pittsburgh P, 1963.
- Eby, Carl. *Hemingway’s Fetishism: Psychoanalysis and the Mirror of Manhood*. State U of New York P, 1999.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Edited by Matthew Bruccoli, Scribner, 1989.
- Griffin, Peter. *Less Than a Treason: Hemingway in Paris*. Oxford UP, 1990.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. The FincaVigia Edition. 1987. Scribner, 2003.
- . *Ernest Hemingway: Selected Letters 1917-1961*. 1981. Edited by Carlos Baker, Scribner, 2003.
- . *The Sun Also Rises*. 1926. Scribner, 2006.
- . “Soldier’s Home.” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. The FincaVigia Edition. 1987. Scribner, 2003. pp. 110-16.
- Herman, Judith. *Trauma and Recovery*. 1992. Basic Books, 1997.
- Hoffman, Frederick. *The Twenties: American Writing in the Postwar Decade*. 1955. Free Press,

- 1965.
- Kobler, J.F. "'Soldier's Home' Revisited: A Hemingway *Mea Culpa*." *Studies in Short Fiction*, vol.20, 1983, pp. 377-85.
- Imamura, Tateo. "'Soldier's Home': Another Story of a Broken Heart." *The Hemingway Review*, vol. 16 no. 1, Fall 1996, pp. 102-07.
- Jones, Horace P. "Hemingway's Soldier's Home." *The Explicator*, vol.37, no.4, 1979, p. 17.
- Lamb, Robert Paul. "The Love Song of Harold Krebs: Form, Argument, and Meaning in Hemingway's 'Soldier's Home'." *The Hemingway Review*, vol.14, no.2, Spring 1995, pp. 18-36.
- Lynn, Kenneth S. "Hemingway's Private War." *Commentary*, July 1981, pp. 24-33.
- McKenna, John J. and David M. Raabe. "Using Temperament Theory to Understand Conflict in Hemingway's 'Soldier's Home'." *Studies in Short Fiction*, vol.34, 1997, pp. 203-13.
- Mellow, James R. *Hemingway: A Life without Consequences*. 1992. Perseus Books, 1993.
- Monteiro, George. "Hemingway's Soldier's Home." *Explicator*, vol.40, no.1, 1981, pp. 50-51.
- New York Daily News*. "Trump Suggests Vets with PTSD Aren't 'Strong'." October 3, 2016. <http://www.nydailynews.com/news/politics/trump-suggests-vets-ptsd-aren-strong-article-1.2815752>. Accessed 4 May 2016.
- The New York Times*. "Vogue of Bobbed Hair." June 27, 1920.
- . "'War' Nerve Cases Difficult to Treat." August 21, 1921.
- O'Neil, Eugene. "Shell Shock." *Eugene O'Neil: Complete Plays 1913-1920*. Library of America, 1988, pp. 656-72.
- Roberts, John J. "In Defense of Krebs." *Studies in Short Fiction*, vol.13, Fall 1976, pp. 515-18.
- "September 10, 1919: New York City Parade Honors World War I Veterans." *WWW. History Com*. <https://www.history.com/this-day-in-history/new-york-city-parade-honors-world-war-i-veterans>. Accessed 4 May 2016.
- Salinger, J.D. *Nine Stories*. 1953. Little, Brown, 1953.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. G.K. Hall, 1989.
- Stewart, Matthew C. "Ernest Hemingway and World War I: Combatting Recent Psychobiographical Reassessments, Restoring the War." *Papers on Language and Literature*, Spring 2000, pp. 198-217.
- Trout, Steven. "'Where Do We Go from Here?': Ernest Hemingway's 'Soldier's Home' and American Veterans of World War I." *The Hemingway Review*, vol.20. no.1, Fall 2000, pp. 5-21.
- Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. 1962. Vintage, 2004.
- Ullrich, David W. "'What's in a Name?' — Krebs, Crabs, Kraut: the Multivalence of 'Krebs' in Hemingway's 'Soldier's Home'." *Studies in Short Fiction*, vol.29, no.3, 1992, pp. 369-75.
- 板橋好枝 『『兵士の故郷』——無力化された言語』『ヘミングウェイの時代 短編小説を読む』彩流社1999年 77-106頁。
- 河田英介 「胡乱なクレプスの母への執心、二重化される帰還不可能性——アーネスト・ヘミングウェイ "Soldier's Home" 論」 *Strata* 25. 2011年 23-43頁。
- 野間正二 『「グレート・ギャツビー」の読み方』創元社2008年。

【付記】本論文は第56回日本アメリカ文学学会全国大会（鹿児島大学・2017年10月14日）で口頭発表をしたものを修正したものです。

（のま しょうじ 英米学科）

2018年10月25日受理

論文

田漢の歴史話劇における材源と創作に関する考察： 『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を中心に

楊 韜

〔抄 録〕

本稿は、田漢の歴史話劇作品『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『中日議和紀略』や『清光緒朝中日交渉史料』との比較を行い、そこから見られる田漢の創作活動を考察した。1938年に創作した『春帆楼上的対話』の内容は、全面的に『中日議和紀略』を用いたと考えられるが、田漢は主に、①登場人物の表情や仕草に関する描写、②劇上演時のナレーションと思われる台詞、という二点から独自の創作を加えた。これは「劇本荒」のニーズ及び当時の政治的背景に応じるように創作されたと思われる。一方、1948年に創作した『朝鮮風雲』は長いスパンで、朝鮮半島の数十年に渡る歴史を描いた長編作品であるが、『清光緒朝中日交渉史料』をそのまま用いた箇所は少なく、単一の材源（史料）に依拠して創作したとは考えにくい。ただし、『春帆楼上的対話』から『朝鮮風雲』まで、田漢が歴史話劇創作をめぐって、材源と創作の間で常に模索し続けていたのは間違いない。

キーワード 田漢、歴史話劇、『春帆楼上的対話』、『朝鮮風雲』、材源

1 はじめに

本稿では、田漢⁽¹⁾の話劇作品『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を中心に、その歴史劇作品に用いられたと思われる材源及びそれに関する田漢の創作活動について、初歩的な考察を試みる。

周知のように、十九世紀七十年代以降、中国（清朝）と冊封関係で結ばれている諸隣国に対して、欧米列強及び日本といった新興国は次第に侵略を活発させた。1883年に勃発した清仏戦争はその一連の成り行きにおける重要な転換点であった。一方、1871年に清朝と「日清修好条約」を結んだ日本は、1874年の台湾出兵、1875年の江華島事件を経て、朝鮮に対する侵略の動

田漢の歴史話劇における材源と創作に関する考察：『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を中心に（楊 韜）

きを一層強めた。1882年、ソウルで壬午の軍乱が発生し、朝鮮側の要請を受けた清朝は兵士を送り反乱軍を弾圧し、大院君を天津に拉致する一方、閔妃派を復権させた。その後の甲申政変も清朝の軍隊によって潰された。しかし、朝鮮における清朝勢力の優位は長く続かなかった。1894年に発生した朝鮮南部甲午農民戦争後の朝鮮出兵を機に、日本は清国の艦隊を奇襲し、8月に両国は宣戦布告した。その結果は日本の大勝だった。1895年3月20日、下関の春帆楼で休戦交渉が始まり、4月17日に日清講和条約（日本側では「下関条約」、中国側では「馬関条約」）の調印に至った。この日清戦争の敗戦によって、中国は朝鮮に対する宗主権を失っただけでなく、台湾などの領地の割譲や膨大な賠償金を取り決められ、深刻な危機に陥った。田漢の歴史話劇『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』は、まさに上記の歴史を題材とした作品である。（表1参照）

本稿では、まず、『春帆楼上的対話』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『中日議和紀略』との比較を行い、さらにその異同から田漢の創作痕跡を分析する。次に同じく、『朝鮮風雲』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『清光緒朝中日交渉史料』との比較を行い、そこから見られる創作痕跡を考察する。さらに、それぞれの作品における台詞にみられる特徴や登場人物の設定などについても分析する。最後に、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』という異なる時期に創作された両作品を、主題の関連性・ストーリーの構成と展開における差異・創作時期の時代背景など、複数の側面から比較し、田漢の歴史話劇の特徴に関する検討を行う。

表1 『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の概況

	『春帆楼上的対話』	『朝鮮風雲』
創作時期	1938年2月	1948年
初版情報	『最近救亡戯劇選集』（武漢・怒吼出版社、1938年4月）所収	『人民戯劇』第1巻第4号、1950年
区分	短劇（三つのシーン）	13幕
舞台設定	日本・下関（春帆楼）	朝鮮・漢城（郊外、日本公使館、景福宮、景祐宮）、中国・天津（直隸総督署）、中国・北京（紫禁城）、ベトナム・保勝（劉永福軍営）、日本・東京（黒田清隆公邸）
時代背景	光緒21（1895）年2月28日～3月21日	光緒8（1882）年～光緒11（1885）年
主要登場人物	（中国）李鴻章 （日本）伊藤博文	（中国）李鴻章、翁同龢、光緒帝、西太后、袁世凱、吳大澂、伍廷芳、劉永福 （日本）伊藤博文、黒田清隆、山県有朋、井上馨、榎本武揚 （朝鮮）大院君、閔妃、金玉均

出所：『田漢全集』に基づき、筆者作成。

2 『春帆楼上的対話』における材源と創作

『春帆楼上的対話』は全部で三つのシーンしかない極めてコンパクトな短篇話劇である。登場人物も李鴻章と伊藤博文の二人だけであり、全編は李鴻章と伊藤博文の会話によって構成されている。以下、まず『中日議和紀略』との比較を通して、この作品にみられる田漢の創作痕跡を一部例として表2に示しておく。

表2 『春帆楼上的対話』にみられる田漢の創作痕跡の一部例

	『春帆楼上的対話』	『中日議和紀略』	『下関春帆楼における両雄の会見』における邦訳(参照)
例1	李：台湾多是潮州和漳、泉一帶の客民、民風非常強悍の。 伊藤：台湾還有生蕃？ 李：對哪、生蕃占十分之六、其余的都是客民。貴大臣提起台湾、想必有占拋那兒的意思、因此貴国不願停戰、可是那樣一來英国一定不甘心、前面說的恐怕有損別国的權利、正是這意思。守不了台湾又將怎樣呢？	李云台湾係潮州漳泉客民遷往最為強悍。 伊云台湾尚有生番。 李云生番居十之六余皆客民貴大臣提及台湾其遂有往踞之心不願停戰者因此英国將不甘心前所言恐損他国權利正指此耳。 李云不守則又如何。	台湾は潮州漳泉の客民が遷り住めるものにて最も強悍である。 台湾には未だ尚ほ生蕃ありや。 生蕃は十中の六余に居りて皆客民である、貴大臣は台湾迄も手を延ばし遂に攻め取る積りか、即ち休戦を望まれなかつたのも夫れが為めであらうが、英国は此の議に甘んじない、前に申した他国の權利を恐る云々とは正しく此の辺の事であつた。
例2	李：台湾瘴氣極大、從前貴国兵在那兒傷之極多、所以台湾人大概都吃鴉片煙以避瘴氣。 伊藤：瞧我們日後占領台湾、一定禁鴉片。 李：台湾人抽鴉片不是一天的事。 伊藤：沒有鴉片以前台湾也有居民。日本鴉片進口禁令極嚴、所以沒有吸煙的人。 李：佩服之至。	李云台地瘴氣甚大前日兵在台傷亡甚多所以台民大概吸食鴉片煙以避瘴氣。 伊云但看我日後拋台必禁鴉片。 李云台民吸煙由來久矣。 伊云鴉片未出台湾亦有居民日本鴉片進口禁令甚嚴故無吸煙之人。 李云至為佩服。	台湾は其の上瘴癘の毒氣多く前年も日本軍台湾に行きて傷亡した者少ないが台湾住民は大概阿片煙を喫食するが故に其の毒氣を免れて居る。 御覽あれ我日本が台湾を占領せば屹度阿片を禁じて御目に懸くべし。台湾住民の阿片を喫食するのは由來久しき事なれば之を禁ずる事は甚だ難しい。 阿片と云うものが世に出現しない以前にも台湾には住民が在つた筈、我日本の如きは阿片の輸入に就て禁令嚴重である為め誰一人も喫煙する者はない。 感服の至りで御ざる。
例3	伊藤：交接之時、六月為期太久、可限一月……此約一經互換、台湾即交日本。 李：一月太快。 伊藤：一月够了。 李：頭緒紛繁、至少要兩月、才可辦妥。台湾已經是貴国口中之物了、何必那樣緊急。	李云一月之限過促總署與我遠隔台湾不能深知情形最好中国派台湾巡撫與日本大員即在台湾議明交接章程其時換約後兩国和好何事不可互商。 伊云一月足矣。	一箇月の期限は余りに急である、總理衙門も拙者も台湾とは遠隔の所に在るを以つて深く其の情形を知る能はざれば、最も好きは中国は台湾巡撫を派遣して、日本の大官と與に台湾に於て受渡しの章程を議するにあり、其の時は条約批准交換後にて兩国和好の事なれば

伊藤：還沒下咽、餓得很。 李：兩万万賠款也可以療飢了。	李云頭緒紛繁兩月方 寬辦事較妥貴国何必 急急台灣已是口中之 物。 伊云尚未下咽餓甚。 李云兩万万足可療飢 換約後尚須請旨派員 一月之期甚促。	互いに商議するに差聞へなかるべし。左様するには一箇月間あれば充分である。 種々混雜の折柄なれば二箇月は猶予して緩々万事を処置しても好き筈なるに、貴国は何故左様に火急にせらるのか、台湾は既に口の中物では御ざらぬか。 併し未だ咽から下らず、餓に堪へぬ。 貳億万両もあれば餓を凌ぐに充分であらう、交換の後尚ほ我皇帝の旨をも請ふて官吏を派することになれば一箇月の期限は余りに急である。
--------------------------------	---	---

出所：『春帆楼上的対話』・『中日議和紀略』・『下関春帆楼における両雄の会見』に基づき、筆者作成。

表2から分かるように、『春帆楼上的対話』における李鴻章と伊藤博文の会話は、『中日議和紀略』に記述したものとほとんど同じである。一部の箇所において、より口語文体に近い表現への改変が見られる。郭沫若は1943年に「歴史・史劇・現実」と題する論文を発表し、そのなかで「史劇用語は多少制限があり……根幹となるのは現代語、そうでなければ話劇とは成立しない」⁽²⁾と指摘し、歴史話劇における現代語（口語文体）の使用を推奨している。この点に関しては、田漢も同じような姿勢で実践している。次に、登場人物の表情や仕草に関する描写をピックアップして、表3に示しておく。

表3 登場人物の表情や仕草に関する描写

李鴻章	伊藤博文
苦笑（苦笑い）	帶幽默的奸笑（ユーモラスで陰険に笑う）
吃惊（驚く）	譏弄地（人をばかにするように）
生气（怒る）	有些不耐（面倒くさそうな表情）
興奮地（興奮して）	凶狠地（恐ろしい）
气愤（憤慨する）	冷酷地（冷酷な）
強硬（強硬に）	得意（満足するように）
	咄咄逼人（気迫に満ちて人に迫る）
	急道歉（急に謝る）
	変色（顔色を変える）
	躊躇滿志地（得意満面）

出所：『春帆楼上的対話』に基づき、筆者作成。

表3では、『春帆楼上的対話』台本にあった登場人物の表情や仕草に関する描写を比較しているが、分量的には伊藤博文に関するものがやや多いことがわかる。田漢は、二人の登場人物を意図的に区分して描写しているように思われる。李鴻章に関しては、交渉中の伊藤博文に対する憤慨や不満を中心に表現している。一方、伊藤博文に関しては、その冷酷さや得意満面の様子を中心に表現している。つまり、清朝と日本の外交交渉だが、その交渉に用いた言説から当事者の両国の立場を「戦勝国-敗戦国」或いは「上-下」に分けるように見立てている。李鴻章という歴史人物（外交家）に関しては、中国では一般的に「弱腰」とのレッテルが貼られているが、田漢はどのように看着いるだろう。李鴻章について、田漢は次のように評したことがある。

李鴻章は当然当時腐敗した清朝朝廷の代表的な大官僚である。しかし、彼は対日政策について全く見解をもっていないわけでもない。琉球-台湾事件や清仏戦争以降、李鴻章は欧州と日本からの圧力には相当警戒しているし、奮起してつとめ励むことを考えた。彼らは工場や鉱山を開き、近代式の海軍を建設し始め、人材を育成し、軍艦や大砲を購入し、軍港を建築し、一定規模の成果を生み出した。(中略) 光緒20年に戦争が勃発し、中国海軍は七千トン級の世界第二水準の艦隊を持っているが、他はすべてにおいて日本より後れている。李鴻章は当時の現状を把握しているため、対日作戦を主張せず(欧米) 帝国主義の干渉に頼って平和の局面を保ちたかった⁽³⁾。

以上の評論からわかるように、田漢は李鴻章に対して完全否定の態度を取っていない。李鴻章の外交活動にある政治的歴史背景を踏まえて考えなければならないと主張している。田漢のこのような態度は、彼の創作にも影響していると考ええる。

次に、『春帆楼上的対話』台本から劇上演時のナレーションと思われる台詞をピックアップしてみたい。

○注意、台湾既属中国領土、生蕃殺死外人、何至与中国無涉、這一句話、就断送了台湾！
(気を付けろ、台湾が中国領なら、生蕃が外人を殺した場合、中国と関係ないわけがない。この一言で台湾を失ってしまった！)

○李鴻章是書呆子、不知敵人的目的原在永不讓中国壮大起来！（李鴻章は役に立たない読書人に過ぎず、敵の本来の目的が中国を永遠に強くさせないことであるのかさえ分らない。）

○這老外交家說出笨話来了（老外交家はこのような間抜けなことを言い出した。）

田漢の歴史話劇における材源と創作に関する考察：『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を中心に（楊 韜）

○瞧今日日軍所到之处不僅公然販売鴉片且引誘我民衆吸食白面紅丸、這侵略者愈趨下流了！（今日日本軍のいる所では公然と鴉片を販売するだけでなく、我々の民衆を誘惑し毒薬を飲ませている。侵略者はますます卑しくなった！）

○不談台湾了、只談賠款数目（台湾はもうさて置き、賠償金額だけ話そう）

○他拿出一紙文件（彼は一枚の文書を取り出した）

○何等傷心事以談笑出之！（このような悲しくて悔しいことなのに、笑って片づけるなんて、よくもできたもんだ！）

○台湾、我祖宗開辟的這一南海的天地、就這樣斷送在這餓狼口里四十三年了！直到今日才受了我空軍的訪問。（台湾、我々の祖先が開拓した南海の天地を、このように凶悪な日本狼に飲み込まれた。43年経った今日、ようやく我が国の空軍が訪れた。）

以上の台詞は、観衆に向けたナレーションだと推測する。このようなナレーションを導入して、ストーリーの展開を分かりやすくする効果があると同時に、李・伊藤交渉によって台湾が日本に割譲された事実が強調され、日本に対する憎悪感を高揚させる意図が見られる。

『春帆楼上的対話』は台湾の割譲という単一のテーマを作品全体に行き渡るように構成し、展開している。『中日議和紀略』の一部をほとんどそのまま用いているが、『中日議和紀略』のなかで述べられている内容の一部にしか過ぎない。ここには、おそらく田漢の意図があっただろう。すなわち、台湾割譲を作品の唯一のテーマにすることによって、隙のないストーリーとなり、焦点をあてる効果がある。また、登場人物も李鴻章と伊藤博文の二人のみにすることで、それぞれの人物像の差異をより鮮明に描き出すことを実現している。観衆にとっても、このような処理を通して、物語における登場人物たちの衝突する一瞬（複数回）がよりインパクトを与えられることになる。

3 『朝鮮風雲』における材源と創作

次に、『朝鮮風雲』について具体的に見てみたい。『春帆楼上的対話』と異なり、『朝鮮風雲』は13幕の長編劇作品となっている。劇中の舞台は漢城・北京・天津・東京など複数に散在しており、登場人物も朝鮮の王族や一般庶民から中国と日本の皇室や重臣まで、合計20人以上に上る。この作品の内容が豊富かつ紙幅（文章の長さ）が大きいから、単一の材源のみ使用したとは考えにくい。ここでは、主に『清光緒朝中日交渉史料』との比較を通して、この作品の第九

幕にみられる田漢の創作痕跡を一部例として表4に示しておく。

表4 『朝鮮風雲』(第九幕)にみられる田漢の創作痕跡の一例

『朝鮮風雲』(第九幕)	『清光緒朝中日交渉史料』
李鴻章：這次朝鮮事件可以說彼此都有不是。倘使說敵国帶兵官得処罰、那么貴国竹添公使的過失又該怎麼辦呢？ 伊藤博文：竹添進宮是奉了朝鮮国王手諭、不能說他不對。貴国駐防軍開槍射擊敵国的官兵、不能不辦。 李鴻章：中国的駐防軍系朝鮮大臣的請托才入宮保護国王、并没有同貴国官兵開槍的意思。不料開到宮門貴国兵和朝鮮乱党向我国兵開槍、我們才自衛的、也不能說不對。 伊藤博文：敵国的官兵在宮里、中間隔着朝鮮兵、倘使日本兵先開槍必定先打的朝鮮兵、爾不是中国兵。 吳大澂：中国兵的前面既是朝鮮兵、又怎么能打到日本兵？拠本大臣調查、當時把守宮門的朝鮮兵是貴国人訓練的前後營、所以金玉均引他們入宮作政變的主力、敵国人訓練的左右營和江華營都是在宮外、開槍射擊敵国兵的朝鮮兵實際跟貴国兵是一氣的。	李：若要懲处中国營官、竹添之錯当如何辦理？ 伊藤：竹添入宮、実奉朝王之諭、不能責其不合。中国營兵不応打我官兵、所以要辦營官之咎。 李：中国營勇并未打日本之兵。 伊藤：我兵在內、華兵在外、中間又有朝兵、我兵若先開槍、必打朝兵、是以并非兵先開槍也。 吳：華兵之前既有朝兵、則華兵開槍、只能打朝兵、如何能打到日兵？ 李：如有意打日兵、何必先行致信？既有此信、則中国營官決非有心開戰。 伊藤：中国營兵傷我民人之事、作何辦理？ 李：前日所見口供內、語多影響、傷害之人大半得自伝聞、并無实在証拠、何能定案？

出所：『朝鮮風雲』・『清光緒朝中日交渉史料』に基づき、筆者作成。

『春帆楼上的對話』と違い、『朝鮮風雲』のほうは、『清光緒朝中日交渉史料』をそのまま用いることは少ない。比較してみると、重要な事実や発言を『清光緒朝中日交渉史料』と一致するようにしているが、事象の時間的・空間的描写が異なる箇所も少なくない。田漢は複雑な歴史事実を個々に把握したうえ、彼なりに再構成して、劇に相応しい編成にしている。また、登場人物の登場する順番も、『清光緒朝中日交渉史料』と異なる箇所がある。ちなみに、上記表4に示された内容(竹添公使の朝鮮王宮進入前後の詳細)について、日本の外務省が編纂した『日本外交文書』にもみられるが、同じく歴史史料として多くの研究者に利用されている『清光緒朝中日交渉史料』と比較しても両者が完全に一致しているわけではない。もう一つ違う点として挙げられるのは、既述したように、『春帆楼上的對話』には登場人物の表情や仕草に関する描写があるのに対して、『朝鮮風雲』にはそのような描写がほとんど見られない。また、観衆向けに説明するようなナレーションもない。ただ、『朝鮮風雲』において、幕と幕の間に、年代の跳躍が激しく、実際に上演するとき、果たして観衆にとって理解しやすいものだったのか、いささか疑問を感じざるを得ない。

4 材源と創作の間における模索（『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』を比較して）

1960年10月18日、中国戯劇家協会の主催で『『甲午海戦』座談会』という話劇関係者を中心とする文芸イベントが開かれた。この座談会において、田漢は「談話劇『甲午海戦』」と題した発言を行った。そのなかで、田漢は次のように述べている。

私は昔からこの題材（甲午海戦）を扱う計画があった。黄海での戦いだけでなく、政治・軍事・外交などの諸側面にかかわることを書こうと考えた。舞台も朝鮮から北京・天津・黄海・平壤・長崎・台湾まで多くの地域を含める。しかし、歴史に関する考えが成熟しなかったため、今日に至るまで書けなかった⁽⁴⁾。

田漢は以前から近代朝鮮半島をめぐる作品を三部曲で創作する予定があったが、実際に今日に確認できるのは『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』のみである。この二作品は田漢が二段階にわけて創ったものとして看做すことができる一方、三部曲という大きな計画は完成できないままその劇作家としての生涯を終えたともいえる。また、『春帆楼上的対話』はのちに『朝鮮風雲』のような長編作品を創作するための試作とも見て取れる。1938年に創作した『春帆楼上的対話』の内容は、全面的に『中日議和紀略』を用いたと考えられる。田漢の創作は主に、①登場人物の表情や仕草に関する描写、②劇上演時のナレーションと思われる台詞、という二点にあった。一方、1948年に創作した『朝鮮風雲』は長いスパンで、朝鮮半島の数十年に渡る歴史を描いた長編作品である。ストーリーのスケール、登場人物の多さ、複数舞台に渡る移動性などから考えると、「大作」として評されてもおかしくないように思われる。しかし、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』のいずれも、田漢によって創作されたほかの作品に埋もれたように、これまでにほとんど言及もされず、関連する評価もまったく見られなかった。

次に、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の両作品の創作時期の時代背景についても簡単に触れたい。『春帆楼上的対話』は極めて短い作品であり、田漢の劇作家としての能力や意欲から考えると不思議にも思える。それは、その創作時期と関連していたのではないかと思う。すなわち、1938年前後は、「劇本荒」と呼ばれたように、中国の話劇界において、著しく作品（台本）不足の現象が現れた。それに対応するように、登場人物が少なくかつ台詞が短い、といった上演までの準備期間が短縮できる「独幕劇（一幕劇）」作品が量産された。さらに1938年は、日本軍の侵略拡大によって南京・武漢・広州などが次々と陥落させられ、中国が「亡国」という最大の危機に瀕した時期でもあった。このままだと国土を失ってしまう、といった危機感が中国民衆のなかで広がる一方、国民党内で対日妥協を主張する汪兆銘一派の動きも徐々に顕著となった。『春帆楼上的対話』は、このような背景に、抗戦における短い話劇のニーズに応じるように創作されたと思う。対して、1948年に創作した『朝鮮風雲』は日中戦争が

終結したあとの国共内戦期に創作された作品である。陳瘦竹はかつて田漢の劇作品を論じた際、『朝鮮風雲』の創作動機として、1950年代初頭のアメリカによる朝鮮侵攻及び台湾海峡への米軍第七艦隊の派遣といった時代背景に応じることだったと論じている⁽⁵⁾。しかし、このような指摘に関しては、筆者は疑問を抱く。なぜなら、『田漢全集』では『朝鮮風雲』の創作時期を1948年と明記しており、なんらかの事情によって1950年になってから『人民戯劇』第1巻第4号に掲載されたことを配慮しても、田漢の創作動機を1950年代初期の朝鮮戦争と直接に結びつくことの説得力は低い。記述したように、1960年10月18日の座談会における田漢自身の発言からも、彼はもっと早い時期から、すでにこのテーマ（朝鮮半島関連題材）の作品を創る考えがあったことがわかる。したがって、『朝鮮風雲』は三部曲という大きな創作計画のもと、長年にわたる材源（史料）の積み重ねによってはじめて実現したものと思われる。『春帆楼上の対話』から『朝鮮風雲』までの十年に渡る資料の収集、ストーリーの構成、執筆による完成は、田漢の歴史話劇創作という遠征の道のりであり、材源と創作の間に長く続いた模索とも言える。

最後に、田漢の教育歴（日本留学期を含む）、劇作家としての活動経歴、関連書物の出版年代などを鑑み、田漢の歴史話劇作品の創作活動において、参照した可能性のある材源（史料）を抽出し、下記の一覧表（表5）を作成して提示することにしておく。

表5 田漢が参照した可能性のある材源（史料）

中国語によるもの	日本語によるもの	1960年10月18日田漢が言及したもの
○李鴻章編『中日議和紀略』 ○蔡爾康輯『中東戦紀本末』 ○洪興全『説倭伝』（後に『中東大戦演義』と改名） ○故宮博物院編『清光緒朝中日交渉史料』 ○黄海安『劉永福歴史草』 ○翁同龢『翁文恭公日記』 ○袁世凱等『袁世凱等致李鴻藻稟牘』 ○陳裕菁輯『朝鮮壬午甲申事件之文件』 ○陳信徳訳『東郷平八郎撃沈高陞号日記』 ○著者不詳『金玉均甲申日記』 ○張雁深・張緑子合訳『朝鮮京城事变始末書』 ○張雁深・張緑子合訳『井上特派全権大使復命書』 ○張雁深・張緑子合訳『伊藤特派全権大使復命書』 ○王炳耀輯『甲午中日戦輯』	○伊藤博文『秘書類纂』 ○陸奥宗光『蹇蹇録』 ○大日本帝国議会誌刊行会『大日本帝国議会誌』 ○外務省編纂『日本外交文書』 ○小笠原長生『東郷平八郎伝』 ○徳富蘆花『不如帰』	○『清史稿・列伝二百四十七』 ○日本人による『東郷平八郎伝』 ○林紓訳『不如帰』

出所：筆者作成。

5 結びに

以上、『春帆楼上的対話』と『朝鮮風雲』の台本を精査し、材源として用いられたと思われる『中日議和紀略』や『清光緒朝中日交渉史料』との比較を行い、そこから見られる田漢の創作活動を考察した。1938年に創作した『春帆楼上的対話』の内容は、全面的に『中日議和紀略』を用いたと考えられるが、田漢は主に、①登場人物の表情や仕草に関する描写、②劇上演時のナレーションと思われる台詞、という二点から独自の創作を加えた。これは「劇本荒」のニーズ及び当時の政治的背景に応じるように創作されたと思われる。一方、1948年に創作した『朝鮮風雲』は長いスパンで、朝鮮半島の数十年に渡る歴史を描いた長編作品であるが、『清光緒朝中日交渉史料』をそのまま用いた箇所は少なく、単一の材源（史料）に依拠して創作したとは考えにくい。ただし、『春帆楼上的対話』から『朝鮮風雲』まで、田漢が歴史話劇創作をめぐる、材源と創作の間で常に模索し続けていたのは間違いない。

1960年末、呉晗が発表した「歴史劇を語る」を契機に歴史劇論争が起きた。既述した1960年10月の『『甲午海戦』座談会』はこの歴史劇論争において特に重要視すべきものである。瀬戸宏が「この歴史劇論争は、直接には一九五〇年代後半以後盛んになってきた歴史劇の創作をどう考えるかをめぐる論争である。しかし、その背景には狭隘な政治的実用主義から学術・芸術の自律性を守ろうとする無意識の衝動があったと考えるべき」⁽⁶⁾と指摘しているのも傾聴に値する。1950年代以降田漢は『関漢卿』や『文成公主』といった歴史話劇作品を創作した。『春帆楼上的対話』から『朝鮮風雲』までの10年と『関漢卿』や『文成公主』を相次いで創作した1950年から1960年代半ばまでの時期との比較も視野に入れ、より具体的に検討するべきであろう。今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 田漢（1898～1968）は、近代中国の著名な劇作家・詩人・映画人である。湖南省長沙に生まれ、長沙師範学校を経て1916年日本に留学、東京高等師範学校で学んだ。帰国後、『南国半月刊』を創刊、のちに南国電影劇社・南国芸術学院を開設し、文芸教育活動の傍ら多くの話劇作品や映画シナリオを執筆した。中華人民共和国建国後、国务院文化部戯曲改進局長や中国戯劇家協会主席などを歴任した。
- (2) 『戯劇月報』1943年第1巻第4期。
- (3) 『田漢全集』第16巻、473頁。
- (4) 『田漢全集』第16巻、476頁。
- (5) 陳瘦竹（1979）、63頁及び162頁。
- (6) 瀬戸宏（2018）、176頁。

〔文献一覧〕

＜日本語（五十音順）＞

- 小笠原長生『東郷平八郎伝』（改造社、1931）
海野福寿『韓国併合』（岩波書店、1995）

- 海野福寿編集・解説『韓国併合：外交史料』（不二出版、2003）
鹿島守之助『日清戦争と三国干渉』（鹿島研究所出版会、1970）
外務省編纂『日本外交文書 明治 第十八巻』（巖南堂書店、1950）
瀬戸宏『中国の現代演劇：中国話劇史概況』（東方書店、2018）
竹村則行編著『説倭伝』（花書院、2000）
竹村則行「清末小説『説倭伝』に全文転載された李鴻章編『中日議和紀略』をめぐって」竹村則行
編著『説倭伝』（花書院、2000）：247-267
大日本帝国議会誌刊行会『大日本帝国議会誌』（1926～1930）
徳富蘆花『不入帰』（民友社、1903）
森山茂徳『日韓併合』（吉川弘文館、1992）
李鴻章編纂・大園市藏編訳『下関春帆楼における両雄の会見』（明治史蹟研究会、1925）
陸奥宗光『蹇蹇録』（岩波書店、1933）

〈中国語（ピンインローマ字順）〉

- 蔡爾康輯「中東戦紀本末」楊家駱主編『中日戦争文献彙編 第五冊』（鼎文書局、1973）
陳瘦竹『現代劇作家散論』（江蘇人民出版社、1979）
郭沫若「歴史・史劇・現実」『戲劇月報』1943年第1巻第4期
故宮博物院編「清光緒朝中日交渉史料（選録）」楊家駱主編『中日戦争文献彙編 第一冊』（鼎文書局、1973）
田漢『田漢全集 第四巻』（花山文芸出版社、2000）
田漢『田漢全集 第六巻』（花山文芸出版社、2000）
田漢『田漢全集 第十六巻』（花山文芸出版社、2000）
田漢『田漢全集 第二十巻』（花山文芸出版社、2000）
王炳耀輯「甲午中日戦輯」沈雲龍主編『近代中国史料叢刊 第一輯』（文海出版社、1966）
李鴻章編「中日議和紀略」中国野史集成・統編編委会・四川大学図書館編『中国野史集成統編 29』（巴蜀書社、2000）
『戲劇報』編集部編『歴史劇論集 第一集』（上海文芸出版社、1962）

〔付記〕

本稿は、科学研究費【基盤研究（B）】『中国建国前夜のプロパガンダ・メディア表象』（研究代表者：星野幸代）の研究分担金の交付を受けて行った研究成果の一部である。

（よう とう 中国学科）

2018年11月15日受理

論文

古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について

——コノハナノサクヤヒメを中心に——

黄 當 時

〔抄 録〕

古代日本語の船舶の名称には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。これらの単語には、適切な海の民の視点、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識を持てば正確に理解できるものがある。

茂在寅男氏は、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、井上夢間氏は、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、ハワイ語を用いて簡潔に説明したが、その知見は、言語面からの研究に突破口を開くものであった。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙（外来語）という視点を加えることで、コノハナノサクヤヒメが「大型船＋労働＋貴婦人」の意味構造であろうことを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 竹籠、亀甲、無目籠、大目鹿籠、コノハナノサクヤヒメ

1. はじめに

コノハナノサクヤヒメは、『古事記』『日本書紀』によると、それぞれ漢字で、木花之佐久夜毘売、木花之開耶姫、と表記される。

この単語は、『日本国語大辞典』（第五巻 p. 976）に次のように説明されている。

このはなのさくや-びめ【木花開耶姫・木花之佐久夜毘売】記紀などに見える神。大山祇神（おおやまつみのかみ）の娘。磐長姫（いわながひめ）の妹。美しい容姿を天孫瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に好まれてその妃となり、火酢芹命（ほのすせりのみこと）、火

明命（ほのあかりのみこと）、彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）を生む。神吾田鹿葦津姫（かんあたかしつひめ）。神阿多都比売（かんあたつひめ）。このはなさくやびめ。

『大辭典』（第11巻 p. 208）は、次のように説明している¹⁰¹⁾。

コノハナノサクヤヒメ 木花之佐久夜毘賣・木花開耶姫 大山祇神の女。瓊々杵尊の妃。一名、^{かあしつひめ}鹿葦津姫・^{かむあたつひめ}神吾田津姫。木花は櫻花のこと、開耶は^{さきはや}開光映にて咲き匂ふこと。即ち櫻花の^て光り^は映ゆる如く麗しき女神の意。記・上「木花之佐久夜毘賣」神代紀「時彼國有美人、名曰鹿葦津姫、（亦名木花開耶姫）、……美人對曰、妾是大山祇神所生兒也、皇孫因而幸之……生火闌降命・彦火々出見尊・火明命」

『日本国語大辭典』は、コノハナノサクヤヒメという名前の由来や意味については説明がない。一方、『大辭典』は大胆な説明をしているが、文字表記にすぎただけの説明ではないか、説明とも言えないのではないか、と思われるような説明をしている。

この人物にこの名前が付けられた頃に用いられていた言語は、恐らく、忘れ（去）られたであろうが、この名称に失われた言語の痕跡が残されている可能性は、ないのであろうか。古代日本語の船舶の名称には、いわゆる日本語一視点のみでは正確に理解できないものがあるが、この人物の名前が船舶の名称に由来する可能性は、ないのであろうか。

海の経験の乏しい私たちには、この問題について判断する能力や知識が欠けているかも知れないが、私たちの視点を、いわゆる海の民の視点にもう少しでも近づけることができさえすれば、解析対象を見極める能力や解析に必要な知識は、入手可能ではないだろうか。いわゆる海の民の視点とは、具体的には、彼らが用いたであろう言語や文化についての知識ということになろう。小論では、管見に入った有用な知見を手掛かりに、必要にして十分な程度の知識を入手しつつ、言語学的視点からコノハナノサクヤヒメという名前の由来を探ってみたい。

2. 先行研究

古代日本語における船舶の名称については、言語学的視点からの研究は貧弱で見るべきものがほとんどないが、二人の研究者が「枯野」解明の過程で示した知見が有用と思われるので、見ておきたい。

まず、茂在寅男氏は、人間は有史以前から驚くほどの広範囲にわたって航海や漂流によって移動していた、と考えている。その研究は、日本語の語彙にも及び、『記』『紀』の物語が成立した頃は、ある種の高速船を「カヌー」または「カノー」と呼んでいたもので、その当て字として「枯野」（『古事記』）、「枯野、輕野」（『日本書紀』）が使われたのではないかと推論してい

る²⁰¹⁾。現在の「カヌー」という言葉は、コロンブスの航海以後にカリブ海の原住民から伝えられたアラワク語が元で、さらにその語源をたどると北太平洋環流に関係してくる、と言う。そして、『記』『紀』の中に古代ポリネシア語が多く混じっている、と述べ、様々な例を挙げるが、「枯野」については、具体的な手掛かりを示さなかった²⁰²⁾。その説は、重要な問題提起ではあったが、それ以上の知見が出てこなければ、面白い考えだ、で終わってしまうものであった。

次いで、井上夢間氏は²⁰³⁾、「枯野」等の言葉とカヌーとの関係について、種々の事例を紹介しつつ、基本的に重要なことがらを次のように簡潔に説明している²⁰⁴⁾。

私も大筋としては同じ考えですが、茂在氏がいささか乱暴にこれらの語を一括して同一語とされているのに対し、私はこれらはそれぞれ異なった語で、ポリネシア語の中のハワイ語によって解釈が可能であると考えています。

カヌーは、一般的にはハワイ語で「ワア、WAA」と呼ばれます（ハワイ語よりも古い時期に原ポリネシア語から分かれて変化したとされるサモア語では「ヴァ、VA'A」、ハワイ語よりも新しい時期に原ポリネシア語から分かれたが、その後変化が停止したと考えられるマオリ語では「ワカ、WAKA」）。しかし、カヌーをその種類によって区別する場合には、それぞれ呼び方が異なります。

ハワイ語で、一つのアウトリガーをもったカヌーを「カウカヒ、KAUKAHI」と呼び、双胴のカタマラン型のカヌーを「カウルア、KAULUA」（マオリ語では、タウルア、TAURUA）と呼びます。ハワイ語の「カヒ、KAHI」は「一つ」の意味、「ルア、LUA」は「二つ」の意味、「カウ、KAU」は「そこに在る、組み込まれている、停泊している」といった意味で、マオリ語のこれに相当する「タウ、TAU」の語には、「キチンとしている、美しい、恋人」といった意味が含まれていることからしますと、この語には「しっかりと作られた・可愛いやつ」といった語感があるのかも知れません。

これらのことからしますと、『古事記』等に出てくる「からの」または「からぬ」、「かるの」は、ハワイ語の

「カウ・ラ・ヌイ」

KAU-LA-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; la = sail; nui = large)、「大きな・帆をもつ・カヌー」

「カウルア・ヌイ」

KAULUA-NUI (kaulua = double canoe; nui = large)、「大きな・双胴のカヌー」の意味と解することができます。

また、「かのう」は、ハワイ語の

「カウ・ヌイ」

KAU-NUI (kau = to place, to set, rest = canoe; nui = large)、「大きな・カヌー」の意味と解することができます。

以上のように、記紀に出てくる言葉で日本語では合理的に解釈できない言葉が、ポリネシア語によって合理的に、実に正確に解釈することができるのです。

井上氏の解明は、言語学的視点からの研究に突破口を開くものであった。氏の画期的な知見により、私たちは、言語学的な根拠を持って古代日本語における船舶の名称について考察することができるようになったのである。氏の知見が私たちの研究の新たな礎となることは、間違いない。ここに引用した知見は、古代日本語における船舶の名称の解明に極めて重要な視点/手掛かりであり、今後の研究に大きく寄与することであろう。

3. 『万葉集』の船名

寺川真知夫氏は、『万葉集』の一部の船について、次のように簡潔にまとめている³⁰¹⁾。

……『万葉集』の巻二十に伊豆手夫禰（四三三六）、伊豆手乃船（四四六〇）と二例伊豆国産の船が詠まれており、奈良時代中期には大阪湾に回航され、使用されていたことが知られる。その船は伊豆手船すなわち伊豆風の船と呼ばれているから、熊野船（巻十二、三一七二）、真熊野之船（巻六、九四四）、真熊野之小船（巻六、一〇三三）、安之我良乎夫禰（巻十四、三三六七）などと同じく、何らかの外見上の特徴を有する船であったに違いない。この四三三六の歌では「防人の堀江こぎつる伊豆手夫禰」とあるから、これを防人の輸送と解し得るなら、その特徴は大量輸送の可能な大型船ではなかったかと思われる。

ここで、井上氏の説くところを手掛かりにして、さらに考察を加えてみたい。

先ず、「伊豆手夫禰」³⁰²⁾と「伊豆手乃船」³⁰³⁾であるが、（四三三六）と（四四六〇）の歌は、次の通りである。

巻第二十（四三三六）

防人の 堀江漕ぎ出る 伊豆手船 梶取る間なく 恋は繁けむ³⁰⁴⁾

巻第二十（四四六〇）

堀江漕ぐ 伊豆手の舟の 梶つくめ 音しば立ちぬ 水脈速みかも³⁰⁵⁾

外来語を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法がある。中国語では、どちらも漢字で表記するが、音訳してみたもののわかりにくいかもしれない、と考えられる場合、

さらに類名を加えてわかりやすくすることがある。特に、音節数が少ないものは、よりわかりやすく安定したものにするために、この手法が採られることが多い。

例えば、beer や card という単語は、「啤」や「卡」という訳で、一応、事足りており、特に単語の一部であれば、問題はない（例：扎啤、〔ジョッキに入れた〕生ビール；信用卡、クレジットカード）。ところが、「啤」や「卡」だけで一つの独立した単語となると、やはりわかりにくさは否めない。そこで、類名の「酒」や「片」を加えて、「啤酒」や「卡片」とするのである。

このような、現代中国語に見られる「外来語＋類名」という表記法は、古代日本語に既に存在している。「手」や「手乃」という訳で、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「夫柁」や「舟」という類名を加えて、「手夫柁」や「手乃舟」としたのである。

歌人が見たものは、どちらも、「手乃」と呼ばれる船である。表記の違いは、(四四六〇)では、「手乃」をそのまま使うことができたが、(四三三六)では、音節数の制約によりやむなく一文字省略せざるをえなかった、ということから生じている。そして、歌人は、一文字省略するに当たって、前置要素「手」を略して後置要素「乃」を残したのではなく、後置要素「乃」を略して前置要素「手」を残したのである。

もちろん、逆に、(四三三六)で「手」と詠まれた船を、(四四六〇)では二音節で詠むために、「手」に「乃」を後置して「手乃」とした、と見なしても一向に差し支えない。

いずれの見方をするにせよ、意味は取れなくとも、修飾語を被修飾語の後に置くという、表層の日本語には見られない語法構造であることは見て取れる。なお、「手」は、その頃の日本語の実相がわからないまま訓みをつつ当てただけであって、歌人が「手」と詠んでいた可能性を排除することはできない。「手」には、た行音の場合、「た」と「て」の二音があり、実際のところ、時代差や地域差さらには個人差により「た」が用いられたり「て」が用いられたりしていた、と考えてよい。

次は、「熊野舟」³⁰⁶⁾、「真熊野之船」³⁰⁷⁾、「真熊野之小船」³⁰⁸⁾であるが、(三一七二)、(〇九四四)、(一〇三三)の歌は、次の通りである。

卷第十二 (三一七二)

浦廻漕ぐ 熊野船着き めづらしく かけて偲はぬ 月も日もなし³⁰⁹⁾

卷第六 (〇九四四)

島隠り 我が漕ぎ来れば ともしかも 大和へ上る ま熊野の船³¹⁰⁾

卷第六 (一〇三三)

御食つ国 志摩の海人ならし ま熊野の 小船^をに乗りて 沖辺漕ぐ見ゆ³¹¹⁾

この三つの船名は、ある同じタイプの船を指している、と考えられる。つまり、(一〇三三)

の「小船」は、「小」という情報を明示しており、(〇九四四)の「船」と(三一七二)の「舟」は、音節数の制約により「小」を略してはいるが、(一〇三三)の「小船」と同じものと理解してよい。

最後は、「安之我良乎夫祢」³¹²⁾であるが、(三三六七)の歌は、次の通りである。

卷十四 (三三六七)

百つ島 足柄^ゑ小舟 あるき多み 目こそ離るらめ 心は思へど³¹³⁾

先の例と同じく、これらの単語も「異文化の語彙（外来語）＋類名」という表記法で書き記されている。「小」や「乎」と訳して、一応、事足りているが、よりわかりやすくするために、「船」や「夫祢」という類名を加えて、「小船」や「乎夫祢」としたのである。

歌人はある船を「を」と詠み「小/乎」と書き記した、と考えるのみでは、重大な事実誤認をする可能性がある。歌人がある船を「こ」と詠み「小/乎」と書き記した可能性は、排除できるものではなく、このケースではむしろ高いのではないだろうか。

後人は、いわゆる海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「小船」や「乎夫祢」の正確な意味がわからず³¹⁴⁾、「小/乎」を接頭語か形容詞と誤解して「を」と訓んだが、熊野の「小船」と足柄の「乎夫祢」は、ともに「こぶね」と詠まれたものを書き記した可能性があるのではないのだろうか。

この文字表記から確実に言えることは、「小/乎」は「を」か「こ」を書き記した（「を」か「こ」の音声を示している）ということだけである。「小/乎」の訓みは「を」一音しかない、と考えるのは、無邪気に過ぎるが、「小/乎」は、考え得る訓みの一つであるのみならず、古代日本語の船舶の名称を研究する上で極めて重要な意味を持っている。研究者は、「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだ、という認識を頭の片隅に置くとよい。

漢字は、形音義の三要素からなるが、表意文字と分類されるように、表意機能が強いので、漢字が理解できる者が、漢字の字形が示唆する意味を考慮せずに情報を解析することは、一般に、容易ではない。この問題もそうだが、漢字が表音に用いられている（ことを見抜かねばならない）ケースでも、字形が示唆する意味で解け（た気分になれば）、思考がそこで停止する。その結果、漢字表記が行われる以前の日本語の実相を見誤ることが間々生じるのである。

歌人は、「小」や「乎」を表音に用いたのであり、表義に用いたのではない、と考えてよい。(三三六七)の原文のように、「乎夫祢」と表記されていれば、字面から舟/船の大きさを連想することはない。ところが、「小舟」と表記されていると、当て字に過ぎないということがわかっていけばよいが、人々が、つい、字形に引かれて、単に「サイズが小さい船」と取ってしまっても無理はない。語感の極めて鋭い一部の人が腑に落ちないと思うことがあっても、漢字の絶大な表意力の前に、「小」と書いてあるから小さいと考えるしかない、と不審の思いを喪

失してしまうのである。

それでは、「手」、「手乃」と「小/乎」は、いずれも船を意味する異文化の語彙（外来語）を音訳したものということになるが、一体どのような言葉に由来するのであろうか。先に引用した井上氏の知見から推測すれば、「手」は「tau」を、「手乃」は「tau-nui」を、そして、「小/乎」は、「kau」を書き記したものであろう。

大型のカヌーと言いたければ、確かに、「手乃 (tau-nui)」が正確な表現である。しかし、実際には、寺川真知夫1980が、大量輸送の可能な大型船ではなかったか、と推測するように (p. 142)、(四三三六) の「手 (tau)」は (四四六〇) の「手乃 (tau-nui)」と同じ大型船を意味しており、大きいことを明言する場合を除き、「手 (tau)」だけでカヌー一般を指したはずである。それは、今日、カヌーという言葉が大小を問わずに使えるのと同じような状況である。このことは、「小/乎 (kau)」についても同様であった、と考えられる。

言語現象として、伊豆では「手 (tau)」が使われ、熊野や足柄では「小/乎 (kau)」が使われていることは、注目に値する。それは、伊豆にはカヌーを「手 (tau)」と呼ぶ人々が、そして、熊野や足柄にはカヌーを「小/乎 (kau)」と呼ぶ人々がいたということを示しているからである。

これで、古代の日本の船舶には、修飾語の「nui、野/乃」を付す大型のもの (kaulua-nui、加良奴/加良怒/枯野/軽野; kau-nui、狩野³¹⁵; tau-nui、手乃³¹⁶) と、「nui」を付さず、大型のものから小型のものまで幅広く使用できるもの (tau、手; kau、小/乎) があったことがわかる³¹⁷。

4. 亀甲

『古事記』(中巻、神武天皇)に、「故、從其国上幸之時、乗亀甲為釣乍打羽拳来人、遇于速吸門」という記述がある。

この一文は、一般に、「そして、その国から上っていらっしゃった時に、亀の背に乗って釣りをしながら袖を振って来る人に、速吸門で出会った」⁴⁰¹、「そして、さらにその国からお上りになった時、亀の甲に乗って釣をしながら左右の袖をはばたいて来る人に、潮流の速い海峡の速吸門でお会いになった」⁴⁰²と口語訳されている。

この物語は、『日本書紀』(巻第三、神武天皇、即位前紀)にも登場する。

原文は、「天皇親帥諸皇子・舟師東征。至速吸之門。時有一漁人、乗艇而至」であり、「天皇は自ら諸皇子・舟軍を率いて、東征の途に就かれた。速吸之門に着かれた時に、一人の漁師がいて、小舟に乗って近づいて来た」と口語訳されている⁴⁰³。

『古事記』の「亀甲」は、『日本書紀』では「艇」と記述されているが、両者は同じものである、と考えてよい。にもかかわらず、これまでは、『古事記』の「亀甲」を、例えば、「亀の

背」や「亀の甲」と解釈し、『日本書紀』の「艇」を、例えば、「小舟」と解釈してきた。両者の意味に乖離があることには気付いていても、手の付けようがなかったのである。

『日本書紀』の「艇」が船舶という情報を伝えていることは、紛れがない。『古事記』の「亀甲」と、『日本書紀』の「艇」とが同じものである以上、「亀甲」は、決して、亀あるいは亀の背ではなく、船舶なのである。つまり、「亀甲」という船なのである。

先に、井上氏の知見を紹介した際に、カヌーを、ハワイ語でカウ (kau) と呼び、マオリ語でタウ (tau) と呼ぶ、と述べた。そして、古代日本語において、kau は、『万葉集』では、「小/乎」と訳されるが、訳語の表記が一文字で、読みも一音であり、わかりにくく不安定である。そこで、よりわかりやすく安定したものにするために、類名を加えて、「小船」や「乎夫称」と表記されている、と述べた。

「甲」は、「小/乎」とやや異なり、長音で、類名を付さないが、その意味は、もうおわかりであろう。kau は、『古事記』のこの物語では、「亀+甲」という形式で、複音節語の後部に置かれている。言わば、「亀カヌー」というような表記である。

『古事記』の「亀甲」が船であることは、自明である。加えて、『日本書紀』も「艇」という情報で船であることを明示している⁴⁰⁴⁾。『記』『紀』ともに、船であることを明示しているにもかかわらず、人々は、海の民の言語や文化についての知識を欠くために、「亀甲」を船に解釈することがどうしてもできなかった。

『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）の竹籠^{たけのこ}という単語は、情報がやや重複する形ながら、「堅間」を竹製の籠^こ (kau) とはっきり説明したものである。籠という漢字は、龍に竹冠を付したものである。海の民は、船を龍と見なし、船を龍舟や龍船、さらには、略して龍とすることがある。龍は、本来は想像上の動物である。そのため、『日本書紀』の編纂者は、想像上の動物という意味を排除しつつも、籠（舟/船）という情報を伝えられる好個の漢字として、籠を使用したのである。籠は、語部の提供したコ (kau) という音声情報と、竹製の籠（舟/船）という意味情報とを伝達できる表記であるが、『日本書紀』の編纂者の漢字に対する造詣の深さには改めて驚きを禁じえない。

『日本書紀』（神代下、第十段、正文）にも、無目籠、という船があり、「籠」は、古訓はカタマであるが、コとも訓む。小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994は、「所謂堅間は、是今の竹籠^{たけのこ}なり」を引いて、「カタマは竹籠^{たけのこ}の意である」と説明するが（p. 156頭注8）、「竹籠^{たけのこ}」を「竹籠^{たけ}」と言い換えるのは、間違っている。両者は、名称も異なり形状も異なる全くの別物である。「竹籠^{たけ}」の訓注が理解できないのは、小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏に限ったことではないが、言い換えるのであれば、竹籠^{たけのこ}とは、竹籠^{たけ}の意である、とすべきであった。

『古事記』の編纂者は、なぜ、わざわざ訓注を施したのであろうか。それは、籠^{かご}と読まれることを危惧したからである。そして、籠^{かご}では、読みが違うのみならず意味も違い理解不能とな

るからである。

訓注は、私たちに理解できなくとも、重要な情報を提供している可能性が高く、よほどの根拠を提示しない限り、無視するものではない。理解できない場合には、ペンディング、とすればよい。このような難問を扱う際、解決を棚上げする知恵が必要である。このケースで言えば、籠こと籠かごとの間に等号を引くことは、思いとどまるべきであったが、これで、私たちが「竹籠たけかご」の解釈に悪戦苦闘することは、もはやない。

以上の通り、古代日本語において、kau は、後に類名が続く場合には「小/乎コウ」と表記され、単語の末尾に置かれる場合には「甲/籠コウ」と表記されていることがわかった。そして、亀甲が、亀の甲コウ (kau)、言わば、亀のカヌー、であることがわかった。

亀は、船舶の一部と見なすには、異質な要素であるが、亀の甲コウ (kau) という船とは、一体どのような船なのであろうか。

情報には、一般に、目で受容するもの（以下、視覚情報）と耳で受容するもの（以下、音声情報）の二種がある⁴⁰⁵⁾。時空を越えた情報の伝達には、電話やテープレコーダがない時代にあつては、視覚情報を使うしかないが、視覚情報は、さらに、文字情報と非文字情報（図像や造形など）に大きく分けられ、文字がなかった頃は、非文字情報が利用された。

唐古・鍵遺跡からこ かが（奈良県磯城郡田原本町）の弥生土器の線刻舟の前方には鳥が描かれている。
東 殿塚古墳ひがしとのづか（奈良県天理市）の円筒埴輪には、三隻の大型船の線刻画が描かれ、2号船は、舳先に鳥が描かれている。珍敷塚古墳めずらしつか（福岡県うきは市）の壁画には、舳先に鳥が大きく描かれている。

古代の日本において、一部の情報は、非文字情報と音声情報の二種の媒体で伝達されている。このケースで言えば、人々は鳥を船に乗せて航海した、という情報が、土器や壁画に彫られた非文字情報と、語部によって代々引き継がれ、後に『記』『紀』などの文字情報に変換された音声情報に共通して保存されているのである。

非文字情報と、後に文字情報に変換された音声情報に共通する情報は、人々は鳥を船に乗せて航海した、ということである。そして、船名を構成する動物は、鳥である。そうすると、この亀は、鳥と解析するしかない。つまり、私たちににとって、亀とは、通常、爬虫類の亀であつて鳥類の亀を意味することはないが、古代日本語ではある種の鳥を亀と呼んでいた、と解析せざるをえない。

古代人が鳥を亀と呼んだ例は、他にも存在するのであろうか。

例えば、古代英語では、turtle は、turtledove の一般的な略称であつた⁴⁰⁶⁾。

“Turtle” was a common archaic English shortening of the name “turtledove.”

turtledove は、通常、キジバトと訳されるが⁴⁰⁷⁾、小論では、亀鴿と訳しておく。そうする

と、全称の turtledove/亀鳩を上略した形が dove/鳩で、下略した形が turtle/亀であることが容易に見て取れる。亀鳩は、考察の便宜のため試みに訳したものであるが、古代日本語には、上略した形の鳩や、下略した形の亀が存在したのみならず⁴⁰⁸⁾、全称の亀鳩も存在したのではないだろうか。ハワイ語には、kuhukukū という単語があり、鳩もしくは亀鳩を意味する (kuhukukū. n. Dove, turtledove)⁴⁰⁹⁾。kuhukukū が、turtle と訳された例を挙げておく⁴¹⁰⁾。

The voice of the turtle, (archaic for turtledove), ka leo o ke kuhukukū.

茂在氏が述べる通り、海の民は、外洋航海で、目標の陸地や島が視界に入っていない場合に、あらかじめ船に乗せておいた鳥（特に、ハトやカラスなどの陸鳥）を飛ばすのである。鳥が飛び去るなら、その方向に陸地や島があることがわかり、船に戻って来るようであれば、近くには陸地や島がないことがわかる。

外洋船に鳥を積み込むことは、乗員が生きて再び土を踏むことができるかどうかにかかわる極めて重要な行為であった。その重要度の高さは、鳥の舶載が非文字情報と音声情報（後の文字情報）の二種の媒体に登場することからも窺い知ることができる。

5. 無目籠

海幸彦・山幸彦の説話の中に、山幸彦が釣針をなくして海岸で泣いていた時に、シホツチの老翁が来て、ある船を造り、ワタツミの宮に行かせる場面がある。

ある船とは、「無目籠」（『日本書紀』神代下、第十段、正文）⁵⁰¹⁾のことであるが、『日本書紀』では、「無目堅間」（神代下、第十段、一書第一）⁵⁰²⁾とも表記され、『古事記』（上巻）では、「无間勝間之小船」⁵⁰³⁾、「無間勝間之小船」⁵⁰⁴⁾と表記されている。そして、これら四者（以下、姉妹船）以外に、さらに一つ、「大目籠籠」（『日本書紀』神代下、第十段、一書第一）⁵⁰⁵⁾という名称も持っている。

個々の姉妹船は、一見、難解であるが、体系的に見ていくと、それぞれの船名や付随する記述から、それなりに筋が通った情報が読み取れる。考察の便宜上、姉妹船をひとまず「無目籠かたま之小船」の一語に括っておきたい。

書かれた時点では、書かれた内容は理解できたはずであるが、後人は、書かれた内容が理解できないため、「無目籠かたま之小船」の解釈に長く苦しんできた。この言葉は、一般に、次のように説明されている。

竹で固く編んだ、すきまのない小舟⁵⁰⁶⁾。

隙間のない竹の籠かご⁵⁰⁷⁾。

隙間なく竹を編んだ小さな籠かごの船⁵⁰⁸⁾。

密に編んだ隙間のない籠かご⁵⁰⁹⁾。

籠は、所詮、籠である。竹籠にどう手を加えたところで、大海へ乗り出すには貧弱すぎる。古代の旅は、身分の高い者にとっても決して楽なものではなかったが、山幸彦は、この船旅でどのような船舶を利用したのであろうか。山幸彦の遠出のためにわざわざ造ったのであれば、籠かごなどではありえない、と見るべきであろう。

茂在氏は、次のように述べる⁵¹⁰⁾。

……無目堅間小舟……は御存知であろう。……在来は目つぶしをした籠の舟と訳しているこの船。無目は水密なと訳しても良いが、その後を私は次のように考える。

カタマランを、元の響きを残して日本語に訳せといたら、「カタマ小舟」と訳すのは無理な話であろうか。私は「堅間小舟」は文字に意味があるのではなくて、発音に対する当て字が使われたのだと解釈する。……もっともカタマランとはタミール語である。カタとは「結ぶ」マランとは「木」で、筏のことも双胴船のこともカタマランと呼んでいたのには数千年の歴史がある。

茂在氏の着想は、鋭い。氏の主張には、耳を傾けるべきところが多々あるが、特に、字面にとらわれない解釈を提案したことは、重要である。氏が、「籠かたま」を、カタマランの音訳であると看破したことは、画期的であり、その功績は大きい。しかしながら、「無目」を、水密な、と解釈したことは、従来の解釈の域を出るものではない。水密でない船は、水上の乗り物としては不適当である。『記』『紀』は、どの船にも求められている必須条件にわざわざ言及しているわけではない。この「無目」は、文字通り、「目が無い」という意味なのである。

中国語では、龍の装飾があるものを、龍と言うことがある⁵¹¹⁾。龍舟節/龍船節で使用する船には龍の装飾が施され、今日、一般には、龍舟/龍船と言うが、単に龍と言ってもよい。例えば、唐の薛逢の詩「観競渡」に、「鼓聲三下紅旗開，兩龍躍出浮水來」とあるが、この龍は、龍舟/龍船のことである⁵¹²⁾。

苗族の文化では、船は龍に同じ、と考えられている。

このような、船を龍と同一視する考え方は、例えば、浙江省の舟山（杭州湾）地区にも見られる。ここで、この地区の漁船について書かれた文章の一つを見ておきたい⁵¹³⁾。

长江口外东海杭州湾一带，是中华古国最早出现海上渔船的海域之一。现今概念上的嵊泗渔场，正是处于这片江海交汇丰饶大海域的最佳区位上。……据考古，上古时期的吴越风俗由海洋传播至嵊泗列岛。由此推断，最早出现在杭州湾外长江入海口之嵊泗海域上的，当是

独木渔舟。……在相当长一个时期内，这种独木舟式的渔船之船头两侧没有船眼装饰，因此渔民唤之为“无眼龙头”。

船の舳先は、船頭と言ひ、龍舟/龍船の場合には龍頭という言い方があるが、普通の船でも龍頭と言うことがある。舟山（杭州湾）地区では、長期にわたり、丸木舟形式の漁船の舳先（船頭、龍頭）の両側には船眼（船の眼、マタノタタラ）の装飾がなく、漁民はそれを「無眼龍頭」と呼んでいた。この地区の漁民は、船を龍と見なす祖先の文化を継承してきたのである。

舟山（杭州湾）地区の漁民が使う「無眼龍頭」。この単語が、「無目籠」が船眼の装飾のない船であることを私たちに教えてくれている。

『記』『紀』の物語が成立した頃の日本にも、船を龍と見なす人々、船眼の装飾がない船を「無目籠」と呼ぶ人々がいたのではないか。少なくとも、その頃の日本人がそのような文化や語彙が世の中にあることを知っていたことは、間違いない。

では、「無目籠」は、なぜ、「無目籠」と表記されたのであろうか。

龍は、想像上の動物である。「無目籠」という表記をそのまま採用すると、人間が人間に作れるはずのない龍を作ることになり（作無目籠）、合理的ではないと考えられたのであろう。

『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）には、さらに、竹を取って大目鹿籠を作った、とあるので、籠は、龍と竹の二つの情報を伝える好個の文字と考えられたのではないか。

「無目籠之小船」は、意味のよくわからない「無目籠」に、よく知られている「小船」を後置して意味説明を補足する形式を取っている。

茂在氏は、上に引用した通り、カタマランは「カタマ小舟」と訳せる、と言う。全体像の捕捉という点で問題はないが、正確ではない。この着想で訳すなら、カタマランは、「カタマ船（勝間船/堅間船/籠船）」となるからである。

先に、異文化の語彙（外来語）を取り入れる場合、大きく分けて音訳と意識の二つの方法があり、音訳では、さらに類名を加えてわかりやすくすることがある、と述べた。そして、beerやcardは「啤酒」や「卡片」である、と例示した。泡があるとか、小さいとかいう要素を類名に持たせることはないので、いくら泡があつたり、小さかつたりしても、「啤酒」や「卡片」が、「啤酒酒」や「卡小片」となることはない。「之」を介していることからわかるように、「無目籠之小船」の「小船」は、類名ではないのである。

シホツチの老翁は、第三者がその小ささに言及せねばならないほど、明らかに形状が小さい船をわざわざ作って山幸彦に提供したわけではない。この「小船」が、決して、小さい船という単純な意味で使われているのではないことは、もうおわかりであろう。「小船」は、ここでは、「コ（kau）と呼ばれる船」のことであり、すでに検討した通りである。

さて、「無目籠之小船」は、考察の便宜のために創作した仮の言葉である。以上のように、

おおよその意味が取れたので、ここで、この一語に括る前の、個々の表記の出入りも検討しておきたい。

姉妹船の表記を見る限りでは、『古事記』には「之小船」が付され、『日本書紀』にはそれがない。しかしながら、実は、語部(集団)の言うカタマは補足説明なしにはもはや理解が難しく、という危惧は、『古事記』と『日本書紀』の記述に共通して見られる。『古事記』の編纂者は、「無間勝間/無間勝間」の直後に「之小船」を付すことで、『日本書紀』の編纂者は、文末の「一云」で「是今之竹籠」と述べることで⁵¹⁴⁾、意味説明を補っている。両者は、表現の手法や用いた漢字こそ異なるが、伝えようとする情報には違いがない。どちらも、カタマが今の言葉で言うコ(kau)に相当する船であることを伝えている。

異文化の語彙(外来語)は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。『記』『紀』における「勝間」と「堅間」の揺れは、元の表記をそのまま採用しなかった(あるいはできなかった)ために生じている。『記』『紀』がそうしなかった(あるいはできなかった)のは、その単語が漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のどちらかである。先に、「小船」が何であるのかを見たが、「小」と「乎」の揺れ、さらには、「籠」の揺れも、同じ理由によるものである。

「無目」には、「無間/無間」と「無目」のバリエーションがあるが、いずれも、動賓(V O)構造である。この構造は、この表現が、音声を表記したものではなく、意味を表記していることを示している。言い換えれば、「マナシ/まなし」という音声ではなく、「マ/まがない、マ/まを持たない」⁵¹⁵⁾という意味を表記しているのである。

残るは、「間」と「目」の出入りであるが、表記に違いはあるものの、伝えようとする情報には違いがない。「間」と「目」は、ともに「目/眼」のことである。

同一情報の記録に同一表記を用いる手法ほど単純明快なものはない。『古事記』の編纂者は、語部(集団)の言う二つの「マ」(音声情報)を二つの「間」(文字情報)で書き記したが(無間勝間/無間勝間)、後人は、二つの「間」が二つの「マ」を意味することを見て取ることもできず、例えば、前の「間」は「ま」を意味し後の「間」は「マ」を意味する、と誤解したりした(無間勝間/無間勝間)。

答は、既に出ているので、お気付きかも知れない。先に、船には船眼(船の眼、マタノタタラ)の装飾を施さないものがある、と述べた。『古事記』は、「マタノタタラ」という音声情報(異文化の語彙、外来語)を「間」と書き記し、『日本書紀』は、「船の眼」という意味情報を「目」と書き記したのである⁵¹⁶⁾。

以上を踏まえて解釈すれば、「無目籠之小船」の意味は、次のようになろう。

「舳先に船眼(マタノタタラ)の装飾のないカタマランという船で、ある文化圏では無目龍と呼ばれ、船材に竹を使っているが⁵¹⁷⁾、今の日本語では、外来語のコと組み合わせて、通常、コぶねと呼んでいるものに相当する船」である。

「無目カタマ籠コ之小船」一語に、これほどの情報が織り込まれているのである。『記』『紀』の編纂者は、語部(集団)の提供する情報を該博な知識で記録・編集したが、海の民の言語や文化に関する知識は、その後、急速に失われ、後世の人々は、同じ知識を共有しないため、書かれたことを理解することもできない。周辺諸語の知識なく、いわゆる日本語一視点のみの知識で、このような語彙に立ち向かうものではない⁵¹⁸⁾。

「一云」に始まる文章は、僅か33文字であるが、提供する情報の質の高さは、秀逸である。

渡航用船舶として、舳先に船眼（マタノタタラ）の装飾のないカタマランが準備されたこと、カタマランは、ある文化圏では龍と呼ばれ、船材に竹を用いていること、落水に備えた命綱は、火火出見尊には船上で動きやすいように他の乗員よりも細めのものが使用されたこと、尊の命綱は、本人ではなく他人がしっかりと装着したこと、装着確認後に出航しており、発航前点検がきちんとなされたこと、一行に対する見送りは、船影が水平線の下に消えるまでの鄭重なものであったこと、そして、この物語に登場するカタマランという船は、今で言う、竹のコ（kau）に相当すること、などが読み取れる。ポイントを押さえた、正確で詳細な内容には、驚きを禁じえない。

6. コノハナノサクヤヒメ

コノハナノサクヤヒメは、漢字で、木花之佐久夜毘売、と表記されたり、木花開耶姫、と表記されたりしている。

異文化の語彙（外来語）は、元の表記をそのまま採用しない限り、新たな表記をする際に揺れが生じやすい。

この人名に見られる表記の揺れは、この人名が元々漢字以外の文字で表記されていたか、文字表記そのものがなかったか、のいずれかであることを示唆していよう。

木花之佐久夜毘売、であれ、木花開耶姫、であれ、コノハナノサクヤヒメという音声情報に当て字をしたものと見てよいのではないか。上述の通り、『大辭典』の説明は漢字表記にすぎたものであり、事実や証拠に裏付けられた説明ではないように見受けられるが、いかがであろうか。

人々は、木花の二文字を見て、それは樹木の花、それは桜（もしくは梅）、と推測したのであろうが、解決を焦るあまり、自身の頭脳が普通に考えていないことにすら気付かなかったのであろう。気の毒と言うしかないが、女子の名に桜（もしくは梅）を想定した名付け人が桜（もしくは梅）を捨てて木花に走るなどないのである。

サクヤヒメは、恐らく、haku wahine（貴婦人）が口伝の過程で劣化したものではないか⁶⁰¹⁾。

haku wahine. n. Wife of a chief, lady, woman of high rank; female employer or supervisor.

コノは、これまで見てきた通り、kau-nui (船-大きい) のことであろう。この人物は、大型船と何かの関わりがあってこのような名前が付いたのではないだろうか。

『日本書紀』(神代下、第九段、一書第六)には、以下のような記述がある⁶⁰²⁾。

天孫又問曰、其於秀起浪穗之上、起八尋殿、而手玉玲瓏織紵之少女者、是誰之子女耶。
答曰、大山祇神之女等、大号磐長姫、少号木花開耶姫。亦号豊吾田津姫。云云。

ハナは、hana (1. nvt. Work, labor, job, employment, occupation,)⁶⁰³⁾のことではないか。よく働いたのでこのような名前がついたのではないか⁶⁰⁴⁾⁶⁰⁵⁾。

7. おわりに

コノハナノサクヤヒメは、適切な海の民の視点を欠いたままでは、文字表記にすぎる理解しできない。

小論は、これまで持つことのなかった、異文化の語彙(外来語)という視点を加えることで、コノハナノサクヤヒメが「大型船+労働+貴婦人」の意味構造であろうことを解明することができた。

古代の日本語の問題を考えたり、古典を読み解くのに、外国語、特にポリネシア語等の周辺諸語の知識や、船舶・航海の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

〔注〕

101)引用の際の省略個所は、……、で示す。以下同じ。

201)『古事記』(下巻、仁徳天皇)の原文表記は、加良奴(荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p. 289)、加良怒(山口佳紀、神野志隆光1997. p. 304)。

202)茂在寅男1984. p. 32。

「枯野」等の解釈に外来語(異文化の語彙)という観点を試みたのは、茂在氏が初めてであろう。

203)筆名。本名、政行。

204)KAMAKURA OUTRIGGER CLUB、<http://leiland.com/outrigger/column.shtml?kodai.html>. Copyright (C) 1999-2002 KAMAKURA OUTRIGGER CLUB & LEILAND INC.

これは、管見に入った最も有用な知見である。

井上氏は、ここでは慎重に、kau = to place, to set, rest = canoeと説明しているが、自身のHP(夢間草廬、<http://www.iris.dti.ne.jp/~muken/>)では、kau = canoeとしている。Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986には、「kaukahi. n. Canoe with a single outrigger float」(p. 135)、「kaulua. nvi. Double canoe」(p. 137)の例があるので、kauを

canoe と理解するのに問題はない。修飾語がなくとも、「kau」だけで使われていたであろう。

301) 寺川真知夫1980. pp. 141-142。

302) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p. 390の原文表記。

寺川真知夫1980. p. 142は、引用の通り、大型船か、と推測する。正しい推測である。

303) 小島憲之、木下正俊、東野治之1996. p. 437の原文表記。

なお、同頁には、「歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる」と頭注を付している。小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、窮余の策をとったのであろうが、歌の趣では、信頼性に疑問が残る、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない。

後述するが、文字表記に基づくなら、「手乃」は「手」よりも大きいので、小島憲之、木下正俊、東野治之諸氏は、逆に解釈をしてしまっている。趣は、主観的要素に左右される余地が大きく、基準として使えないことが改めてはっきりした。趣は、個々人で異なるものであり、趣ではなく、言語に依拠することが望ましい。日本語一視点で解こうとする思考に傾きがちな研究者の意識改革が待たれる。

304) 小島憲之他校注1996、p.390は、次のような頭注を付している。

伊豆手船—伊豆地方で建造された船をいうか。四四六〇の「伊豆手の舟」との異同は不明。『令集解』（宮繕令・古記）に船艇の代表に『播磨国風土記』逸文に見える伝説的丸木舟の名「速鳥」と並べて「難波伊豆之類」とも見える。

原文：佐吉母利能 保理江己芸豆流 伊豆手夫祢 加治登流間奈久 恋波思気家牟。右、九日大伴宿祢家持作之。（小島憲之他校注1996、p. 390）

305) 伊豆手の舟→四三三六（伊豆手船）。歌の趣から推して、伊豆手船よりも小型かと思われる。

（小島憲之他校注1996、p. 437頭注）

原文：保利江己具 伊豆手乃船乃 可治都久米 於等之婆多知奴 美乎波也美可母。（小島憲之他校注1996、p. 437）

306) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 369の原文表記。

307) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p. 121の原文表記。

308) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995a. p. 162の原文表記。

309) 小島憲之他校注1995b、p. 369は、次のような頭注を付している。

浦廻漕ぐ—津々浦々を漕ぎ巡る、の意で、熊野船の特性を述べた修飾語。

熊野船着き—熊野船は熊野地方産の原木で製した船。その構造や機能に特色があった上に、その沿岸住民も航海技術に長じていたことで、当時、既に有名であったのであろう。巻第六の山部赤人の歌（九四四）にも「大和へ上るま熊野の船」が詠まれている。

原文：浦廻榜 熊野舟附 目頬志久 懸不思 月毛日毛無。（同上）

青木生子他校注1980、p. 390は、次のように注釈を付している。

熊野舟つき 「熊野舟」は良材を産する紀伊の熊野地方の舟で、特異な形状であつたらしい。

「つき」は形状の意で、目つき・顔つきの「つき」と同じものか。上二句は序。「めづらしく」を起す。

310) 小島憲之他校注1995a、p. 121- p. 122は、次のような頭注を付している。

島隠り—この島隠ルは風待ちなどのために島陰に停泊すること。

ま熊野の船—マは接頭語。熊野は熊野船（三一七二）としてその構造・機能に特色がある船を産し、沿岸住民も航海技術が卓越していたことで、当時既に有名であった。

原文：嶋隠 吾榜来者 乏毳 倭辺上 真熊野之船。（同上 p. 121）

311) ま熊野の小船→九四四（ま熊野の船）。

原文：御食国 志麻乃海部有之 真熊野之 小船尔乗而 奥部榜所見。（小島憲之他校注1995a、p. 162）

312) 小島憲之、木下正俊、東野治之1995b. p. 464の原文表記。

- 313) 足柄小舟—足柄山で造った舟。「足柄山に船木伐り」(三九一)ともあった。逸文『相模国風土記』に、足柄山の杉材で造った舟は足が軽い、とある。
原文：母毛豆思麻 安之我良乎夫祢 安流吉於保美 目許曾可流良米 己許呂波毛倍杼。
(以上、小島憲之他校注、1995b、p.464)
- 314) 「小船」が後人に正しく理解されていないことを知るには、「小船」とはどのような船なのか、つまり、その具体的な大きさや乗員数等を考えるとよい。注303)で、歌の趣では、信頼性に疑問が残り、後日、正誤の判断が示されるまでは、理論上、誤りではないものの、研究方法として許容されない、とは書いたが、歌や文章の趣が真にわかる人には、字面は「小船」だが実際には「小」さくなく、と感ぜられることがあるのではないかと。
- 315) 総称の「kau-nui、狩野」は広く使われていたようである。その痕跡は、船名にはないようであるが、地名に見ることができる。例えば、伊豆半島にある狩野を冠する地名は、茂在氏の挙げた例であるが(茂在寅男1984、p.20)、他にも、例えば、巨濃郡(このぐん、鳥取県)、金浦(このうら、秋田県由利郡金浦)がある。さらに、神社に、籠神社(このじんじゃ、京都府宮津市大垣)がある。いずれも「kau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。また、広島県福山市金江町は、江に金(属)があることに由来するのではなく、江にkau-nui(船-大きい)があることに由来している。金江町金見、金江町藁江、も、金(属)が見えるのではなく大型船(kau-nui)が見えるのであり、江に稲藁があるのではなく双胴船(waa-lua)があるのであろう。
- 316) 地名には、その痕跡がある。例えば、田浦(たのうら、長崎県福江市)は、「tau-nui」との深いつながりで名付けられたものであろう。このような事例は、今後さらに追究するならば、無数に発見しうるに相違ない。
- 317) ありふれた言説であるが、言語は多重構造である。例えば、菊乃/菊野、雪乃/雪野、幸乃/幸野、綾乃/綾野、等の人名は、心理の深層では過去の言語習慣(慣習)に基づく一種の「慣習法」が支配しているのではないかと、思わせる例である。乃/野を付さない、菊、雪、幸、綾、等との意味の違いを人々が認識しているのか、認識できるのか、を考えるとよい。古代日本語とポリネシア語とのつながりを示す言語的痕跡ではあるが、今日まで受け継がれている例である。
- 401) 原文・口語訳ともに、山口佳紀、神野志隆光1997(p.142)。
402) 荻原浅男、鴻巣隼雄1973の口語訳(pp.149-150)。
403) 原文・口語訳ともに、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守1994、pp.194-195。
404) 『日本書紀』の「艇」は、洗練された言葉であり、異なる言語や文化を持つ集団にも理解してもらいやすいが、情報としては、『古事記』の「亀甲」の方が原情報を留めたものであり、古代人の言語に関する情報を伝えている点で、はるかに価値が高い。
405) 触覚情報に、アン・サリバンがヘレン・ケラーの手に字を書いたことや点字がある。
406) Miguel Venegas、<http://www.goldengateaudubon.org/birding/earlybirds/TheyCameBySea.htm>。
407) 小西友七・南出康世主編『ジーニアス英和大辞典』大修館書店2001。p.2310。
408) 鳩については、字面の助けもあり、大きな問題はないが、亀については、知識が継承されず、字面からの誤解も加わり、正確な意味を取ることができなかった。
409) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986。p.174。
410) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986。p.550。
501) 隙間のない籠。「籠」はコとも訓むが、古訓のカタマによる。これは一書第一(一六三)の「無目堅間を以て浮木に為り」について、「所謂堅間は、是今の竹籠なり」とみえ、カタマは竹籠の意である。……記に「无間勝間の小船」とあり、カツマの語形もある(小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。p.156頭注8)。
なお、この注に限ったことではないが、「竹籠」を「竹籠」と言い換えたり考えたりしてはいけない。両者は、別物であり、「竹籠」とは、「竹籠」のことである(注514参照)。小島

- 憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守諸氏は、根拠を示すこともなく恣意的な言い換えをするべきではなかった。第3章『万葉集』の船名で、研究者は「こ」と呼ばれた船が存在した可能性がありそうだという認識を頭の片隅に置くとい、と書いたが、古代日本語におけるこの存在が一日も早く認識されることを願うばかりである。
- 502) カタマは竹製の籠。カタマは「堅編かたみ」の意かという。カツマ・カタミとも。（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 163頭注15）
- 503) マナシは「目無し」、カツマは竹籠で、カタマ・カタミともいう。固く編んですきまのない竹籠の意。神代紀には「無目籠」とある。西村真次は「無間勝間の小船」をベトナムの籠船と比較して、竹製の目を椰子油と牛の糞をこねた塗料でふさいだ船であるとし、また松本信広は竹製の目を漆で填隙した船と解している。（荻原浅男他校注1973. p. 138頭注3）
- 504) 「無間勝間」は、編んだ竹と竹との間が堅く締まって、隙間がない籠をいう。それを船として用いたものであり、船の形に作ったのではない。これを、潮路に乗せるのであり、漕いで行くわけではない。『書紀』にはこれを海に沈めるとあり、『記』とは異なっている点、注意される。（山口佳紀、神野志隆光1997. p. 126頭注4）
- 西宮一民1979. p. 98には、原文や現代語訳はないが、以下のような注釈がある。
「間なし」は隙間がない。「勝間」は「堅かたみ箕」で固く編んだ竹籠。隼人は竹細工を得意とした。竹は呪力ある植物で、この容器に籠っている間に異郷で新生するという龍宮女房譚と同型の説話である。
- 505) 『日本書紀』（神代下、第十段、一書第一）には、竹を取って大目籠を作った、とあり、さらに、「是今之竹籠也」と付記する（小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 163頭注15）。
- 506) 荻原浅男、鴻巣隼雄1973. p. 138の現代語訳。
- 507) 山口佳紀、神野志隆光1997. p. 127の現代語訳。
- 508) 三浦佑之2002. p. 109の現代語訳。以下の脚注も見える。
原文には「無間勝間の小船」とあり、カツマ（カタマとも）は竹籠の意だが、ここは、目のない（マナシ＝目無し）竹籠であり、海中に潜ることのできる潜水艦のような船をイメージしているのだろう。海底にあるワタツミの宮に行くための船である。昔話「浦島太郎」のように亀の背に乗って海底の龍宮城へ行ったら溺れてしまうはずだ。
- 509) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 157とp. 163の現代語訳。
p. 163には、「無目籠」を指して、「目のつまった籠」という注釈も見える。
- 510) 茂在寅男1984. pp. 3-4。
- 511) ④飾以龙形的。如：龙勺；龙旗。亦借指饰以龙形之物。（罗竹风主编1993. p. 1459）
- 512) 罗竹风主编1993. p. 1459。
- 513) 牧鱼人、<http://www.ds.zj.cninfo.net/haiyangwenhua/muyuren/gongjuyanbian/003.htm>。
- 514) 『日本書紀』の注釈の意味は、もうおわかりであろう。「竹籠たけかみ」とは、「竹の籠（kau）」である。注501)参照。
- 515) 『古事記』は、「マナシ」、『日本書紀』は、「まなし」である（後述）。
- 516) 「目」は、音義融合とも取れる。現代中国語の例：引得（yǐndé）、インデックス。
- 517) 無目籠之小船に、竹がどの程度用いられたかは、わからない。台湾の竹筏（てっぱい）は、今日見ることができるものであり、竹製のカタマラン（原義）で、船眼がなく、外洋航海にも耐える。アティリオ・クカーリ、エンツォ・アンジェルッチ『船の歴史事典』p.13（原書房、1985）参照。
- 518) カタマランという言葉は、古代から使用範囲が広いが、小論では、茂在氏の説くところに従う。なお、茂在氏は、この単語が奈良朝前期までに日本に入ってきていた、と考えている（茂在寅男1984. p. 44）。地名の痕跡も見えておきたい。志賀島（福岡市東区）は、博多湾の入口にある小さな島である。勝馬地区は、現在、田畑になっているが、かつては船が入れる入江であった。

カタマランが利用したことに由来するのであろう。

- 601) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 50.

『竹取物語』は、当家の語部（集団）が代々口伝してきた音声情報（ハクワヒネ/カクワヒネ）を『記』『紀』が記録に残さないなら当家が残す、と発奮したことが創作動機だった可能性があるのではないかと。音声情報が口伝の過程で劣化することはよく見られるが、「花」に聞こえる語句が直前になかったならば、コノハナノサクヤヒメはもう少し原音の痕跡を残す語形になっていたかも知れない（コノ〇〇ノカクワヒメ）。口伝の採集にあたって、語部（集団）をどのように選別/抽出したのか、説明が待たれる。

- 602) 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994. p. 152.

- 603) Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 55.

- 604) 織り仕事の神の民間伝承の例に下記のようなものがある。

多くの地域では身近にあった稲藁を織り出しの数本（段）織り込んできた。しかし、織仕事をする者にとっては、あまりにも「当たり前」のことであり、筆者もそれらの動作や作業を中国少数民族の村々や日本各地の織場で見ていたが、それをうっかりと遣り過ぎてきた。だが、ベトナムのサパ県の苗の大麻布を織る女性も、貴州の苗の絹布を織る女性もその試糸に稲藁を織り込んでゆくのであった。あまりにも共通する稲藁の利用について留意し質問すると、多くは「昔からこうしている」というが、なかには「この稲藁を織りこむのを忘れると、織り作業の間に、タテ糸が何度も切れる」「神さまだ」と答える女性たちがいた。

そして、貴州省をともに訪れていた岡山県出身のTさんが「私の記憶では、母も布の織り初めに稲藁を使っていました。そして、その藁が身近になかった大雨の夜に、織り出しは絶対に藁でと、わざわざ田んぼに取りに行った記憶があります」「母がいうには、これは神さま、木花開耶姫」と教えられたという。

井関和代「織り仕事の神さま「木花開耶姫」」。『BIOSTORY』vol.20. pp. 62-63. 誠文堂新光社 2013年。

- 605) コノハナノチルヒメは、「知流」では手も足も出ないから、文字表記にすがって何かしら適当に述べる者もさすがに何も述べないようだが、この人物には、子をもうけた事績があるくらいで、裏付けは取れないものの、言語情報に目を向けるならば、例えば、

kilo. 1. nvt. Stargazer, reader of omens, seer, astrologer, necromancer;

-hine. Female, feminine.

(Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. p. 151 と p. 71)

がある（日本語のサ行音タ行音はハワイ語ではk音）。口伝に劣化は付き物であるが、この名前であるならば、この人物は、女性の占星家、天文学者、だったのであろう。

〔参考文献〕

＜日文＞

青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎1980。『萬葉集・三（新潮日本古典集成）』新潮社。

荻原浅男、鴻巣隼雄1973。『古事記 上代歌謡（日本古典文学全集1）』小学館。

小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①（新編 日本古典文学全集2）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995a。『萬葉集②（新編 日本古典文学全集7）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1995b。『萬葉集③（新編 日本古典文学全集8）』小学館。

小島憲之、木下正俊、東野治之1996。『萬葉集④（新編 日本古典文学全集9）』小学館。

『大辭典』1994（覆刻版。1936初版）。平凡社。

寺川真知夫1980。「『仁徳記』の枯野伝承の形成」、土橋寛先生古稀記念論文集刊行会編『日本古代論集』笠間書院。

西宮一民1979。『古事記（新潮日本古典集成）』新潮社。

日本国語大辞典刊行会 第二版 編集委員会、小学館国語辞典編集部2001。『日本国語大辞典 第二版』小学館。

三浦佑之2002。『口語訳 古事記 [完全版]』文藝春秋。

茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。

山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集 1）』小学館。

〈その他〉

羅竹風主編1993。『漢語大詞典』（第十二卷）、漢語大詞典出版社。

Mary Kawena Pukui & Samuel H. Elbert 1986. *Hawaiian Dictionary*, University of Hawaii Press.

（こう とうじ 中国学科）

2018年11月15日受理

論文

The Progression of Intercultural Communication in the
Writings of the Early Modern Jesuits:
Alessandro Valignano and His Rendering of the
Japanese Social Custom of Gift-Giving

AISHWARYA Sugandhi

〔抄 録〕

This paper examines the custom of gift-giving, the act of offering presents in Japan during the Christian Century. Alessandro Valignano's *Advertimentos* of 1581 was responsible for developing a vital aspect of the "Jesuit Code" in Japan. The paper argues that the Japanese custom of gift-giving is complex yet an inseparable part of Japanese culture which was understood, mastered and wisely utilized by Jesuits that enabled them to not only forge negotiations but also pave the path for Intercultural communication.

キーワード Society of Jesus; Accommodation policy; Alessandro Valignano;
Gift-Giving; Intercultural Communication; The Christian Century of
Japan

Introduction

The Jesuits quest for finding greener pastures to execute their missionary activities was not only a complex assemblage that involved learning and reaching out to places far beyond untapped areas, but also to make and record observations about their new-found knowledge. This basic series of actions initiated several forms of enquiry, methods of creating avenues of information networks, sophisticated forms of information gathering and dissemination of information among long-distance corporations. This entire range of activities, which the author proposes to call, the 'Jesuit Code' involved unique ways of doing

things that were born out of repeated failures and learning. These included or made way for what we may interpret as possessing innovative features of Intercultural Communication.

It is intended in this paper to examine the custom of gift-giving, the act of offering presents, in its major forms, from the point of view of a non-economic activity, within the context of the Japanese Mission. This essay argues that the Japanese custom of gift-giving is complex yet an inseparable part of Japanese culture and the Jesuits attempts at understanding, mastering and intelligently employing this custom not only enabled the Jesuits to forge negotiations and win support of the local authorities but went as far as becoming a powerful tool to communicate across cultures.

Documents left behind by missionaries are not just sources of information revealing past events narrating the history and nature of the Jesuit Mission in Japan but also provide an invaluable, and deeply enriching insight into the social and psychological world as the writers recorded their views of life itself, existing cultural practices and social norms. This study will demonstrate how these sources not only provide ample insights to understand ideas, practices and actions of people believed to have been historical but also offer an opportunity to comprehend relation structures which have implications on the socio economic and politico cultural processes, particularly in the geographical space of Japan in the context of east-west contact during the Christian Century. All in all, I argue that the sources not only help in understanding how the Japanese society was discussed by the Orientalizing gaze, but also provide a basis for developing multifaceted, multifarious highways for intercultural communications.

These dispatched accounts not only formed the basis of knowledge regarding the mystifying far eastern country, but also played a vital role in engraving Japan's image onto European minds.

Previous studies on the gift-giving culture have mainly been situated around the practice of gift-giving itself,⁽¹⁾ material exchange and diplomacy⁽²⁾ and cultural history⁽³⁾ among others. I propose to employ the method of 'deconstructive reading' of the texts in the context of the gift-giving culture with specific reference to the Japanese concept of *Miyage*. The 'Probe and inquiry' method will be employed as a tool of deconstruction to find multiple or diverse meanings, recurrences, deviations, ambiguities, irony, contradiction, conflict, silences and linguistic oddities. A discursive approach will be beneficial to explore the construction of meanings in the Japanese-Jesuits social and cultural transactions under

the frame of East West interactions, which form a part of the interconnected collective human experience. While the above approach is largely based on a micro-level and does suffer from limitations in scope, nevertheless it provides a substantial platform to initiate a comparative study which will be pursued at a later stage. This essay will contribute to the discourse of intercultural and cross-cultural study.

I : Nippon prior to the arrival of Alessandro Valignano

The island of Japan stirred the imagination of several Europeans who had little or no idea of what lay beyond Christendom. The Jesuits realized the potential Japan had for missionary activities in East Asia and had set foot on the soil almost over two centuries after first receiving information about Japan, which was initially carried to Europe through the accounts of travellers like Marco Polo. Information propagated by the Jesuits was what created Japan from *Chipangu*, the mysterious island of gold in the Far East. The Jesuits' sent back personal letters and annual letters, which were consumed first by the Jesuit headquarters at Rome, as well as branches in the Iberian Peninsula, followed by the rest of Europe and these form the bulk of the historical documentation of the Jesuit history and their interpretations of Japanese society. Accounts of the Jesuits that arrived to spread Christianity, also formed the basis for the knowledge of the eastern world in Europe.

The year 1549 saw transformation in the religious scene of Japan for a second time, when St. Francis Xavier landed in Kagoshima to preach the gospel and evangelize the natives. After this a series of individuals appeared on the stage of missionary activities in Japan. Notable Jesuits like Alessandro Valignano, Luis Frois, Luis de Almeida, Gnechi-Soldo Organtino, conducted missionary activities by understanding, digesting and accommodating the various cultural aspects of Japanese society. Undoubtedly, while some orthodox Jesuits like Francisco Cabral insisted on conducting missionary activities that ignored and rejected Japanese Cultural contests.

Francis Xavier's hope of reaching *Meaco* (Miyako 都) to receive permission for missionary activities in Japan ended in failure after a mere eleven days stay.⁽⁴⁾ This failed attempt drove him to Yamaguchi and opened his eyes to a possibility for a new dream. To realize his dream, Xavier armed himself with a present laden message wrapped in a letter to Ouchi Yoshitaka, the Lord of Yamaguchi. He had carried with him thirteen kinds of lavish items in the name of the Governor of Portuguese India, Garcias Sá and the Captain of Malacca, Pedro da Silva.⁽⁵⁾ This heralded the beginning of a new relationship

between the Jesuits and the Japanese and a saga which ended in the challenges and accommodation of the Japanese custom of gift-giving.



Portrait of Alessandro Valignano holding a Latin Bible showing one stanza *Actus Apostolorum* 9:15, “VT PORTET NOMEN MEVM CORAM GENTIB [VS]”. This portrait dated “An. Dni. M.D.C.”, 1600, is one which was engraved while he was alive. The title of the portrait in Latin reads as General *Visitor* to India, Society of Jesus including a nuanced comparison to his predecessor ‘XAVERIO, ORIENTIS APOSTOLVS’. See the frontispiece of Maki (1949).

II : Alessandro Valignano’s path to compilation of the *Advertimentos*

Alessandro Valignano, the Visitor of the Jesuit missions in Asia, took control and responsibility of the Japan “Empresa,” enterprise, three decades, after its commencement by St. Francis Xavier. Padre Valignano standardized Japanese missionary methods, and also commenced activities of recording and compiling mission reports for the headquarters in Rome. Shortly, two years after his arrival, Valignano compiled the *Advertimentos e avisos acerca dos costumes e catangues de Jappão* (*Observations on the Habits and Particular Customs of Japan*)⁽⁶⁾ at Bungo 豊後 (present day Oita 大分 prefecture) in 1581, wherein he concisely recorded the first official regulations connected to customs and manners necessary to preserve the dignity of the Jesuits in Japan. This *Advertimentos* will form the bulk of our scrutiny. In the preface Valignano makes two broad explanations, first being the purpose of the instructions, and the second, a set of basic principles which must be followed by the Jesuits in Japan. The first proclamation is as follows:

“Ainda que, pera os Padres e Irmãos procederem conforme aos costumes e catangues de Jappão, fora necessario escrever muytas cousas, todavi [a] por agora summariamente se porão alguns avisos necessarios, com os quais poderão os Padres e os Irmãos com boa criança proceder, quanto pera elles basta, com os ditos catangues e costumes, e sem os quais não podem deixar de cair em muytos maos ensinos e descortesias, com muyto damno de de sua propria estimação e da relegião christão e com muito detrimento do fruito que se pode fazer assi com os Christãos como com os gentios.”⁽⁷⁾

The above can be interpreted as follows: On the outset, Valignano mentions that a lot needs to be written, however on this occasion brevity will be maintained. Fathers and Brothers should follow the instructions related to the Japanese customs and *catangues* carefully, in order to keep them from losing their focus. Failure in doing so would cost the Jesuits their reputation and also show Christianity in bad light. Further, it would also nullify the fruits expected to be achieved from missionary efforts among the Christians as well as the gentiles. Further Valignano states, “...o que os Padres pretendem acerca da converção e da Christandade hê saber tratar com os Jappoens de tal maneira que por huma parte tenham autoridade e por outra usem de muita familiaridade...”⁽⁸⁾ The main points of the above can be summarized as, a twofold policy which emphasizes 1. maintenance of “authoridade,” authority on one hand and 2. expressing a “familiaridade,” familiarity on the other. This is appropriate when dealing with the Japanese. This is particularly important for Fathers in their conversion endeavors as well as for Christendom.

A hypothesis stating that the co-operation of the Japanese *Irmãos* or Brothers, the influential Otomo Sorin 大友宗麟 (Yoshishige 義鎮) who had connections with the powerful *Zen* 禅 sect temple, Daitokuji 大徳寺, was sought for this compilation.⁽⁹⁾ Sorin is known to have had a welcoming attitude towards the Jesuits and had even been baptized by Francico Cabral in 1578, just a year prior to Valignano’s arrival.

It was the continuing legacy of Cabral that European missionaries constantly pelted insults at the Christian warlords, *Kirishtan Daimyos* including Otomo Sorin and then Valignano himself. On this basis, the reason for Valignano’s compilation probably was the criticism as well as the unappreciated efforts of Daimyos who had destroyed Buddhist temples following the advice of the Jesuits. Some of the latter believed that, the Jesuits were insensitive to Japanese customs, etiquette and manners despite their favours. A letter from Valignano to the General in Rome on November 23, 1595 from Goa recollecting the above episode⁽¹⁰⁾ provides justification in this context, at least to some extent. In the letter

Valignano also criticizes Francisco Cabral *Superior* of the Japan Mission from 1570–1581.⁽¹¹⁾ Cabral is known for being old-fashioned, orthodox and rigid with an “idealist” traditional outlook towards missionary practice. This is attributive to his Eurocentric, non-accommodative attitude towards Japanese culture and society. Qualities such as the former were not suitable for Japan and Valignano was quick to realize that the only way forward for the Jesuits was to transfer him to a region which did not have complex social code such as the Japanese. Cabral was whisked out of Japan and sent to Macao. In order to understand Valignano’s “foundation building” for the Japan Mission this paper will deploy the aforementioned *Advertimentos*. The compilation consists of seven chapters in Portuguese as a set of instructions for Jesuit activities in Japan. The following is a tabular representation of the list of contents divided in *Capítulo*, or chapter form:⁽¹²⁾

Table 1 : Representation of the Chapters of the *Advertimentos*

CAP. 1	Do modo que se ha de ter pera adquirir e conservar autoridade tratando com os Jappoens;
CAP. 2	Do modo que se ha de ter pera fazer familiares os Christãos;
CAP. 3	Dos cumprimentos que os Padres e Irmãos han de ter com os foresteyros;
CAP. 4	Da maneira que se a de ter en dar e tomar sacanzuque e sacana;
CAP. 5	Do modo que se á de ter no tratar dos Padres e Irmãos e entre ssi [e] com os demais de casa
CAP. 6	Do modo que se ha de ter em agazalhar embaixadores ou outras pessoas de respeito e dos convites e praesentes (<i>sic</i>) que se hão de fazer;
CAP. 7	Do modo que se há de ter em fabricar nosas casas e igrejas em Japão

The following is a tabular representation of the interpretations of the above.

Table 2 : Interpretation of the Chapters of the *Advertimentos*

CH. 1	The method of maintaining the prestige of the Jesuits while interacting with the Japanese.
CH. 2	The method in which Japanese Christians could familiarize with the Jesuits.
CH. 3	The method in which Fathers and Brothers are required to greet the outside locals.
CH. 4	The method of using <i>sakazuki</i> 盃 and <i>sakana</i> 肴.
CH. 5	The method of behaving and interacting with internal people, Fathers and Brothers living in the <i>Casa</i> , the dormitory of the Jesuits.
CH. 6	The method of greeting and receiving messengers and persons of high rank and the rules of relating to banquets and gift giving.
CH. 7	The method of building <i>casas</i> and <i>igrejas</i> in Japan.

The above interpretation of the chapters of the *Advertimentos* give a clear picture of the method recommended as a form of instruction imparted by Valignano. The latter half of

Chapter 6 of the *Advertimentos*, which is specifically dedicated to the topic dealing with the custom of gift-giving, is a part of the *costumes e catangues de Jappão*.⁽¹³⁾ As a practice, mentions Valignano, missionaries could give gifts in the form of general items such as food, cloth and others. In the case of food items, it is courtesy that the gift should not reach before one's arrival and gifts must be sent to all the necessary persons involved irrespective of being restricted to persons of high ranks such as non-Christian feudal lords but also to the messenger who comes to visit the Jesuit. However, says Valignano, the gifts especially in the case of food and drink, to be presented could be broadly divided into “cinco degraos” or five degrees, according the relationship with the receiver. A tabular representation in the following will be helpful in understanding these categories:

Table 3 : General gifts bifurcated in *cinco degraos* or five degrees.

First degree	Combination of <i>sacana</i> a form of relish which included fish and fruit or <i>peixe com huta</i> (肴=魚+果) and <i>vinho</i> or sake; Four <i>bules</i> , bottles or one <i>tocori</i> 德利.
Second degree	A set of <i>taro</i> or cask 樽 of <i>vinho</i> and <i>jiquiro</i> 食籠 container containing <i>mochi</i> (餅) rice cakes and <i>sacana</i> .
Third degree	Two taros and one <i>jiquiro</i> or one <i>vorinomono</i> 折物 that includes <i>bem feitos</i> or well cooked <i>aves</i> 鳥 bird, <i>peixe</i> fish <i>caramuios</i> or mollusks.
Fourth degree	A four layered <i>uorinomono</i> . ⁽¹⁴⁾ Sweet meat <i>manju</i> 饅頭, <i>aletria</i> Vermicelli noodles ⁽¹⁵⁾ and <i>sacanas</i> . Accompanied by four or six <i>taros</i> of <i>vinho</i> and <i>quatro dentro bem concertados</i> four layers of well-portioned <i>uorinomono</i> .
Fifth degree	<i>Dalgumas conservas</i> ...or some preserved food in other words <i>Nabão</i> 南蛮 styled (our kind of) food.

The above Table 3 tells us how Valignano not only categorized the general type of gifts in five degrees with specific examples but also emphasized the hierarchy of the relationship with the receiver. In continuation of the above, he sets aside five kinds of recipients of gifts and their relationships with the Jesuit mission while making a specific mention of the influential persons vital for the future of the Mission in Japan.

The first degree is applicable to close “Christãos familiares” meaning, close Christians, and also for persons who are especially poor or are lower class messengers of familiar Christian Lords. The second degree of gifts is for *menos familiares* meaning, less familiar persons who belong to a lower class. The third degree is for “senhor honrado” meaning, Lords who deserve respect. This is especially in the case when, the lord is a local *Yacata* (Yakata 屋形) and has on other occasions been a recipient of a gift. In such a case it is

customary to give a gift. The fourth degree is not as frequent and is rarely used by the Fathers. It is presented to persons who are not familiar and are slightly higher in status than *Kunishu* 国衆 and also to “Embaixadres gentios de muita dignidade”, noble gentile ambassadors sent by high class Lords. These gifts are given when the missionaries could not invite the above-mentioned persons earlier. Further when an invitation is sent, and they have to stay on for quite some time these gifts are customary. The fifth degree is the category of the local *Yacatas* and “senhores grandes gentios” or chiefs and other powerful gentiles, non-Christian Lords. The aim of sending gifts to them is to earn their benevolence and goodwill. These gifts are to be sent every fortnight, once every twenty days, or monthly.

He makes it clear that the receivers should be gifted something of their liking and that is of *Nanban* style. This should be done in the similar manner in which, Lord Nobunaga and *el-Rei de Bungo* or King of *Bungo*, Otomo Sorin would be treated. It can be deduced that these Nanban articles were necessary for not just associating with these members of society but initiating and engaging in meaningful exchange through various levels of communication and negotiation.

There is no doubt that Valignano specifically names Nobunaga and Otomo Sorin because both these figures continuously granted favours and were seen as valuable supporters of evangelical and missionary activities. This is seen in the fast-developing nature of Jesuit establishments taking root in Japan. For instance, the setting up of a *Seminario*, in Azuchi in May 1580 and another college to educate and nurture Jesuits in higher learning in Funai, the capital of the Bungo province in October of the same year. Furthermore, in December another institute namely the *Noviciado*, *Casa de Provação* in Usuki the place where Sorin built his castle, are all proof that Valignano’s activities were favoured.

Valignano cautions sending certain items like cloth and items that should be avoided and emphasized that due consideration be given to the timing of sending the gift, such as appropriate seasons for exchange, in addition to the amount or quantity of the items to be sent. In the case of cloth, Valignano suggest that locally manufactured cloth is ideal.⁽¹⁶⁾ For instance, when the sender of the gift is a person from *lugar da Nao* literally place of the vessel, hailing from Nagasaki, the gift should be a *Nanban* item for sure, similarly when a person goes from *Meaco*, cloth from *Cami* region namely the area around Kyoto should be taken as a present. Finer details about the outward appeal of the gift such as the use of wrapping paper and even the type of paper (for example *Suibara* 杉原) and finally when

physically offering the gift, carefully placing it on a tray were among other important aspects that Valignano paid special attention to.

Valignano is a keen observer of Japanese society especially of class stratification and social status in Japanese society. He is sensitive to the interclass interactions maintained within its structure, as well as the interactions of Japanese with outsiders. He also makes it a point to let it be known to the recipients that their position and role in Japanese society is well understood and appreciated. His classification of gifts on the basis of the above division of social classes was apt enough for the recipient to feel deserved and rewarded.

Finally, Valignano summarizes his section on gift-giving with a few points of caution.⁽¹⁷⁾ It is important that the Jesuits do not compromise their position when it comes to gift-giving, he points out, when it involves the Christians, and especially when it involves the gentile Lords, who must be shown special courtesy. Furthermore, these points of caution in addition to the ones mentioned earlier must be followed with great care, as and when the situation demands. Points of caution are known by the Japanese, especially those who are well versed with such matters. Valignano further reiterates, that members must consult with Japanese persons from within as well as from outside of the *Casa*. However, in case one is going to act as per one's own will, there is a big chance of committing several blunders which shall further lead to impairing the Jesuit reputation.

Conclusion

Valignano was aware of the benefits of the custom of gift-giving for the Jesuits specific to the Japan Mission. On the other hand, he was also well aware of the dangers of not being sensitive to the local code of conduct in a cultural setting. He is cautious and careful and points out that this practice should never be the reason for inviting a bad reputation or enmity of any sort. The document speaks of Valignano's understanding of his target audience and his keen observation and interest in detail combined with his acumen to use this new knowledge for the good of the mission in Japan. He paid keen attention to the fact that the Jesuits must be courteous at all times and this in the long run left a positive mark. However, it cannot be ignored that Valignano's manual was not welcomed by everyone alike from within the Jesuit community.

Valignano had been creative, timely, pragmatic and futuristic. His ability to embrace the difference in the East-West ways of doing things especially Europe-Japan was novel and

rewarding. His instructions involved unique ways of doing things that were born out of repeated failures and learning. In order to highlight the overall impact of Jesuit activities on the history of feudal Japan, C.R. Boxer devised the title, “The Christian Century in Japan.” In a paper, by Nakasuna Akinori the term “Iezusukai no Seiki イエズ会の世紀” (The Jesuit Century), further enhances the former for a wider and deeper understanding of the global aspects of the Jesuit enterprise in regard to time and geographical space. It is within the framework of this Jesuit century, one needs to explore the meaning and perception of the Jesuits and their culture of gift-giving in the Asian expanse. This fits within the entire range of activities the author calls the ‘Jesuit Code’ which can be included or made way for what we may interpret as possessing innovative features of Intercultural Communication.

Selected Bibliography

Published Primary Sources:

- Cooper, Michael (ed.). 2001. *João Rodrigues’s Account of Sixteenth-century Japan*. London: Hakluyt Society.
- Valignano, Alexandro. 1946. *Il Cerimoniale per i Missionari del Giappone. << Advertimentos e Avisos acerca dos Costumes e Catangues de Jappão. >>* Giuseppe Fr. Schütte (ed.). Roma: Edizioni di” Storia e Letteratura.

Published Secondary Sources:

- Biedermann, Zoltan (et al). 2018. *Global Gifts: The Material Culture of Diplomacy in Early Modern Eurasia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Boxer, Charles Ralph. 1951. *The Christian Century in Japan, 1549-1650*. Berkeley, CA: University of California.
- Cooper, Michael (eds.). 1971. *The Southern Barbarians: The First Europeans in Japan*. Tokyo: Kodansha International.
- Davis, Natalie Zeamon. 2000. *The Gift in Sixteenth Century France*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Laven, Mary. 2018. “From His Holiness to the King of China.” In *Global Gifts: The Material Culture of Diplomacy in Early Modern Eurasia*, Zoltan Biedermann (et al.), pp. 217-234, Cambridge: Cambridge University Press.
- Moran, J. F. 1993. *The Japanese and the Jesuits. Alessandro Valignano in sixteenth-century Japan*. London: Routledge.
- Mauss, Michael. 1990. *The Gift: The Form and Reason of Exchange in Archaic Societies*. W.D. Halls (trans.). New York: W.W. Norton.
- ONeill, Charles E., and Joaquín Maria Domínguez (eds.). 2001. *Diccionario Histórico De La Compañía De Jesús: Biográfico-temático*. Roma: Institutum Historicum Societatis Iesu.
- Radulet, Carmen M. 1994. “O << Cerimonial >> do P.^e Alessandro Valignano: Encontro de Culturas e Missionaç o no Jap o.” In *O S culo Crist o do Jap o: Actas do Col quio Internacional Comemorativo dos 450 Anos de Amizade Portugal-Jap o (1543-1993)* (Lisboa, 2 a 5

de Novembro de 1993), Roberto Artur da Luz Carneiro and Artur Teodoro de Matos (eds.), pp. 55-69, Lisboa: Centro de Estudos dos Povos e Culturas de Expressão Portuguesa da Universidade Católica Portuguesa.

Published Japanese Translated Primary Sources:

- Valignano, Alessandro (trans. Yazawa Toshihiko 矢沢利彦, and Tsutsui Suna 筒井砂). 1970. *Nihon iezusukaishi reiho shishin* 日本イエズス会士礼法指針 (Kirishitan bunka kenkyu shirizu キリシタン文化研究シリーズ 5). Tokyo: Kirishitan Bunka Kenkyukai.
- Valignano, Alessandro (trans. Matsuda Kiichi 松田毅一 et al). 1973. *Nihon junsatsuki* 日本巡察記 (Toyo bunko 東洋文庫 229) Tokyo: Heibonsha.

Published Japanese Secondary Sources:

- Kawasaki, Momota 川崎桃太. 2003. *Furoisu no mita sengoku Nihon* フロイスの見た戦国日本. Tokyo: Chuo Koron Shinsha.
- Kawamura, Shinzo 川村信三. 2017. “Iezusukaijyunsatsushi Varinyano no ‘jyunnou’ hoshin no doki to jissen イエズス会巡察師ヴァリニャーノの「順応」方針の動機と実践.” In *Kirishitan ga hiraita nihongo bungaku: Tabungo tabunka koryu no engen* キリシタンが拓いた日本語文学 多言語多文化交流の淵源, edited by Guo Nanyan 郭南燕, 45-80. Tokyo: Akashi Shoten.
- Cooper, Michael. (trans. Matsumoto Tama 松本たま) 1991. *Tsūji Rodorigesu: Nanban no boken-sha to daikokai jidai no Nihon, Chugoku* 通辞ロドリゲス 南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国. Tokyo: Harashobo.
- Kono, Yoshinori 河野純徳. 1988. *Sei furanshisuko zabieru zenshogai* 聖フランシスコ・ザビエル全生涯. Tokyo: Heibonsha.
- Gonoi, Takashi 五野井隆史. 1990. *Nihon kirisutokyoshi* 日本キリスト教史. Tokyo: Yoshikawa Kobunkan.
- Takahashi, Hirofumi 高橋裕史. 2006. *Iezusukai no sekai senryaku* イエズス会の世界戦略 (Kodanshasensho mechie 講談社選書メチエ372). Tokyo: Kodansha.
- Nakasuna, Akinori 中砂明德. 2006. “‘Iezusukai no seiki’ no Nihon to Chugoku 「イエズス会の世紀」の日本と中国.” In *Kyoto to Peking: Nitchu o musubu chi no kakehashi* 京都と北京一日中を結ぶ知の架橋一, edited by Kihira Eisaku 紀平英作 and Yoshimoto Michimasa 吉本道雅, 208-227, Tokyo: Kadokawa Gakugei Shuppan.
- Wakakuwa, Midori 若桑みどり. 2003. *Kuatoro ragattsi: Tensho Shonen Shisetsu to sekai teikoku* クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国. Tokyo: Shueisha.

Note: Unless when quoted, the author emphasis on translation in context rather than literal translation.

[注]

- (1) (Mauss 1990)
- (2) (Biedermann 2018)
- (3) (Davis 2000)
- (4) (Kono 1988 : 246-247)
- (5) (Kono 1988 : 248-249)
- (6) English translation borrowed from (Laven 2018: 221). Henceforth, the *Advertimentos*.
- (7) (Scütte 1946 : 118-120). For the Japanese translation see (Valignano 1970 : 53).
- (8) (Scütte 1946 : 120; Valignano 1970 : 53)

- (9) See Hubert Cieslik's introduction in (Valignano 1970 : 46).
- (10) (Valignano 1970 : 42-43).
- (11) (Valignano 1970 : 41). See also (Boxer 1951: 86-87) for Cabral's attitude towards Japanese.
- (12) (Schütte 1946) *See also* (Carmen 1994: 62)
- (13) For a discussion and analysis of chapter 6 see (Scütte 1946: 258-268; Valignano 1970: 105-109).
- (14) Spelt interchangeably with a "U" also means '折物'.
- (15) The Japanese version translates it as '素麵' or *somen* noodles.
- (16) For a discussion and analysis of the paragraph see (Scütte 1946: 260-266; Valignano 1970: 106-109).
- (17) For a discussion and analysis see (Scütte 1946: 266-268; Valignano 1970: 109).

(アイシュワリヤ スガンディ 英米学科)

2018年11月15日受理

研究ノート

古代日本語における異文化の要素

——南島神話と日本神話の固有名詞にみられる後置修飾表現——

黄 當時
沖 村 由 香

〔抄 録〕

古代日本語の語彙には、日本語一視点のみでは正確に理解できないものがある。

現代日本語は前置修飾構造である。しかし、かつて日本社会には、後置修飾構造を持つ言語が存在し、その痕跡は『記』『紀』の固有名詞に残っている。

日本神話の中の日向神話や創世神話とポリネシアなどの南島（オーストロネシア）の神話に類縁関係があることは、古くから神話学者によって指摘されてきた。

オーストロネシア諸語は後置修飾構造であるが、それらの神話と類縁関係のある日本神話の主人公の名前を分析すれば、その名前には後置修飾構造が見られる。

これは、神話はその言語の話者によって日本に伝えられた証拠であろう。

古代の日本語の問題を考え、古典を読み解くのに、ポリネシア諸語等の外国語の知識が役に立つという認識は、やがて常識となるのではないか。

キーワード 彦火火出見、イワナガヒメ、日向神話、バナナ型神話、釣り針喪失譚

1. はじめに

現代日本語は前置修飾構造である。しかし、かつて日本社会には、後置修飾構造を持つ言語が存在した。その痕跡は『記』『紀』の固有名詞に残っている。

黄（2011）において、「『日本書紀』に見られる人名の、彦火火出見尊は、後置修飾表現の「彦-火火出見」と、前置修飾表現の「火火出見-尊」とが混在して用いられる社会で生まれたハイブリッド表現である」と指摘した。

「彦（ひこ）」という名詞について『古典基礎語辞典』は「ヒ（日、太陽）とコ（子、男子）とから成り、太陽の子、または太陽の神秘的な力を受けた子の意。単独では使われず、尊称として男神や男子の名前の上または下につけて用いた（大野2011：1017）。」と解説している。

尊称とは、敬称の一種であり、特定個人を呼ぶ特別の呼び方の代名詞型と、人名や役職名などの後に添えて、その人に対する敬意を表す語の2タイプの用法がある。

彦火火出見尊の「尊」は尊称であるため、「彦火火出見尊」という名前は、「彦」と「尊」の二つの尊称が重複して使用されていることになる。

『古典基礎語辞典』は「名前の上または下につけて用いた」とするが、「名前の上」に尊称をつける彦-〇〇という形式は、上代には使用されたものの、古代の早い時期にみられなくなり、〇〇-彦という形式が主流となったようである。更に時代が下がれば、「彦」は固有名詞と一体化し、「尊称」としての働きを失ったと考えられる。

本稿では、言語学的視点のみならず比較神話学の研究成果を参照して、古代天皇家に多く見られる「彦-〇〇」型の固有名詞の由来を探り、古代日本社会に後置修飾構造を持つ言語が存在したことを明らかにしていきたい。

2. 彦火火出見尊と南島神話

2-1. 彦-〇〇型の固有名詞

『日本書紀』の中で、「彦-〇〇」という形で、彦が語頭に立つ人名は、天皇家の祖先と皇族や神の名前に見られる。これらは、神代から神武天皇の息子の代まではほぼ連続して出現するが、その後出現頻度が減り、敏達天皇の太子であり、継体天皇の曾孫である「彦人皇子」を最後として、『日本書紀』からは姿を消す⁽¹⁾。彦-〇〇型の固有名詞を『日本書紀』登場順に並べれば下記ようになる。

- ①彦狭知神（神代下第九段第二の一書）
- ②彦火火出見尊（初代神武天皇の祖父・山幸彦）
- ③彦波瀲武廬茲草葺不合尊（神武天皇の父）
- ④彦五瀬命（神武天皇の兄）
- ⑤彦火火出見（神武天皇の諱）
- ⑥彦稻飯命（神武天皇の弟・第十一段第四の一書）
- ⑦彦八井耳命（神武の第一子）
- ⑧彦五十狹芹彦命（孝靈天皇の皇子、別名吉備津彦）
- ⑨彦狭島命（孝靈天皇の皇子）
- ⑩彦国率尊（孝元天皇）
- ⑪彦太忍信命（孝元天皇の皇子。武内宿祢の祖父）
- ⑫彦湯産隅命（開化天皇の第一皇子。亦の名を彦蔭簀命。丹波の竹野媛の息子）
- ⑬彦坐王（開化天皇の皇子。丹波比古多多須美知能宇斯王（『記』による）の父）

- ⑭彦五十狹茅命（崇神天皇の皇子）
- ⑮彦狹島王（崇神天皇皇子豊城入彦命の孫）
- ⑯彦人大兄命（景行天皇皇子）
- ⑰彦国葺（孝昭天皇皇子の天足彦国押人命の三世孫または四世孫。和珥氏の遠祖）
- ⑱彦主人王（応神四世の孫、継体天皇の父）
- ⑲彦太尊（継体天皇の別名）
- ⑳彦人大兄皇子（敏達天皇皇子。継体天皇の曾孫）

これら20例以外に、「大日本根子彦太瓊天皇（孝靈天皇）」「大日本根子彦国率天皇（孝元天皇）」「稚日本根子彦大日日天皇（開化天皇）」のような「〇〇-彦-〇〇」の構造を持つ名前は、本来は「彦-〇〇」型の名前であったが、後世に「大日本根子」や「稚日本根子」のような称辞が前置修飾した可能性がある。（【表1】参照）

但し、新編日本古典全集『日本書紀』では、孝靈天皇の和風諡号「大日本根子彦太瓊」について、「大日本根子彦」は以下三代の天皇の称辞で（小島他1994：255）」と述べ、「大日本根子彦」までを修飾部分とみなしている。しかし、後代の天皇諡号と比較するならば、称辞として後世に追加された部分は「大日本根子彦」ではなく「大日本根子」とすべきと思われる。

神武以下九代の天皇名、所謂、和風諡号については、天武以後の和風諡号との親近性があることから、後世の作為が論じられてきた（山田1973）が、問題の「大日本根子彦太瓊天皇」「大日本根子彦国率天皇」「稚日本根子彦大日日天皇」を天武以後の和風諡号と比較すれば、『続日本紀』記載の「大倭根子天之広野日女尊（持統天皇）」、「倭根子豊祖父天皇（文武天皇）」、「日本根子天津御代豊国成姫天皇（元明天皇）」、「日本根子高瑞淨足姫天皇（元正天皇）」などと親近性があると思われる。そして、これら『続日本紀』の3例は、いずれも「大倭根子」「倭根子」「日本根子」の部分が称辞部分と思われる。つまり、『続日本紀』にならうならば、「大日本根子」「稚日本根子」が後世追加され、ある時点までの原型は「彦太瓊」や「彦国率」「彦大日日」だったとみるべきだろう⁽²⁾。『日本書紀』本文が「大日本根子彦国率天皇（孝元天皇）」を彦国率尊と表記していることも忘れてはならない。小島、他（1994：259）。

このように、見かけ以上に古代天皇名には「彦-〇〇」型の名前が多く伝承されていたと思われる。但し、これについては、他の名前の詳細な分析を含めて、なお明らかにすべき点が多いと思われるため、まずは、確実に「彦-〇〇」型と表記されている名前について考察していきたい。

上記20例の中で、④～⑥は、神武天皇（⑤）とその兄弟（④と⑥）だが、神武の兄弟の名前や誕生の順番は、『日本書紀』の正文と一書により異なり、4人兄弟であることだけが一致している。この4人兄弟はいくつかの別名を持つが、4人の中で、「彦-〇〇」形式の名前を持たないのは、三毛入野命一人である。神武の父と祖父もまた「彦-〇〇」形式の名前を持つこと

と、神武自身の諱が、祖父と同じ「彦火火出見」であることから、「彦-〇〇」形式の名前の起源は、系譜に無関係の神名である彦狭知神を除外すれば、彦火火出見尊にさかのぼることができると思われる。

2-2. 釣り針喪失譚

神武天皇の祖父である彦火火出見尊（別名、山幸彦）には、「海幸・山幸」の名で知られる次の伝承がある。

山幸彦には、兄の海幸彦が居た。海幸彦は、海の幸を得る霊力があり、山幸彦は山の幸を得る霊力があつた。二人はある日獵具を交換し、山幸彦は魚釣りに出掛けたが、兄に借りた釣針を失くしてしまう。元の釣り針を返すように海幸彦に責められ、山幸彦は、釣り針を探して海神の国を訪れる。そこで、海神の娘である豊玉姫と結婚して生まれたのが彦波瀲武盧茲草葺不合尊（神武天皇の父）であつた。

文化人類学者の後藤明氏は、海幸・山幸神話について、次のように述べている。

日本の研究者は古くから海幸・山幸のモチーフが外国、とくに東南アジアからオセアニアに見られることを指摘してきた。さらに釣り針を失うのは、「釣り針喪失神話」として環太平洋的な分布をすることで知られている（後藤2002：135）。

後藤氏はこれに続けて、インドネシアのスラウェシ島北部のミナハッサ族、インドネシアのモルッカ諸島のケイ島、ミクロネシアのパラオ諸島、メラネシアのソロモン諸島のチョイセル島などに見られる「釣り針喪失神話」を例にあげている。

後藤氏の例に上げた神話の伝承された地域、インドネシア、メラネシア、ミクロネシアの人々は、オーストロネシア語族の中のマライ・ポリネシア諸語の話者である。

マライ・ポリネシア諸語には、後置修飾構造を持つという特徴がある。また、それらの言語では、敬称や尊称は人名の前に付く。そしてマライ・ポリネシア諸語で語られた神話と共通する日本神話の中に「彦火火出見尊」という、人名の前に尊称がついた名前が出現する。つまり、神話の分布圏の言語の特徴が、主人公の名前に反映していると考えられるのである。

神話というものが、どのような経緯で異なる言語や文化を持つ世界の各地に伝播したかについて、具体的なことはわかっていない。しかし、おそらくは、神話を持つ集団の移動を伴って伝播したのであり、神話を持つ集団の「言語」を介して物語が伝えられたと見るべきだろう。

後藤明氏は、「かつてこの日本の海幸・山幸神話はインドネシア方面からもたらされたと考えられていた。とくに隼人の起源を語るので、オーストロネシア系の隼人族がもたらしたとも

言われている（後藤2017：198）」とするとともに、釣り針喪失譚⁽³⁾の広がりとして

この種の話の一つの脈流は中国・長江流域の白^{はく}娘子^{じょうし}や化け鯰^{なます}といった民話であろうと大林太良は考えている。また民話学者の斧原孝守は長江上流の少数民族の間にも釣り針喪失譚のモチーフを見いだしている。この地は、漢民族に支配される以前はいわゆる呉越の土地で、漢民族とは異なった文化、おそらくオーストロネシア系文化が及んでいた可能性がある（同：200）

と述べ、釣り針喪失譚が、環太平洋地域だけでなく東アジアに色濃く分布する点に注意を促している。

「釣り針喪失譚」が、マライ・ポリネシア諸語文化圏から直接日本に伝播したのか、或いは、中国南部経由で伝播したのか、その双方の流れがあったのかについては神話学者の意見は分かれる。しかし、神話の残存地域はオーストロネシア系後置修飾構造の言語の地域である。更に、中国南部や台湾諸語も後置修飾構造言語であることから、「釣り針喪失譚」の伝播ルートは、後置修飾言語地域を避けて通ることはできない。主人公「彦火火出見」の名前に、神話の伝播元の言語の影響があることは、いたって当然の現象ではないだろうか。

3. 磐長姫

3-1. バナナ型神話

彦火火出見の釣り針喪失譚以外にも、南島神話と共通する日本神話がある。そしてその中に後置修飾構造を持つと思われる名前がある。

『日本書紀』神代下第九段の第二の一書と第六の一書に「磐長姫」という名前の女性が登場する。彦火火出見尊（山幸彦）の伯母にあたる女性である。

この磐長姫と妹の神吾田鹿葦津姫（木花開耶姫）の物語も、オーストロネシア神話と共通のモチーフを含んでいる。これは、海幸・山幸神話と共に、日向神話とも呼ばれ、極めて南島神話の影響が強いとされている物語である。以下、『日本書紀』神代下第九段の第二の一書を要約する。

日向の高千穂峰に降臨した天津彦火瓊瓊杵尊は、海浜で一人の美人に出会う。大山祇神の子神吾田鹿葦津姫（亦の名は木花開耶姫）である。木花開耶姫を妻にと臨む天津彦火瓊瓊杵尊に、大山祇神は、木花開耶姫だけでなく姉の磐長姫も奉る。しかし、天津彦火瓊瓊杵尊は、姉は醜いと思い、妹だけを召した。

そこで、磐長姫は、大いに恥じて呪いをかけて「もし、天孫（ニニギ）が私をお召しになっ

ていたら、生まれる御子の命が長いことは、磐石のように永遠だったでしょう。しかし、そうならずに妹だけをお召しになった。そのため、生まれる御子の命は、必ず木の花のように散り落ちるでしょう」と言った。

一説には「現世の人は、木の花のようにたちまち盛りが過ぎ、生命が衰えてしまうでしょう」と言ったとされる。

この話は、天皇や人間の命に限りがあることを説明した「死の起源神話」であるが、後藤明氏は、「このイワナガヒメとコノハナサクヤヒメのどちらかを選ぶというモチーフは、東南アジアなどに伝わるバナナ型の死の起源神話の一ヴァリエントと理解してよいだろう（後藤2017：251）。」と述べている。この「バナナ型」という名は、インドネシア・スラウェシ島のトラジャ族の次の神話から命名されたという。

はじめ、天と地の間は近く、神が縄に結んで食料を天空から降ろしていた。その食料によって人間は生きていたのだが、ある日、神は石を降ろした。最初の男女は「これは石だ。他のものをください」と叫んだ。それで神は石を引き上げて代わりにバナナを降ろした。二人は走り寄ってバナナを食べた。すると天から声が聞こえた。「バナナを選んだから、お前たちの生命はバナナの生命のようになるだろう。バナナの木が子どもを持つときには、親の木は死ぬ。そのように、お前たちは死に、お前たちの子どもが跡を継ぐだろう。もしお前たちが石を選んでいたら、お前たちの生命は石のように永遠であったろうに」と。
（後藤2017：251-252）

吉田敦彦氏も「このスラウェシの話はたしかに、人間にゆだねられた最初の選択が、石とバナナそれ自体であるという点で、石と木の花が、それぞれ醜い姉娘と美しい妹娘という人間の形であらわされている日本神話の場合と違っている。しかしながらこの点を除けば、石を捨て植物を選び取ったため短い寿命を与えられたという基本的結構において、二つの話は正確に一致していると言って良いであろう（吉田2007：46）。」と述べ、磐長姫と木花開耶姫姉妹の物語とインドネシア神話との類似を認めている。

磐長姫の妹、木花開耶姫は海幸彦・山幸彦兄弟の母であるため、姉妹の物語は、海幸・山幸神話と一続きの物語でもある。

では、彦火火出見の名前に後置修飾表現の痕跡があるように、磐長姫という名前には後置修飾の痕跡はないのだろうか。

3-2. 磐長姫・石長比売

磐長姫という名前について、新編日本古典文学全集『日本書紀』は「磐石のごとく長久不変

の女性（小島他1994：141）」と頭注を付している。「生まれる御子の命が長いことは、磐石のように永遠だったでしょう（生児永寿、有如磐石之常存）。」という磐長姫の言葉（括弧内は原文）もそれを裏付けているかに見える。

しかし、「磐長」を磐石のごとく長久不変の、とする解析は不審である。「磐」は名詞であり形容詞ではない。また原文には「磐石」とあるように「磐石」と「磐」は区別して使用されている。「磐」は必ずしも「長久不変」であるわけではない。何故なら、磐には堅い磐もあれば軟らかい磐もある。柔らかければ、簡単に砕けて細くなるし、石炭のように火をつけることで燃えて消える岩もある。物語のレトリックに嵌まり、磐を不変の存在と誤解したのであろうが、決してそれ自体は長久不変の存在ではない。

『古事記』では、姫の名前は「石長比売」であり、「常に石の如くして、常に堅に動かず坐さむ（山口、神野志1997：122）」とするが、この場合の「石」は、長久不変の比喻ではなく「不動のもの」の比喻となっている。しかし、全ての石が不動なわけでもない。それが大きな石であっても、形状に安定性がなければ「不動」ではないのだ。この文脈の「石」が指すのは、普通名詞の「石」ではなく、「石長比売」の名前に象徴された固有名詞としての「石長」である。この磐長姫という名前を、後世の女性人名と比較するならば源義経の生母の呼び名常磐御前が適当な比較対象と思われる。「ときわ」は「常葉」「常盤」と表記されることもあるが、常「葉」に明瞭に見られるように、葉一字には常緑、永遠などの意味はない。「常」の字の存在が常緑不変であることを保証するのである。

これと同じく「長」の字に修飾されて初めて、「石長」は安定性のある「長大な石」、「磐長」は長久不変の「^{とこ}長しえの磐」の靈力を付与されるのである⁽⁴⁾。

磐長姫という名前は、「磐石のごとく長久不変の女性」ではなく、「長」を長久不変と訳すならば「長久不変の磐の（靈力を持つ）女性」と、後置修飾で解釈すべきなのである。

4. 丹波と南島神話

4-1. 籠神社に残る「釣り針喪失譚」

黄（2010）において、丹後一宮である籠神社の名称について、ポリネシア語の「大きな船（kau-nui）」という言葉に由来するのではないかとする説を発表したが、籠神社は、オーストロネシア神話と浅からぬ繋がりがある。

和銅6年（713年）以前、丹後と呼ばれる領域は丹波国に含まれていた。地理的には丹波国の北部にあたり、海に面した地域である。

籠神社の神社案内には、「別名を彦火火出見命とも云われたご祭神彦火明命が、竹で編んだ籠船に乗って、海神の宮に行かれたとの故事により、社名を籠宮と云う」と社名の由来が書かれている⁽⁵⁾。既に述べたように彦火火出見命は山幸彦の別名であるため、籠神社の名称由来

は、「海幸山幸の物語」と同種のもものと推測される。

「釣り針喪失譚」を共有することから、籠神社のある古代の丹波と南島地域が海上交通で結ばれていた可能性は十分に考えられるだろう。

4-2. 天橋立とイザナキ

釣り針喪失譚のみならず、南島の神話、中でもポリネシア神話と日本の創世神話に強い結びつきがあることは、松本信廣氏、大林太良氏、吉田敦彦氏、後藤明氏等が論じてきた。イザナキ、イザナミのアメノヌボコの神話も、南方系の「島釣り神話」の類型とされているが、ポリネシアを中心にマウイ、ティキ或いはタンガロア神が島釣りをする神話がみられる。

そして、籠神社のすぐ側にある天橋立には、日本神話の創世神であるイザナキが天橋立を作り立てたという伝説が残っている。以下、『風土記』逸文を引用する。

（丹後の国の風土記に曰ふ）

与謝の郡。

郡家の東北の隅の方に速石の里あり。この里の海に長大き前あり。長さは一千二百二十九丈、広さ或る所は九丈以下、或る所は十丈以上、二十丈以下なり。先つ名をば天の椅立といひ、後の名を久志浜といふ。然云ふは、国生みましし大神、伊射奈藝の命、天に通行はさむとして、椅を作り立てたまふ。故、天の椅立と云ふ。（植垣1997：472）

「丹後の国の風土記（逸文）」には、このほかに浦島子伝説や羽衣伝説もある。そして、メラネシアのバンクス諸島には、日本の羽衣伝説に非常によく似ていとされる「天女伝説」がある（山田2017：100-101）。バンクス諸島の住民もまたオーストロネシア語族である。

海沿いにある古代の丹波（丹後）には、濃厚に南島に連なる海洋文化が根付いていた。これは、古代丹波の住民が海洋民的性格を持ち、朝鮮半島や中国大陸方面だけでなく、広く南洋と交流していたことを想像させる。或いは、海を通じての外国との交流が、竜宮や天界などの異界と行き来する話として残されたのかもしれない。

4-3. 彦火明命

籠神社に見られるオーストロネシア文化の痕跡は社名由来譚に留まらない。ご祭神、彦火明命の名前が「彦-○○」型の、尊称が上につく構造を持つのである。

『記』『紀』は、これを「天火明命」（『記』）「天照国照彦火明命」「火明命」（『紀』）という、尊称が下につく形式の名で伝えている⁽⁶⁾。「彦火明命」は、国宝である籠神社の「海部氏系図」にだけ見られる唯一の表記である。

岡田精司氏は「神社は古代の姿のまま現在まで続いているのではなくて、あとからのいろい

ろな変化がある」と述べているが、「変化」の一つとして、ご祭神名称を『記』『紀』由来に変更する例がある。例えば、富士山本宮浅間大社の木花之佐久夜毘売命は、近世になって新たに祀られた祭神で（大林2001：108-113）、その表記も『古事記』に倣っている。これは、古代から信仰されてきた自然神や土着の神が、名前が良く知られた『記』『紀』の神にとってかわられた例である。

これに対して「海部氏系図」にも彦火明命の名があることから、この神名表記は『記』『紀』に影響されず古形を保持しているとみられる。古代の言語の実相がそこにあるのではないだろうか。

5. 天孫降臨神話の南方要素と欠史八代

5-1. 天孫降臨神話に見られる南方要素

神話学では、日本の創世神話と日向神話について、ポリネシアなどの南島世界との結びつきが指摘されてきた。しかし、その中間を占める天孫降臨神話については、「日の神の降下」と「稲」という二つの重要な点は南方要素（三品1971）とする三品彰英氏の意見があるものの、一般的には北方遊牧民族由来の神話とされてきた。確かに、前置修飾、後置修飾という観点から見れば、高天原の神々の名前の中に、彦狭知神以外には一見してそれとわかる形で後置修飾構造が見られないことは、アルタイ系のモンゴル語や朝鮮半島の言語、そして中国北部の言語と合致するようにも見える。

一方、大林太良氏は、天孫降臨神話について、従来の解釈に加えて、インドネシアや台湾などの影響について再考すべきではないかと指摘している。ボルネオのダヤクという先住民族は、黄金の船に乗って山頂から広がる神話を持つ。スマトラ（の神話）もまた山に降りてから、パレンバンなどへ行く。台湾のアタイヤル族の起源神話では、高い山の上で神が人間を生むとされるという（大林、吉田1998：105）。

大林氏のあげた例もまた、オーストロネシア諸語族の地域であり、後置修飾表現を持つ。そして、地上に降臨した天孫「天津彦彦火瓊瓊杵尊」の名前は、「〇〇-彦彦-〇〇」型である。二つの「彦」が連続することから、「天津彦」部分を称辞と見れば、天孫ニニギの名前は前置修飾と後置修飾の混じるハイブリッド的要素を持つことになる。

神話学者は、天孫降臨神話に南方要素を指摘した。そして、天孫ニニギの名に後置修飾要素を見出すことができるとすれば、言語学の観点からも天孫降臨神話に南方要素を認めることができるのである。

5-2. 欠史八代の天皇名

天皇家の系譜の中で、第二代綏靖天皇から第九代開化天皇までの八代の天皇は「欠史八代」

とも呼ばれている。これら八代の天皇は系譜のみで、事跡が記載されていないことやすべて直系で継承が行われているなど不自然な点が多いことから、存在自体を架空のものとする「系譜捏造説」を唱える研究者も多い。八世紀の『記』『紀』成立段階で、天皇家の歴史をより古くみせかけるために、架空の天皇を創作したとする説である⁽⁷⁾。

しかし、これらの天皇名が全くの創作であれば、八代の天皇名が後置修飾構造と、前置修飾構造のハイブリッド的な名前を持つことは説明出来ない。（【表1】参照）。『日本書紀』成立の八世紀ごろには、おそらく後置修飾構造は日本語から失われていたと思われるからである。

実用的でない長すぎる天皇の名前には、後代の修飾の痕跡が見える。これは、元々は、非常にシンプルな「彦耜友」や「彦国押人」のような「彦-〇〇」型の名前が伝承されており、それに後から「大日本根子」のような修飾が施されたと考えられる。これらが、神武と日向三代の名前だけを元に創作されたと考えることは可能である。しかし、神武と日向三代の名前は、欠史八代の天皇名とは一見してその構成要素に類似性が低い。モデルになる「彦-〇〇」型後置修飾構造を持つ天皇名が伝承されていなければこのような創作は困難ではないだろうか。

また、伝承された天皇や皇子の名前から、徐々に「彦-〇〇」型の名前が姿を消すのは、古代日本の言語から、後置修飾が失われていくことと合致している。第九代開化天皇は「稚日本根子彦大日日天皇」であり、既に述べたように「稚日本根子」が「彦大日日天皇」を修辭していると思われる。しかし、次代の崇神天皇「御間城入彦五十瓊殖天皇」は、前置修飾構造の名前である可能性が高い。

『日本書紀』歌謡18に以下の歌謡がある⁽⁸⁾。小島、他（1994：279）。

御間入彦はや 己が命を 弑せむと 窃まく知らに 姫遊びすも

（原文・瀾磨紀異利寐胡播椰 飫迺餓鳥塙 志齊務苔 農殊末句志羅珥 比賣那素寐殊望）

これによれば、「瀾磨紀異利寐胡」は「御間城入彦」と考えられるため、「〇〇-彦」型の名前であると考えられるからである。

この「御間城入彦」崇神天皇を境に、以後の天皇名は「彦-〇〇」とは分析しがたい名前となっていく、「彦」字の使用自体も減少していく。また、「彦」は尊称から固有名詞の一部となっていく。これは、古代の言語の推移の実態をある程度正確に反映したものとみなすことができるだろう。

天皇家の先祖伝承が記録、口承されていたとすれば、それは言語研究の貴重な資料となる。但し、欠史八代の天皇名が伝承されていたとしても、それらの「天皇」が実在していたかどうかはまた別の問題である。政治的な歴史観に左右されがちな古代天皇の実在問題について、科学的かつ実証的な視点で文献資料を分析していくためにも、言語学をはじめ他の学問領域も参照してより科学的手法で天皇名についての考察を行っていくべきであろう。

6. かなび

最後に、皇族名以外の固有名詞に残された後置修飾表現を指摘しておきたい。非常に古い地名「かなび」山である。

民俗学者の吉野裕子氏は、かなび山とも言われる大和の三輪山について

三輪山の神が蛇として伝承されてきたのは、その山が一際美しい典型的な円錐形であって、トグロを巻く巨大な蛇の姿態をよく連想させるからである。三輪山はその名称からしてすでに神蛇のトグロの輪を意味し、神輪^{みわ}山の意がこめられている。(吉野1999:66)

と述べ、「出雲および大和で、神奈備山と呼ばれる一連の円錐形の山が篤い信仰の対象とされたのは、三輪山と同様に、それらの山々がいずれも「甕立ての蛇」に擬えられたからに他ならないとして、かなび山信仰の根源にある蛇信仰の存在を指摘した。(同:67)。

同じく、古代日本の蛇信仰に注目した民俗学者の谷川健一氏は、出雲のかなび山について

出雲にも四カ所の「かなび山」がある。佐太神社のうしろの三笠山、あるいは朝日山ともいわれているこの三笠山は、もとの佐太神社があったところとされている。とすれば、佐太神社のかなび山と蛇神のつながりは容易に推察される。「なび」とか「なみ」とかは蛇を意味する語であるから「かなび山」は神蛇山にほかならぬとする説は捨てがたい。(谷川2012:106)

として、かなび山を「神蛇山」とする説をあげた。そして、吉野氏は「神蛇のトグロの輪」と表記している。しかし、山に象徴されているのは本当に「神蛇」なのだろうか。

神が蛇を修飾した「神蛇」即ち「神の蛇」とは「神のような蛇」に過ぎない。しかし、人々は蛇を信仰しているわけではないだろう。

これを後置修飾で捉えると、「蛇の神」「蛇神」となり、人々の信仰の対象が、蛇ではなく神であることが明らかになる。

「かなび山」「神^{かん}蛇^{なび}山」とは、後置修飾の構造であり、谷川氏が「蛇神」とも記したように「蛇神山」という意味を持つ名前と考えるのが合理的であろう。

同時に、「神日本磐余彦天皇(神武)」「神淳名川耳天皇(綏靖)」、磐長姫の妹「神吾田鹿葦津姫」などに見られる「神-〇〇」型の名前にもこれと同じ事が言えるのではないだろうか。これら天皇家の祖先たちは、全て「神」として祀られ、半ば神話の世界の住人である。果たして彼らは「神のような」イワレビコや「神のような」アタカシツヒメであろうか。否。おそらくこれらの名前は、イワレビコの神、アタカシツヒメの神を意味している。これら「神-〇〇」

型の名前もまた、後置修飾形式であると考えられるであろう。

極めて古い信仰を持つ地名に、後置修飾表現が残存する。

これは、日本社会の古層に、「後置修飾」言語が存在した証拠なのである。

【表1】 日向三代と古代天皇の名前

		日本書記	古事記
神代・日向三代		天津彦彦火瓊瓊杵尊	天迩岐志国迩岐志天津日高日子番能迩迩芸命
		彦火火出見尊・火折尊・山幸彦	火遠理命・山幸彦
		彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊	天津日高日子波限建鸕鷀草葺不合命
第1代	神武	神日本磐余彦尊・彦火火出見・狭野・稚三毛野尊	神倭伊波礼毘古命
第2代	綏靖	神渟名川耳天皇	神沼河耳命
第3代	安寧	磯城津彦玉手看天皇	師木津日子玉手見命
第4代	懿德	大日本彦耜友天皇	大倭日子鉏友命
第5代	孝昭	觀松彦香殖稻天皇	御真津日子訶惠志泥命
第6代	孝安	日本足彦国押人天皇	大倭帶日子国押人命
第7代	孝靈	大日本根子彦太瓊天皇	大倭根子日子賦斗迩命
第8代	孝元	大日本根子彦国牽天皇	大倭根子日子国玖疏命
第9代	開化	稚日本根子彦大日日天皇	若倭根子日子大毘毘命
第10代	崇神	御間城入彦五十瓊殖天皇	御真木入日子印惠命
第11代	垂仁	活目入彦五十狹茅天皇	伊久米伊理毘古伊佐知命
第12代	景行	大足彦忍代別天皇	大帶日子淤斯呂和氣
第13代	成務	稚足彦天皇	若帶日子命
第14代	仲哀	足仲彦天皇	帶中日子命
第15代	応神	誉田天皇	品陀和氣命
第16代	仁德	大鸕鷀天皇	大雀命
第17代	履中	去來穗別天皇	大江之伊邪本和氣命
第18代	反正	瑞齒別天皇・多遲比瑞齒別天皇	水齒別命
第19代	允恭	雄朝津間稚子宿禰天皇	男浅津間若子宿禰王
第20代	安康	穴穗天皇	穴穗御子
第21代	雄略	大泊瀬幼武天皇	大長谷若建命、大長谷王
第22代	清寧	白髮武広国押稚日本根子天皇	白髮大倭根子命

〔注〕

- (1) 『新撰姓氏録』にみられる後代の「彦-〇〇」型の名前は除外し、『紀』のみを考察対象とする。
- (2) 岩波文庫『日本書紀』でも「(7) 孝霊・(8) 孝元・(9) 開化の、少なくともヤマトネコの部分は、記紀編纂時代に加わったとみるのが自然であろう(坂本他1994:411)」としている。
- (3) 後藤(2017)では「譚」使用のため、以下「釣り針喪失譚」とする。
- (4) しかし、「イハナガ」ヒメという固有名詞については、これを「石長」や「磐長」という漢字を用いて表記した結果、「バナナ型神話」と結びつき、それを構成するような意味が生じた可能性があり、「イハナガ」という「音声」自体が、当初からそのような意味を持っていたかは大いに疑わしい。イハナガヒメ、サクヤヒメ姉妹は波の上で機を織る織姫としての神格を有しているが、その織姫神話は南島神話の影響に覆い尽くされたか、岡山県の民間伝承にわずかに痕跡が見いだせるのみである(井関2013)。
- (5) 籠神社 HP に同様の記載がある。<http://www.motoise.jp/about/#02> 最終アクセス2018年10月6日。
- (6) 『先代旧事本紀』の「天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊」も或いは同神かとも言われる。
- (7) また、後代の天皇名との名前の類似、例えば、27代安閑天皇の「広国押建金日」と弟の28代宣化天皇の「建小広国押楯」、6代孝安天皇「日本足彦国押人」に「国押」がみられることから「国押」の例がしきりにみられる(井上1973:296)ことを理由に、実名ではなく称号であり架空の名前とする考えがある。しかし、安閑、宣化天皇は兄弟であり、兄弟の名前が類似することは不思議ではない。天皇の和風諡号にはおそらく後世の装飾部分が存在すると思われるが、従来の説に顕著な「時代の新しい天皇名(27代、28代)から古い天皇名(6代)が創作されたとする一方方向の解析は、果たして科学的であろうか。名前には流行があり、古い時代に流行した名前が再び使われることも多い。従来、歴史研究の一環として解析されてきた天皇諡号や固有名についての議論からは、名前の復古趣味や親族間での名前の継承といった観点が抜け落ちている。「彦火火出見」という同じ名を神武と祖父の彦火火出見が共有することは、神武と彦火火出見が同一人物という説を生み出した。しかし、台湾先住民族では男子は祖父、女子は祖母の名を継いで用いることが広く行われていたという(穂積1992:49)。このような民族的視点を欠いた従来の天皇名の考察には大いに問題がある。
- (8) 『古事記』歌謡23にも類似の歌謡がある。

〔参考文献〕

- 井上光貞1973。『日本の歴史1—神話から歴史へ—』中央公論社。
- 井関和代2013。「織り仕事の神様「木花開耶姫」」『BIOSTORY 20』60-63誠文堂新光社。
- 植垣節也1997。『風土記(新編 日本古典文学全集5)』小学館。
- 大野晋編2011。『古典基礎語辞典』角川学芸出版。
- 大林太良2001。『私の一宮巡詣記』青土社。
- 大林太良+吉田敦彦1998。『世界の神話をどう読むか』青土社。
- 岡田精司2011。『新編 神社の古代史』学生社。
- 黄當時2010。「古代日本語の船舶の名称における異文化の要素について 籠神社を中心に」『文学部論集94』65-81 佛教大学文学部。
- 黄當時2011。「金印「漢委奴国王」の読みと意味について」『中国言語文化研究第11号』佛教大学中国言語文化研究会。
- 小島憲之、直木孝次郎、西宮一民、蔵中進、毛利正守1994。『日本書紀①(新編 日本古典文学全集2)』小学館。
- 後藤明2002。『南島の神話』中央公論社。
- 後藤明2017。『世界神話学入門』講談社。
- 坂本太郎、井上光貞、家永三郎、大野晋校注1994。『日本書紀(1)』岩波書店。

- 崎山理2017。『日本語「形成」論 日本語史における系統と混合』三省堂。
谷川健一2012。『蛇—不死と再生の民俗』富山房インターナショナル。
穂積陳重著・穂積重行校訂1992。『忌み名の研究』講談社。
三品彰英1971。「神話と文化境域」『神話と文化史 三品彰英論文集第三巻』平凡社。
茂在寅男1981。『日本語大漂流 航海術が解明した古事記の謎』光文社。
茂在寅男1984。『歴史を運んだ船——神話・伝説の実証』東海大学出版会。
山口佳紀、神野志隆光1997。『古事記（新編 日本古典文学全集1）』小学館。
山田英雄1973。「古代天皇の諱について」『日本書紀研究第七冊』塙書房。
山田仁史2017。『新・神話学入門』朝倉書店。
吉田敦彦2007。『日本神話の源流』講談社。
吉野裕子1999。『蛇』講談社。

（こう とうじ 中国学科）
（おきむら ゆか 有限会社第一産業）

2018年11月15日受理

編集員（＊編集長）

＊坂井 健，李 冬木，瀬戸賢一

文 学 部 論 集 第103号 ISSN 0918-9416

発 行 日 2019年3月1日

編 集 者 佛教大学研究推進機構会議
文学部論集・大学院紀要編集会議

発 行 者 佛教大学文学部

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町96
Tel. 075-491-2141(代)

印 刷 所 株式会社 図書印刷 同朋舎
〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町2
Tel. 075-361-9121 Fax 075-371-0666

JOURNAL
OF
THE FACULTY OF LETTERS

Vol. CIII

March 2019

Published by

THE FACULTY OF LETTERS

BUKKYO UNIVERSITY

Kyoto, Japan